
CROSSING OF DESTINY

金剛石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CROSSING OF DESTINY

【Nコード】

N5865H

【作者名】

金剛石

【あらすじ】

加筆・訂正は作品完結後にすることになりました、と言いつつ、読み返してみても過去の文章に絶句。少しずつ修正していきます。現在第2章まで完了##### モンスターハンターを知らない人でも楽しめるように、色々と努力している作者の処女作。様々な書き方を練習しているため、ごちゃごちゃした小説になること請け合い。コラボも多数実践。ところが、遅筆のため作者様方、読者の皆様に大変迷惑をおかけしていますm(_____)m

プロローグ（前書き）

前書き・・

この小説はCAPCOMの商標「MONSTER HUNTER」関係のものを参考にして、アレンジを加えたオリジナル作です。ご了承ください。

また、今回がデビュー作となるので幼稚な文かもしれませんが楽しんでいただけたら幸いです。更新とか遅くなるかもしれませんがよろしくお願いします。

プロローグ

プロローグ

その者は待つ

いまだ朝靄あさもやの濃く煙る、風吹きすさぶ荒れ果てた峡谷で

風に舞い、雷いかずちを纏まとう、空を翔かける狩人

天を統べる自然の騎士

その者は行くゆ

心の奥に燃え上がる、強大な力へ挑む闘志

背負った鋼の得物えものに手を添え歩む、揺るぎない眼差しまなざしの狩人

彼の瞳と剣けんに輝くのは、新たな出会いと戦いへの歓びよろこび

彼らは感じる

新たな戦いの息吹を、己を見守る晴れ渡った青空を

彼らは出会う

空に舞う、雷電に召されし狩人

鋼に煌めく剣を持つ、強き眼の狩人

猛る咆哮、昂る鼓動

ほとばしる電光、閃く刃

二つの狩人が、今、討ち合わんとす

その刹那

空は翳り、黒雲が沸き立つ

雲を引き裂き降臨れたるは、古の“白き闇”

憎しみと怒り、哀しみと絶望の権化

天は崩れ、海は怒り、大地は唸る

時間を超えた戦いの果てに、その未来の希望を求め

生きとし生けるもの、否、数多の物に見守られ

己の悉くをそこに懸け

麗しく、美しく、神々しい、紅き双眸の純粋な“闇《シロ》”に

今再び、狩人達は相対す――

プロローグ（後書き）

一年ぶりに見直してみても正直、ものすごく恥ずかしいです（；、
ん、）

この小説は再び修正を加えていきたいと思っています。途中、修正で
きてない章（読むのが辛くなるような）も現れると思います。現在
は多少当時よりマシな文章力を身につけたはず。

成長する過程が読み返して分かる日記みたいなつもりでいました
が……

逃げたら駄目ですね。修正から。過去の自分を叩き直してきま
す……

第1章 パシフィスト、ナイト

——物語は晴れ渡った夕空の中より始まる

第1章 パシフィスト、ナイト

徐々に炎のような茜色^{あかね}に染まる空に、ぽっかりと赤い夕日が浮いている。それは遙かな地平線に向かって、ゆっくりと沈みつつあった。傾けたグラスからワインがそっとこぼれ出たかのように、暖かい赤燈色の光が木々も雲も湖も、すべてを包み込んでいる。

その赤い夕日をバックに、何かが空を飛んでいる。逆光のせいで、夕暮れに黒く映える、空を飛びゆく者。

それは竜だった。

力強い巨大な翼が宙を叩くたび、翼から伸びる長い鎖のような触手が尾に向かってなびく。触手は、はためきに合わせ、優雅に竜の飛ぶ軌跡を辿った。

竜^{かれ}の名はアトラス。

翼が大気を引き裂くごとに、そのしなやかで強靱な身体にバチバチと金色こんじきの電流がほとぼしる。鱗は鈍い黒鋼色くろがねに輝き、首周りから背中にかけては、淡い黄金色の毛で覆われていた。頭には体表に沿うようにして、微かに湾曲した角が一本生えている。そして、鞭のようにしなる一本の主尾と二本の副尾、翼から伸びている触手。それはまるで、竜がリボンの端を持って舞っているようにみせていた。数多あまたの飛竜ひりゅうの中でも、その強大さゆえ格別に畏おそれられている竜。人はその種を【舞雷竜ブライリュウ 雷の主ベル キュロス】と名付けた。

ベルキュロス。雷に召されし飛竜。電気を操り、舞うが如く空を翔ける、迦楼羅カルラ。

この世界では、人間の他に、モンスターと呼ばれる生き物がいる。ベルキュロスであるアトラスもそのモンスターの一種で、危険や害のあるモンスターは人の手によって排除されていた。

そのモンスターの排除を生業なりわいとする者——その者達を狩人、殊に——“モンスターハンター”——と人は呼ぶ。

世界の中心を成すのは、弱肉強食という単純な論理。弱い者は生き残れない。強い者が覇者となる。

今日も、どこかで誰かが誰かの糧となり、死んでいく。

そして、人間とモンスター達の飽くなき生存競争もまた然り。狩られる者と狩る者、ただその不変の関係の中で繰り広げられていたのだった。

◆◆◆アトラス◆◆◆

日はまだ沈みきってはいないが、風は夜の冷気をはらんでいて、涼やかに身体を撫でていく。

眼下の密林の中に人間の村が見える。広大な緑の海に浮かぶ孤島のように小さな村だ。

目をこらすと、村の付近に大量の家畜が放されているのが分かった。村の隣に、丈の低い草が生い茂った、広い農場があるのだ。

私はその村に向かつてゆつくりと降下し始める。今朝、棲み家の峡谷地帯を出発してから何も食べていなかったので、胃腸が悲鳴を上げていた。

人間達に家畜を分けてはもらえないだろうか。密かに期待を寄せ、峡谷地帯を出て以来初めて人間に接触を試みた。

村の中央の開けた広場に、家畜を融通してもらおうと白鳥のようにゆつたりと降り立つ。ところが、見渡す限り家々の扉は固く閉ざされ、誰かが出て来そうな気配は皆無だ。まるで、自分の家から他人を締め出しているかのように、村が私の存在を拒んでいた。

不気味な静けさが辺りを包んでいる。家々を繋ぐ村道にも、何かの遊び道具や農具が散らかったままだ。まるで、予期せぬ出来事にすべてを置き去りにして慌てて逃げた、という様相だ。

あまりにも閑静な村に、嵐の前の静けさ、不穏な空気を感じる。嫌な予感だ。

小さく高い音色で吼えて、人間に呼び掛けてみた。幾分かおとなしそうな竜に思われないかと考え、低く唸って相手を警戒させることはしない。

だが、やはり変化はない。

もう諦めようかと考えた矢先、近くの家の扉が恐る恐るゆつくり

と開かれ始めた。私は驚き半分、喜び半分で、黙ってその扉を見守る。

中から現れたのは、鹿か何かのもも肉を抱えた一人の小さな少女だった。肉の重量のせいかな多少おぼつかない足取りで、おずおずとこちらにやって来る。

印象的だったのは、赤いルビーのように煌めく彼女の瞳だった。鮮やかな血のように、生き生きとした目だ。彼女の小さなその瞳は、好奇心と恐怖がない交ぜになって輝いている。不安で身体が小刻みに震えているようだが、勇気を振り絞って歩いてくるその姿は称賛に値した。

その時、少女の家から親とみられる男が突然飛び出してきた。そして、鬼気迫る表情で私を一瞥し、少女を抱えて無理やり家の中へ連れて行ってしまった。

もも肉は、私と少女の家の間に、物寂しく置き捨てられている。一瞬のできごとだったので、啞然として少女が連れ去られていくのを見ているしかなかった。やはり、人間はモンスターを危険な生き物としか考えていないようだ。

そうこうしているうちに、“嵐”がやってきた。不穏な空気が吹き荒れる。

突如、武装した兵士達が巣を襲われた蜜蜂の如く、物陰からわんさと飛び出してきたのだ。雄叫びを上げ、武器を取り、果敢に襲いかかってくる。

私めがけて、殺意のこもった矢が雨あられのように降りかかってきた。

「何てことを!？」

翼で宙を叩きつけ、慌てて空に舞い上がって回避する。一瞬前まで私がいた地面に、標的を見失った矢が次々と突き刺さった。

人間達は罵声を上げて私を追撃しようとしていた。矢の照準が上へ上へと伸び上がってくる。頬を矢が掠めていった。

私は上昇しきった後、村人達の射程から逃れるように飛んだ。村

は生い茂る木々に埋もれて、見えなくなっていく。

「やはり人間と平和的な接触を図るのは不可能なんではようか……」
沈んでいく夕日を眺めながら、私はそう呟いた。村からは、勝ち誇った人間達の叫び声が響いてくる。

その歓声を聞いて、私はひどく落ち込んだ。負けたからとかいう、そんな単純でくだらない理由ではない。私はただ食料を分けてもらいたくて立ち寄っただけなのだ。

私が人間とまともに対面したのは、過去の一例を除けば今日が初めてだった。だから、人間がこれほどまでにモンスターを毛嫌いしていることを知り、悲しんだ。

そこで、たった一度の失敗で諦めようとしている自分に気づく。

私は地平線に燃える夕日から目をそらし、前を向いて飛んだ。

人間は私達のような強力なモンスターに恐れを抱いている。だから、まさか家畜を食べる許可をもらいに私が来たなどとは思ってもなかったのだろう。仕方ないことだ。

人間に対する認識を今一度改めなければならない。彼らは臆病なのだ。モンスターを見て「よう、うちの村へようこそ」などと、言葉も……通じない相手を迎え入れてくれるような友好的な人間なんて……ほとんどいないのだ。いや、まったくいないのかもしれない。私が抱いている人間像は現実とはかけ離れているのかもしれない。

そもそも、家畜を食べるためにいちいち人間に許しを乞う私のようなモンスターなどいるはずがないのだ。大概のモンスターは、いわゆる食い逃げか、もしくは村の人間さえ自分の腹に収めようと暴れ回る。もっとも、私がさっき訪れた村は、いち早く私の存在を察知し、警戒体制をとっていた。普通の小型モンスター程度では、簡単に返り討ちに遭うだろう。

もし私の他に人間と接触を試みているモンスターがいるなら、是非とも夜を徹して語り明かしたいものだ。気が合うはずだ。

モンスターは人間を嫌っている。人間を目の敵にしている。
狩るか狩られるかのこの世界で、人間はずいぶん身勝手なことを

やらかしているのだから無理もない。

モンスターの棲み場所を奪い、誇りを奪い、命をも奪う。

それでもまだ人間の欲は満たされない。底無し沼のように、何もかもを飲み込み、最後に残るのはボコボコと腐った空気を孕んだ^{はら}気泡、空虚な“無”だ。

でも私は諦めない。

いつかきつと、故郷の峡谷で私を馬鹿にした奴らを見返すのだ。

人間と私達モンスターが共生できる世界を作ってみせる。

そのためには、まずお互いの意思疎通を図らなければならない。少し吼えただけで追い出されることはわかった。村のど真ん中に私がいきなり降り立つから悪いのだ。

なら、次は玄関から入ればいい。村の端っこから、「お邪魔します」と、入る許可をもらえるまで待てばいいのだ。これなら礼儀正しいし、人間もむやみに攻撃してこない……と願いたい。

何でも平和的にやり通さなければならぬ。

『そんで、自分が人間と戦わざるを得なくなったら？』

峡谷で出会った別種の口うるさい飛竜がそう問いかけてきたのを思い出す。

もし戦わざるを得ない時が来たなら、私は自分の持っている力を全て懸けて戦いに臨むつもりだ。

私が目指すのは、父のような騎士道に順ずる者になること。

背中への傷は恥。

どんな生き物でも女性には手を出さない。

白旗を上げた敵は、どんな奴だったとしても命までは取らない。礼儀を忘れない。

むやみに殺生を犯すべからず。

相手を尊重するため、戦いは全力で挑む。

私はそんな騎士^{ナイト}として生きる。

それが私のポリシーであり、父の遺志だった。

他のモンスターからは、変な奴だなど、よく笑われる。でも、この騎士道精神は父親を見習ってのものだ。

私は騎士のように誠実に生きたい。無駄な戦い——人間とモンスターとの飽くなき生存競争——など必要無いのだ。

先ほどの村で、肉を抱えて家から出てきた少女をふと思い出す。

彼女はそれを私に渡そうとしていた。

他の人間達が私を追い払おうとしていたのに、なぜ彼女は私のもとへ食べ物分けに来ようとしたのだろうか。

肉が毒入りで、私を殺すのが目的だったとしたら……しかし、それでは少女がわざわざ持ってくる意味が分からない。その辺に毒肉を放置しておけば、考えなしに食いつくモンスターもかなりいるはずだ。

結局、少女の意図は分からず終^{しま}いだ。ただ、私に対して敵意の籠った眼差しを向けていたわけではないのは確かだ。

「あの少女のように友好的な人間がたくさんいることを願いましうか」

無意識のうちに呟いていた。

切にそう願った。

第1章 パシフィスト、ナイト（後書き）

パシフィスト…平和主義者

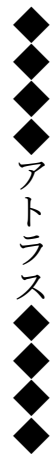
ナイト…騎士

第2章 薄れゆく意識の中で（前書き）

前章に登場する【舞雷竜 ベルキュロス】はパソコンのネットゲーム、モンスターハンターフロンティアで登場します。

第2章 薄れゆく意識の中で

第2章 薄れゆく意識の中で



私は^{わたくし}広大に茂る原始林を越え、さらに西へ向かった。その森には、私を追い出したあの小さな村以外に、人間の集落などとは無さそうだったからだ。

次に私が辿り着いた場所は、湿気と霧が支配する昼でも薄暗い湿地帯だった。ジメジメとした空気はクモの糸のようにまとわりつき、薄明が全てを無機質な灰色に染め上げている。

人はこの湿地帯を“ウェット湿原”と呼ぶらしい。これも、峡谷にいた時、口うるさい飛竜が教えてくれたことだ。ただ、なんで“人間が”そう呼んでるのを知っているのかは甚だ疑問である。どうやって人間の言語を聞き取ったのだろうか。そう考えると、私は適当なことを教えられていた可能性がある。まあ、あの竜ならやりかねない。

それはさておき、その沼地で集落を見つけるのは至難の技だった。なんせ、厚い雲の中にと勘違いしそうなほど、霧が濃く渦巻いているのだ。いくら飛竜で目が利くと言えど、こればかりはどうにもならない。

ところが、私は奇跡的に村を見つけることに成功する。たまたま

地面——ヘドロのように絡み付き、グチュグチュとグロテスクな音を立てて足を包み込む素晴らしいほど悪寒のする——に降りて翼を休めようとした時に、渦巻く白い霧の向こうに民家と思われる建物の影が映っていたのだ。

その村に向かって、静かに霧を掻き分けて進んでいく。足元のみずみずしい泥は、やはりぐちゅぐちゅと気色の悪い音を立てる。

村に到着し、私は前回のようには吼えず、ただ村の端っこで佇んでいた。吼えれば警戒されるかもしれないからだ。“キジも鳴かずに撃たれまい”という諺ことわざもある。

人間とモンスターはまともな対話できない、という基準で色々試すしかない、私は結論づけた。

今までは、飼い犬が主人になつくのと同じように、人間とモンスターが親しみ合えば幾分かは意思が通じる、という基準で考えてきた。だが、親しむどころか矢を放たれるのにどうして話が通じようか。いや、通じない。根本から駄目だったのだ。

峡谷という家に閉じこもっていたせいで、私が世界について知ってることはあまりにも少な過ぎた。こうなると知っていたなら、あの腹の立つうるさい飛竜の話を、もっとよく聞いていたのに。

それにしても、世の中とは実に上手くいかないようにできている。もう夜になろうとしていて、霧も邪魔で誰も私に気づいてくれないのだ。これほど虚しいことはない。だが、我慢する。吼えれば追い払われるだけだ。まずは、相手にこちらを観察する余裕を与えなければならぬ。

気づいてもらえるまで待つんだアトラス。お前は騎士だ。待つことぐらいたやすいはず。

そう自分に言い聞かせる。

その時、夕食を食べ損ねていたことを唐突に思い出した。脳裏に、少女が運んでいた鹿のもも肉が、ぼんつと現れる。

ぐるるるるううう

「しまっ……」

私の腹の虫の『飯を寄越せ』という文句が、静寂を引き裂いて湿原に轟き渡る。それも、狼が低く唸り声を上げているかのような、険しそうな音でだ。

どこかで、カラスが『アホー』と鳴いて飛んでいった気がした。ええ、言わなくなたって分かってますよ、カラスさん。私はアホです。

半ば白棄^{やけ}を起こして悪態をつく。

「べ、ベルキュロスだ！ ハンター達、集まれ！ みんな家に隠れろ！ 急げ急げ！」

人間の切羽詰まった怒鳴り声がする。静かな湿原に、喧騒がもたらされた。

またこれだ。数時間前のあの村の時と全く同じ光景。

私は集まってくる人間達を尻目に、そそくさと宙に舞い上がった。だが、詰めが甘かった。数時間前と違う点。それは、敵が人間を相手に訓練を重ねてきた先ほどの村の兵士ではなく、経験を積んだ腕利き狩人達^{ハンター}だったことだ。

突如、目に眩^{まは}い白光が飛び込んできて、私は視力を失って墜落した。頭を強く打ちつけたかのように、鋭い痛みが襲ってくる。まるで、脳みそを鋭い爪で引っ掻き回されている感覚だ。

地面に激突し、ベチョベチョする泥沼に体が浸かる。

「目眩まし……」

私は周囲が見えなくても暴れることはできたが、そのような見苦しいことは騎士としてのプライドが許さなかった。私はここを襲いにやって来たのではないのだ。

私はちゃんと背筋を伸ばして座り込む。頭の奥が先の閃光のせいで焼けるように痛かったが、耐えた。

「ありゃ？ 妙におとなしいな、こいつ」

聞こえてきた人間の声は、澄んだ綺麗な声だった。沼地の厚い霧を切り裂くかのような張りのある声。若い男のようだ。

「そんなもん知らねえさ。捕獲しちまえ」

誰かが答えている。言葉が分からないのが残念でならなかった。一体何をされるか分からない。

じっとして身構えていると、私の顔に何かが当たって炸裂した。思い切り、出てきた煙のようなものを吸い込んでしまう。

「あれ……」

急に眠気が襲ってくる。頭がぼうつとして、呼吸が穏やかになる。目眩ましから回復した目も、瞼が下りてきて視界がぼやけていく。ぬかるんだ泥の中に倒れ込んだ。どろどろの地面が、今は極上の寢床に思えるのはなぜだろうか。

「死ぬ……んですね」

意識が薄れゆく中で、ぽつりと言葉が漏れる。

夢うつつの中、私の顔の近くに人が寄ってきたのがかろうじて分かった。

「それは違う。まだ死にはせん」

その誰かが答えた。

なるほど、私はすぐに殺されるわけではないらしい。

「そ……う……なんです……か？」

自分の声が弱々しく口からこぼれ出る。

「わしがついてる。安心しろ」

意識が消える最後の寸前、私の脳が睡魔に抗った。この声は確かに人間のものだ。

今、私の顔の近くにいる人間の誰かが……私と……モンスターの

私と……

『会話』した!?

ちょうどその時、ついに視界が暗転し、何もない闇に私は落ちていった。

第3章 遠い記憶

第3章 遠い記憶



「こらアトラス、父さんは疲れてるんだから休ませてあげなさい！」
ママが怒ってパパから僕を引き剥がそうとする。

「やだゝパパと遊びたいの！」

僕は必死にパパの首にしがみついた。

「よしアトラス、少しだけだぞ」

パパがヤレヤレといった感じで起き上がる。が、顔は笑顔に弾けていた。見ただけでこっちも幸せになれる、そんな笑顔。

しかし、そのささやかなひとときを破るかのように、岩影から突然人間が現れた。

日の光を浴びて爛々《らんらん》と照り返してくるのは、冷たいまでの太陽の光。暖かいはずの日の光が、銀色の冷たい冷氣を孕^{はら}んでいる。高貴であり、見る者を畏怖に跪かせる、威厳に満ち溢れる銀の防具。それに身を包んだ人間の背には、巨大な鋼色の大剣。

そいつは低い声で何か喚き始めた。しかし、それは耳障りな騒音ではなく、どこか親しみやすさのある、暖かいものだった。

「おっしやー！ 見つけたぜ、ベルキュロス！ 昨日のリベンジマツチだ！」

そいつは青灰色^{せいかいしよく}の髪をした、色黒の若いハンターだ。いかにも快活なその性格に、本来人間の敵であるモンスターの僕まで引き込ま

れそうになる。相手が、その人間だけに僕は戸惑った。

パパと言えは……啞然として、口をぱっくり開いている。

「くそ！ しつこい奴だ。昨日あれほど苦勞して追い払ったというのに……」

どうやら、パパの疲勞の原因はあの人間のようなのだ。

「コノォー！」

僕は生まれてまだ一年くらいしか経っておらず、体も羊くらいの大きさしかない。しかし、危険を承知でそいつに向かって体当たりしに行った。

まだ翼で空を飛べない僕は、自分の四肢で懸命に地を蹴る。時々、小石に足を引っ掛けながらも、まっすぐに突き進む。

パパをいじめる奴は僕がやつつけてやるんだ。

「アトラス！」

パパとママの仰天した声が重なる。しかし、僕の走る勢いは止まらない。

僕の突進など、あの人間なら避けれただろう。

ところが、そいつは僕の姿を見ると、その場で仁王立ちした。まるで、突っ込んでこいともいうように。

「来いよ」

顔は不敵な笑みを浮かべている。

「えっ!？」

僕の体がそいつにぶつかった。一瞬、辺りが沈黙に包まれる。

そいつはびくともせずに僕の渾身の突進を受け止めていた。

「グホッ、や、やられた」

しかし、そいつはわざとらしく武器を放り投げ、地面に倒れ込んだ。

そして、ゆっくり起き上がると、僕の頭に手を伸ばしてきた。何をするのか、と怯えた僕は、威嚇の唸り声を上げる。

その人間の手は、僕の頭をそつと撫でた。まるで、僕が自分の子であるかのように優しく。

そいつの顔は弾けるような笑みで溢れていた。さっきのパパのような笑顔と同じように。

そいつの行動にも驚いたが、さらに僕達は驚愕した。

「お前は勇気があるな。将来きつとあのお父さんのように強くなれる」

耳を疑った。

今まで何を言っていたのか分からなかった人間の言葉が“分かった”のだ。僕の後ろにいるパパとママも驚いた顔をしていた。今の僕が巨大な岩壁を打ち抜いたとしても、こんな顔はしないだろう。

何なんだこいつ、いきなりやって来て、いきなり戦おうとして、いきなり喋り出して……何なんだこいつ。

「ありゃ？ またモンスターと喋れるようになったぞ？ どうなってるんだ、俺」

「いや、訊きたいのはこっちだ」

パパが戸惑いながら答える。そうだそうだ、あんたが教えろよ。

「何であなたは私達と話せるの？」

ママが訊こうとした、その時。

周囲がいきなり薄暗くなった。にわか雨が降る、あの時のように見上げると、蛇がとぐろを巻いているかのような黒雲が渦々しい邪気を放ちながら空を徐々に覆っているところだった。それは、晴れていた空を覆い尽くし、不気味な赤い雷をほとばしらせていた。

その黒い雲からはおぞましい負の感情が溢れ出ている。なぜだか知らないけど、ゾツとした。

その不吉な黒雲の中から、白い光が一筋、僕達の目の前の地面に降り注ぐ。唐突に、黒い暗雲を割って淡い白色に輝く白龍が舞い降りてきた。背景にある黒い雲とは不釣り合いなほど清純な白光に包まれている。夜空に浮かぶ、たった一つの星のようだ。巨大な翼を上下に動かし、徐々に僕達のもとへと迫ってきた。

首と尾が長く、白銀に輝く翼をはためかせてそれは着地する。頭には、優雅に枝分かれした、曲線を描く白銀の角。パパよりも一回りくらい大きい体格。

その竜は見る者を釘付けにする神々しさに溢れていた。

「綺麗……」

僕は思わず呟いた。

「お前は……まさか！？ 伝説によればお前は暗黒時代に“古の十勇士”^{ゆうゆうし}によって闇へ葬られたはずだ！」

人間が青ざめた顔をしながら怒鳴る。意味不明の単語が連発された。アンコクジダイ？ イニシエノジュウウシ？ 僕が聞いたことも無いような言葉だ。

その白く輝く竜はニヤリと笑って舌なめずりした。その目は、血のように紅に染まっている。

僕は背筋に冷や汗が流れるのを感じた。この竜の美しさは……邪悪そのものだと、子供ながらに理解する。

そこで初めてその白い竜が口を開いた。その声はぞっとするほど甘く、そして不気味だった。

「……古の敵の血、その血を受け継ぐ者の犠牲により、彼らは蘇ら^{よみがえ}ん。その兄弟、再び世に“混沌”をもたらさん。彼らの名は……」

その時、パパが叫んだ。

「お前達、逃げろ！」

パパの声は震えていた。

何者にも臆しない騎士が、初めて怯える姿を僕に晒した。

——いつものパパじゃない。

「でもあなた……」

ママの言葉をパパは目で制した。その目は、真剣で、不安げで、恐れ慄いていた。

ギュワァァァァァッ！！

突然、白い竜が咆哮し、口から赤い光弾こうだんを発射する。

僕は全てがゆっくりと動いて見える気がした。

恐怖と絶望に満ちたパパの顔。

嘲笑う白い竜の邪悪な顔。

僕を庇おうと、飛びついてきたママの悲壮な顔。

僕に向かって間近に迫る、邪悪な赤い光弾。

僕、死ぬのかな……？

突然目の前に何かが立ちはだかった。がっしりしたその体からは、パパが守ってくれているような安心さを感じる。僕に迫ってくるはずだった、赤い光はその力強い背に阻まれて見えなくなった。

「うわああああっ！」

僕を庇ったのは、あの人間だった。大きな剣で光弾を防ごうとして身構える。その光弾がぶつかった瞬間、赤雷せきらいが弾け、人間と剣は吹き飛ばされた。

「人間！」

パパが信じられないといった顔で叫ぶ。

僕は動揺した。

パパはいつも言っていたのだ。

人間はモンスターを平気で殺す。

人間は森を壊す。

人間は欲深いケダモノだ。

今、僕を庇ったのは一体何なんだろう。ねえ、パパ？

吹き飛ばされた人間は、呻きながら立ち上がる。

「あんたら、今のうちに逃げろ！」

彼は苦しそうな声でそう言った。大きなダメージは受けていないようだ。

なぜ人間は僕を庇ったんだろう……。僕の小さな脳が、突然の混乱ではち切れそうになる。

僕らを庇う彼を見て、パパは僕とママに叫んだ。

「行けええええっ！」

ママは涙をボロボロとながして、小さく『さよなら』と言った。まるで、悪いことが起こるのをすでに知っているかのような呟きだった。まるで、パパとはもう会えないというような『さよなら』だった。

昔、パパに教えてもらったことがある。『さよなら』の次は『こんにちは』だって。次に会うときはちゃんと礼儀正しくあいさしるって。

「パパ、何で!？」

僕はママの足にがっしりと捕まえられる。いつもは暖かく感じるママの体が、まるで氷だった。

「嫌だパパも一緒だよ!」

何で? ママもパパも何でそんな悲しい顔するの? 何で『もう二度と会えないね』って顔してるの?

僕は暴れた。訳が分からなかった。なぜみんなが悲しそうな顔をするのか。

「アトラス!」

パパが叫び、にっこりと微笑む。

「パパは弱いか!？」

僕は涙を流しながら、懸命に首を横に振る。

パパは騎士だ。戦いに背を向けない。背中への傷は恥だから。パパは強いから。だからパパにまた会える。いつものように、『ただいま。勝ったよ』って。そう言って帰ってくる。

「パパは騎士だ! 戦いに背は向けない! 違うか!？」

パパは必ず戻ってくる。あの白い竜を倒して必ず帰ってきてくれる。

僕は、嗚咽をこらえて叫んだ。

「パパ、絶対帰ってきて!」

パパはまた微笑む。

白い竜が、パパと剣を構えた人間に向かって、蛇行しながら突進してきた。パパがそれを迎え撃つ。そこに駆け込んでパパを援護するハンター。

そのハンターが僕に向かって言った。

「ボーズ！ 次会うときは、立派な竜になってろよ！」

その顔は快活で豪胆な笑みに満ちていた。

／／／アトラス・父／／／

未だに信じられない。

人間がアトラスを……私の家族を庇って一緒に戦ってくれている。どうやら、人間には彼のような特殊な者もいるようだ。そう、モンスターを助けてくれるような人間……。いや、モンスターと分かり合える人間が。

ひよっとしたら、私達モンスターは人間について何も知らないのではないだろうか。人間は、ただ殺戮さつりくと自然破壊を繰り返す破壊者ではないのかもしれない。

戦いは長時間に及んだ。

ある時、奴の攻撃を防ごうとした人間の手から、巨大な剣が弾き飛ばされた。

彼は終わりを悟ったのだろう。私の方を見て、疲れた顔で笑う。「あんたと戦ったこと。あんたと共に戦えたこと。俺は誇りに思う

ぜ！」

奴の白い体が彼を崖の方へ突き飛ばした。
彼の体が宙を舞っていく。

『また会おうな！』

彼は最期にそう叫んだ。

奴を相手にして、彼は……人間にしてはよくやってくれた。

私もついにスタミナが切れて地に倒れ伏す。体が綿になったかの
ようで、もう力が入らなかった。

近くに人間が使っていた剣があるのを見つけ、懸命にたぐり寄せ
る。不思議なぬくもりが感じられる剣だった。

私に向かって連続で赤い光弾が飛んでくる。赤い雷がほとばしる。

すまない、アトラス。

お前に教え残したことが多すぎたようだね。



僕は無惨な姿になったパパの前に立った。パパはあの邪悪な赤い
光弾に身を焼かれ、死んでいた。

ママは僕に泣き顔を見せまいと、必死に悲しみに耐えている。

パパはあの若いハンターが使っていた大きな剣を大事そうに抱い

ていた。彼もまた、犠牲になったのだろう。

僕の頬をひとしずくの涙が流れる。

「パパ ああああゝ！」

私はそこで目が覚めた。

体を起こそうとするが、まったく言っていないほどビクともしない。薄暗い明かりの中、目をこらしてみると、ロープやら鎖やらで体を縛りつけられている。

目くらましをくらったときに麻酔弾を撃たれて眠らされ、その隙に縛られたのだろう。

「起きたか」

突然声がした。

その人間の言葉が“分かる”。そういえば、捕まえられる直前にもこの声を聞いたような気がする。

薄暗い影から誰かが現れた。

そこには青灰色の髪をした、色黒のオジサンハンターがいた。

第4章 オッサンと竜

第4章 オッサンと竜



私の前に立つ人物。私の記憶の中で、唯一私が敵意らしい敵意を抱かなかった人間。

松明^{たいまつ}が一つ、小さな炎を揺らしている。この息の詰まるような狭い密封された部屋を照らしているのは、その弱々しい^{ほむじ}焰だけのようだ。

影に浮かぶ人間。この人間は彼なのだろうか……。

いや、忘れるはずがない。この人間は、あの十年前の父と共に私を守ってくれた彼に違いない。私の心は踊った。彼は生きていた！

「あの、すいません……」

私は興奮を抑えて彼に話しかけた。心臓が普段よりも高く弾んでいる。

「何のことだ？ 何も悪いことはしてないだろう」

彼が不思議そうな顔をする。少しズレた答えだった。

「いや、そうじゃなくて……あの、私のこと……覚えてませんか？」

私の知るなかで、モンスターと話せる人間は彼しかいない。この人は、僕を救ったあの若いハンターだという自信があった。

しかし……

「残念ながら……お前とは初顔合わせだ」

彼は平然とそう言った。嘘ではなさそうだ。途端に心臓の鼓動が正常に戻る。高く飛び跳ねたバツタが空中で風にぶたれて急落下す

る、そんな急激な興奮の冷め方だ。不快極まりない。

「そ、そうですよね……」

私の心は、また底無し沼に沈む。家畜をもらいにきただけで矢を飛ばされ、吠えただけで捕らえられる。挙句の果てには、微かに抱いた希望さえひねり潰され、状況も気分も悪くなる一方だ。

「どうした？ 顔に元気がないぞ？」

その人は私の頭をそつと撫でた。違う人間だと頭では理解している、目の前の人物が十年、前の“彼”の姿と重なる。

『お前は勇気があるな。将来きつとあのお父さんのように強くなれる』

『ありゃ？ またモンスターと喋れるようになったぞ？ どうなったんだ、俺』

『あんたら、今のうちに逃げろ！』

たった数分、“彼”と過ごしたただけなのに……なぜ彼の言葉を鮮明に覚えているのだろう。忘れてはいないのだろう。

『ポーズ！ 次会うときは、立派な竜になってろよ！』

亡き父と共に戦う“彼”の後ろ姿。

父と“彼”にまた会いたい……。

「お前、泣いてんの？」

目の前にいる人間は急におろおろした。

「い、いや……悪気はねえんだ。な？ ……ほらほら、わしの顔見ろ。しわだらけのオジサンだろ？ だから、最近物忘れが激しくなってるかも……だぜ？ な、な！？」

一生懸命私を慰めようとしているオジサンが滑稽で、私は笑った。
「あん！？」 笑ってんじゃネーか！ おい、お前、内心ほくそ笑んでるだろ！ さんざん自虐的なこと言わせやがって！」

何だ？ このオジサンは？ 外見に似合わない若々しい言葉遣いに、べらべらと一人で喋りたてるこの滑稽な姿。私はまた笑った。

「カーッ！ また笑いやがったな！？」 コノヤロー、図体がでかいからっていい気になりやがって！」

頭から湯気を出す勢いで、オジサンは一人、怒鳴り散らしている。

「アトラスです」

「えっ？」

オジサンがピタリと止まる。

「私の名前です」

オジサンは頭から湯気を絶やして言った。散々怒鳴っていたのに、急に静かになった。

「アトラス……か。いい名だ……」

私は微笑んだ。

「本当ですか？」

素直に嬉しかった。

「おう。でもな、俺がもっといい名をつけてやろう」

オジサンが胸を張って宣言する。いい名、とは……？

「“ジャンボマン” 何てどうだ？」

私は自分の目が白黒するのが分かった。ジャンボマン。何だそれは。

「あのですね……」

「嫌か？　じゃあ“ハツデンキ”は？」

——私の心はなぜか明るい。

「確かに放電はしますよ？　しますが、それはあんまりじゃ……」

——運命か？

「ダメか？　そんなら“尾長丸”だ。ほら、尾長だぜお前。翼とか尻のやつとか」

——彼……オジサンに出逢ったのは、運命なのだろうか？

「あなたが名付け親じゃなくて本当に良かった……」

「あゝ？　何か言ったか？」

——父さん……あなたは人間と共生できる世界を望みますか？

あなたと共に戦ったあの“彼”のような人間がいるなら、あなたはそれを後押ししてくれますか？

「いえ、何にも言っではおりません」

「ゴホン、よろしい」

——私は諦めません。“彼”のような人間は必ずいます。今ここにいるオジサンがそうであるように。

「なあアトラス……見ろよ」

オジサンが急に真面目な顔になった。彼は、燃える松明が一つあるだけの薄暗いこの部屋の一角を指差す。そこには壁をくり抜いて

作られた小さな窓があった。

「朝日だ……」

確かにそこから白い日の光が射し込み始めていた。光は宙に舞うほこりの一つ一つをキラキラと照らし上げる。それはダイヤモンドダストのように目を釘付けにする美しい光の芸術だった。

「夜明けですね……」

私のその言葉を聞いて、オジサンはハツとした。

「しまった！ 朝になる前にお前を逃がさなかったら、お前は安楽死させられることになってたんだった！」

途端にオジサンは慌て出す。

しかし、私は不思議と怖く無かった。私はのんきにオジサンに話しかける。私を逃がす？ どういう意味だろう。

「そう言えば、あなたの名は？」

オジサンは慌てふためきながら、答える。

「フアイザ ケイ・F・ネイチャーだ。ああどうしよう……こんなに明るいとは不運な……霧が晴れてやがる……これじゃ霧に紛れて脱出できねえよ……」

その時、私の腹の虫が怒りを爆発させた。

ぎゅるるううーごろろろおおお

そう言えば、昨日の昼前から何も食べていない。

「腹減ってんのか？ くそっ、こんなときにい……」

ケイが呆れ顔をする。

「ご馳走が食べたいです」

私はしみじみそう言った。

「何言い出すんだよ？ ご馳走？ 何でまた？」

ケイがイライラしながら言った。

「いや、何となくご馳走を食べてもいい気がして……」

確かにそう思った。直感で。

それに、なぜか私は、すぐには死なない自信があった。ケイがいるからだ……という本音は押し止めておく。まさに根拠のない自信だ。

「ご馳走が食べたいです」

喚いているケイを尻目に、私はまた呟いた。

第4章 オッサンと竜（後書き）

アトラス編終わりました。アトラスはこのあと安楽死させられたのでしょいか。謎のオジサン、ケイ・F・ネイチャーとは？物語は幕を閉じたのでしょいか？それなら次は誰が主人公を務めるのでしょうか？ここまで御愛読頂いた方々、誠にお礼申し上げます。次編、ご期待のほどを…でわでわ（へへゞ

第5章 邪竜伝説（前書き）

第三章で出てきた“古の十勇士”にまつわる物語です。

第5章 邪竜伝説

第5章 邪竜伝説

邪竜伝説

はるか昔の暗黒時代、人間が生まれる以前の、世界が“混沌”に満ちていた頃、命ある者たちは“彼ら”に恐れをなし、ひれ伏し、蔑まされる日々を送っていた。命ある者はみな、“彼ら”の餌食となっていた。“彼ら”の生きる糧は絶望と恐怖。“
彼ら”は腹をすかすたびに、暴虐の限りを尽くし、多くの命を奪った。そうして、殺した者の絶望と恐怖が染み入った血肉を食する。恐れをなし、自分を見失った者の中には、自ら“彼ら”の手下となる者もいた。その数は少ないわけではなかった。

邪竜伝説＜龍三帝の章＞

伝説は動き出さん

混沌を求め

彼の者は現れん

絶望と恐怖をもたらすために

希望を喜びを

絶望の兄弟はそれを打ち砕かん

土を焼く者

鉄くろがねを溶かす者

水を煮立たす者

風を起こす者

木を薙なぐ者

炎を生み出す者

その者の名は ミラボレアス

その者の名は ミラバルカン

その者の名は ミラルート

それらの名は 宿命の戦い

それらの名は 避けられぬ死

それらの名は 災厄の兄弟

喉あらば叫べ

耳あらば聞け

心あらば祈れ

ミラボレアス

殲滅と破壊を呼ぶ

彼の者の名を

ミラバルカン

絶望と終末をもたらす

彼の者の名を

ミラルート

死と混沌を招く

彼の者の名を

彼の者の名を――

そんな“混沌”の世に、十の英雄達が立ち上がった。それこそ、
今にまでその名を轟かす、“古の十勇士”である。
いにしえ

邪竜伝説＜希望の章＞

彼らは闇よりあらわれた

それは絶望ではない

この世に一筋と差し込む、一閃の光

この世に希望をもたらす神からの使者

彼らは呼びかける

我らと共に戦え

我らと共に歩め

我らと共に立ち上がれ

希望は希望をもたらした

その希望を憎む者

その臭いを嗅ぎつけ

現れる

——災厄の兄弟

数多あまたの希望は数多の絶望を打ち砕く

希望は次々と大きくなる

災厄の兄弟は降り立つ

絶望と恐怖を身に纏^{まと}い

決戦の地へ

十の勇士は辿り着く

希望と勇気を胸に秘め

決戦の地へ

希望は自らの血を 絶望の消滅に捧げた

希望は自らの命を 邪悪の封印に捧げた

犠牲の果てに 世界は秩序を取り戻す

希望は“混沌”から世界を救いだした

自らの血を

自らの命を

捧げて――

こうして、世界は暗黒時代を脱した。

次の伝承は、邪悪を封印した時に作られた石碑に刻まれていた文である。それは、世界を救った者たちの警告だった。

邪竜伝説＜再臨の章＞

古の敵の血

かたき

その血を受け継ぐ者の犠牲により

彼らは蘇らん

よみがえ

その兄弟 再び世に“混沌”をもたらさん

彼らの名は――

殲滅と破壊を呼ぶ

ミラボレアス

絶望と終末をもたらす

ミラバルカン

死と混沌を招く

ミラルート

その者は呼びかけん

甘き声で 悲哀を誘う声で

我らに敵の血を捧げ給え

我らに敵の命を捧げ給え

我らはそなたに報いよう

力を

幸せを

自由を

そなたに差し上げよう

我らに敵の血を捧げ給え

我らに敵の命を捧げ給え――

第6章 雇われた殺し屋（前書き）

すこし、悲惨なシーンが入ります。

主人公が人殺しだからです。

どうぞ、お楽しみください ^^v

第6章 雇われた殺し屋

第6章 雇われた殺し屋

「言いたいことはそれだけか？」

真っ暗な夜の闇に響く声。その声は氷のように冷たい。まるで感情が込められていなかった。

「ま、待ってよ。何で私達が殺されなきゃいけないのよ！」
動揺した若い女の金切り声。恐怖のせいかな、震えている。

「残念だが、これは依頼されたことなんでね」

さっきの感情のない事務的な口調の男が突き放すように言った。

男はマントを身に着け、帽子をかぶっている。

「何で！？ 私達がしたことじゃないじゃない！ どうして今は死んでしまっただけ、この世にいない親の罪を……なんで私と子供たちが……」

女の背中には、五歳にも満たないであろう二人の子供が震えてしがみついている。双子だ。恐ろしさのあまり、口も利けなくなっている。

すると、さらに別の人間の声が闇を引き裂いた。

「テメェら見苦しいんだよ！ おい、依頼通り心臓にぶちこめよ！ さっさと殺せ！」

人を見下すような低い声。声の主は裕福な身なりをしていて、体格は太っている。

「……だそうだ。せいぜいあの世で悲運な人生を嘆くんだな」
マントの男が右の腰のホルダーから、サイレンサーのついた金色

の銃を取り出した。それは、暗闇に差し込む月光に怪しげな金の光を投げかける。男はまるで地獄の番人のように淡々と事をこなしていた。まさに悪魔だ。

裕福な身なりの富豪は、この冷酷な男の依頼主のようだ。

「や、やめて……せめて子供たちだけでも……」

女が狂ったように喚き出す。子供を守るために必死になっていた。悪魔は言い放つ。

「目障りだ」

その時、構えられた銃を見た子供達が泣きながら逃げ出した。闇夜に子供の甲高い泣き声が響き渡る。

マントの男は子供たちに照準を合わせる。

「やめてええええ！」

女が目をもいて男に飛びかかろうとした。

バシユン バシユン

しかし、時すでに遅し。

サイレンサーが銃声をくぐもらせる。二発の弾丸は二人の子供の背を捉えた。小さな体が勢い余って地面を転がる。

そこに赤黒い血の池ができた。子供たちはピクリとも動かなかった。

「いやあああああっ！」

悲痛な叫び声を上げ、号泣する女。それを見て嘲笑う、太った富豪。

「さあ、次はお前だ」

冷酷極まりない男が、銃を泣きじゃくる女に突きつける。女が顔を上げて悪魔を睨んだ。その表情は鬼のように恐ろしく、憎悪に満ちていた。

「この……人でなし！」

男はふうと溜め息をつき、面倒くさそうに答える。

「悪いが、仕事なんだ」

女の心臓に銃が突きつけられた。

バシユン

女の胸部から、血が滝のように流れだし、女が前のめりに倒れ伏した。綺麗なプラチナ色の髪が、紅の鮮血に染まる。

その無惨な死体の手に、マントの男は小さな紙切れを握らせた。

「何をしている？」

太った男が訝しげな顔をする。

「これは、俺のポリシーだ。俺が何人目にそいつを殺^やったか、番号が書いてあるのさ」

マントの男は肩をすくめる。それを聞いて、富豪は気味の悪そうな顔をした。蔑むような、敬遠するような、そんな顔だ。

「とてもいい趣味とは思えんが、よくやった。これで誰がこんなクズ共を葬ったか、永遠に分かることはないな」

富豪はそう言って懐から分厚い茶封筒を取り出した。

「金だ。受け取れ」

富豪はひよいとそれを投げてよこす。男は片手で華麗に受け止める。

「それじゃあ、ここでお別れだ。ご苦労だったな」

富豪がそう言って帰りかけたが、急に立ち止まって再び男の方を向いた。

「その金で何をするんだ？ お前はかなり儲けているんだろ？ 服くらい新調したらどうだ」

冷酷な男は自分の身なりを見た。

ボロボロの黒いシルクハットに、ボロボロの薄茶色のマント。ボロボロの革の黒いジャケットに、ボロボロの革でできた黒いスラックス。そして、左目に摺りきれている黒い眼帯。茶色い革靴も薄汚れている。

男が持っている中で新しいというか、手入れが行き届いているのは武器だけだった。一つは女やその子供を殺すのに使った金色に輝く小銃。世には出回っていないようで、男が自分で作ったと思われる。もう一つは軽そうなボウガンだった。こちらは銃身が金属で作られていない。光沢の無い黒に、所々に燃えるような橙色の点がついている。心なしか、熱を帯びているように見える。モンスターの素材を使った物のようだ。

「このボロい身なりは俺のトレードマークだ。金は銃の手入れと、飯くらいにしか使わない」

それを聞いて、太った富豪は吐き捨てる。

「けっ。くだらん信条ばかりだな。だが、殺した人間の数を書いた紙を、死人に渡すのくらいはやめたらどうだ？ なぜそうするのかさっぱり分かん。俺がその数字の一部にならないといいが」

富豪は踵^{きびす}を返して、待っていた馬車に乗り込んだ。

冷酷な男は、去っていく馬車を見送った後、死んだ女が握っている紙切れを見つめて呟いていた。

「『なぜそうするのかさっぱり分かん』か。そうだな……あんたには分からないだろうな……何もかも……」

+++++レイザー+++++

今日も一仕事終えた。厄介な依頼だった。何せ人気がないところに女と子供を呼びつけなければならなかったからだ。

それに、あの依頼主。ああいうのには吐き気がする。世の中、本

当に金でどうにかなると思つてやがる。

「ひとまず、部屋とつてあるから、宿に戻るか……」

翌朝、俺は武器屋に行くために街の通りを歩いていた。朝ということもあつて、たくさんの人が通りを往き来している。時々見かける、狩人以外、市民は皆、麻でできた風通しの良いシンプルな服ハンターに付けている。全身を覆う仕様で、日光から肌を守りながらも涼しさを保つようになっていいる服だ。俺のような暑苦しい格好の人間は、どこを見回しても見つからない。

それもそうだ。

ここは砂漠のど真ん中にあるオアシスに建つ、巨大貿易都市、“ラクシャリ”だからだ。

頭上からは、全てを干上がらせる地獄の陽光が降り注ぎ、空気は湿気というものをほとんど含んでいない。この街で涼しい所と言つたら、オアシスの水辺に生える樹の影か、近くを流れる巨大な“タリ川”のそばにある遺跡の中くらいだ。

ちょうど北の方に“ウェット湿原”と“ラクシャリ”の氣候を、足して二で割つたような過ごしやすい氣候の街がある。

こちらの氣候帯の中で最も快適で、人が集まり暮らす街。

砂漠地帯や、湿地帯、熱帯、寒帯など、全てをひっくりくるめたミナガルデ地方のなかで、首都的な役割を持つ超巨大都市、“シュレイド”だ。

“ラクシャリ”が砂漠のど真ん中にあるのに栄えているのは、“シュレイド”からタリ川が流れてきて、“ラクシャリ”を通り、さらに南方にある、熱帯の貿易都市“アルタミラ”へ続いているからだ。

要は、シュレイド、ラクシャリ、アルタミラの三大貿易都市が一本の川で繋がっているのだ。その水流のおかげで、様々な物資が運搬されている。

と言うわけで、俺はとある男の情報を探すためにここに来ている。
貿易都市は、物品だけではなく、情報もやり取りされるからだ。
その男を見かけたら是非とも知らせてほしいものだ。

男の名はケイ・F・ネイチャー。
ファイヴ

色黒で、せいかいしよく青灰色の髪をした四十歳前半の男なんだが……

今のところ、居場所を知る者はいない。

第7章 金の小銃、ボロいマントとシルクハット（前書き）

この人が主人公の話は一話が長いです。申し訳ありません。さて、言語解説ですが、「ボウガン」とは弓とライフルのハイブリッドとも言いましょうか。モンハンではボウガンをさらにライトボウガン、ヘビィボウガンの二種類に分けています。ライトは軽く、機動力があり、剣士などの援護が主流です。しかし、特定の弾をマシンガンのように連射できる攻撃的な面があります。ヘビィは、ライトとは比べ物にならないほどの単発の威力を誇ります。が、重いために機動力に欠けます。それを補うために、銃身にシールドをつけ、攻撃を防ぐことができます。

第7章 金の小銃、ボロいマントとシルクハット

第7章 金の小銃、ボロいマントとシルクハット

+++++レイザー+++++

俺は金の小銃ホルダーにしまった。そして、武器屋のおやじに金を渡す。

「悪いな。手入れ金、まけてもらって」

俺はおやじに礼を言う。昨晚使った金の小銃を早速手入れしてもらったのだ。自分でも手入れはできるが、こうして定期的に専門家に見てもらっている。情報収集がメインだが。

「んなこと言うなよ。そんなボロい服着て来られたんじゃ、まけたくもなるさ」

武器屋のおやじが軽く笑いながら言った。物騒な武器を扱う店主にしては優しい顔をしている。

小さく笑い返す。

「好意と受け取っておこう」

俺は歩いて武器屋から出ようとした。その時だ。

「俺はあんたが誰だか知ってるぜ」

武器屋のおやじが言った。歩みが止まる。無意識に腰のホルダーに手を添える。

振り返ると、おやじが温和な笑みを浮かべていた。ホルダーに添えた手を外す。杞憂だったか。

「知ってたのか。それは予想外だ」

俺はおどけた感じで、驚くフリをした。知ってる奴は知ってるも

んだ。

「そうさ。武器屋をやってる奴なら一度は会ってみたい影の英雄だからな」

おやじが深々とお辞儀した。突然だったので、内心で少し驚くとともに訝しむ。

「こんな小さな武器屋によくぞおいでくださいました。あなたの武器、精魂込めて御手入れさせていただきました！」

「おいおい、よせよ。照れ臭くなる」

またもや杞憂だ。以前、愛想ばかり振舞って俺の隙を窺い、銃を撃ってきた奴がいたのだが、この店主は呆れるくらいに純粹だ。この職業をしてる人間にしては珍しい。

おかげで頬が少し熱くなった。

「あんたが手入れしてくれた銃、大事に使わせてもらおうよ」

おやじはあたかも俺が神であるかのような視線を向けてくる。

「ありがとうございます」

また深々と礼をしやがる。俺はそんな身分の男ではない……。

「じ、じゃあ俺は行くよ。ありがとな」

そそくさと小さな店を出る。

手入れしてもらった銃ホルダーから抜き出し、調べてみる。上出来だ。あのオッサンの腕もたいしたものだ。

そのオッサンの銃系統専門の店は、路地裏に隠れるようにして建っている。日の光はほとんど射し込んでおらず、他の家々の陰になっていた。

いい武器屋ってのはこういう所にあるもんだ。

夕暮れ時。俺は小さなバーでウォッカを飲み、夜の砂漠の情緒を楽しんでいた。こういう、静かな中でウォッカを飲むことほどいいものはない。

ところが、その情緒に感じ入っていることに水を差すように、バーの前で暴動が起きた。急に辺りが騒がしくなり、せっかくの気分が台無しだ。

俺はウォッカを一息に飲み干す。

「マスター、金はここに置いてくからな」

懷から千ゼニー札を取り出し、カウンターに置く。多額のお釣りがくるだろうが、気にしない。どうせ、俺が騒動をでかくして店に迷惑をかけるだろうから。

店の外では何十人もの武装した軍団がいた。布の服を何重にも体全体に纏^{まと}い、頭に動物の骨をつけている。物騒な奴らだ。俺が言えたことではないが。

「おい貴様ら！ 命が惜しいなら、家から出てこい！ 俺達は砂漠の盗賊“砂嵐”だ！」

ラクダに乗った、リーダーと思われる大男が怒鳴り散らす。道の端には、家々から出てきた人達が怯えてうずくまっている。

盗賊“砂嵐”か。噂では、ラクシャリを時々襲い、大量の金品を略奪していく強力な勢力だと聞いた。確かに屈強そうな者ばかりだ。おまけに、いつもこいつも凶悪な顔つきをしている。ほおほお怖いこった。

「おい、誰か、俺にこいつらを追っ払ってくれと依頼したいやつはいるか？」

俺は堂々と挑発の言葉を吐いた。その途端、目という目が俺のこゝとを凝視する。

「はあ！？ なめてんのかテメエ？ 貧乏なクズがいきがるんじゃないよ！」

大男が馬鹿にしたような声を出す。

確かに俺の外観は貧乏だ。トレードマークなんだ。悪かったな、貧乏に見えて。

「クズ？ 随分な挨拶だな。が、それはどうでもいい。俺と銃の決闘をしろ！」

シルクハットの陰から大男を睨みつけ、怒鳴る。人の楽しみを奪っておいで、ただで済むと思うなよ。

その途端、周りの市民が慌てたように騒ぎ出した。盗賊達はゲラゲラと笑い合っている。

すると、道端で怯えていた人の中から歳をとった老人がでてきた。腰は曲がっておらず、若々しく、颯爽としている。

「あんた正気かね？ あやつがボウガンを我が身の一部のように使いこなすということを知らないのかい？ あんたの、その勇気だけは認める。だが、悪いことは言わん。早く逃げなされ」

俺は眼帯のついていない右目で老人の目を見つめた。

「あいつの銃が体の一部なら、俺の銃は俺の命だ」

「……」

老人はそれを聞いて黙り込んだ。俺を品調べするかのようになり、見回していた。

俺と盗賊のリーダーの大男は、背中を向かい合わせて道の真ん中に立つ。

一陣の風が砂漠の乾いた空気を運んでくる。その風は身も凍るような冷気を帯びている。砂漠は夜になると、昼には考えられないくらいに気温が下がり、厚着をしないと寒くてかなわないのだ。

射撃決闘のルール

その1…対戦者は背中合わせになってボウガンなどの各自の銃を手

に持つ。銃は一丁。中には殺傷能力がないペイント弾が一発。

その2…審判を選び、その審判が10から1までカウントダウンをする。そのカウントに合わせて対戦者はそれぞれ反対に向かって歩く。カウントが0になると同時に、振り返って相手を撃つ。

その3…ペイントを当てた場所が相手の心臓の近くにある方が勝ち。勝った者は、自分の銃に実弾を一発装填する。負けた方は、地面に膝立ちになる。そして、勝った方は弾の入れてある銃を敗戦者にわたす。敗戦者はそれで自分の頭を撃ち抜かなければならない。

これがこの世界における、銃による決闘だ。

「後悔するなよ、貧乏人！」

そう言って、盗賊のリーダーが不敵な笑いを浮かべている。今までそう言って散っていた奴は山ほどの。どいつもこいつも自分が勝つことに自信を持っているのだ。勝負は何かあるのか分からないのに、だ。

夜の気配が迫る中、砂漠の果てに紅い太陽が半分ほど沈んでいる。藍色がかったきた空には、すでに何億、何兆ともしれない星が天高く輝き、静かにこの決闘を見下ろしていた。

「では、始めます」

審判員に選ばれたのは俺に忠告をした若々しいあの老人だった。

「10……9……8……7……」

俺はカウントに合わせて一步一步進んでいく。胸元に、愛用の黒いライトボウガン掲げた。

ラヴァシュトローム。俺の金の小銃に並ぶ宝物だ。

周りの市民は、俺を哀れみの目で見ている。まるで、俺が死ぬこ

とが初めから分かっているような目だ。勝負は何が起こるか分からない。決めつけてかかる奴は、必ず度肝を抜かされる。俺の経験上は、そうだ。

「6……5……4……」

深々と深呼吸をする。

目を閉じる。

命を懸けた、誇りと誇りがぶつかり合う真剣勝負。心地よい緊張感に、心臓が少しずつ高鳴っていく。

「3……2……1……」

^{からだ}心臓の甘い響きが、体の芯から伝わってくる。それにともない、身体中の神経が針の先のように鋭く研ぎ澄まされる。

緊張が頂点に達した――

「0!」

バシユン!

パン!

轟く二つの銃声――

∞∞∞砂嵐の頭∞∞∞

俺は決闘する相手の姿を改めて見た。服は全てにおいて年季がはいっていて、穴だらけでボロボロだ。何年使えばそんなにくたびれるのだろうか。

「後悔するなよ、貧乏人!」

そう俺はからかってやった。口元に、自然に笑みがこぼれる。

カウントが始まった。

「10……9……」

俺があんな情けねえ格好をしたクズに負けるはずがねえ。まあ、俺に刃向かう度胸を見せたんだ。それだけは誉めてやりたい。ま、そんな度胸を見せたがために、何人死んできた奴がいることだか。

俺は絶対の自信の元に勝負に挑んでいる。負けたことは、一度たりとも、無い。

「3……2……1……0！」

俺は横に大きく転がり、立て膝の体勢になる。そして、落ち着いて貧乏人の胸部を狙った。両腕でしっかり銃を構え、撃つ。

パン！つという火薬の破裂する乾いた音が響く。その途端、あいつは身を翻した。^{ひるがえ}わずかにだが狙いが外れ、ペイントは相手の左側の鎖骨部分に付着した。

上出来だ。こっちは最初に横転して回避していたので、被弾は無かった。文字通りクズな相手だったな。

市民どもが目を見開いてこっちを見てやがる。そんなにファインプレーだったか？　しかし変だな。いつもの、ちやほや俺を褒め称える野郎どもの歓声がない……。全く、何を見とれていやがる。俺は勝ったじゃねえか。

「敗者、砂漠の盗賊“砂嵐”の頭、^{かしら}ブライマル！」

耳を疑った。

今、あのジジイ、何て言いやがった？

貧乏人の方は平然と俺を眺めている。そいつのマントが、乾いた冷風になびいた。

その時に、ちらりと見えた……右腰のホルダーの黄金の小銃。

鳩尾が^{みぞおち}スツと冷たい空気でいっぱいになる。

そんなはずは……なぜ“あいつ”がここに……

俺は混乱する頭を抱え込む。

もしかして俺は……とんでもねえ野郎を相手にしてたんじゃない——

第8章 雇われた殺し屋の正体 1 (前書き)

真実を語る涙ほど、美しいものは無い――

第8章 雇われた殺し屋の正体 1

第8章 雇われた殺し屋の正体 1

+++++レイザー+++++

俺は負けたことに相当ショックを受けている大男を見下ろした。
その大男、砂漠の盗賊“砂嵐”の頭であるブライマルは、さんざん俺のことを馬鹿にしたあげくに敗北した。世の中、自信過剰な人間ほど痛い目を見るものだ。

俺は奴の心臓ピッタリの所にペイント弾を撃ち込んでやった。そう、奴が横転してかわしたつもりになる直前に、だ。

審判をしていた老人が、俺に向かって話しかけてきた。驚きと疑問がないまぜになった表情だ。

「もしや……お前さんは……」

その時、突然人ごみの中から誰かが叫んだ。まさに老人が俺に訊こうとしていたころだろう。

「おい、そのマントの奴……“せきがん隻眼の孤狼”じゃねえのか!?”」

それを聞いて、決闘を見に来ていた野次馬が一斉に俺を観察しだした。どれも畏怖と敬遠がこもっている視線だ。辺りがざわめき出す。

面倒くさいことになってきた。

「おい、“隻眼の孤狼”って言ったら、自らが六十万ゼニーもの賞金首でありながら、この世界の賞金稼ぎの頂点に立つ男……“アウストラティック・レイザー”のことじゃねえか?’」

盗賊達は一斉に震え上がった。何せ、巨大貿易都市ラクシャリを

襲っている盗賊団なのだ。それなりの懸賞金が積まれているのは周知のことだった。実際、俺もその悪行にはいつか制裁を加えようと思っていたところだ。誰かが依頼してくれれば、すぐにでも潰しにかかっているだろう。

「奴が破った犯罪組織は星の数ほどある。暗殺者五十人集めても、自分がどこから狙われているのかすら分からぬまま、全員殺された……」

盗賊達は、徐々に後退り始めた。全員が死への恐怖に顔を引きつらせている。まるで地獄の悪魔でも見たかのような面持ちだ。

「安心しろ。残念だが、俺も市民方の手前、“殺し”はできない。それに、今日は別の用事でここに来ていた。だがな、次お前らがこの街を襲ったときに俺がいたなら……二度と日の光は拝めないと思え」

心の底から怯えている盗賊どもに楔^{くさび}を刺す。そうすれば、わざわざ騒ぎを起こしにラクシャリへやって来ることは無くなるだろう。

後退っていた盗賊の一人が、恐怖のせいか足がもつれて転倒した。「うわあああああっ！」

それをきっかけに、盗賊どもが互いに押し合い、踏みつけ合いしながら、情けなく悲鳴を上げて逃げていく。

「お、おい、野郎共！どこ行くんだ！？戻ってこい！」

ブライマルは逃げていく部下達に怒声を浴びせるが、決闘に負けた頭の言葉に耳を貸す者は、もはや誰もいなかった。

ブライマルはうな垂れて地面に両手をついた。

俺は、ゆっくりと堕ちた大男に近寄る。はっ、とブライマルが俺を見上げた。その目には、すっかり暗くなった夜空に浮かぶ星々と、それをバックに立つ俺の黒い影が映っている。

いつの間にか、市民達が周りにかがり火を立ててくれた。揺れる焰^{ほむら}に合わせて、回りの人々の、建物に映る影が静かにうごめいている。辺りは沈黙が支配していた。

「頼みがあるんだ」

ブライマルが再び俯いて静かに呟いた。しかし、辺りが静かなので、妙に声が響く。

「おい貴様！ 見逃してくれとか言うんじゃないぞ。どれだけの市民が、大切な財産を奪われたと思ってやがる！？」

回りを塙のように取り囲むほど集まった群衆の中から誰かが叫んだ。

「そうだ、そうだ！」

皆が相槌を打ち出す。こういうのは一人が始めると、水溜りに水滴が落ちるかのように辺りにさざ波となって広がっていく。騒ぎはどんどん伝わっていくのだ。

やかましくなってきた。やがった。

「市民の皆さん、お怒りなのは重々承知だが、罵詈雑言は決闘の掟通り、この男が死んで、それからにしてもえませんか？」

俺がそう横槍を入れると、あっという間に静寂が訪れた。演奏途中で急に楽器が音を出さなくなったかのような、不自然な静寂の訪れだ。

俺はため息を一つついて問うた。

「で、頼みってのは何だ？」

それを聞いてブライマルが、バツと顔を上げた。その顔は苦痛に歪み、目に涙が溜まっていた。

おやっ、と俺は思う。これは演技なのか、本心からなのか。

「あんたの手で俺を殺してくれ！ 助けてくれなんて見苦しいことは言わねえ！ 許してもらえないことぐらい分かってる！ だから……頼む！」

大男が、腰を折って、深々とひざまずいた。

演技か、本心か。嘘か真実か。俺は疑いながらブライマルを見下ろす。

「人を馬鹿にしといて、随分図々しいな。理由は何だ？」

俺はいかにも面倒くさそうに訊いた。本当に図々しい。

「悪く言ったことは、謝る……この通りだ」

大男がひざまずいたまま言う。

嘘か本当か。

それから、ブライマルは顔を上げて話し始めた。頬には、涙が一筋、流星のように滑っていく。

「俺はな、昔、自殺しようとしてた人に言ったんだ。『自分で自分のことを捨てるな!』ってな。馬鹿みてえだろ? 信じれねえだろ? それでもいいんだ。とにかく、俺はそいつにそんな風に言っちゃまった。そいつは泣いて頷いたよ。『私、死なないから!』って、そう言ってどっか行っちゃった……。俺だって男だ。決闘のルールは守りたい。けどよ、自分で自分のこと捨てるなって言っておきながら、自分の頭撃ち抜きたかねえんだ! 俺みたいな野郎の言葉を真剣に受け止めて、捨てかけた自分の命を拾ったあいつを裏切りたくねえんだ! だから、頼む……」

俺は黒いシルクハットの陰から、土下座するブライマルを睨みつけていた。

内心、ほお、と思った。

なぜなら、こいつの話は嘘じゃなかったからだ。俺にはどうでもいいことだが。

「いいだろう。お前の頼みとやらを聞いてやる。どこに一発欲しい? 額ひたいか? 後頭部か?」

俺は、右腰のホルダーから金の小銃を取り出した。すっかり手入れされていて、揺れるかがり火に黄金の煌めきをまとっている。さすが、あの武器屋の親父。この光沢には文句無しだ。

「額だ……」

ブライマルが安心した顔で言った。その顔は死を前にした男のものとは思えぬほど、清々《すがすが》しかった。この男に恨みを抱いているであろう市民も、その顔を見て、ひととき、思っただろう。

“美しい”と。

俺は動かなくなったブライマルを、ラクシヤリの、街の西門の近くにある、廃墟となった倉庫に放り込んでおいた。奴の手に、紙切れを握らせるのを忘れずに。

そして俺は西門へと歩き出した。西門からは、広大な砂漠が広がっているのが見える。その砂漠の地平線を境に、何もかもを飲み込むかのような、星の宝石をまとった海が広がっている。全てを飲み込む漆黒の海だ。

時刻は、ちょうど真夜中。

西門の、大きく開けられた門扉の付け根に、何かが置いてあった。星の明かりを受けて輝く、黒いボトルだ。

「お、ウォッカ!？」

情けないが、これだけは目がない。

俺はウォッカを手にとると、ラベルを見物しながら街の西門をくぐり抜けようとした。かなりの高級品だ。

その時、近づいてくる気配を察知した。

「礼は言わないが、トッテオキのプレゼントがある。すぐそこの、捨てられた倉庫に入ってみるといい」

俺は街を出る直前、振り返らずにそう叫んだ。

どうせ礼でも言いに来たんだろう。

俺は肩をすくめて、延々と続く砂漠に歩み出した。

♀♀♀♀ある女性♀♀♀♀

私は彼を一目見た時から胸がときめいていた。まさに電撃的な恋

愛、一目惚れというやつだ。

あれは真夜中だった。

彼は怪我を負っていた。ラクシャリの警備隊と戦って、太ももと脇腹に矢が深々と刺さってしまったのだ。私は怪我人を見捨てられない性格^{たち}だったし、彼に惹かれていた。だから、路地裏で気絶していた彼を自分の家まで背負っていった。普通の人よりかなり身長があつて運びづらかったが、私はやり遂げた。

私は彼を自分の部屋のベッドに寝かせ、治療した。

私は両親から彼を隠した。

なぜなら両親はラクシャリの役人だったから。ラクシャリの敵である彼が、私の家にいることは知られてはならなかった。

彼は私の介護で元気になった。

彼は自分が私の家についていいのか心配していた。でも私は彼に言った。私がいるから、大丈夫だと。

ある日、私の家に太った富豪と、ラクシャリの警備隊がやってきた。何の前触れもなかった。

「お前達夫婦は、ラクシャリの治安を預かる役人の地位にあるにも関わらず、貿易業を営むアリアス公より、多大な賄賂を受け取っていた。その見返りとして、アリアス公の商売敵である、こちらのハルベイ公に対し、麻薬輸入をしたという偽りの罪を被せ、公の貿易会社を潰した。そのせいでアリアス公が市場を独占し、品物の値段を吊り上げて、経済が混乱に陥った。それにより、貧民層での餓死者が急増した。その咎^{とが}を死をもって償わせるため、我々は貴様らを逮捕しにきた！」

警備隊が罪状を申し立て、私の両親を連れていった。

その時、太った富豪、ハルベイ公が私に向かって叫んだのを覚えている。

「テメエもただではすまさねえ！俺が受けた侮辱のほどを知れ！」
口から唾を撒き散らし、憤怒も露わに怒鳴り散らした。

「ハルベイ公！あなたは機嫌が悪いと口調が汚くなります」

警備隊の一人がいさめる。

「あ、ああ、悪かったな……」

そんな捨て台詞を残して、あいつは去った。

両親は、その日のうちに頭を銃で撃たれて処刑されてしまった。

私は両親を殺されたショックで、自暴自棄になっていた。自分の胸にナイフを突き刺して死のうとした。

「自分で自分のことを捨てるな！」

彼は私に言った。私は彼の胸の中で泣きじゃくった。彼は優しくった。ただただ、私を抱きしめてくれた。

あの時の言葉に、どれだけ励まされてきたころだろう。

「私、死なないから！」

私はあの時、そう叫び返していた。

彼と、ある種の約束をしたのかもしれない。

その日は彼と共に夜を過ごした。

翌朝、私はこっそり家を出た。もう彼とは会うことはできない。

彼といれば私は足手まといになるだけだった。

事実、今日までハルベイ公は私を捕まえようと追っ手を繰り出している。

「さようなら……ブライマル……」

私は二人の子供を授かった。双子だった。生活は貧しく、ハルベ

イ公の追撃から逃げ続けなければならなかったが、充実した生活だった。

街の外へ逃げようと思ったが、門にはハルベイ公が手を回した門番がいた。私達は、ラクシャリに閉じ込められていた。

彼と別れて四年が経った。ハルベイは私の尻尾を掴めていなかったが、私達もラクシャリから出られないままだった。ブライマルに会う機会も、無かった。

そんなある日、私は匿^{かくま}ってもらっていた友人から、手紙をもらった。

「真夜中に西門付近の倉庫に来て！ 門番の目をごまかして街を脱出する方法を見つけた！」

私はそれを信じ、西門のその倉庫に侵入した。

しかし、待っていたのは……ハルベイ公と、シルクハットと黒いマントを身につけた謎の人物だった。

私は、罠にはめられたのだった。

第9章 雇われた殺し屋の正体 2（前書き）

さあ、アウストラテック・レイザー編、フィナーレ、開幕です。

第9章 雇われた殺し屋の正体 2

第9章 雇われた殺し屋の正体 2

♀♀♀♀ある女性♀♀♀♀

私はマントの男が、男の隣にいる太った富豪、ハルベイに雇われた殺し屋だと悟った。マントの男からは、面倒くさいが仕方なくやっているという雰囲気がありありと醸し出されている。鬱陶しいものでも見るかのような目つきで私を睨んでいた。

「じゃあ、始めるか。どうする？自分が先に死んで、無惨な姿を子供に晒さらすか？ それとも、殺される子供を見て絶望の果てにあの世に行くか？ あんたが選えらびな」

そのマントの男の声は身震いするほどの冷たさで、何の暖かみも存在しなかった。つららのようだ。鋭くて、突き放すようで、冷たい。

「な、何よいきなり……あの手紙は一体だれのものだったのよ!？」

私は頭が真っ白になっていた。手紙の字は完全に友人のクセが現れたものだ。

男の目が私の視線と交錯した。ふつふつと放たれる殺気。殺される……私も、子供達も……。

「ああ、門番の目をかいくぐって脱出できる方法があるとかどうとか書いてある手紙か……。あれは俺が偽造したやつだ」

悪魔のような男が肩をすくめる。相変わらず事務的な口調だ。

「どうということよ？ 筆跡は明らかに私の友達のものよ!？」

私は頭が割れそうになるほど恐怖と不安にさいなまされていた。

必死に生き延びる糸口を探そうと考えるが、浮かばない。思考が空回りしている。

二人の子供は、怯えて私の背中にしがみついていた。

「あんなものは簡単さ。このハルベイ公にあんたの友達の住民票を取り寄せてもらったんだ。住民票は二十歳になったら、自分で親が書いたものを書き直すのがこの法律にあるだろう。あとは、字の使い方を真似れば……」

マントの男が再び肩をすくめた。それを聞いて私は感情が爆発するのを感じた。

この男は、人を追い詰めるのならなんでもするのか、と。

「あんた一体なんなのよ！ 人を貶めるのがそんなに楽しい！？ 私死ね訳には行かないのよ！」

目の端に涙が滲む。あの時の記憶が鮮明に蘇る。

頬を伝う涙

抱いてくれる彼

彼が私に放った、一声

「馬鹿な私が自殺しそうになった時、『自分で自分のことを捨てるな！』って抱いてくれたあの人……。彼のおかげで、私は命を捨てずに済んだの！ そんな彼に『私、死なないから！』なんて豪語しておいて、こんな血も涙もない悪魔に殺されるなんて……悔しい！ どうしてあんたみたいなケダモノがこの世にいるのか分からない！ 私の気持ち……人の命を平気で踏みにじるような奴が、私の気持ちなんて絶対分かるわけないわ！」

子供達がさらにきつく抱きついてきた。

私は、はっとした。自分が今、マントの男を激怒させるようなことを叫んでいたことに気づいたのだ。つかっとなって、言ってしまった。

もう取り返しがつかない。どんな罵声が飛んで来るのか、私は身

構えた。

マントの男は微動だにせずに、言った。

「言いたいことはそれだけか？」

ぞっとした。その声は、さっきと全く変わらぬ口調だった。感情が込められてい、氷の刃をはらんだ声。激昂した様子で無いことが逆に恐ろしい。

私は混乱した。もはやこの男からは逃れられない。そんな絶望感で頭がいっぱいだった。

「ま、待ってよ。何で私達が殺されなきゃいけないのよ！」

子供を守らなければ……。心臓が体の中でのたうち回っている。今にも破裂すかもしれない。

「残念だが、これは依頼されたことなんでね」

マントの男が事務的な口調で言うと、目でハルベイ公の方をちらっと見た。雇い主を蔑んだ瞳だ、

「何で！？ 私達がしたことじゃないじゃない！ どうして今は死んでしまつて、この世にいない親の罪を……。なんで私と子供たちが……」

私はすっかり回らなくなった頭で呆然と言葉を返す。すると、人を見下したような鋭い怒声が闇を切り裂いた。

「テメェら見苦しいんだよ！ おい、依頼通り心臓にぶちこめよ！
？ さっさと殺せ！」

ハルベイ公の声だった。その言葉は私の頭をさらに麻痺させる。

さっさと コロセ

「……だそうだ。せいぜいあの世で悲運な人生を嘆くんだな」

マントの男が金色の小さな銃を取り出した。それを見た瞬間、体が硬直した。背に抱きつく子供達の手がますます震える。

コロセ

「や、やめて……せめて子供たちだけでも……」

頭では冷静になろうとするのに、体が勝手に動く。私は狂ったように喚いていた。

マントの男は言い放つ。

「目障りだ」

その途端子供達が、夜の闇に向かって走り出した。そこからはあまり覚えていない。まるでコマ送りされた画像だった。

地面に倒れ、血の池に溺れるようにして動かなくなった二人の子供。嘲笑うハルベイの声。

「この……人でなし！」

気づくと私はそう言っていた。男はふうと溜め息をついて答える。

「悪いが、仕事なんだ」

私の胸に、金色の小銃の先端が突きつけられる。

バシユン

私は目を覚ました。

「あゝママやっと起きたね！」

「ヤッターヤッター。ママより早く起きたんだよ！　ねー？」

「うん！」

私は辺りを見回した。ここは、昨日私達が殺されたはずの場所……あの倉庫だった。窓から日の光が射し込んでいる。

「ねーママ？　服がベチョベチョしててキモチワルイよう」

子供達が無邪気に騒いでいる。生臭い臭いが立ち込めていた。

辺りの状況を確認する。私達は全身……トマトケチャップ……いや、血糊だらけだった。ふと、私の胸の部分を見やると、小さな注射器と、ゴム風船の欠片のようなものがついている。

「麻醉薬と……血糊入り風船？」

よく見ると、子供達の背中にも、怪しげなミニ注射器と風船の一部がぶら下がっている。

その時、子供達二人が急に前のめりに倒れた。かなりの勢いだっ

た。

「あれれ？ ママゝ力が入らないよう」

「おまけに頭がぼーっとするう」

そう言えば、私も頭がスッキリしない。まるで貧血が起きたときのように、視界が白く霞む。

しばらく、三人でぼーっと寝転がっていた。すると、手に違和感を感じた。私の右手に折り畳まれた紙が握らされていたのだった。

『おはよう。目は覚めたか？ 伝えなきゃいけないことがあるから読んでくれ。』

1. 君達は世間的に死んだことになっている。ハルベイもそう思っている。だから、外に出る時は顔を隠せ

2. ちなみに、その赤い液体は、幾分かは、被弾したときに飛び散る血糊が混ざっているが、それだけでは殺していないとバレルので、君達の体の血が流れ出てくるようにしておいた。蚊の唾のエキスを使っているから、死なない程度に血が流れ出るようにしてある。ただ、貧血のような症状が出るがそこは我慢してくれ

3. 今日の真夜中になる直前に、西門の門扉の付け根にウォッカを一ボトル置いといってくれ。俺は街を出る時にそこを通るんでね。礼は言いに来るな。いいか、ウォッカ一ボトルだけだ。二ボトルでも三ボトルでも、お札の手紙つきでも俺は受け取らない。ウォッカきっかり一ボトルだ

4. あと、倉庫の出口の所にプレゼントが置いてある。街を出る時とか、食費とかに必要なだから。残った分は……お前達の自由にしろ

5. じゃあ、それだけだ

ボロいマントの男より』

私は何度も何度も紙を読み返した。何度も何度も。

「あ、ママ何読んでるの？」

「どうして僕たち赤いお服着てここで寝てたの？」

どうやら、麻酔薬が強すぎて、子供達は昨晚何が起こったのか記憶を失っているようだ。

倉庫の出口を見ると、分厚い茶封筒が無造作に置かれていた。私の目の前が涙でぐちゃぐちゃになっていく。

「あれれ？ ママ？ 泣いてるよ？」

「ママごめんなさい！」

「何謝ってるの？ 僕たちなにもしてないよ」

「でも、でもごめんなさい！」

私は顔を拭いた。涙を拭い捨てた。悲しみも、絶望も、全ては流れ去った。もう泣くことはない……。絶望に、恐怖に涙することは。延々と続いた死と隣り合わせの鬼ごっこは終わった。

「お、ウォッカ！？」

マントの男が嬉しそうな声を出している。私は男の仏頂面が、ウォッカを見て子供のように笑顔になるのを見ていた。思わず笑い出しそうになる。普段からであろう、あの無愛想な顔や声からは創造もつかないような表情だ。

マントの男はウォッカのラベルをまじまじと見ながら、西門をく

ぐろうとしていた。

私が、お礼を言うために物陰から飛び出そうとした、その時。

「礼は言わないが、トッテオキのプレゼントがある。すぐその、捨てられた倉庫に入ってみるといい」

あの人は街を出る直前、振り返らずにそう叫んだ。どうやら、来ていたことがばれていたらしい。

私は慌ててその倉庫へ向かった。その倉庫とは、今朝、私達が倒れていた所のことだ。何が待っているのだろうか……私の心は明るく波打った。

私は倉庫の扉の前で、深呼吸した。何かを察知しているのか、心臓が無駄に高く跳び跳ねている。

そして、私が錆びた扉に手を掛けようとした、まさにその時……。

「待て！ レイザーさん！」

誰かがいきなり飛び出してきた……。

見間違えるはずもない。

「あんた、何をしたくてこんな紙切れを！」

私は走り出す。

“彼”の後を追って。

「素敵なプレゼント？ ブライマルは世間的に死んだ？ 何がしたいんだよ！？」

彼は西門の外に向かって叫んでいた。

私は、はあはあと肩で息をしながら彼の隣へやって来た。膝に手をつき、呼吸を整える。貧血気味なのが体に響いていた。

「あんた誰だよ？」

彼がぶつきらばうに言った。彼の声だ。
懐かしい。昔と全然変わらない、無愛想さ。

「ブライマル……？」

私は顔を上げた。

彼は私をじっと見た。

「ま、まさか……？」

突然彼が硬直し、私に向かって倒れてきた。

「わあっ！」

慌ててその体を支えたが、彼は気絶していた。彼の手から紙切れが舞う。

ちらりと見えたその一文。

『5. もし素敵なプレゼントと会ったら……貧血症状もあるから……まあ気絶しないことだ』

ボロいマントの男より』

私は彼を背負うと、西門の外に広々と広がる砂漠を見つめた。

マントの男の姿は、当然、もうない。

そこにはただ、星明かりに白く浮き上がっている砂丘のみ。

ハルベイ公の恐怖から、私を救い出したマントの男。そして、あの倉庫の出口に、ハルベイ公から渡された依頼料の入った茶封筒を、そっくりそのまま貧しい私達に残していったマントの男。あの人は、本当に何のお礼も受け取らずに行ってしまった。
ウォッカ以外に。

私は隠れ家のベッドに彼を寝かせた。

すると、起きていたのであろう二人の子供達がトコトコやって来た。

「こら、寝てるように言っただでしょ!？」

こそこそ声で私は子供を叱る。頑張って怖い顔をしてみるが、笑いの種になるだけで、あまり意味はない。

「ママ、この人誰？」

子供達が揃ってヒソヒソ声で尋ねる。

私はスヤスヤと眠る、“彼”——ブライマル——の顔を見つめた。彼の寝顔は、清々しく、そして、安らかだった。

額に注射器の針で刺されたような痕あとがある。それが意味することは、もう知っている。彼もまた、マントの男から助けてもらったのかもしれない。縛られた鎖から解き放たれたのだろう。

「この人はね……あなた達のパパよ……」

子供二人にそう囁く。

ミナガルデ新聞一（一部）

盗賊“砂嵐”のリーダー死す

砂漠の貿易都市ラクシャリ。それを頻繁に襲撃していた、強力な盗賊団“砂嵐”のリーダー、ブライマル・アルワードが、先日、古いシルクハットとマントをまとった謎の男と射撃決闘をし、敗北ひたひた。額を銃で撃ち抜かれ、死亡。その後、遺体は決闘をした謎の男によって運び去られ、行方不明となっている。また、残った部下達は本

抛地に逃げ帰る途中でモンスターの襲撃に遭い、全滅した。モンスターの特定はできていないもよう。
また、謎の男の正体は、“隻眼せきがんの孤狼ころう”、アウストラティック・レイザーであるとの情報が入ってきている。

◆◆◆アトラス◆◆◆

「こりやまゝ物騒なニュースだね」
色黒で青灰色せいがいしよくの髪をしたオジサンが、木の枝の上に腰掛けて新聞を読んでいる。ケイだ。

私はケイの言葉、つまり、人間の言葉は分かるものの、字は読めなかった。

「何て書いてあるんですか？」 読んでくださあーい」
私があくびをしながら訊いた。寝不足が続いたせいで、疲労困憊だ。今はゴロゴロと、木々の間で寝転がっている。

「あん！？ 甘えんなよアトラス！ 自分で読め！」
ケイが無茶苦茶なことを言ってくる。

「だーかーらあー、字は読めないって言ったでしょう！？ もう忘れたんですか？」

「いや、わしは忘れてねえぞ！ ほら、わかったら読め！」
うわー。何も分かってないぞこのオジサン。もういやだ。誰か私の代わり——オジサンの相手役——をしてくれませんか？

「おーい、アトラス？ 読むなら早く読めよー。次はラクシャリに行くんだからよー」

行くって言っても、目的地に着くまで私の背中の上寝てるだけでしょうが！ おまけに目的地が峡谷地帯からラクシャリへ変わっている。私はため息をつきながら目を閉じた。

このオジサンを乗せてあちこちを飛び回ることほど重労働なこと

はない。

もう一眠りしよう。

第9章 雇われた殺し屋の正体 2（後書き）

どうでしたか？ レイザー編、お楽しみ頂けましたでしょうか？ さあまだまだ続く、この拙作、暖かい目で見守り頂けたら、幸いです（^^）

第10章 ゴリラ三兄弟（前書き）

さあ始まりました。ボケと突っ込みをトッピングしたモンスター達の饗宴！たっぷりお召し上がりください！！

美味しいかわかりませんが^^；

第10章 ゴリラ三兄弟

第10章 ゴリラ三兄弟

「ば、バルスの兄貴……さ、さ、さみいいん、だ、だけど……」
吹雪舞う雪山の奥地で、凍った鼻水のつららを鼻にぶら下げたま
ま嘆いている、ピンク色のゴリラがいた。頭には色鮮やかな黄色が
かったトサカがあり、口には特徴的な四本の全然鋭くなさそうな牙
が覗いている。長い尾の先には、巻き取ったキノコ。体格は人間の
三倍以上はある。枯れ葉で作った茶色のコートに、桃色のたるんだ
巨体を無理やり収めていた。

「情けねえぞ！ まったく……。あんなあったかい森で、ダラダラ
過ごしてるからそうなるんだ。気合で何とかしろ！」

こちらは、いかにも熱血漢だという感じがする、黄金の縞模様を
持つ漆黒のゴリラ。ピンクのゴリラよりも数倍筋肉質で、大きな
上でもかなり上回っている。頭には相手を威嚇するかのように、水
牛のそのように大きく曲がった二本の角が飛び出している。

ピンクのアホくさいゴリラは、くしゃみを連発しながら、ぶるぶ
ると震えている。このアホくさい桃色の巨大類人猿は、人間に【桃
毛獣^{けじゅう} ババコンガ】と呼ばれていて、無法者だとか、ワイルドだとか、
下品だとか、間抜けだとか……さんざんな酷評をされている。
それもこれも、ババコンガ自身の生活態度や戦い方にあるのだが……。

一方、こちらの熱血イケイケ巨大類人猿のお方は、ババコンガと
は違って恐れ敬われている。その漆黒の筋肉質な体躯^{たいく}で、次々と敵
に襲いかかる超攻撃的生物。【金獅子^{きんじし} ラージャン】だ。興奮する

と、体の毛が反応を起こして黄金色に輝く。ただ、ここにおられるお方のように、普段から黄金の毛をまとっているものもいる。それらは、突然変異型として、特に【ラージャン・激昂げきこう】と呼ばれている。なぜ【激昂げきこう…いきり立つ、怒る】なのか。それは怒らせてみれば分かるが……。

これら二匹の牙獣種がじゅうしゅは、自分達の兄弟に会うために、わざわざ寒いところまでやって来たのだった。

「あ、兄さぁーん！ よく来られましたね！ それに弟よ、よくぞお前がここに来ようと思ってくれたものです！」

吹雪の中から誰かが叫んだ。それを聞いたババコンガは（鼻につらをくつつけたまま）、胸をそらして急に威張り出した。

「へっへっへー！ スゲエだろ、タスカの兄貴ィ！ 会いたくてたまらなかったぜ！」

その威張りくさっている弟分の頭を、ラージャンのゲンコツが襲う。慈悲も何もない、叩き潰すような勢いだ。

「アホが！」

「イテエエッ！？ 何すんだよバルスの兄貴！ ただでさえ頭悪いのに、もっと馬鹿になるじゃねえか！？」

「テメエ、あんだだけここ、雪山には来たくねえとか言ってただこねてただろ！ 『寒いのは嫌だー！ 死ぬー！ 俺はまだまだ生きたんだぁぁぁ！』とか喚いてるのを俺が無理やり引っ張って来たんだろうが！ おまけにそれ以上の馬鹿には成りようがねーだろ！」

「ああ、酷い！ 今、どさくさに紛れて酷いこと言った！ 俺の思考能力が生態系ピラミッドの下げの下げの最底辺にあるって言った！」

白い闇の向こうから、何かが笑いながらやって来た。それは吹雪に溶け込んでいるせいか、ほとんど姿が見えなかった。

「やっぱりそうですか、兄さん。クリンチが進んで寒い所に行くは

ずがありませんからね」

不意に白銀の闇から現れたのは、凜々しく肉の締まった真っ白なゴリラだった。

赤ら顔に、長く鋭い白色の二本の牙が上顎から生えている。そして、黄みがかかった、固く長い二本の髯^{ひげ}。体の大きさはババコンガとほとんど変わらない。この巨大類人猿は、牙獣種の【雪獅子^{ゆきじし} ドドブランゴ】だ。ブランゴという、ドドブランゴの小型サイズの類人猿が集まった群れの頂点に立つものだ。ドドブランゴは非常に統率力に優れている。

さて、雰囲気から察するに、こいつらは義兄弟だ。長男がラージヤンのバルス。次男がドドブランゴのタスカ。三男がババコンガのクリンチ。

この三人組は何をするためにわざわざ集まったのだろうか。

それは、かつて世界を揺るがした、歴史に深々と刻まれている、あの大戦争が起きようとしているからだ。

“猿蟹大合戦” ざるかにだいがっせん

人はその戦いをそう呼ぶ。

第11章 両軍、合流（前書き）

なんか、主人公のタスカが影薄いです。タスカの義兄と義弟のせ
いっすけど…… W W

第11章 両軍、合流

第11章 両軍、合流

****タスカ****

俺は雪山の麓ふもとの平原に集まったモンスターの軍隊を見回した。弟のクリンチが連れてきたコンガ——ババコンガの小型サイズのもの——達が百体ほど。こいつらはまったく緊張感がないが……。俺の群れからは、精鋭部隊として、五十体のブランゴに、普通の寄せ集めの戦闘員が百五十体くらい。コンガと違って、かなりの統制がとれている。

コンガ種もブランゴ種も似たような生態系を持っている。それぞれ、ババコンガやドドブランゴなどの群れのリーダーがいることだし、その統制力がどうしてここまで違うのか。

それはさて置き、バルス兄さんが連れてきた友達のラージャンが二体いる。ただでさえ種の数が少ないラージャンにしては、集まった方だ。何せ、ラージャン一体でブランゴ五、六百体分以上の力にはなるのだ。さらに、兄さんは【ラージャン・激昂げきこう】だから、普通のラージャン一体の二倍以上の戦力にはなる。

この軍隊に同盟軍が加わって……千は越える大軍になるはずだ。俺が軍隊の様子を確認していると、雪山の方から轟くような不吉な音が響いてきた。

ふと顔を上ると、何かが雪山の坂を下り降りてきていた。一見すると、雪崩のようだ。雪煙がもうもうと立ち上っている。

「兄さん！ 何か来る！」

俺は、横になって居眠りしている兄さんを叩き起こした。

「うおっ！ 何じゃありゃ!？」

バルス兄さんが飛び上がる。

津波のように押し寄せて来たその雪崩がついに正体を現した。

薄く青みがかった白い肉食恐竜のような体に、青い筋がストライプ模様を織り成している。後ろ足の長いトカゲが二足歩行しているような体型だ。頭部には小さなエメラルドグリーンのトサカ。細い腕の先にある指についている、鋭い爪。ギアノスという鳥竜種ちようりゅうしゆの大量だ。

その集団は、俺達から三十メートルほどの距離の所で立ち止まった。轟音がゆっくりと静まり、辺りには部下たちの苛立たしげな鼻息の音が聞こえるのみとなる。

味方のブランゴ達が唸り始めた。それもそうだ。ギアノス達とは、いつも雪山の縄張りを争っているのだ。

憎い敵、ギアノス達の中から一際体格の大きいものが出てきた。エメラルドの大きなトサカに、これまたエメラルドグリーンの巨大なカギヅメ。集団のリーダー、ドスギアノスだ。

「何だコイツら。タスカ、コイツら敵か？」

バルス兄さんが険しい顔で訊いてきた。バルス兄さんは普段雪山に来ることがないため、ギアノス達のことを知らないようだ。

「普段は敵です。でも、今は何か別に目的があるみたいです」

その会話を聞いていたのか、ドスギアノスが俺達に向かって声を張り上げた。

「まずは、謝ろう。お騒がせして申し訳ない。実は君達が、人間に對して戦争を仕掛けるということを小耳に挟んだものでね。俺達も混ぜてもらいたくてやって来た、という訳だ」

やはりギアノス達もこのことを知っていたらしい。部下を集めるために、色々と大きく動かなければならなかったのだ。他のモンスター達が知っていても別におかしくはない。

ドスギアノスの申し出に對して、当然の反応のようにブランゴ達

が文句を叫び出す。

「お前らの手助けなんていらねーよ！」

「そうだそうだ！」

「今さら何いい顔ぶってるんだ！」

ギアノス達が唸り声を上げだした。相当、苛立ってるんだろう。両者の間に険悪な空気が流れている。

それもそうだ。いつも縄張りを侵してくる奴らの手助けなんて……

「別にいいぞ。混ざっても」

「おいイイ！」

バルス兄さんが問題発言をしたクリンチの頭をぶっ叩く。

「イツテエエ！ 何すんだよバルスの兄貴！」

「お前、ブランゴ達が何て言ったのか、ちゃんと聞いてたのか!?」
バルス兄さんが文字通り激昂している。

「うん。聞いてたぞ」

ひょうひょうとクリンチが答える。

「じゃあさっきの発言取り消せえ！」

「イツテエエッ！ だから頭を叩くなって兄貴イイ！」

俺は、拳を振るうバルス兄さんから、頭を抱えて逃げ回っているクリンチを見て笑っていた。いつもコレだ。クリンチがわけの分からないことを口走っては、バルス兄さんが毎回それを叩きに行く。

「だって、味方は多い方がいいじゃねえか！」

クリンチが逃げ回りながらそう言った。その途端、バルス兄さんが急に立ち止まる。

「おお！ 確かにそうだな！ お前、頭いいなあ」

と、納得顔で相槌を打つ。

「ちよっと待てよ！ バルスの兄貴！ そこ、フツー気付くだろ！」

気づけよ！ てか、この頭にできたコブ何とかしやがれ！」

頭にプツクリとしたこぶを作って怒鳴るクリンチ。顔が真っ赤だ。素で怒っているらしい。

「いやはや……大変な義兄弟きょうだいをお持ちじゃないか」

俺の隣で声がした。ふと横を見ると、いつのまにかドスギアノスが隣に来て笑っていた。

周りを見ると、配下のブランゴ達やコンガ達、バルス兄さんの友人のラージャン達も笑っている。

おまけにギアノス達までもが腹を抱えて大爆笑していた。

さっきの険悪な空気はどこかに行ってしまったている。こんな風に自然に場を和ましてしまうのがクリンチの得意とするところであり、尊敬できる場所であった。まあ、本人には自覚症状がまったくないのだが。

「よし、そういうことだ！ ブランゴの諸君、色々あっただろうが、ギアノス達には加勢してもらうぞ！」

バルス兄さんが、無理やり話をまとめる。

ブランゴ達はしぶしぶといった感じだが、ギアノス達の参加を認めた。やはりそこはブランゴ種の誇りだ。殴りかかりたりせず、常に冷静な判断を下す。コンガ達はどうでも良さそうな感じだった。

「ハッハッハ。全ては俺の思惑おもわく通りだ」

クリンチが、たるんだ腹を揺らしながら、空に向かって高笑いしている。

「クリンチ！ 馬鹿なことやってないで出発の準備を整えさせるのです！」

俺が、ぐうたら寝転がっているコンガ達を指差して怒鳴ると、クリンチはすぐ退散していった。

あれから二日後。俺達の軍勢はウェット湿原のはずれに到着した。バルス兄さんの話によれば、“同盟軍”とはここで合流することに

なっていた。

俺達が、長い行軍の疲れを癒すために休んでいた時だ。突然、足元の地面が、酔っ払ったかのように揺れ出した。ガラガラと瓦礫^{がれき}の山が崩壊する。

「ひゃあ！ 地震だ！ 俺はもう駄目だああ！ 落石に遭ってペしゃんこになっちまうんだああ！」

クリンチが、泣きじゃくりながら頭を抱えてうずくまっている。

「馬鹿か！？ 潰れたら気合で膨らみ直せ！」

バルス兄さんが、また無茶苦茶なことを言っている。

「膨らむ！？ 俺は風船じゃねえよ！」

クリンチが顔を上げて反論する。

「充分風船みたいな体型してるじゃねえか！ このデブが！」

「あ！？ またそんなこと言う！？ この、バルスの兄貴のがん黒ゴリラめ！ 黒毛和牛！ 裁かれて食われやがれ！」

「あゝ！？ 何だと！？ ……って、ゴリラ元から黒いじゃねえか！ しかも俺、金だぞ！ 金獅子だ！」

そんなゴタゴタの中、沼地特有のどろどろした地面から、たくさん^{かに}の蟹が出てきた。泉から水が湧き出るように、次々とめどなく溢れ出してくる。

“同盟軍”だ。

「お出ましですよ！」

俺は、互いのほっぺたをつまんで取っ組み合っているクリンチとバルス兄さんに叫んだ。

「こ、こりゃスゲー……」

バルス兄さんが目を丸くしている。目の前には、辺りを埋め尽くすほどの大量の蟹がいた。赤いのと青いのがきれいに並んで別れている。

どこを見ても蟹、蟹、蟹だ。

「どうでありますかな？ 我が軍勢は……」

俺の隣にはバルス兄さんとほとんど大きさの変わらない巨大蟹がいた。体は全体に赤く、両腕の巨大なハサミは盾のように分厚い。黒い小さな丸い目の近くから、細長い触覚が二本伸びている。その蟹は背中に白骨化した竜の頭蓋骨をしょっていた。その頭蓋からは、立派な、長い一本角が生えている。

この巨大蟹の名は、頑丈なその爪が由来で【盾蟹^{たてがに} ダイミヨウザザミ】と呼ばれている。ちなみに、蟹軍の半数を占める、人間の胸くらいまでの体高をした赤い蟹は、ダイミヨウザザミの幼体のヤオザミだ。ヤオザミの背中には、生まれつき貝のような殻^{から}が背負われている。だから、人間の言葉を借りて例えるなら……ヤドカリのようなものか。しよってあった殻は成長過程で捨てられ、大きくなったら、ダイミヨウザザミのように大型生物の骨や殻を背負うようになるらしい。

もう一種類、バルス兄さんくらいの大きさの巨大蟹がいた。青い外骨格に、鋭く長いブレードのような両腕を持っている。その両腕は、全てを切り裂く鎌の如し。ダイミヨウザザミの丸い頭部とは違い、長く尖ったノコギリのような頭をしている。背中には、ダイミヨウザザミの物とは別の、ごつごつした竜の頭蓋骨が背負われている。

こいつは、やはり爪由来で【鎌蟹^{かまがに} ショウグンギザミ】と呼ばれている。なお、蟹軍のもう半数を占めるのが、ショウグンギザミの幼体、ガミザミだ。大きさはヤオザミとほとんど同じ。こちらも、成長過程で捨てられる殻をしょっている。

この二種族は、甲殻種に分類されていて、どちらも硬い外骨格を持っているため、人間が生半可な刃物で切りつけても刃がボロボロになるだけだ。

「うむ。この沼地に住むコンガ達も、そなたらに加わったそうではないか」

蟹軍のリーダーであるショウグンギザミの切刻さん——恐ろしい名前だ——が俺に訊いてきた。ちなみに、副リーダーがダイミヨウザザミの鉄壁^{テツベキ}さん。

「はい。コンガ達は、自由気ままに生活していて、群れを作りませんが、集まってみたら多いんですよ。クリンチが分け前にキノコをくれてやるって言ったもんだからこぞってやって来てしまっ……」俺は、少し気圧されながら答えた。

そう、コンガ種はキノコが大好きなのだ。クリンチなど、自分の尻尾の先に巻きつけて持ち運んでいる。

以下が、俺達の軍勢の状態だった。

猿蟹連合軍（助っ人Ⅱギアノス）の戦力状況

猿軍^{さるぐん}

*リーダー バルス（ラージャン・激昂）

*副リーダー兼毒味役 クリンチ（ババコンガ）

*参謀長 タスカ（ドドブランゴ）

*精鋭部隊

ラージャン 2

ブランゴ 50

コンガ 0（当然か……）

*通常部隊

ブランゴ 約150

コンガ 約250

援軍

＊リーダー アッシュ（ドスギアノス）

＊通常部隊

ギアノス 約100

蟹軍 かにぐん

＊大将 キリキザミ（ショウグンギザミ）

＊副大将 テツペキ（ダイミヨウザザミ）

＊精鋭部隊

ショウグンギザミ 1

ガミザミ 約50

ダイミヨウザザミ 2

ヤオザミ 約50

＊通常部隊

ガミザミ 約400

ヤオザミ 約500

「実はもう一人、我が軍の侍大将がこっちに向かつて来たる」
さむらいだいいしやう

キリキザミ大将が言った。

「まだ増えるのか？」

バルス兄さんが驚いている。それも当然だろう。蟹軍の兵数だけでも千を超えるのだ。

「その通り。ましてや、かの戦力なくして楽勝なし。あやつはヤオザミ一万に相当す」

ギシギシと甲殻の軋む音と共にやって来たテツペキ副大将が口を挟む。それを聞いて、クリンチが食べていたキノコを喉に詰まらす。

「ゲホッ、ゲホッ……い、い、一万だと!？」

「さよう。ただ、隠密行軍が難く、その歩み、いみじく遅し」
かた

キリキザミが説明する。

その時だ。俺は、微かに大地が揺れるのを感じた。

「地震……ですか？」

キリキザミに訊いた。キリキザミは黒く、丸い目で俺を見つめた。
「来たれり」

だんだんと地震……いや、地響きがひどくなってきた。一定の間隔で刻まれる、大地を揺るがす轟音だ。

地が震えるほどの衝撃。

「何だ何だ!？」

ドスギアノスのアッシュが、慌ててやって来た。この轟音に驚いているらしい。

「霧の内に、奴の姿を垣間見^{かじまみ}たれり」

テツペキが、霧の中を指差している。

「何だ!？ 見えねえ、見えねえ!」

バルス兄さんが目を細めて仕切りに視点を変えている。

すると、だんだん霧に何かの影が映りだした。霧の向こうから、影の主がやって来ているのが分かる。地を震わす巨大な足音。甲殻種独特の軋むような動作音。異様に巨大な影。

その姿が霧から姿を現そうとしていた。

俺は目を疑っていた。心臓が、畏怖と、恐怖に波打つ。見上げても天辺がみえないほど巨大だ。

「おい……あんたらの言う侍大将ってのは……」

バルス兄さんは、こいつが誰なのか知っているようだ。

「さようだ。この者にありけり」

キリキザミが答える。甲殻種の無表情な顔からは、何も読み取れなかったが、明らかにに心強く思っているのが分かる。

クリンチの口の端から、食べかけのキノコがこぼれ落ちる。

「あわ、あわわわ……」

その時だ。頭上、それもかなり上の方から声が降ってきた。

「おやゝっさゝん。まゝたゝせゝたゝなゝ」

辺りに響き渡る、気前のいいのんびりした大声。しかし、意外と

美声だ。かなり声ではなく、低くて心地良い声。
「うむ。気にするでない。よくぞ参った、巡山」
キラキザミが受け答えしている。

バルス兄さんが呆然と上を見つめている。

「こ、こいつあ……【仙高人】シエンガオレンじゃねえか……」

第12章 すれ違う者達

第12章 すれ違う者達

****タスカ****

俺はただ呆然と立ち尽くしていた。

目の前には、天をつくようにそびえ立つ超巨大蟹。

青銅色^{ブロンズ}の金属的な硬い外骨格。一本一本が大木の幹のように太く、かつ長い六本の足に、それに負けじと長い二本の腕。その腕は、シヨウグンギザミの腕のように鋭いブレードになっているわけではないが、その重量たっぷりの一撃はハンマーのように全てを打ち砕く。まさに自然が生み出す凶器だ。ちなみに、本当にブレード化している鎌蟹の腕とは違い、先端にはちゃんと小さなハサミがちよこんとついている。そのちよこんとしたハサミが巨体に似合わずかわいらしい。そして、背中には——高い位置に胴となる部分があるため、下からではよく見えないが——何か巨大なものが背負われていた。殻^{から}か、それとも盾蟹ダイミヨウザザミや鎌蟹シヨウグンギザミと同じように何かの頭蓋骨を背負っているのか……。いや、後者は無いな。あんな巨大な胴部に見合う頭蓋骨を持った生き物が存在するわけがない。何を期待してるんだ俺は……。

「うは〜デカイ。一、二度、姿を見かけたことがあったが、近くで見たら、また別格だなこりや」

バルス兄さんが巡山と呼べたその巨大蟹を見上げて言う。

「バルスの兄貴、こいつが【^{とりでがに}砦蟹^{シエンガオレン} 仙高人】なのか!？」

クリンチがキノコの欠片を口の回りにつけたまま言った。ご存知、

コンガ共はキノコに目がない。

「そうだ。圧巻だろ？」

バルス兄さんがクリンチの反応を見て楽しんでいる。クリンチは、ジュンシャンを見上げたままゴクツと唾を飲み込んだ。そして、急に土下座した。

「ジュンシャンさん……足ください！」

「バツツキヤロー！」

兄さんがまたしても問題児の頭を拳で打ち付ける。

「イツテエエエ！ またかよ！」

「つたりめえだ！ お前、初対面の方に向かって、足寄越せたあどいう考えしてんだ！」

「うるせえ！ 俺は足短いんだ！ 短足の美脚なんだ！ でも足長い方がカッコいいだろ！」

「なにが美脚だ！？ どっからどー見たって汚ならしい豚足とんそくじゃねえか！」

「わゝっはっはっはゝ！ おやつさゝん、こゝいつら気に入ったゝでゝ！」

バルス兄さんとクリンチの喧嘩を見て、ジュンシャンが笑い出した。やはり腹に響く心地よい低音だ。

「そうであるか！ 実は私もそう思っていたところであるぞ！」

キリキザミが答える。声に笑いが含まれていた。そう言えば、彼らのような甲殻種は、無表情（これは外骨格のせいだ。仕方ない）で、感情の起伏がほとんど無いと聞く。でも、うちの義兄弟は、そんな彼らも笑わすことができるらしい。まったく、色々な意味ですごいことだ。

「とにかく、戦力は充分。団結力も心配なしということ……この地方から人間達を追いつ出す日も近いでしょう！」

俺は明るい未来を想像して、そう言った。

その時だ。ドスギアノスのアッシュが叫んだ。

「空から何か来るぞ！ 全員隠れろ！」

俺達猿軍とギアノス達は大慌てで草原に身をひそめた。蟹達は地面に潜っている。ジュンシャンは……ゆっくりとしゃがんでいた。気を付ければ音を出さずに済むらしい。意外と器用なようだ。

ここから、ジュンシャンの背中が見える。背負われていたのは……巨大な頭蓋骨だった。盾蟹や鎌蟹とは比べ物にならないほどの大きさだ。しかも、それは明らかに竜の頭部だった。

「あんなでかい頭蓋骨なら、その体はどれぐらいなんだろうな……」隣にいるアッシュが呟いている。

息を潜めて待っていると、空から霧を割って何かが降りてきた。翼に鞭のようにしなる長い尾に、これまた長い数本の尻尾。

「ありゃ【舞雷竜 ベルキュロス】じゃねえか……。何でこんな湿地帯にいるんだ？ 聞いた話じゃ、ずっと東にある峡谷地帯にしか住んでないはずだぞ」

にじり寄ってきたクリンチが、知識をひけらかしている。

そのベルキュロスは、しばらくして頭上を通り過ぎていった。気のせいか、何かを探しているようにみえた。

「俺、追っけてみる」

クリンチが走り出した。

「お、おい、待ちなさい！ この霧の中どうやって後を……」

俺は言いかけてやめた。コンガには、食べ物や食べ物、その他の食べ物などを探し当てる大変敏感（性格とは大違いだ）な鼻を持っていることを思い出したのだ。

「兄さん、キリキザミさん、アッシュさん、ここ頼みます。あいつだけじゃ何をしでかすか分かりませんから」

俺はそう言って駆け出した。

「あいよ」

「うむっ」

「任せろ」

三つの返事が重なる。

俺とクリンチは、岩陰からベルキュロスを観察していた。

「あいつ、人間に見つかりてえのか？ アホだろ」

クリンチが呆れたと言わんばかりに呟く。失敬だが弟よ、『アホ』という言葉を使う権限はお前には無いぞ、と言いたいになる。

しかし、確かにあのベルキュロスは『アホ』だ。何せ人間の村の前で黙って突っ立っているのだから。

しばらく待っていると、物音一つしていなかった沼地に突然轟音がして、俺達は飛び上がるほど驚いた。俺は頑張って、声を出さなかったが、クリンチは……

「アホ……」

カラスのように、馬鹿にしたような甲高い声を出したクリンチの口を、俺は手を使って慌てて塞ぐ^{ふさぐ}。

「モンスターだ！ ハンター達、集まれ！」

どこからか、人間の声が出た。何と言っているか分からないが、あのベルキュロスに対して攻撃を始めるに違いない。俺とクリンチは、ゴタゴタに巻き込まれないように慌てて逃げ出した。

「ひゃあっひゃあっひゃ！ あいつ、アホだ！ ひゃあっひゃっは」

俺は腹を抱えて地面を転がり回っているクリンチを、呆れた目で見つめていた。だから、『アホ』は使うなよ……。

「あのベルキュロス、相当腹ペコだったんだろうな……グフフフ……あの地響きみたいな腹の虫の音！ おもしろえー！ ひゃあっひゃ」

クリンチは涙を流しながら笑っている。テツペキが呆れたように呟く。

「まったく……兄上方のご苦労が想像し難いですな。まあ、はたか

ら見れば愉快的な限りであるが……」

それはそれはとんだ誉め言葉だ……。

「ご、ご冗談を……」

まったく、誰か俺の役割を代わってもらえないものか……。叱るのも疲れてくる。

ひとまず、ベルキュロスには気付いていなかったし、特に何かをするためにここに来たわけでもなさそうだ（さっきは何をしようとしていたのだろうか）。

俺は突然揺り起こされた。辺りはまだ真っ暗だ。

「どうしたんですか？」

寝ついてからまだ、少ししか経っていない。気分是最悪だ。俺を起こしたのはアッシュだった。

「さっきから見張りをしていたんだが……空気が変わった。明日の朝、このウェット湿原は霧が晴れるだろう」

確かに、空気が乾燥してきていた。霧をカモフラージュにして行軍を計画していたので、俺は驚いた。慌ててみんなを起こしにかかる。

「みんな眠いでしょうが、聞いてください。明日の朝にはこの霧が晴れます。そうなると、人間にこの軍勢が見つかってしまう恐れがあるため、一時来た道に戻って北の森に姿を隠します。早速行きますよ」

俺達は霧がウェット湿原を覆うまでここを抜けることはできない。俺達はどうしてもこの沼地を通過しなければならなかった。なぜなら、ここを抜けた先には人間達の最大の街が横たわっているからだ。

その街の名は、超巨大貿易都市“シュレイド”。

俺達はそこに奇襲をかけ、叩き潰すつもりだ。その街が無くなれば、このミナガルデ地方の人間達は、首をもがれることになる。

人間達を、ここから追い出す日は近い。

第12章 すれ違う者達（後書き）

次はアトラスが再登場します。ウェット湿原脱出エピソードも後で出てきます（ハ－ハヾ

第13章 二人目（前書き）

更新遅れてすいません。さて、早速載せることになった『アトラスのウェット湿原脱出エピソード』です。そこで彼が出会った人物は……。また、ケイの優しさも垣間見れるかも……。です。では、今回はブルーな感じで仕上げました(?)ので!どうぞご入場ください (へーへ)

第13章 二人目

第13章 二人目



私は色黒のオジサンわたくしのケイを背に乘せて夜間飛行をしていた。

頭上には数えきれないほどの星々が白や黄や赤などそれぞれの色を輝かせている。そして、青みがかった神秘的な満月。その空の住人達の、ほのかで柔らかい光が、眼下に永遠と続く雲海うんかいを明るく照らし出し、まるで本物の海を見ているかのように錯覚させていた。

「ケイ、見てください」

私は背中の上でぐっすりと眠りこけているケイを、落とさないように揺すった。

「んゝ着いたのか？」

ケイがあくびをしながら伸びをしている。彼の特徴的な青灰色せいがいしよくの長めの髪が、風を受けてサラサラなびいている。まったく、のんきな人だ。でも、そういうところを私は気に入っている。

「ありゃ、まだかよ。でも綺麗な景色だな」

私はケイが辺りを見やすいように減速して飛ぶ。

しばらく景色を堪能していると、雲海に切れ目があるところにやって来ていた。

「あ、下に人間の街があるようですね。明かりが……たくさん見えますよ」

私は眼下の遙か下に、巨大な都市が横たわっているのを見つけた。近くを大河たいがが流れていて、星や月の光が静かに水面みなもに映えている。

「ありやウェット湿原からすぐ近くのシュレイドだ。おい、アトラス、街の近くの川辺に降りてくれ」

ケイがワクワクした顔で言った。ひょっとしてあの人に会いに行くつもりなんじゃ……。また行き先変更だ。峡谷地帯からラクシャリ、ラクシャリからシュレイドと、一日に二度も行き先を変える旅人が他にいるだろうか。

「はいはい。ラクシャリはこのシュレイドという街に行ってからなんですな？」

私は呆れながら言った。ケイは風の吹くまま、気の向くままに進路を変えるようだ。私としても、モンスターと話せる人間を探したのであって、特に行きたいというところがある訳ではないのだが……これはいくらなんでもひど過ぎる。

「で、何でシュレイドに行くんですか？ まさか、またあの人に会いに行くんじゃないですよ？」

私は背中の上のケイに向かって顔だけ振り返った。

「ん？ ……おう。あいつのバンドの演奏をちよっと聞きに行きたくてな」

まだ頭が半眠りなのだろうか、返事が鈍い。それよりも、この人、『懲りる』ってことを知らないようだ。

「それって、ミライじゃないですか……」

「そうそう、“ぜにがた銭形 ミク未来”だ」

わあ、この人まだ名前間違えてるし……。

「“ミライ未来”ですよ。まだ分らないんですか？」

「いいじゃねえか。どっちでも」

ケイが首をかしげている。

「あのですね……ミライは男性ですよ？ ミクだったら女性の名前みたいじゃないですか」

はあ、疲れてきた。

私がこのオジサンと、ウェット湿原を脱出する時、ミライという人に手伝ってもらったのだ。

数日前 早朝

朝になれば私が殺される……と慌てふためいていたケイが、この小さな独房のような小部屋から飛び出していつて十分が経った。

すると、閉められていた小部屋の戸から、そうっと誰かが入ってきた。二人いる。一人はケイだが……もう一人は誰だか分からない。朝の薄い日光を浴びて、その人物の姿が部屋の入り口に浮かび上がっている。

ケイと同じくらいの背丈だ。頭にはツンツンな金髪。朝日を浴びた金髪は、本物の黄金で作られているかのように明るく輝いている。そして、すらっとした顔立ち……が、不快さに歪んでいた。

「何なんだジジイ!? 朝っぱらから俺を叩き起こすくらい重要なことなんだろうな?」

人間の中では美男子に分類されているだろうその男は、苛立ちをストレートに表に出している。何かに腹を立てているようだ。まあ、想像はつくが。ただ、何を言ってるのかさっぱり分からない。

それにしても、この澄み切った声、どこかで聞いた気がする。

「前に、わしがたまにモンスターと話せるってことを言ったよな?」

ケイは金髪男が不機嫌なのを無視して話し出した。

「ああ……んで?」

金髪男が大あくびをしながら言った。ひょっとしたら、ぐっすり寝ているところをケイに起こされて不機嫌なのかもしれない。着ている服も白い単調なものだ。人間が寝るときに着る“寝間着^{ねまぎ}”というものののだろうか。

「こいつとは喋れるんだ」

ケイがニカニカしながら私を指さす。その顔じゃあ信憑性が無くなると思うが……

「嘘だろ。どうせ」

ほら、やっぱり。

「けっ、仕方ねえ。アトラス、三回小さく唸ってみせてくれ」

ケイがすねた顔で頼んでくる。この人も感情が分かりやすい人だ。私は喉の奥で『グルルルウ』と三回唸った。すると、金髪男の馬鹿にしたような顔が一転、驚愕に取って変わる。ケイが勝ち誇った顔で金髪男を見た。

「ま、まぐれだろ」

まあ、そう思うのが妥当でしょう……えっ!?

私は、信じられないことに気づいた。

「すいません……金髪のお方？」

私は少し興奮しながら、確信を持ってその男に話しかけた。

「ん？ ケイ？ 何か言ったか？」

金髪男が反応した。やはり……

「ほえ？ わしや何も言ってねえぞ」

ケイが間抜けな返事をする。そして、当然だと言わんばかりに私を指し示す。

「しゃべったのはアトラスだぜ？」

金髪男が仰天した様子で私を見つめた。目を皿のように丸くしている。

「お、お前が、し、しゃべったのか!？」

金髪男の言葉が分かる……。それは突然やってきた変化だった。十年前の、あの悲劇の直前に起きたことと同じように……。

「は、はい、私です。私の言葉が分かりますか？」

私は驚き半分、喜び半分の心境で答えた。

「分かる……分かるぜ……お前の言葉が！」

金髪男は興奮して叫び始めた。

「俺はモンスターの言葉が分かるようになったんだ！」

「私も、あなたが『ま、まぐれだろ』と言ったときに、何か違和感を……」

私もついつい大声を出していた。それをケイが慌てて止めに入る。

「しーっ！ 村の奴らを起こすつもりか！？」

ヒソヒソ声で叱咤する。

それを聞いて、金髪さんと私は顔を見合わせた。

「だってビビったからなあ。仕方ねえよなあ？」

金髪さんが目の端でケイを見ながら言った。

「そうですね。私も、モンスターと話せる人を見つけることができて、嬉しかったんですから」

そう口を合わせる。その時だ。突然ケイが真顔になって訊いてきた。

「モンスターと話せる人を見つけることができて嬉しい？ 何で嬉しいんだ？」

それを聞いて私は、はっとした。

「今までに何匹もモンスターと話してきたが、人間と話せるから嬉しいなんて言った奴はいなかったぞ。むしろ、最初は人間と話せる自分がおかしいという風に言っていた。まるで人間なんかと話せるようになった自分が嫌みたいにな」

それはそうだ。モンスター達は人間を目の敵にしているのだ。なぜなら、人間は、自分達の都合でモンスター達を排除してきたからだ。森に街を作りたいからだとか、商隊が砂漠を通らなくてはならない時に、その地域にモンスターがいたら危ないからということだ。モンスターを殺したりとかだ。憎悪は憎悪を呼び、ほとんどのモンスター達は人間を嫌悪するようになったのだ。子供の頃、父さんに教わったことだ。

「実は……私……人間とモンスターが一緒に生きていけるような世界を夢見てるんです」

私は顔を俯けてそう言った。

「えっ！？」

金髪男が驚きの声を上げた。顔は見ずとも、信じられない、とい

う表情をしているのが分かる。

「小さい頃、私はケイのように、モンスターと話ができる人に命を助けられたんです……。ちょうど、若いケイのような外見で、てつきりケイが私を救ってくれた人間だと思っていたんですが……。まあ、彼に助けられたんです。私と母は……。父と彼が犠牲になってくれたお陰で生き延びられたんです」

二人は黙って私の話を聞いていた。小鳥のさえずりでさえ、その歌声を控えている。唯一、小さなかがり火の炎のはぜる音だけが聞こえるが、それが余計に周囲の沈黙を引き立たせていた。

「父と彼は、あの白い竜から……。私を……」

喉が鳴咽をこらえようと、必死になっている。目の前が霞に覆われていく。

「白い……。竜……。!」

あの悪夢が、再び私を悲惨な過去へと引きずり込む。

——赤い光弾。

——私を庇った人間の背中

——嘲笑う白い竜

——父さんの最期の微笑み

——母さんの涙をこらえる悲壮な顔

——全身を邪悪の炎に焼かれた父さんの無惨な亡骸

——父さんの亡骸が抱いていた、人間の大きな鋼色の剣

白い竜が、私を見て舌なめずりをする。白い竜が私に向かって近づいて来る。私は頭の中が真っ白になった。私の回りにはもう誰もいない。私をこの悪夢から救ってくれる人はもう誰も……

私はいつの間にか、子供のように体を丸めて泣きじゃくっていた。抑えようのない恐怖に私の体は震えていた。

その時だ。悪夢以外に何もない私の心に、光が一筋、射し込んできた。

「おめえは一人じゃねえよ」

鋼色の大剣を持った人物が現れた。顔は陰になって見えない。白の混じった濁った青色の髪をなびかせ、その人は剣を手に白い竜に向かって駆け出す。白い竜の顔に恐怖の色が浮かぶ。

「ボーズ、立派になったじゃねえか」

私は、現実に取り戻された。地面に丸まっていた私に、ケイが腕を組んで、背中で私の首に寄りかかっていた。

ケイが、私に優しく諭^{さと}すような声で語りかける。

「お前は強いアトラス。強くて、そして、弱い」

「……」

「お前……父さんが死んだ日以来、俺に会う今日まで、ずっと泣かなかったんだろ」

「……はい」

父さんが死んでから元気がなくなり、衰弱死しそうになっていた母さんに、私はずっと泣くところを見せないようにしていた。母さんが死んだ後も、私は泣かないと決めたのだ。私は父さんのように騎士になる。騎士は誰にも涙を見せない……

「バカ野郎……。つらかっただろうが」

そう言ってケイが立ち上がった。パンパンと、尻についた地面の砂を払う。顔はこちらからは見えない。

「今、金髪頭のミクが……えっと、ミライがお前の脱出準備をしてくれてる。見張り台の兵士の目をごまかすための道具に、ロープをつけてる。手伝ってくるから……そうだな、十分したら戻ってくる

ぞ。きっかり十分だ。いいな？」

ケイは、私の返事も待たずに外へ出ていった。一人取り残された私は、ケイが出ていった扉を見つめた。

その途端、涙が止めどなく溢れ出てきた。私は小さく、そして気の済むまで泣き続けた。

「じゃあなアトラス。俺は今日からシュレイドっていう街に用があるからここでお別れだ」

ミライさんが私の頭をポンポンと叩いて言った。やっぱり今日会う以前に聞いたことのある、張りのある若い声だ。

ふと心当たりが見つかった。

「ミライさん、昨晚私が閃光玉で目を眩まされた時にあの場にいませんでしたか？」

私が尋ねると、ミライさんが申し訳なさそうな顔をした。

「ああ、あの時確かにハンターとして駆けつけてたよ。閃光玉投げたの、実は俺なんだ。ただ、普通のモンスターなら、目を焼かれた痛みとか、目が見えない恐怖で暴れ出すところを、お前はじつと突っ立ってて、おとなしかったんだ。だからただ者じゃない気がしてたんだ。まあ、とにかく、あん時は悪かった」

頭の後ろをかきながら、ミライさんは頭を下げる。

「別に気にしてないですよ」

「そう言ってくれると助かるぜ」

ミライさんが苦笑いする。

「では、さようなら銭形未来さん」

私はミライさんに頭を下げた。

「未来ミライって呼べよ。またいつでも会いに来い。シュレイドでバンド組んでっから、お前のために演奏会を開いてやるぜ。バンド組んでる奴がお前見て逃げ出さなかったらだけだな」

ミライが微笑む。やっぱり美男子の類いだと思う。モンスターの

私にも分かる。

「分かったぜ！　またいつでも会いに行くぞ、ミク！」

私の背中に、改造した馬の鞍をつけ終わったケイが言った。途端に、ミライの顔が鬼と化す。その間、まばたきかん一回分。

「オメエは来んな！　ジジイ！」

「ひよええ〜！　ア、アトラス逃げるぞ！　ヤマンバだ！」

「誰がヤマンバじゃクソヤロオ！　俺は、お・と・こだっつてんじゃねーかあ！」

ミライが、金髪を振り乱してケイに飛びつこうとしている。まるで怒り狂うラージャンだ。

「よっしゃ！　じゃあ行くぜ！」

必死にミライの攻撃をかわしていたケイが、私に、地面に畳んであった、薄く、柔らかな皮を被せた。全体的に淡い紫色で、不思議な触り心地だ。ところどころにロープがついていて、それを私の体に結んで皮が外れないように固定している。そして、スプレーでその皮に何か透明な液体をかけた。余すところなく、まんべんなくかけている。すると、皮を被っている私の体が“透明”になりだした。

「おお！　すごい！」

私は驚きのあまり、仰天の声を上げた。こんなものは見たこともない。

「これはな、オオナヅチっていう、カメレオンみたいに背景に体色を変えられる竜の皮だ。この透明になれるマントはわしの発明品だ」ケイが胸を張って自慢し出した。

「いいから早く行けよ。効き目、短いんだろ？」

ミライが不機嫌な顔で別れを告げた。

「おう。翔とべ、アトラス！　空へ！」

鞍の上でケイが言った。風避け用のゴーグルを顔に着けている。急いでここを離れることになるので、飛行中は風圧が恐ろしいほどかかるのだ。

「じゃあなケイ！」

ミライがプリプリしながら、ぶつきらぼうに手を数回だけ振る。

私は、翼をはためかせた。辺りに風が巻き起こり出す。そして、一気に空へと舞い上がった。オオナヅチの皮がまとわりついて、飛びにくかったが、かなりのスピードで私とケイは東へ飛んでいった。目的地は、私の故郷の峡谷地帯（後でラクシャリへ行こうだの、シユレイドへ行こうだのと変わるが）。ケイに私の住みかにしまつてある鋼色の大剣を見せる予定なのだった。

「速いなく。もう村があんなに小さいぜ。おまけに霧が晴れてたら、ウェット湿原って案外綺麗に見えなくもないな」

ケイの声が、風に流されて小さく聞こえる。

眼下に森が広がっていると差し掛かった。私が峡谷からウェット湿原に向かうまでに立ち寄った、小さな村のあるヘリテイジ密林だ。……村ではひどい扱いを受けたが。

「ここまで来りゃいいだろう。アトラス、新聞読みたいから降りてくれ。ラクシャリっていう砂漠の街で騒動が起きたらしい。見出しに“砂嵐”とか書いてあったから、だいたい想像はつくけどな」

いつの間取ってきたのか、ケイの手に棒状に丸められた新聞があった。私も、今日の夜中から起きっぱなしだったので少し眠りたかった。

あ、そう言えば。肝心なことを忘れていた。

「ケイ、ご馳走っていつ食べさせてくれるんですか？」

その途端、私の腹は地震を起こした。何とも形容し難い腹の虫の鳴き声が、空に響き渡る。あえて言うなら、空が割れるほどの雷鳴だろうか。

「これじゃあ丸一日絶食することになりますよ」

すると、ケイが爆笑し出した。うーん、寝不足のせいで癪にさわる……。

「心配すんなアトラス！ わしがついとるからな！」

さんざん笑われたので、仕返ししてやろうと密かにほくそ笑む。「それって、ご飯が無い時に、非常食としてケイを食べてもいいいっ

て意味ですよねぇ？」

わざとらしく舌なめずりをしてみせる。途端にケイの顔が蒼白になる。

「よ、よしたほうが、い、いいぞ！　わしは年だから、に、肉が腐つとるぞ！　腹壊しても、しししし知らねえからな！」

かなり慌てている。やっぱりストレートに感情が表れるんだな、この人。

「し、しょうがねえ。いつか料理作ってやるから……お願いだから、今、俺を……く、喰うなよ！？」

尻すぼみに言葉が小さくなる。

「はいはい。分かりましたよ！　そこらの動物達のお肉を適当に頂きますよ」

私は笑いながら、広大な原始林に向かって突然急降下し始める。虚空に響き渡る、誰かさんの悲鳴。

「ぎいいいやあああああ！　落ちるううううう！」

私は久しぶりに、そして、純粹に爆笑していた。十年以上ぶりの心からの爆笑は、とても心地よかった。

第13章 二人目（後書き）

この話には出てきませんが、“猿蟹連合軍”も同時に動いている
ということをお忘れにならないでくださいよ（へーへ）b えっ
？猿蟹連合軍の目的地もシュレイドだからアトラスやミライ達はど
うなるのかって？ ♪（・ε・）ナンノコトデショカ（w w

第14章 少女と老龍（前書き）

ヤバいです。宿題が……いや、読者様に愚痴ってはならない！そんな苦し紛れの状況で書き上げた、新たなストーリー。楽しんで頂けたら嬉しい限りです（ハ－ハヾ

第14章 少女と老龍

第14章 少女と老龍スッパリゴウ

「やゝいバケモノだ」

青みがかった銀の長い髪をした少女が、背後から飛んでくる野次を無視して一目散に走っている。村の子供達が彼女に投げかける野次は、ガラスのように脆く幼い心を打ち砕く。彼女は、その小さく白い頬を涙で濡らしていた。

彼女は自分の家の前で立ち止まった。ずっと走り続けていたせいで、肩で息をしている。少女は息を整え、涙を拭くと家の扉の取っ手に手をかけた。

ΦΦΦある少女ΦΦΦΦ

「今帰りました！」

私は扉を開けると、はつきりとした声で言った。
わたし

「やあ、お帰り。……どうした、目が赤いぞ？」

お義父とっさんが、椅子に座って新聞を読んでいた。良かった……お義父さんだけで……。

「ううん。何でもないの。アレルギーかな」

私は泣いていたことを隠すために適当に嘘をつき、笑顔を繕う。

「……そうか。またイジメられたら、ちゃんとパパに教えるんだぞ？」

「……うん！」

やっぱりお義父さんは優しい。

「お義父さん、お……お義母^{かあ}さんは？」

私は、おずおずと鬼の義母の所在を聞く。

「ああ、アミラは今日の夕ご飯前に戻ってくるらしいよ」

今は朝なので、時間はたっぷりある。よし……。

「お、お義父さん？ ……今日は遊ん……」

私がおもいとおもうとするのをお義父さんが笑いながら遮る。

「分かっている分かってる。いつも家事ばかりやらされてるんだから、アミラがいない日くらいは遊んだっていいさ！」

「本当！？ やったああああ！」

私は飛び上って喜んだ。天にも昇る気持ちだ。ここ最近、義母は一日中家にいながら仕事をしていたので、ずっと遊べず、こき使われていたのだった。

「でも、出かけるときは気をつけるんだぞ？ 家事はパパがやって

おくから、思う存分遊びなさい」

「ありがとう！ お義母さんには内緒だよ！？」

私はお義父さんに人差し指を向けて言った。

「さあ。言っちゃおうかな」

お義父さんがそっぽを向いて、目の端でこっちを見る。口元は意地悪そうに笑っている。

「うう、お願い、言わないでえ」

私はふくれっ面をお義父さんに向けた。それでも、お義父さんがお義母さんに、私が遊んでいることを言うことは無いと知っている。

「はいはい。分かったよ。じゃ、遊んでおいで」

お義父さんは、呆れた顔で笑っている。私はお義父さんに手を振って、家の扉を飛び出した。

私は村からかなり離れた所へやってきた。村は原生林に囲まれていて、危険なモンスターが村の外を出回っているため、一人で外に

出ることは村の掟で許されていなかった。しかし、私は原生林の中を進んでいく。私だけの秘密の谷があるのだ。その谷に“おじいさん”は棲んでいる。

突然目の前を覆っていた木々が姿を消し、目の前が開けた。その先には、深い谷が横たわっていた。向こう側の崖までは五十メートルほどの距離がある。私が立っている数歩先には急勾配の崖。そこに、私が木の幹に縛り付けておいた頑丈なロープがぶら下がっている。私は、おそろおそろ、ロープを伝いながら比較的降りやすい所を選んで下っていった。

もう一つ、この谷を上り下りするための緩やかな勾配の坂があるが、時間短縮をするために谷へ降りるときは崖から伝い降りている。

「おう！ 久しぶりさね。どないしたんや？」

“おじいさん”が、谷間の、暗い陰になったところで私を待っていた。私は“おじいさん”の顔の前まで来ると、その大きな頭を撫でた。

「えっとね、お義母さんがずっと家にいたから、外に出て遊べなかったの」

私は“おじいさん”にすまなさそうな顔で言った。いつもは三日か、四日おきには会えるのだが、今日は二週間ぶりだ。

「ふおっふおっふおっ！ それは仕方ないさね」

変な方言まじりの“おじいさん”の声は、長い月日を経て、深みのある不思議な声をしている。私はそんな“おじいさん”の語り部を聞きに、いつもここに來ていた。

「おじいさん、久しぶりに“邪竜伝説”を聞かせて。＜希望の章＞のお話」

私は“おじいさん”の硬い喉元をちょちょちよした。

「ふあっふあっふあ！ 分かった分かった！ ちょちょちよだけはせえへんでくれ。えーと、あーと……」

笑っていた“おじいさん”が急に難しい顔をする。

「また私の名前忘れたの？」

私はわざとふくれっ面をする。でも、“おじいさん”は歳だから仕方ない。

「すまんの。もうかれこれ千年も生きとるからの。新しいことはめっぽう覚えれへんかて」

“おじいさん”がのん気な顔で笑った。

「もう……私の名前は“ルナー・エフェカルネ”よ！ あ、“おじいさん”の名前は？」

私も“おじいさん”の名前を忘れていることに気づく。

「やっぱりなあ。お主も忘れとるでえ」

“おじいさん”がニコニコしながら言う。

「だって“おじいさん”の名前、とっても長くて舌噛みそうになるんだもん」

「ふあっふあっふあ！ では申そう。我が輩の名は“連山之阿修羅之紫乃神”じゃ」

やっぱり舌がもつれそうな名だ。

「レ、レンさんの、あ、あしたのしにがみ？」

舌を噛み噛み発音する。

「レンザンノアシュラノシノカミ、じゃて」

「ああもうややこしい！ “しにがみ”でいいじゃん！」

「んのの、それは嫌じゃ。せめて“シノカミ”に……」

“おじいさん”は、人間で言えば八の字眉の表情をした。

私は“おじいさん”の体を改めて見た。一つの巨大な山のような体の大きさだ。しかし、太っているというわけではなく、山のように大きな龍ということだ。背中には大きな棘がいくつも突き出ていて、硬い甲殻は長い年月を経て、紫がかったている。昔は灰色に近い薄い青紫だったそうだ。“おじいさん”の顔の鼻先には、顔の割に小さな角がニョキッと生えている。しかし、大きさで言えば私の身長を軽く越すくらいある。

“おじいさん”は、私達人間から“ラオシャンロン老山龍”と呼ばれている生き物で、“おじいさん”、シノカミはその中でも格上の“あしゅ亜種”に分類されている。普通のラオシャンロンとラオシャンロン亜種の違いは、体色とその力の差だ。普通のラオシャンロンは、赤い茶色の体色に黒い瞳を持っているが、亜種は灰色に近い淡い青紫の体色に、黒く濁った赤色の瞳だ。ラオシャンロンに限らず、OO亜種と言う風に、亜種とつくモンスターは、原種よりも強力な力を持っていることが多い。要は、モンスターが突然変異を起こしたものであったり、厳しい環境で育ったものであったりすると、その変化が外観に現れ、亜種と呼ばれるようになるのだ。

ただ、シノカミは亜種の中でも飛び抜けて目の色が変わっていた。シノカミの目は、黒ずんだ赤色ではなく、血のように深紅の色を輝かせていたのだ。しかし、その瞳は暖かみがあって、見る者をやりわりと包み込む優しさに溢れている。血に飢えた凶暴なモンスターの瞳ではないのだ。なのに、シノカミは目の色を気味悪がられて、小さい頃に親に捨てられた。

その気持ちは私はよく分かる。なぜなら、私の目も深紅なのだから。ただ眼が紅いからと言って、私は他の子供たちに気味悪がられ、バケモノ呼ばわりされる。本当の母さんは、私が十歳になる前に病気で亡くなった。父さんは私が生まれた時期に死んだ。十一年前のことだ。

十歳で両親を失った私は、路上で餓死寸前だった。ところが、小かった私を、ある男の人が助けてくれた。そして、その男の人が私をこの村の、子供のいない夫婦に預けたのだ。それが今のお義父さんと……お義母さんだ。これが一年前。

私はシノカミの巨大な顎の隣に座り込むと、首にかけてあるペンダントを外した。金色のチェーンに銀色の楕円球の飾りがついたシンプルなものだ。モンスターの素材で作られているらしい。ハンターだった今は亡き父さんが、モンスターを倒して、その素材を使って作り、お母さんにプレゼントしたものらしい。ペンダントの飾り

の中には小さな写真。

「母さん……父さん……」

写真は、私の誕生記念に撮ったものだ。きれいな銀髪を長く伸ばした、白い肌の端正な顔立ちの母さん。母さんは、隣にいる私を抱いている父さんを心配そうに横眼で見ている。それもそうだろう……。灰色がかった青い髪に、黒い肌の父さんは、生まれて間もない私を『高い高い』するかのように、両腕で高く掲げているのだから。父さんの顔は、子供のように喜びがはじけた笑みを浮かべている。

「懐かしへんか？」

はっとシノカミの顔を見上げると、暖かい紅い眼が、ペンダントに見入っていた私を優しく見守っていた。

「うん……。父さんが生きていれば……。あ、でもそれじゃあシノカミと会えないことになってたかもね……」

私は複雑な心境でシノカミの顔に寄りかかった。

「ルナー・エフェカルネのエフェカルネというのは母さんの方の名かいの？」

シノカミが顎で私の頭をそつと小突いた。

「うん」

私は昔を思い出すような、遠いところを見つめる目をしていた。

「父さんはなんて言う名さね？」

シノカミが年老いて、すっかり老眼になってしまっている目で、私のペンダントをのぞき込む。

私はペンダントの写真が貼ってない方の、フタに書いてある三つ名前が並んでいるところを見た。

「父さんの名前は……。何かかすれてよく見えないけど……。まあ母さんから聞いているしね……」

「ケイ・F・ネイチャー」
フアイヴ

「それがルナーの実の父の名かいな？」

シノカミが問う。

「うん……」

私はもう一度写真に見入った。辺りを沈黙が包み込む。私の目に涙がたまってきた。

突然シノカミが語り出した。まるで、泣きそうな私を慰めるかのように……

「『邪竜伝説＜希望の章＞』」

彼らは闇よりあらわれた……」

第14章 少女と老龍（後書き）

さて、またまた出てきたケイ・F・ネイチャーという名前。幾人もの人生に現れる青灰色の肌黒の人物……。同一人物か？それとも……まあお楽しみにしてください（へーへ）b

第15章

ガール、オールド、フル、ナァーカートイック、クワイエット、

長らくお待たせ致しました。宿だ……ゴホゴホ……えー、家庭の事情により遅れました。宿題で遅れたなんて口が裂けても言えませんね。さて、実はテストがいと近しなんです。こんなこととしていいのかと言ってくださいる方、心より感謝いたしますぜい。自分は懲りない性質なんので……では拙作の続編をどうぞ（へーへー

第15章

ガール、オールド、フル、ナアーカーティック、クワイエット、ビ

第15章　　ガール、オールド、フル、ナアーカーティック、
クワイエット、ビューティー

ΦΦΦΦルナーΦΦΦΦ

私はシノカミの棲み処から村へ帰ってきた。もう少しでお義母さんのアイラが帰ってくるのだ。家に帰るときは、村の他の子供達に見つからないように家々の裏通りを通ることにした。

自分の家に帰ってくると、普段アイラがいるときとは違う、元気で碎けた口調で『ただいま!』と言った。

「お？　お帰りなさい」

お義父さんが夕飯の準備をしながら笑いかけてきた。家の中はスープの香ばしい匂いで満ちている。その食欲を誘う香りに唾液が溢れてくる。

「お義父さん、ご飯の準備、手伝うよ」

私はエプロンを着けながら言った。

「そうだな。アイラも帰ってくるだろうからな」

お義父さんがそう言って大きな鹿のもも肉を指差した。

「あれを裁いて小分けしてくれ」

「オーケー!」

私はその巨大な肉の塊を持ち上げた。新鮮で、水洗いされている。その時だ。

「おいモンスターだ! みんな家の中に入って戸を閉めろ! ベルキュ

ロスが来るぞ！」

私は驚き、窓際に張りついて外を見た。村人が慌てふためきながら建物の中に駆け込んでいく。空には巨大な飛竜ひりめうの影。村の放牧しである羊を狙いに來たに違いない。

「そういえば、【舞雷竜 ベルキュロス】は東にある峡谷地帯にしかいないはずだが……」

お義父さんが私の隣に来て言った。

ベルキュロスは村の中央広場に降り立った。私の家の真正面だ。そして、しばらくじっとしていた後、一声鳴き声を漏らした。私ははらはらしながら様子を見ていたが、竜のその鳴き声を聞いてはつとした。その鳴き声には、凶暴性が全く感じられなかったのだ。

「怖い竜だね」

お義父さんが呟いた。

「お腹を空かせてなければいいんだが……」

私は肉を抱えて家の扉を開けた。

「お、おい！ 何をするつもりだ!？」

お義父さんが仰天した声を上げる。

「このお肉あげてくるのよ。あのベルキュロス、お腹空いてるみたいだし」

私はお義父さんに言った。そして、私は家から出た。ベルキュロスが不思議そうにこっちを見た。その目は何の殺気や敵意も帯びていない。シノカミと過ごしてきた私には、このモンスターが私達を傷つけるためにここに來たのではないと分かる。

すると、私は背後から急に羽交い締めになれ、家の中へ連れ込まれた。

「何やってるんだ！ 死ぬ気だったのか!？」

お義父さんが慌てて扉をボタンと閉め、私に詰め寄る。顔は心配さと恐怖と怒りに歪んでいた。

「食べられてしまったかもしれないじゃないか!？」

「ご、ごめんなさい」

私は肉を抱えたまま俯いた。

お義父さんはしばらく私を見下ろしていたが、突然私を抱き寄せた。

「ルナー、お前は大事な家の子なんだ」

がつしりとした両腕が私を優しく包み込む。

「もうこんなことするんじゃないよ？」

お義父さんが耳元でそっと囁いた。

「うん。分かった。約束する」

私は深く反省した。お義父さんは私をこんなにも大切にしてくれていると、改めて実感した。その優しさに思わず目が潤む。

「ベルキュロス、村の警備兵が追いついたみたいだ」

お義父さんが抱擁を解いて窓の外を見た。ベルキュロスが、飛んでくる矢から逃げるように遠ざかっていく。

「もう！ 何なの、あのバカな飛竜は！」

突然、家の玄関の扉が大きく開かれ、赤茶色の長い髪の女性が入ってきた。私のお義母さん、アイラだ。

「あつ、お帰り」

お義父さんは、一瞬固くなってから言った。顔は作り笑いを浮かべている。

「お、お帰りなさいませ」

私も慌ててお義父さんに続く。とうとう帰ってきてしまった。

「お前、ちゃんと家事はこなしてあるんだろうね？」

お義母さんが私を睨む。その双眸は汚物でも眺めるかのような嫌悪に満ちている。

「ルナーはちゃんと家事をこなしていたよ」

お義父さんがフォローに入ってくれた。

「へえそうかい。まあいいさ。朗報が入ったしね」

お義母さんはそう言うと、内ポケットから折り畳まれた黄色い紙を取り出した。

「何だいそれは？」

お義父さんが紙を受け取って目を通した。お義父さんの紙を持つ手が、わなわなと震えだした。こめかみがピクピクと痙攣している。

「アイラ……お前正気か？」

「私は至って健康だよ」

すました顔でお義母さんが言った。

「お、お義父さん？ どうしたんですか？」

アイラの前では、お義父さんにも敬語を使わなければならない。心底心配になった。これほどの怒気を発するお義父さんは見たことがない。

「お前も見たいの？」

お義母さんがお義父さんの手から紙を奪い取って、私に渡した。

お義父さんは紙を掴んでいた手を無言で見つめていた。

私はお義母さんから紙を受け取った。

“ アイラ殿へ

先日、あなたが我々に御申請なさった、『ルナー・エフェカルネの売却』を受理致します。前金として三万ゼニーを配達致すおりにルナーさんを引き取らせて頂きます。この手紙が届いた日の夜、こちらのお宅に伺いますので、よろしくお願いいたします。ご不在なら、しばらくそちらの村に滞在させて頂きます。それであなたのお宅に再度出向く次第です。その後、ルナーさんを競りにかけ、落札した値段に合わせて報酬を支払わせて頂きます。ルナーさんが高く売れることを切に願っております。

スラブ会社 より”

私は頭の中が溶けていくような感覚に襲われていた。視界が白く染まっていく。私の手から黄色い手紙が滑り落ちた。

「アイラ……こんなことが許されるとても……」

お義父さんの言葉をお義母さんが遮る。

「いいえ。あなたもスラブ会社は知ってるでしょう。シュレイド政府に金を納めることで、人身売買を黙認された暗躍機関な……」

「うちの子なんだぞ！」

「違うわ。血が繋がって……」

「ルナーは俺達の娘だろ！」

「何言ってるのよ。“それ”は“あの男”が持ってきて、あなたが勝手に受け取っただけの“人間のクズ”じゃない」

私の目の前が真っ白になった。“それ”と“人間のクズ”の二語が頭の中にこだましている。

「お前は他人の子供ならどうなったっていいのか!？」

「それは違うわ。“それ”の目を見なさいよ。血みたいに真っ赤に輝いているじゃない。あれは悪魔の目よ」

「目の色が何だって言うんだよ!？ この子はこんなに優しいじゃないか！」

「優しくて、野垂れ死にしかけていたこじきの悪魔か……笑えるわね。だいたい私はこじきが嫌いなものよ。通行人の慈悲に頼ってる汚らしいあいっら……見てるだけで目が腐るわ」

わざとらしく身震いするお義母さんを見て、お義父さんは黙り込んだ。

「あんたと出会ったことを今日ほど後悔した日はないな……」

「あらそう？ “それ”がいなくなればそんな日は二度と来ないんじゃない？」

お義母さんが私を一瞥して玄関の扉を開けた。すると、黒ずくめの男達が十人ほど入ってきた。全員白いマスクで顔を隠している。その内の一人が私を背後から羽交い締めにした。

「ルナーを回収しますね」

「嫌よ！ お義父さん！ た、たす……」

私は必死に暴れた。別の男が私の口に白いハンカチを押し付けてきた。途端に意識が遠退いていく。

「すいませ……レイ……さん……。俺はルナーを守つ……なかった……」

切れ切れにお義父さんの言葉が聞こえる。きっと、一年前にお義父さんに私を預けた、“あの男”の人に謝っているのだろう。“あの男”姿が頭に浮かんでしようとした時、私の意識は闇の中へ誘いざなわれていった。

目を覚ますと独房の中にいた。蝋燭の明かりがあるだけで薄暗い。よく回りを見てみると、他にも人がいた。全員、薄い麻布のガウンのような服を着せられている。

虚ろな目で私を見る若い男。生きる意味を失ったような暗い顔をしている。

どこを見ているか分からない目で、狂った笑い声を上げている女。クスリでもやったに違いない。

屈強な体つきなのに顔は間抜けなでくの坊。丸刈りの頭に、何かの鈍器で殴られた跡がある。それで脳みそをやられたのだろう。

私の隣には綺麗な小麦色の肌の女の人が寝転がっている。すらっとした鼻筋に鋭い顎。髪は銀髪。この人はまだまともだ。

全員が手錠に足輪がされている。私もだ。そういえば、子供は私しかない。

「こりゃかわいそうに。こんな小さな子供が……」

一人見落としていた。でくの坊の背後からおじいさんが出てきたのだ。髪はほとんど抜け落ちていて、腰も曲がっている。奴隷とし

て売られるには歳をとりすぎている。

「わしはな、語りが得意なんじゃ」

私の心を読んだかのようにおじいさんが言った。

「私はルナー・エフェカルネと言います。ここはどこですか？ 私達はどうなるんですか？」

立て続けに質問しようとした。

「まあ、落ち着きなさい。まずはみんな自己紹介としようか。と言っても、すぐに奴隷として売られてバラバラになってしまうじゃろうが……。わしは松田という」

それを聞いて、松田の隣のでくの坊がゆっくりと幼い声で喋りだした。

「ぼ、僕はブ、ブラスだよ」

「ウチはニヤカっつーんだ。あんたヤク持ってない？」
麻薬女がブラスに続く。

「……」

無言で会釈したのは、虚ろな目の若い男。

「名前は何ですか？」

私が聞いても答えない。顔を横に背けたただけだ。

「アタイはラルバよ。宜しくねチビさん」

いつの間に目を覚ましたのか、隣の綺麗な女の人が寝転がったまま言った。目は綺麗な明るい青色だった。引き込まれそうなほどの深みがある。

「だそうじゃ。短い間じゃがよろしくな」

おじいさん、松田が笑いかけてきた。

「シノカミ……」

私は思わず呟いた。松田の声が一瞬シノカミのものと重なって聞こえた。

「どうしたんじゃ？」

「いえ……。それよりもここはどこですか？」

「ここはシュレイドの比較的静かな住民区じゃよ」

おじいさんがそう言った途端、独房の外から誰かがやって来た。

警棒を持った看守のようだ。

「時間だ。ステージに行くぞ」

看守が檻の扉を開けた。外に出ると、一本道で、右は行き止まり、左は独房がズラリと並んだ先に階段がある。カビ臭い臭いが立ち込めている。

「他のみんなは売られてしまった」

ラルバが綺麗な顔を寄せて、小声で囁いた。確かに、どの独房も空だった。

私は、そこで“目”の力を使った。私の目は、人の感情を色として見分けることができた。このことは、シノカミと、今は亡き母さんにしか話したことがない。この力は私が生まれつき持っていたものだった。

私は空の独房に残っている“感情の残像”を見た。どの独房も暗い藍色や黒で溢れている。悲しみ、絶望、恐怖。時折見かける赤は怒りか。

「みんなどうなるのかな……」

私の目に涙が溢れてきた。もうこんな悲惨な所は見たくなかった。

「な、泣いちゃだ、だめだよ」

ブラスが遠慮がちに大きな手で私の頭を優しく撫でる。

「余計なことはするな！」

看守が警棒でブラスの右腕を打ち付けた。その瞬間、警棒が発火する。

「あ、熱い！ 痛いよ」

ブラスが火傷した右腕を庇う。

「ブラス、ありがとう」

私は涙を拭ってブラスを見た。ブラスは子供っぽい純粋な笑顔で応えた。脳に損傷を受けていたとしても、人格は昔と変わらないのかもしれない。ブラスからは、生来の優しさがにじみ出ている気がした。

長い階段を私達は上らされた。年老いた松田には、相当こたえて
いるだろう。しばらくすると、扉にぶち当たった。

「この先がステージだ。いい主人がいるといいな」

看守は皮肉っぽく捨て台詞を吐き、私達を扉から押し出した。

急に辺りが眩しくなった。照明が私達を照らしているのだ。光に
慣れきっていない目で状況を把握する。ここは野外ステージの上で、
後ろは壁。眼前には百人はいるだろう観衆。

「さて、最後の一组です。張り切って買しましょう！」

拡声器の役割をする巻き貝を持った男が叫んだ。司会か何かのよ
うだ。スーツを着た係員が、私達を綺麗に横一列に並べる。

「では、早速ですが……」

その時だ。観衆の端から罵声が上がった。

「おいクソジジイ！ まさか奴隷に手え出すんじゃねえだろうな！
？」

澄んでいて、張りのある、若い男の声だ。

「その奴隷売買、わしも入れてくれ！」

こちらは中年のオジサンといった感じの声色だ。どこことなくひよ
うきんさが感じられる。

「テメエ……見損なったぞケイ！」

「大丈夫、大丈夫！ わしを信じろ！ 理由が……」

「うっせーな！ 言い訳なんか聞きたくねえ！」

「待ってミック！」

「ミライだっつーの！」

「どっちでもいいから、わしに付き合え！」

「断じて遠慮する。俺にそっちの趣味はない」

「違う。誤解すんなって！」

ニヤカがポカンとして言い争う二人を見ている。

「何じゃありゃ……」

ラルバが呆れたように呟いた。

「買われるとしてもあいつらはごめんじゃな……」

苦笑いする松田。無言の若者も激しく首を縦に振っている。

「で、でも面白い」

ブラスが必死に笑うのをこらえている。

私は空を見上げた。たくさんの星々と青みがかった月が浮かんでいる。

「竜だ」

私は知らないうちに呟いていた。

月をバックに、長い尾を持つ竜が空を飛んでいた。

第16章 奴隷解放宣言（前書き）

ふとリンカーンを思い出したことがきっかけです。では入り口
はこちらに（ハ－ハヱ

第16章 奴隷解放宣言

第16章 奴隷解放宣言

ΦΦΦΦルナーΦΦΦΦ

「その六人、全員もらえないか？」

奴隷の競^せりが行われている会場に信じられない言葉が響き渡る。声の主は青灰色の長髪で、肌が黒いオジサンだった。さつきから、ツンツンな金髪頭の若者と言いつ争っていた人だ。

「ケイ、あのなあ……」

ミク、いや、ミライと呼ばれた人物がさつきからケイという名のオジサンを止めようとしている。

「大丈夫だってーの」

オジサンのくせに妙に若々しい。それに、ケイと言えば私の実の父親の名前の――

「えっ!？」

私の口から思わず声が漏れる。慌てて服以外の唯一の持ち物であるペンダント――首にかけてある金と銀のペンダント――を開けた。「似てる……」

遠くから見ているが、写真に写る父さんが、もう少し歳をとったらあのオジサンとそっくりの顔になるのが容易に想像できる。

「どうした？」

ラルバが横からのぞきこんでくる。口調からだんだん分かってきたが、ラルバはクールビューティーなタイプだ。

「あ、あのですねお客様……」

司会が呆れたように言った。その時だ。オジサンが指を四本立てて叫ぶ。

「一人につき五〇万ゼニーで買う！」

その途端会場が静まり返る。だから、「五十万？ 指が一本足りないじゃねえか」というミライという金髪男の呟きが妙に響く。

オジサンが慌てて親指を伸ばす。

「いや、指の数の問題じゃないって。五十万かける六人つつたら……さ、三十万ゼニー！ 貴族か何かなの！？ あのオジサン……」
麻薬女のニヤカが、どこを見ているか分からない目で小さく囁く。
「三百万ゼニーじゃろ。脳みそが相当ダメーじを受けとるようじゃな……」

松田が曲がった腰を伸ばそうとしながら言った。

「おい、おっさん」

観衆の中から誰かがステージに上ってきた。裕福そうな服を着た、悪賢そうな若者だ。とは言っても、奴隷を買いに来た者はほとんど金持ちなようだが。

「そんなに金はかけなくてもいいだろう。第一、いくらオークションだとしても、どんなに高い奴隷だろうと十万ゼニーくらいが最高額だ。五十万なんて、犯罪者にかけられる賞金でも、最高のA級ラシクだぞ」

回りの観衆が相づちを打っている。まるで、値下げしないものを買えない、とケチをつける嫌な客のようだ。

「しかも見たところ、ヤク中毒にしか見えない女に、使えない年寄りと子供、でくの坊に、生きる屍しかばねみたいな奴……あ、美人でまともなものもいるようだが……」

だんだんとあのオジサンがステージにやって来た。よく見ると、観衆が怯えたように道を開けている。私は何か、強烈な“気”を感じた。

「こんな役に立たない“商品”を買って何をするつもりだ？」

オジサンがとうとうステージに上ってきた。若者は観衆に向かつて得意気に演説をしているため、気付いていない。

「まあ美人な“商品”も“遊び”終わったら捨てるだけだろうし……」

そこまで言って、若者は初めて自分の近くまで来たオジサンに気付く。オジサンからは目に見えない強烈なオーラが流れ出ている。身体中に鳥肌が立つ。私は隣にいるラルバ達を盗み見たが、全員がただならぬ“気”を感じ取っているらしかった。

「な、何か用か？」

裕福な若者が気圧されながら訊く。

「……お前……もしこいつらのことを買い取ったら何をする？」

さつきとは打って変わった、ドスの利いた覇気の宿る声だ。あのひょうきんさは欠片も残っていない。その目も、一心に若者の目を睨み付けている。口は真一文字に引き結ばれていた。

「えっ……いい、いやアンタには関係な……」

「答えろ」

抑揚のない、有無を言わせぬ口調だ。

「……だ、だから普通に家事を、や、やらせて……つまり、雑用を“商品”にやらせ……」

「駄目だな。それじゃあこいつらは譲れない。それに……こいつらは物じゃねえよ」

物じゃねえよ、と言った瞬間、会場を笑いが包み込む。若者もそれに勇気付けられて、勢いを取り戻す。

「アンタ何言ってるんだよ！？ クッククク……物じゃねえよ、だって？ こいつらは売りもんだ。“物”だよ。“商品”さ」

その時だ。会場の笑い声が途切れた一瞬に、見物していたツンツンの金髪男の声が通り抜けた。

「あゝあ、俺知らねえや。ケイ、手加減してやれよ」

視線が一斉にオジサンに集まった。

「歯ア食いしばれ！」

オジサンが右腕を思いつきり引いた。

“気”が会場を駆け抜けた。実際は吹いていないのに、突風が通り過ぎていった。そんな感じだ。身体中の毛がそれを感じて逆立つ。心臓が異常なほど脈打ち、冷や汗がダラダラと流れ、体の芯から寒気が襲ってきた。

何をしたのか、あまりにも速すぎて見えなかった。瞬きをした次の瞬間、若者の体が宙に浮いて吹き飛んでいた。オジサンは、右拳で若者が立っていた所の、ちょうど若者の顔があった辺りにアッパーをかましていた。つまり、顎下をクリティカルヒットしたようだ。「わりのいが、こいつらは“物”じゃなくて“人”なんだよ。奴隷買うようなクズでも、そんなくらいわきまえろ」

ドサツという鈍い音と共に、若者が二メートル先のステージの床に転がった。白目を剥いていて、半開きになった口からは折れた歯が何本ものぞいている。私はたまらず顔を背けた。こんな暴力的な男が私の実のお父さんなんだろうか……。正直、買われたら何をされるか心配だった。

だけど、『わりのいが、こいつらは“物”じゃなくて“人”なんだよ』というオジサンのセリフが不思議と心に響いたのは事実だ。

「ちょ、ちょっと待ってください」

私は驚きのあまり言い返していた。

「私達はあなたの奴隷として買われたのに、そんなこととして……」
それもそうだ。このオジサンが私達を買い取って、シュレイドの商業市場にやって来た時に『自分の好きな服を買ってこい』と、私達一人一人にお金を渡したのだ。

「そのことはもう忘れろよ。ほんとに奴隷全員解放してやりたいけど、さすがにそれは無理だからな。いつかシュレイド政府に訴えなきゃな」

それを聞いてミライが言った。

「やっぱケイだな。何しでかすと思ってたら……さすがに五十万も出されたら誰も手が出せないだろうな」

「ハッハッハ。そうだ。わしを甘く見んなよミク！」

「……前言撤回。やっぱクソジジイだ」

「何だと!？」

「クソジジイつつたんだよクソジジイ！」

「テメエ……言わせておけばコノヤロオ……ヤマンバめ」

ケイがそう言うのと、こちらに向き直って言った。

「じゃあ一時間後にここに集合だぜ。忘れんなよ? そこのレンガ造りの建物が目印だ」

そして猛ダッシュで駆け出す。

「アトラスの分の飯買い出してくる！」

ミライに手を振りながらそう言った。

「俺は男だって言ってるだろうがあ！」

ミライが信じられない速度で追いかけていく。どこか習慣的な霧囲気が漂っていた。

「何じゃありゃ……」

ラルバがまたもや呆れて言った。

「で、でも、た、助けられたんだよね」

ブラスがどもりながら言った。顔は喜びに輝いている。

「そうね。奴隷にならずに済んだし、しかも小遣いで二万ゼニーも……服なんていいさ……ウチにはもっと欲しいモノが……」

そう言って走り出そうとするニヤカの首の後ろの襟を、無言の若者が驚掴みにして引きとどめた。彼の目に少しだけ、光が見受けられた。ケイというオジサンに、奴隷にされるという絶望の淵から救われたからだろうか。

「離せっ! ウチにはあれが必要なんだ。無いと死んじゃう!」

「絶対離すなよ!？」

ラルバが笑いながら言った。無言の男が初めて表情を変えた。ぎ

こちらなくだが微笑んだのだ。

何だ、いい顔できるじゃん。

「そろそろ名前を覚えてくれないじゃろうか？」

松田が目を優しそうに細めて言った。目小じわがいつそう心の豊かさを醸し出す。

ところが若者は困った顔になった。名前を教えられない理由でもあるのだろうか。

「あっ」

私はそこで気付いた。

「ここにあなたの名前を書いてみて」

私は右手の平を差し出した。若者は救われたような顔をした。そして、慣れた手つきで私の掌を指でなぞる。解放されたニヤカも、気になるのかその場にとどまっている。

「声が出ないんです。……申し訳ありません。……僕の名前は……フォーマルハウト・シュトラウツと言います……ハウトと呼んでください……」

私が声に出して通訳をする。

「へえ。あんまり見かけない風式な名前じゃん。ま、ウチのニヤカ・プランニユなんてのもそうそういないだろうけど」

鼻の下を右手の人差し指でこすりつつ、ニヤカが言った。どうやらそれはクセらしい。

「ねえねえ。早く行こうよ」

私は妙に気分が軽くなっていた。お義父さんと引き離されたにも関わらず、だ。

「だな。アタイもこの薄汚い麻の服にうんざりしてるんだ」

ラルバが心底嫌そうな顔で訴える。やはりいつ見ても、ハツとするほど明るい青の瞳だ。それがクールビューティーに見える原因だろうか。

「じゃここでお別れだ」

そう言い残して逃げようとしたニヤカの肩を全員が腕をかけて引

き止める。

「待て！」

五人の言葉が重なる。ハウトは口パクだったが。

「離せコラ！ わぁ！ 巨人が攻めてきた！」

プラスが発狂するニヤカを取り押さえた。

「幻覚まで見てるね……ひどいんだね……病状が」

私はため息をついた。厄介な人物を抱えてしまったもんだ。

ふと回りを見ると、ラルバがいない。肩を叩かれて振り返ると、ハウトが指を差している。そちらを見るとラルバが堂々と歩いていつているところだった。

「ちよ、どこ行くの？」

私が叫ぶとラルバが叫び返してきた。

「どこって、服屋だろ」

「服屋はここから西の方にあるって言われたじゃない！？ そっちは東よ？」

「何でだ？ 自分が見てる方向の左側が西じゃないのか？」

私は啞然とした。ラルバへの信頼度が、プラスからマイナスへと大暴落した。

この人、絶対一人にしちゃ駄目だ。

「あのじゃな、城が北西にあるからそれを目印にしろと言われたじやろ」

松田があたたた、と腰をさすりながらここから北西に見える巨大な城を指し示す。他のどの建物よりも巨大で壮麗だった。今は夜だが、月の光を浴びて神々しく闇に浮かび上がっている。

「あれが目印か。じゃこっちか」

ラルバが納得顔で南西に向かう。

「ラルバさん違うってば……」

私は頭痛がしてきた。

でも、楽しかった。

誰も私の目のことを悪く言わない。ここにいる六人は、何かしら欠けているものや心にキズを持っている。

年老いて使い物にならないと酷評された、松田。

脳に損傷があり、精神的に非常に幼い大男、ブラス。

麻薬に取りつかれ、人生を棒に振った女、ニヤカ。

話せないからか、生きる希望や感情をも捨てかけた、ハウト。

方向を知る術を持たず、波乱万丈な人生を歩んできたと思われる、ラルバ。

そして、幼くして両親を亡くし、“悪魔”と蔑まれてきた、心にキズを負う、私。

もし、神様がいるとしたら、私達がここで出会ったのは意図されたことなのかもしれない。

それとも、ただの偶然だろうか……。

運命がただすれ違ったただけなのだろうか……。

私達を救い出したケイというオジサンとも、偶然出会ったただけなのか……。

昔、お母さんがよく言っていたことを思い出した。

『様々な人、生き物の人生。それぞれの歩む人生の「道」はそれぞれ

れが主人公。しかし、その「道」が別の「道」と交錯するとき、そこに新たなストーリーが生まれ、新たな「道」が開けるでしょう』

何かの詩の一片らしいが、何の詩かは分からずじまいだ。でも、お母さんがこの詩をとても気に入っていたことは確かだ。

『お父さんと出会ったのも、運命の「道」がすれ違っただけ。そこに新たな道、ルナーが生まれたのよ』

よく聞かされた言葉だった。

「おい、早く来い」

ラルバがこっちに向かって手招きしていた。いつの間にかみんなが移動していたのだ。

「今行くよ！」

私は、路上でニヤカを取り押さえつつ私を待っている、みんなの元へスキップしていった。

足取りは軽やかに

口笛を吹きつつ――

第16章 奴隸解放宣言（後書き）

ケイ、キレましたね。しかも、謎が多い人物なのにもっと謎が増えるという……いったいどんな力を持っているのでしょうか……ルナーの心にも、少しだけ変化が……明るくなったと言っても言いましようか まあ何やかんやで役者が揃いましたね（揃ってんのか？ w w）。猿蟹合戦、迫ります（＊、O、）ノ

第17章 料理人、ケイ（前書き）

さて、皆様に一つお詫びを……。前章で“ラルバ”を“バルス”と誤表記してしまったので訂正しておきました。今までにもちよくちよく訂正を加えていたのですが、一番デカイミスでした。申し訳ありませんm（――）m さて、気持ちを入れ換えて、ミライ視点で行きますよ（へーへッ

第17章 料理人、ケイ

第17章 料理人、ケイ

☆☆☆☆ミライ☆☆☆☆

俺はドラムの練習を終え、ライヴハウスにある練習部屋から抜け出した。

朝っぱらからこの街はにぎわっている。昨日のケイの特製料理の味を思い出すと、唾液が溢れてきた。ああ見えてケイは一流の料理人だ。

昨晚、待ち合わせの場所にて

一時間後、レンガ造りの建物の前に俺とケイは到着した。俺の背には携帯調理用具が大量に入ったリュック。

ケイは両手を食材が入った袋に塞がれ、背中にはアトラス用の大型生肉が担がれている。

ケイに買い取られた元奴隷達も、すでに衣替えして待ち構えている。一見、普通の一般人の格好になっている。

「わしらなんかのためにわざわざすまんう。これは残った金じゃ」
一番年長のおじいさんが、彼らを代表して礼を言った。束ねた数枚のお札を差し出す。

「いいって。気にすんな！ 残った金はやるよ」
ケイがにこやかに笑いながら答える。そして、手に持っている大

量の食材を持ち上げた。

「みんな、腹減ってるだろ？ アトラスん所で宴会とでもいいこうぜ！」

「本当にいいの？」

ハツとするほど紅い目をした少女が、期待に顔を輝かせる。

「おう。こいつ、外見の割に金持ちだからな。おまけに料理の腕は天才的だ」

俺が横から口を挟む。

「でもいいのか？ コイツらにアトラスを見せて？」

「別にいいだろ。モンスターと話せる人間を探してるんだからな。まずは宴会がてらの手始めにな」

ケイが顔を寄せてきて、声をひそめる。

「そうだったな」

みんなが訝しげな視線で見つめているので、俺は慌てケイから離れる。

「実は宴会の会場は、理由あって街の外だ。そこでお前ら驚かせてやるぜ」

ケイが思わせ振りの口調で言った。

街の外に向かって歩いていると、紅い目の少女がふとケイに呼び掛けた。

「あの……オジサンの名前って、どんな名前ですか？」

「ん？ コイツのことか？」

と、あろうことか俺を指差す。

「何で俺がオジサンなんだよ！？ まだ二十代だ！ 二十代！ クソジジイに訊いてるんだよ！」

「ああ、わしか」

「当たり前じゃ、ボケェツ！」

ケイの顔面に向かって、怒りのゲンコツを飛ばす。

「あぶねえ！？ 何しやがる？」

「いいから答えてやれよ！」

俺がそう言った途端、ケイが俺の背後を見て硬直した。突然のことだ。

「ミ、ミライ。お前、コイツら案内してやってくれ」

顔が真面目だった。ケイがこんなふうになった時は、“ふざけ”ではない。

「分かった」

ただ事ではない表情に、俺も真剣に接する。

「わりいな。アトラスとこ行くの、ちよつと遅れるかもしれねえ」
そう残してケイは手荷物の食材を持ったまま、細い路地裏へ駆け出す。そして、あつという間に姿をくらました。

その後を、黒いスーツを着てサングラスをかけた、丸坊主の男が追いかけていくのがチラリと見えた。

街を出る時に、アイルーの団体とすれ違った。例えると、直立二足歩行をする猫だ。学習能力が高いため、人間の言葉を覚えて、人間と共に暮らすことが多い。人間と共生できる数少ない種類のモンスターだ。

そのアイルー達は全員武装していた。どの猫も海賊帽子を被り、服装まで海賊になりきっている。総勢五十匹くらいだ。

「最近霧が晴れていたウェット湿原に霧が戻ってきたニャ」

「そしてその湿原の北部にある森で、たくさんコンガが目撃されたのニャ。それもかなりの数らしいニャ」

「ヘリテイジ密林はどうニャ？」

「特に異常なしニャ。あるとしたら、ベルキュロスがヘリテイジ村を襲いに来て、撃退されたくらいニャ」

「違うニャ。まだあるニャ。その密林にある深い谷にラオシャンロ
ンが棲んでいたみたいニャ。人間も気づいてない極秘情報ニャ」

「ニャらデカイ声で言うニャ！」

「砂漠の盗賊“砂嵐”を壊滅させたモンスターも分かったニャ。どうやら“片角のマオウ”の仕業らしいニャ。人間達はまだ知らないみたいだニャ」

「火山の調査は進んだかニャ？」

「まだニャ。でも明らかに気候がおかしくなってるニャ。マグマがそこらじゅうから沸き出していたニャ。“ギルドナイト”も調査しに来てたニャ」

「雪山も変だニャ。あちこちで雪崩が起きて、周辺の村もピンチだそうニャ。あと、巨大な“キリン”も出現したそうニャ」

「あちこちでおかしなことが起きてるニャ。事件の臭いがするニャ」

そんな猫達の会話が聞こえてきた。内容的にかなり怪しげだ。

「シノカミ……」

紅い目の少女が呟いた。寂しげに見えるのは気のせいだろうか。

「それは何のことじゃ？ さっきも言っていたようじゃが」

おじいさんが言った。しかし、少女は……

「私……いえ、何でもありません」

答えかけて、言うのを止めた。何か言えないような秘密があるのだろうか。

俺達は街を出て、タリ川の川辺にやって来た。近くには、岩が円を描くように積み上げられている。その岩のサークルの切れ目から、みんなを中に導いた。中にはアトラスはおらず、ケイが持ってきた荷物だけが置いてあった。周りの景色を見るために、夜間飛行をするらしかったのを思い出す。

しばらく待っていると、ケイが息を切らして帰ってきた。

「なんだ、けっこう早く来たな」

俺がそう言うと、ケイは憔悴仕切った顔で理由を話す。

「あいつら詐欺師なんだ。俺を狙ってやがる」

「そりゃクソジジイが馬鹿で騙されやすそうな顔してるからだろ」
即答する。

「ちげえよ！ 借りた覚えもない借金を返せと言ってくるんだぜ！
？」

ケイが憤慨した様子で怒鳴る。

「借金？ あんた金持ちじゃなくて貧乏なの？」

麻薬に取り付かれているらしい女が、右手の人差し指を鼻の下でこすって指摘する。明らかに目の焦点が合っていない。

「そうじゃねえ。借金なんかした覚えはねえ！」

かなり必死に弁解している。さすがに嘘ではなさそうだ。

しかし、ケイの貯金額は異常だった。七年ほど前に、一度、ケイの家の金庫室を覗かせてもらったことがある。想像を絶する量の札束が積まれていた。金額にして、軽く三十億ゼニーは越える。上位貴族と張り合えるくらいの大金だ。その時は、一体どうしてそんな大金を持っているのだと訊いた。

返ってきた言葉は、

『分からん』

本人すら知らなかった。どういうことだ。

「早く飯を作ってくれ。腹が減ってしょうがない」

言葉の発信源を見て、ドキッとした。改めて見てみるとかなりの美人だった。小麦色に程よく焼けた肌。海のように深いライトブルーの瞳。月明かりを浴びて銀色に輝く髪。

「まあ待って。お前ら、心の準備しとけよ。腰、抜かずぞ」

ケイが元からここに置いてあった荷物をあさり、ヘビーボウガンを取り出した。真っ白な銃身だ。そして、銃口を空に向けて引き金を引いた。空に向かって白い煙がまっすぐ立ち上った。

「な、何を、す、するの？」

図体はデカイが、呂律が回らない男が尋ねた。少し怯えている。

「さあ！ ビックリのお出ましだぜ！ アトラス！？ お客さんと一緒にパーティーだぜ！」

風を切る翼の音と共に、この岩のサークル内の半分は取れると思われる巨体が空から降りてきた。

元奴隷達を見ると、一様に口をポカンと開け、恐怖に体が硬直している。そりゃそうだ。

「何じゃありゃ……」

さっきの美人の呟きが聞こえてきた。

「モンスターと話せるじゃと！？」

年配のおじいさんが驚愕している。

「おう。大体、十年くらい前からな。全部が全部しゃべれるって訳でもないけどな」

ケイがそう言ってアトラスの頭を撫でる。

「こいつがアトラスって名のベルキュロスだ。礼儀正しくて、騎士道精神がポリシーなんだと」

すると、紅い目の少女が突然閃いたようにアトラスを指差す。

「私、このアトラスっていう竜と会ったことがあるわ！ 私が住んでいる……住んでいたヘリテイジ村で！」

その時、アトラスが少女の顔を見た。そして、低い声で小さく鳴いた。

「そうですね」

と言ったのだ。

それを聞いた少女はさらに驚く。

「今、アトラスが『そうですね』って言ったわ！ 私、アトラスの言葉が分かる！」

「何だって！？」

俺とケイの声が重なった。

「私、実はモンスターと話することができるとなるんです」
なるほど。それがさっき言わなかった秘密か。

「さつきすれ違ったアイルーの団体が、ヘリテイジ密林の谷にラオシャンロンが棲んでいると言っていました。その年老いたラオシヤンロンの名を連山れんさんのあしゅらのしのかみ之阿修羅之紫乃神、あだ名をシノカミと言います。シノカミは私の友達なんです……」

俺は耳を疑った。ラオシャンロンと友達!? 一体どうなっているのだ……。

「シノカミ……。どこかで聞いた気がする……。まあいいか。おいみんな、驚くばかりじゃなくて、腹にも詰め込んでもらうぜ!」

ケイが白いエプロンを腰に着け、コック用の帽子を被った。

「あ、ご馳走ですね?」

アトラスが嬉しそうな声を上げていた。

「やっぱり違いましたか……」

俺の左隣に座っている紅い目の少女——名前はルナーと言うらしい——が気落ちした様子で肉の串焼きを頬張る。

「紛らわしくてわりいな」

ケイがオレンジジュースを飲み干してからそう言った。苦笑いしている。

「いえ……。別にいいんです。お母さんも、お父さんは帰ってこないと……死んだんだと言っていましたから……」

今、俺達がかがり火を中心に円になって座っていて、一人一人、改めて自己紹介をしているところだった。

「そうですね……。名前が一緒に顔が似てるからってだけで私のお父さんとは限らないですよね……」

どうやら、ルナーは十一年前に亡くなったはずの父親が生きていると勘違いしていたようだ。ところが、ルナーのペンダントの写真を見せられても、ケイはピンとこない様子で『人違いだと思うぞ』と言ったのだ。それでルナーは今、ひどく落ち込んでいる。

「まあまあ、そう落ち込むでない。旨い飯もあることじゃ。パーツとやろうではないか」

さすが人生経験豊富な松田。気まずい雰囲気壊した。

「イエーイ！ ホント旨いよこれ。こんな旨いもん食えるならヤクもいらなんてね」

向かいにいるニヤカが、言葉ではそう言いつつ白い粉菓を口に入れようとしている。いつの間に仕入れたんだろうか。

「ハウト！」

すかさずラルバ——やはり美人だ——がニヤカの隣でシチューを啜っているハウトに指示を出す。それに合わせて、ハウトがシチューの入った皿を置き、素早くニヤカの手にあったヤクを奪い取った。

「くそっ」

ニヤカが悪態をつく。

「返せコラ！」

ニヤカがハウトに飛びかかる。ハウトは終始無言のまま、隣にいるブラスという大男にヤクを渡す。

「よし。燃やすんじや」

松田が、かがり火を指差した。

「よ、よーし」

ブラスが粉菓の入った小袋ごと火に投げ入れる。ヤクは、黒い煙を上げながら焼け消えた。

「わああああ！ ウチの命の源が！」

「わっはっはっ！ すごいチームプレーだ。まあまあニヤカ、もう一本串焼きやるからよ」

ケイが笑いながらニヤカに串焼きを投げて寄越す。ニヤカはすねた顔で串焼きをキャッチし、かじりつく。

「美味しいですね」

俺の右隣のアトラスが呟く。

「そうだろ！？ 何てったって俺が作ったんだからな」

ケイが図に乗って高笑いする。それを眺めていたルナーが、
「変なオジサンだね」

と言った。まったくその通りだ。

「だよな」と俺。

「ですね」これはアトラス。

まあ、なんやかんやでみんな楽しんでいた。

その日の夜、元奴隷達はケイの家に泊まりに行き、アトラスはこの岩のサークル内で寝泊まりをすることになった。

俺はバンドのドラム練習をしようとしていたところに突如ケイが現れて、奴隷販売市に連れていかれたので——迷惑この上ない——徹夜でドラム練習をするためにライブハウスへ向かった。もちろん防音室での練習だ。騒音被害で訴えられたかないからな。

それで、まあ今に至る訳だ。

しかし、その明け方の巨大都市に緊急連絡が入ってきた。辺りに突然角笛の低い音色が響き渡る。

——ボオオオオオオオオ

この時の俺は思いもしてなかった。

総勢千五百体を軽く超えるモンスターの大量が大群がやって来たなんてな。

これが、史上最大の防衛戦、“猿蟹大合戦”さるかにだいがっせんだなんてな。

第17章 料理人、ケイ（後書き）

やっとここまで引っ張って来ました。ふいゝ。猿蟹猿蟹ゝ

第18章 ルナー、タスカ、アトラス、ミライ、ラルバ（前書き）

今回、戦闘シーンは・↑こんだけしかありませんm〔m
楽しみにしていたお方、申し訳ございません。次からは戦闘シーン、
増えるはずです。では、どうぞ“開戦”です!!

第18章 ルナー、タスカ、アトラス、ミライ、ラルバ

第18章 ルナー、タスカ、アトラス、ミライ、ラルバ

ΦΦΦΦルナーΦΦΦΦ

私は、シュレイドの緊急住民避難区に張り出されている数枚の貼り紙を見た。

“ 住民の皆様へ

街の北方から、多数のコンガが迫ってきています。リーダーは一匹のババコンガですが、コンガの数はおよそ二百体を軽く超え、非常に危険な存在です。また、コンガ達と共に巨大なシェンガオレンが迫ってきています。よって、大老殿の最高位のアスラ様から、街からの外出禁止令が出されました。皆様、間違っても街から出ないでください。モンスターがうろついている可能性が高く、大変危険です”

さらに別の紙を見た。

“ 市民方の助けを求む！

今この街はモンスターの襲撃に遭おうとしている。しかも、今回、敵はウェット湿原特有の霧に紛れて急襲してきたため、各地からのハンター達の助力はほとんど間に合わない。この街にいるハンター

達とギルドナイトが応戦に回ることになるが、敵は大量のコンガ共に強大なシェンガオレンだ。明らかに人手不足。そこで、腕に自信がある方は武器を取って我々と共に戦ってほしい。だが、命に関わることだ。遊びではないことをご理解願いたい。命を捨てる覚悟がおりなら、街の北ブロックにある集会所の対策本部まで

ハンター軍リーダー アル・カーペンダーより”

この紙を見たラルバは集会所へ向かっていった。聞くところによると、剣術で二刀流を習ったことがあるらしい。

今朝、ケイは角笛の音を聞くと防具や武器を身に付け、出かけていった。その時に知ったのだが、ケイとミライは（あれでも）ハンターだったということだ。それから、私達は泊めてもらったケイの家を後にし、ケイが言い残していた避難区——つまりここ——にやって来た。が、ラルバはハンター軍の応募をしに行ったら、ニヤカは我慢がでずに麻薬を探しに行き、その後を追っていったハウトも戻らない。

結局残ったのは私と、松田じい（みんなでそういう呼び方にしようと思った）と、プラスだけだ。

「まったく、何が『ヤクの隠し倉庫はきつとある！』じゃ。世話の焼ける女じゃのう。もう三十歳になると言うておったのに、まるで人生が台無しじゃ」

そうは言う松田じいだが、顔は心底心配しているのが表れている。

「あ、そう言えば、ラルバって一人で集会所行ってなかった？」

私はふと気づいて言った。路頭で迷っているラルバが容易に頭に浮かんでくる。

「ラルバなら、他の有志に連れていってもらったんじゃない。迷われても困るからの」

さすが松田じい。気が利いている。ラルバを一人で行かせたら、永遠に集会所へ行き着くことはなかっただろう。

*****タスカ*****

俺達は丈の長い草原に隠れて待機していた。今頃、弟のクリンチが部下のコンガ達を引き連れ、街へ向かって北の岩山の道から押し寄せているだろう。こちらは街の南にある草原だ。

「ウズウズするぜ」

隣にいるバルス兄さんがブルブルつと武者震いする。

「クリンチが上手くやってくれるといいんですがねえ」

俺はバカ弟のアホ面を思い出しながら苦笑した。

「大丈夫だろ。タスカ、オメエが考えた戦法なんだ。自信持てよ」

兄さんはそう俺を勇気づける。なぜかとても心強くなった気がした。バルス兄さんの気合いパワーのせいだろうか。

「それに、クリンチんところには冷静沈着なアッシュがついてるだろ。何とかなるさ」

確かにそうだが……。俺は長いため息を一つついた。ウェット湿原の霧が晴れていた頃、俺達は沼地の北にある森に隠れていた。が、統制のとれないコンガ達は好き放題森の中を歩いて回ったため、海賊の服装をした怪しげなアイルーにコンガ達を目撃されてしまった。それで慌てて作戦に移って、“こと”を済ませてしまおうということになってしまったのだ。もう少し余裕を持って作戦を実行したかったが……過ぎたことをあれこれ言ってもしょうがない……。

「クリンチの健闘を祈りましょう。キリキザミ大将とテツペキ副大将も配置につき終わったみたいですから」

そう。全ては順調に進んでいる。



◆◆◆アトラス◆◆◆

わたくし

私は目を覚ました。私は昨日の宴会が終わって、みんなが去った後、ずっとこの岩のサークル内で眠っていた。

さっきは、街から聞こえてきた角笛の音に起こされた。しかし、これと言った変化は無いように見えた……とは言っても、シュレイドはモンスターの襲撃から街を守るため、街が城壁のように厚く、高い壁で囲まれている。要は、ここからでは全く中は見えないということだ。だが、空から街の中を確認することをサボって私は二度寝した。

今回再び私が起こされたのは、近くで物音がしたからだ。サークルのすき間に顔を近づけ、私は外を確認した。

すぐ近くにいたのは、何かの頭蓋骨を背負った、赤みがかった謎の生き物だ。十余年ほどしか生きていない私は、峡谷地帯の外に暮らす他のモンスターをあまり見たことがなかった。体は私ほど大きくはないが、大型モンスターの部類であることは間違いない。二本の大きくて分厚い爪が印象的だ。

しかし、普通、モンスターがこれほど人間の街に近づくなんてことは無いのではないか？ この赤いハサミを持った生き物は何の用でここへ来たのだろうか。

まあ、特別危険そうな生き物でもないようだ。

「寝ますか」

私は睡眠を続行することにした。

☆☆☆☆ミライ☆☆☆☆

「前方にコンガの群れを確認！」

岩山の上の矢倉から声が降ってきた。俺はうつすらともやが覆っている前方を凝視した。わずかに地響きが感じられる。岩山の合間の広い道を、地を這う黒い波が覆い尽くしている。やって来るモンスター達のもやに映える影だ。

俺達ハンター軍は、街の迎撃門があるところに集結していた。

「来やがったか」

隣にいるケイが呟いた。ケイは銀色に輝くモンスターの甲殻を使った装備に身を包んでいる。【シルバーソルZシリーズ】。ハンターの防具の中でもトップクラスの性能を誇る。かなりの腕利きハンターですら持つ人を羨ましがる防具だ。頭や肩の防具には、小さな翼が二つずつ付いている。まるで空を駆け回る戦士のようなのだ。

その防具は、【リオレウス】という飛竜の【希少種】から取れる素材を使ったものだ。【希少種】とは、【亜種】よりさらに珍しいもので、モンスターが特異な環境で育ったり、突然変異を起こしたりすることでありうる。しかし、【希少種】のモンスターはただ珍しいだけでなく、個体の生存能力・戦闘能力なども通常より高いことが多い。まさに、厳しい自然環境を乗り越えたモンスター、運良く突然変異を起こしたモンスターのみが享受できる、【亜種】を上回る“力”だ。

ちなみに【リオレウス 希少種】は銀色の甲殻をしているため、銀リオレウスと呼ばれている。その素材を使ったケイの装備は、白銀の光を放っている。その光は、まさに“冷たい太陽”が発するものだ。

ケイの背中には、昨夜、アトラスを岩のサークルに呼びつける時に使った、シンプルな形状の白いヘビィボウガンが背負われている。銃身はライフルと弓を合体させたような典型的なボウガンだ。ケイの発明品で、【ホワイト・ヘラクレス】という名前が付いている。実は色々な機能が備わっているらしいが……あまり聞いたことはない。

俺は全身薄い赤色の防具、【クックSシリーズ】だ。トゲトゲしているため、下手をすると自分が怪我をする。【怪鳥 イヤンクック】という、赤く、硬い甲殻を持った鳥の素材から作るものだ。鳥とは言っても人の倍近い大きさだが。このシリーズは中堅のハンターなら比較的簡単に手が届くシロモノだ。

武器は、巨大な盾と長細い槍がセットになった、ランスだ。素材には【リオレウス 亜種】の青く、頑丈な堅殻けんかくが使われている。名は【ブループロミネンス】。

リオレウスは別名、火竜かりゆうと呼ばれているが、その名の通り、このランスにも発火機関が取り入れられているため、相手を突いた衝撃で槍先から火が噴き出す仕組みになっている。物理的攻撃に、火という属性によるダメージを追加できるのだ。いつもながら、こんなすごい装備を作っている武器工房には驚かされる。

「全隊、横に並べ！ モンスターの群れに斬りかかるぞ！ 遠距離援護班は後ろに並べ！」

後方からハンター軍のリーダー、アル・カーペンダーの声が聞こえてきた。

その途端、周りのハンター達が手際よく横に並び、十人×五列の隊列を作った。今回、ケイは遠距離武器を使用する——“ガンナー”という——なので後ろに並びに行った。

もやの中から、ピンク色の大津波が地響きと共に飛び出してきた。白いベールの奥には、うっすらとシェンガオレンの巨影が見える。

ピンクのコンガ達の先頭を一際大きな個体が走ってきていた。群れのリーダーと思われるババコンガだ。

ふと心の隅で思ったことがあった。なぜ、シェンガオレンとコンガ達が“一緒”になって攻めてくるのだろうか。

「かかれええええ！」

リーダーの掛け声が響き渡った。俺は心の中の疑問を捨て去った。余計なことは考えていられない。

「ウオオオオオオッ！」

俺達は駆け出した。

「ガァァァァ！」

コンガ達の鳴き声が、地響きと共に轟く。

ハンター達は日光に煌めく武器を振りかざし、コンガ達は強行突破を試みようと突進する。

二つの波がぶつかり合った。

刃が一閃して血が降り注ぎ、太いコンガの腕が振り抜かれ、武器が宙を舞う。怒声や悲鳴が、ハンター達のガチャガチャと鳴る防具と不協和音を織り成す。また一人、また一匹と地に倒れ伏していく。

「ここから先へは一匹たりとも行かせるな！」

リーダーが巨大な剣をコンガに叩きつけながら叫んでいる。

「そういえば……」

離れて射撃をしていたケイが近づいてきた。俺は目の前にいたコンガの首に槍を突き刺した。槍が火を噴き、コンガはその身を焼かれつつ、悶え死んだ。

「どうした？」

俺は一度戦線から後退した。ババコンガが、ハンターを次々と太い腕で殴り飛ばしている。

「あいつ、軍へ加入申請しに来て、一緒に戦うことになってたんじゃなかったっけ？」

ケイがボウガンに弾をこめながら言った。

「あっ……」

今更ながら気づく。いるはずの奴が……いるはずのあの人が……どこにも見当たらないことに。

氷氷氷氷ラルバ氷氷氷氷

暗闇の中、ハツとするほど青い一対の目がキョロキョロとうごめいている。

「おかしいな……。こっちで合ってるはずなんだが……」

鋼色の装備に身を包んだ、銀髪の綺麗な女性が、薄暗い路地裏でうろついていた。背には銅色の小斧が二つ、担がれている。双剣だ。流派で言うなら二刀流である。

「北の迎撃門に十分後集合……って三十分は経ったな……。北っていうから、まっすぐ進んで行くだけでいいはずなんだが……」

女性は防具のついた頭をかきながら歩き出す。そのうちに、広い通りへ出た。

「お!? よし、まっすぐだな」

女性は道に沿ってまっすぐ歩いていく。道路脇の廃れた矢印の看板が、女性の背後から、進行方向に何があるか示していた。無論、女性は気づいていない。

“ここから先

街の南門へ”

第19章 失われた“笑い”

第19章 失われた“笑い”

☆☆☆☆ミライ☆☆☆☆

「くっせええええ！」

ケイが鼻をつまみながら、青い顔で悪臭の溜まり場から出てきた。俺はコンガ達が放屁をする直前に危険地帯から抜け出していたので、あまり被害はなかった。

放屁！？ 俺が初めてコンガという生き物を知った時はそれで驚いていたものだ。それこそがコンガ達の戦い方。

四足走行で突進してきたかと思ったら、急にこちらに背中を向けて立ち止まる。チャンス、とばかりに斬りかかれば、噴出する黄色いガスの餌食になる。それも、ものすごい風圧で繰り出されるのだ。それなりの音も響く。不快極まりない。

体格の大きいババコンガに至っては、量も音も臭さもたまったものではない。腐った生卵にカビ臭いパンを混ぜ、納豆をトッピングしたような“すばらしい臭い”だ。だが、コンガ達のボス、ババコンガの恐ろしさはそれには収まらない。あろうことか、自分の茶色い排泄物を長いしっぽで掴んで投げつけてくるのだ。身の毛もよだつほど“最強”の必殺技だ。潔癖症の方には失神ものだろう。

「コノヤロオオオ！」

ケイが鬼のような形相でコンガ達を睨み付ける。そして、ヘビィボウガンを構えてコンガ達に向かって走り出す。茶色い臭そうな気体がケイが通った所に漂っている。臭気がしみついているのだ。

「ガァァァッ！ ガァッ！」

突然、ババコンガがおかしな鳴き声をあげた。その途端、回りのコンガ達が一斉に放屁しはじめた。辺りが濁ったガスで見えなくなる。そのあまりの強烈な臭気に、女性ハンターの一人が倒れ込み、嘔吐していた。

「ガフッ」

鼻をつまんで逃げ惑うハンター達を無視して、ババコンガはしっぽの先で持っていた赤いキノコを食べ始めた。

ババコンガは、気に入ったキノコがあると、自分のしっぽの先でそれを巻き取り、持ち歩く習性がある。ただ、それは人間が食べられるようなキノコではないこともある。しかも、ババコンガは、食べた物を専用の器官に蓄えることができる。食べられる物は消化・吸収するが、食べれない物はいち早く消化した後、専用の器官に蓄えられ、ババコンガが敵と戦う時に、それを吐きかけることで即席の“ブレス”——火や水などを体内で圧力をかけて噴出する、言わばモンスターの飛び道具——の役割を果たす。

例えば、ババコンガが毒キノコを食べて、器官に蓄えていたなら、毒素を含む息を吹き出す。悪臭を放つゴミでも蓄えたなら、臭気ブレスだ。ババコンガは雑食。何を吐き出すか分からない。

「なにのん気になにキノコかじってんだよ!？」

俺は茶色いもやの中、ランスを構えて突っ切り、ババコンガへ一気に肉薄する。臭いなんて根性でどうにかしてやる。

「おりゃああ！」

掛け声と共にランスの鋭い先端を、ババコンガの太った黒い腹にうずめる。血が吹き出し、ランスが異常なほど火を吹く。ところが、赤いはずの火は青白く燃え上がった。しかし、俺は不思議に思っただけで、あまり気にはしなかった。武器がちよっと壊れただけだろう……そう思っていた。

さすがのババコンガも、痛みのあまりに悲鳴を上げて後ろに飛び

すさる。ちょうどそこは茶色いガスの範囲外だ。

「みんな、もやから逃げろ！」

その時、ケイが急に叫んだ。顔はコンガのおならの臭いを嗅いだ時より青い。

「はぁ！？ 何を……」

「ババコンガが食ったのは、ニトロダケだ！」

ケイの声が俺の質問を遮る。

ニトロダケとは高熱を秘めた珍しいキノコだ。ババコンガが食べて、蓄えたなら、火炎ブレスが吐けるようになる。

「火炎……まさか！？」

気付くのが遅すぎた。コンガ達は全員ガスの外へ退避している。一瞬、ババコンガがにやけたように見えた。そして、奴は思いつきり空気を吸い込んだ。

ヒュゴォォォオ

ババコンガが口から大量の火を吹き出す。そして、その火は青白く燃え上がり……火にさらされた茶色いもやは、大爆発を巻き起こした。

「うわあああああ！」

青白い業火が身を焼き、爆風が俺を吹き飛ばす。巻き込まれたハンターは数知れないだろう。

忘れていた。おならは“燃える”ということ……。

ΦΦΦΦルナーΦΦΦΦ

「北門の防衛部隊が大打撃を受けました！ みなさん、万が一に備え、街から逃げ出す準備をしてください！」

避難区に伝令が飛ぶ。それを聞いて市民達がざわめく。恐怖や不安が辺りを渦巻いていた。

家を失ったらどこに住めばよいのだ、という嘆声も聞こえてくる。

「ケイやミライさんは大丈夫じゃろうか？」

松田じいが心配そうな顔で呟いた。私はいても立ってもいられなくなってきた。

「私、北門に行ってくる！」

「こ、こら！ 待つじゃ、ルナー！」

松田じいの制止を振り切り、私は走って十分くらいの距離にある北門へ駆け出した。

「どいつもこいつも若いモンは！？」

「ル、ルナー！？ ま、待ってよ」

後ろから松田じいとブラスの声が追いかけてきた。しかし、それもしばらく走るうちに聞こえなくなった。

☆☆☆☆ミライ☆☆☆☆

俺は回復薬を火傷した部位にかけた。傷に触れて泡立つ回復薬が、みるみる傷口を癒やしていく。

「しみるう」

ヒリヒリするが治療の副作用だ。仕方ない。

回りを見ると、何十人ものハンター達が気絶したか……亡くなっ
たかで倒れている。どれもさっきの爆風にやられて黒い煤が^{すす}付いて
いる。

生き残っているのは二十人ほど。半分以上が戦闘不能になっていた。まだ予備隊がいるらしいが、数は本隊ほど多くないと聞いている。

ふと、地響きが異常に大きくなっていることに気づいた。慌てて
シエンガオレンの方を見ると、もうすぐ白いベールのようなもやか

ら、その姿をあらわにしようとしていた。まるでそびえ立つ巨塔だ。ハンター不足に、シェンガオレンの襲来。これでは街の陥落は免れないだろう。

「みんな、油断するな！ 仕掛けてくるぞ」

リーダーのアル・カーペンダーは生き残っていたらしい。大声で警告している。

茶色いガスはとうに消え去り、コンガ達が一斉攻撃を仕掛けようと構えている。今更ながらあのババコンガの統率力に驚かされた。よくもまあ、自由奔放に生活しているこいつらをここまで制御するものだ。

「おい、お前！ 確か、ケイとか言ったな？ これを空に打ち上げろ！」

リーダーがケイに何か弾丸のようなものを渡した。

「救難信号だ。予備隊を呼ぶ」

「アイアイサー！」

ケイがヘビィボウガンのマガジンにその弾丸を装填し、ボウガンにセットした。

「ガアアアアッ！」

ケイが空へ発砲するのと、コンガ達が襲いかかってくるのはほぼ同時だった。ケイが撃った弾は、空高くまで上がると、破裂して色とりどりの煙を撒き散らした。

「ババコンガを潰す必要があるな……」

まずは、統制力となるものを消すのが先決だ。俺は、先頭を突っ走ってくるババコンガへ、ランスを構えて突進しだした。

「閃光玉を投げる！ みんな目を庇え！」

リーダーがそう言った。俺は構わずババコンガへ突進する。背後で回りが見えなくなるほどの閃光がほとばしった。俺は前を向いているので被害は無いが、こちらを向いていたコンガ共は全員視界を奪われたようだ。一様に目を焼く光に悲鳴を上げ、悶えている。

「反撃開始！」

リーダーが叫んでいる。ババコンガの元に走り着いた俺は、その勢いを槍先に乗せ、ババコンガの左肩を串刺しにした。狙い済ました一撃は、ババコンガの肩の骨を貫き、内部を炎で焼いた。

「ガギャアアアアア！」

会心の一撃に、痛みあまりにババコンガが顔を真っ赤にした。どうやら怒らせてしまったらしい。俺はババコンガの視力が回復する前に、できるだけダメージを与えるため、繰り返しブループロミネンスを突き出した。

「やあっ！ とおっ！ はあっ！」

体重移動を生かし、重みを乗せた突きをババコンガの左腕の同じ部位に三発ぶちこむ。ぶしゅう、と穴の空いた水風船から水が吹き出すように、ババコンガの赤い血が溢れ出る。

「俺も手伝うぞ！」

リーダーが走り込んできた。背中にはブループロミネンスと同じ素材を使った剣、ブルーウィング。それは身の丈を優に越えるほどの大剣だ。【リオレウス 亜種】の蒼い甲殻に、切りつけると火を吹くというブループロミネンスと同じ機構が備わっている。

「やあああああっ！」

リーダーはババコンガの頭上から抜刀斬りをかまそうとする。だが、ババコンガが横に跳び跳ねようとしたせいで、大剣はババコンガの右肩を裂くことになった。吹き出した火が、ババコンガの傷口を焼く。血が滝のように流れ、ババコンガは痛みに悲痛な叫びを上げた。

ババコンガはおぼつかない足取りで逃げ出した。視力が回復したらしい。

「ガウツガウツ！」

おかしいな鳴き声を上げている。不思議に思っていると、背後から人の悲鳴が上がった。

振り返ると、なんと北門——実際は砦のようになって——の

上から何かが飛び出してきた。人の体高と同じくらいで、白い肉食恐竜のような体型だ。しかも、どんどん飛び降りてきて、綺麗に着地していく。下敷きになったハンターが二、三人いた。さっきの悲鳴は潰されたハンターの声に違いない。

「ギアノスだと!？」

信じられずに声が漏れる。さっきのおかしな鳴き声はこいつらを呼ぶものだったのか? シェンガオレンだけでなく、なぜギアノス達までがコンガ共と一緒にいるのだ……。

「くっ……シェンガオレンが……」

誰かが呟く。俺はシェンガオレンの方を見た。奴はもうこの戦場に到着していた。

「くそっ……もう終わりか……」

リーダーがそう嘆いた時だ。砦の上から轟音と共に巨大な矢が二本飛んできた。バリスタという固定式の強力な弩の弾だ。^{いしゆみ}誰かが発射したのだろう。その一対の矢は、きれいな放物線を描いて戦線を離脱しようとしていたババコンガの体に突き刺さった。ババコンガは力なく地に倒れ伏し、動かなくなった。さきほどの猛攻で出血多量になり、弱っていたのだろう。

コンガ達が悲しげなうめき声を上げた。ギアノス達も、ババコンガに向かって頭を垂れる。

その行動に、多くのハンターが驚愕した。もちろん、俺もだ。なぜ種族が違うモンスターがこれほどまでに心が通じているのだろうか。

「ギシャシャシャシャ」

シェンガオレンがおかしな音をたて始めた。低く心地よい音だが、シェンガオレンの口からは白い泡が吹き出している。口から泡を吐くのは甲殻種の蟹が怒ったときにする行動だ。だが、今までにシェンガオレンが口から泡を吹いてキレたということなど聞いたことがない。泡を吹かないものだと思われていた。

「シェンガオレンが……怒っている!？」

ふと、そこで思い至る。アトラスだ。アトラスと話せるようになってから気付いたことがあった。重大なことだ。

「モンスターにも……“心”があるじゃねえか……」

それまでの俺にとって、モンスターというのは本能のままに生きる、ただの馬鹿な生物に過ぎなかった。でも、モンスターは本能だけしか持っていない訳じゃなかった。思考が、感情が、友情が、モンスターにもあるのだ。

「馬鹿なのは俺達じゃねえか……」

俺達、とは人間のことだ。アトラスが夢見る、人とモンスターが共生できる社会。それを作りたかったら、まず人間の、モンスターに対する考え方を変えなければならぬだろう。

「お、おい。何してんだ!？」

誰かが慌てた声を出している。俺はそいつが見ている方向へ視線を走らせた。

死んだババコンガの近くにケイがいた。武器を地面に置き、直立している。そして、澄んだ低い声で歌い始めた。

「汝^{なんじ} 戦^{いくさ}にて散る

汝の気高き魂は 野を駆け 山を越え 海を渡り 空へ羽ばたく

汝の歩みを 我らは称えん

汝の死を 我らは哀しまん

我らは謳^{うた}う そなたの名を

我らは継ぐ そなたの遺志を

安らかに眠られたまえ」

ケイが遺跡語で歌い終えた。遺跡語とは、古代遺跡に刻まれている古い文字のことだ。この儀式のようなものは、俺がケイと出会った時からすでにケイが習慣としていた。ハンターであるケイは、自分が狩ったモンスターに必ずこの唄を捧げたらしい。どこでそんな唄を覚えたのか訊いたことがあるが、ケイ自身も知らないと答えた。

場は静まり返っている。時が止まっているかのように、誰も動こうとしなかった。その雰囲気を変えたのは、北門の砦の上に到着した予備隊だった。

*****タスカ*****

「放屁爆弾作戦が成功したみたいだな」

「でも驚いたぜ。タスカがあんな汚らしい作戦を思い付くことにな」

「ああ、分かってる。さっきの爆発で人間共をいぶりだして、こっちの方へ逃げさせたんだろ？」

「はい。市民達は万が一のために別の門から逃げ出そうとするでしょうから」

バルス兄さんが不敵な面で笑う。

「俺達だけじゃありませんよ。モンスター達すべての……です」

小麦色に焼けた肌の女性が、鉱石で作った防具、ハイメタシリ―ズに身を包んで南門の砦の上に仁王立ちしていた。彼女の深いライトブルーの瞳が辺りを見回している。

「で、何で誰もいないんだ？」

砦の旗が、虚しく風にはためいていた。

第19章 失われた“笑い”（後書き）

クリンチに合掌。いい奴だったでさあ（；
|（；
／
～
～
～

第20章 ラルバ 覚醒、ラージャン 激昂

第20章 ラルバ 覚醒、ラージャン 激昂

☆☆☆☆ミライ☆☆☆☆

「バリスタ部隊！ 大砲部隊！ シェンガオレンの足を狙え！ 転^ス倒させろ！」

砦の上から、助っ人に来た予備隊の隊長のものとおぼしき声が降ってきた。どうやら、大砲やバリスタが置いてある砦の発射場からギアノス達を掃討し終えたらしい。砦の前の平地で戦っている俺達は、リーダーのババコンガを殺されて怒り狂っているコンガなどで手一杯だったので、かなり気が楽になった。

しかし、相変わらず状況はこちらの劣勢。コンガやギアノスは一匹たりとも街の中へ入れてはいないが、敵にはシェンガオレンというあまりにも強大な戦力が残っている。そして、狙撃部隊の背後をつくように奇襲をかけてくるギアノス達も、驚くほどの統制力を発揮していた。ギアノスの中に、リーダー格のドスギアノスが紛れ込んでいる可能性がある。

「くっ……」

俺は疲労の溜まってきた体にむち打ちながら、ランスの槍先をギアノスの集団に向けて突進する。

「うおおおおっ！」

反応の遅れたものは、鋭い槍に串刺しにされ、吹き出す業火に身を焼かれた。

「ギャウウウ……」

蚊の鳴くような細かい声を上げて、やられたギアノスは息絶える。

突然、砦の発射場があるところから連続して爆音が轟いた。驚いて振り返って見ると、いくつもの大砲の口から、漆黒の煙が立ち上っている。

「砲撃か」

空中を割って真っ直ぐ進む黒く丸い砲弾は、見事にシェンガオレンの右前足をとらえた。中に入っていた特殊な火薬が、激しい衝撃を受けて赤い炎を吹く。響き渡る爆撃音。先のコンガ達のおなら爆弾よりかは随分規模は小さいが、充分な破壊力を持っている。

そんなものが、次々とシェンガオレンの右前足を襲ったため、シェンガオレンはバランスを崩した。そびえ立つ巨体がぐらりと傾き、甲殻種独特の軋むような音と共に倒れ込んできた。

「全員気をつけろ！」

リーダーが慌てて指示を出す。巨体の落下地点にいたハンターは皆逃げ出した。他のモンスター達も上手く退避している。ふと逃げるギアノス達を見ると、一際体格が大きい個体を発見した。エメラルドグリーンのような大きなトサカが目につく。ドスギアノスに違いない。
ブロンズ
駆けつけようと思ったが、目の前に青銅色の物体が地響きを立てて倒れてきた。

（シェンガオレンめ……間が悪く倒れてきやがって）

おかげでドスギアノスの姿を見失ってしまった。

俺達が丈の長い草むらに隠れて待機していると、突然南門が開かれ始めた。錆びついた門扉の付け根が、ギシギシと耳障りな悲鳴を上げている。中から現れたのは、大勢の人間だった。

「よし、さっきの放屁爆弾作戦は成功だな」

バルス兄さんが『おっしゃ!』とガッツポーズをした。

「人間が南門から逃げてきたってことは、北門を守っている人間達が相当ダメージを受けたということでしょう」

「そうだな。戦いが終わったらクリンチのこと褒めなきゃな」

バルス兄さんが苦笑いする。きつと、クリンチが太った腹を揺らしながら、胸を反らして高笑いしている姿を想像したんだろう。

「褒めてやったら、『どうだタスカの兄貴ィ! 俺、スゲーだろ! ?』とか言って図に乗るだろうけどな」

バルス兄さんが笑いを噛み殺しながらクリンチの真似をした。

「そうですね」

俺は笑ってそれに応えた。

「北門から伝令が来たらこれをクリンチに渡してもらおうつもりです」俺は側近のブランゴを呼びつけ、小さな木箱を持ってこさせた。

蓋を開けると、食欲をそそる香ばしい匂いが辺りに充満した。

「おおっ! それはキノコか! ? 妙に美味そうだな」

バルス兄さんが箱を覗きこんで言った。中には、焦げ茶色のかさをつけた大きなキノコが三本入っていた。

「人間がマツタケとよんでいる珍味らしいです。最近は滅多に見られないキノコだ、ってクリンチが言っていました。ほんと、食べ物に關しては無駄に博識ですからね……クリンチは……」

「アイツはそれを食ったことがないのか?」

「ええ。人間の商隊が運んでいたのを奪おうとするたびに、護衛のハンターが妨害してきて失敗していたそうです」

「ほう。アイツ、馬鹿みたいに喜ぶだろうな。そういえば、タスカはどうやってそれを手に入れたんだ?」バルス兄さんが不思議そうな顔をする。

「実は、ウェット湿原の北部の森に“アルカトラズ”の本拠地があるんですよ」

「何っ! ? あの特人間大泥棒猫集団か! ?」

「そうです。ちょうど、テッペキ副大将が私に極上黒真珠ごくじょうくろしんじゅをプレゼ

ントしてくれたので、物々交換でマツタケ三本と変えてもらったんです」

「そんじゃ、人間共もほとんど出てきたようだし、いっちょ暴れるか」

ЖЖЖЖ
ラ
ル
バ
ЖЖЖЖ

「う、ラルバー!? お主、北門の迎撃部隊に加わったのではなかったのか!？」

「やあ、松田じい。それがだな、集会所に着いたは良いものの、トイレに行ったら帰り道が分からなくなってしまつて……」

「それで北の方に向かって歩いていたらここに着いていた。その様子じゃあここは北門じゃないらしいが……」

「違え……」

キャーッ！

松田じいという老人が怒鳴っているのを遮るかのように、鋭い金切り声が上がった。悲鳴だ。

「ゴ、ゴリラがいるよ！」

図体がでかい童顔の男が、南にある草原を指差している。こっちに逃げてくる市民達の背後から、無数の白い類人猿が迫り来っていた。まるで、雪崩が襲ってきているかのような風景だ。

「みんな街の中へ戻れ！」

誰かが大声で指示を出している。市民達は、口々に悲鳴を上げながら、大挙して南門に戻ってきた。しかし、足の早さでは白いゴリラの方が勝っている。

「このままじゃ間に合わない……アタイが止めてくる」

そう言ったラルバの顔は、どこか苦痛に耐えているかのように見える。

ラルバがそれぞれの手に赤銅色の小斧を持った。その途端、彼女の体がビクンと大きく^{けいれん}痙攣した。

「無理じゃ！ 敵が多すぎる！ 殺されるぞ！」

松田が仰天してラルバの右腕を掴んだ。しかし、振り返って松田を見つめるラルバの瞳を見た松田は、硬直した。

「クロス……」

「……ラ、ラルバ!?」

松田が恐る恐る声をかける。

「クロス……クロス……クロス！」

ラルバは松田の腕を振りほどき、駆け出した。体が赤いオーラに包まれている。“氣”を練り上げた“練氣”を纏っているのだ。修行の果てに得られる“練氣”は、それを纏う者に鬼人の如き力を与える。

「ま、待ってよ！　ラ、ラルバ！」

大男が幼い声で呼ぶが、ラルバには誰の言葉も耳には入ってき
てはいなかった。

「うおおおあああつ！」

ケダモノのような奇声を発しながら、ラルバは白いゴリラ達に襲
いかかった。右から左へ、左から右へ小斧を振り回しながら、戦場
を疾風の如く縦横無尽に駆け抜ける。その赤銅の閃きは、目にも止
まらぬ速さで幾多の獣の喉を切り裂き、体の一部を切断し、骨を粉
砕していった。血しぶきが舞い、断末魔の叫びがこだまする。

殺戮の嵐が過ぎ去った後、軟らかな朝日に照らし上げられている
のは、紅に染まった白い獣の無数の死体だった。

「あの目は……」

松田が眼前に広がる凄惨な光景に呆然としながら呟いた。

「あの目は……鬼の目じゃった……。武器を手にした途端、あやつ
の目は……」

*****タスカ*****

「な、何てことを！」

俺は信じられない光景を前に、ただそう呟くしかなかった。みる
みる部下のブランゴ達が殺されていき、先鋒として送った通常部隊
は壊滅した。

「何だあの野郎……」

バルス兄さんが驚愕して目を見開いている。

「一時体制を立て直しましょう……。全軍！　一時撤退！」

俺は動揺しているブランゴの精鋭部隊に指示を飛ばした。このま
ま突っ込めば、俺やバルス兄さんなどは生き残れても、部下達の命

は保証されない。

「まさか、あんなに強いハンターが南門の守備に回っていたなんて……不覚……」

俺は、部下達を殺された怒りと悔しさに歯ぎしりしながら、戦場を後にした。

再び草原に身を隠した俺達の元に、伝令がやって来た。

「東門より、テツペキ副大将が門扉を破壊したり。街に侵入し候！」
赤い甲殻のヤオザミが、背負っている殻をカタカタと揺らしながら報告した。

「こちらも吉報にありけり。キリキザミ大将が西門を突破せり！」
青い甲殻のガミザミが、鋭い両腕のハサミをシャキシヤキと鳴らす。

俺は最後になった北門からの報告を待った。

しばらくして北門からの伝令がやって来た。ギアノスだ。俺とバルス兄さんの前までくると、息を切らして俯いた。

「吉報を待ってましたよ。これをクリンチに届けてください」

俺はギアノスに笑いかけた。すると、突然ギアノスが俺とバルス兄さんに向かって、さらに深く頭を垂れた。目からは涙が流れている。

「き、吉報は……シエンガオレンのジュンシャン様が、足に重傷を負いつつ北門を破壊し、アッシュ殿がギアノスやコンガ達を率いて街の中に侵入したことです……」

「どうした！？ 泣くことはねえだろう？ クリンチはどうした？ 放屁爆弾作戦は成功したんだろ？ タスカがクリンチにプレゼントがあるんだ。わざわざ“アルカトラズ”と物々交換して……」

バルス兄さんが泣いているギアノスを見て笑いながら言った。それをギアノスの伝令が遮る。

「クリンチ殿は……ク、クリンチ殿は立派に“戦死”されました……グアアアアアッ！」

ギアノスが号泣しながら雄叫びを上げた。哀しみと、悔しさとが入り交じった悲壮な響きだった。

「はぁ！？ 何言ってるんだよ……」

兄さんが拍子抜けしている。しかし、声が震えていた。ギアノスの伝令は、嗚咽をこらえながら報告をする。

「クリンチ殿は閃光玉で視力を奪われている時に、人間の集中攻撃で重傷を負い……そして……そして、バリスタの巨大な矢に……」

俺の周りで時間ときが止まった。自分の心臓の拍動する音のみが唯一聞こえる。手からマツタケの入った木箱が滑り落ちた。それは音もなく地面に落下し、中のマツタケがコロコンと転がり出ていく。

「クリンチが……死んだ？」

過去の思い出が走馬灯のように映し出されていく……。

『テメー、ここは俺様……クリンチ様の縄張りだぜ！ 出ていけ！』

『わぁー！ 悪かった！ 俺が悪かった！ だから許してー！』

『お前、タスカって言うのか。俺はクリンチっつーんだ。よろしくな！ 俺の子分……じゃなかった。タスカの兄貴イ！』

『あれは……【金獅子きんじし ラージャン

】だ！ へっへっへ、昼寝してるし、金色の毛を一本頂戴させてもらおうと』

『おい、テメエこのピンクブタゴリラ！？ 死にてえのか？』

『ち、違います！ 毛を引き抜こうなんてこれっぽっちも思っ
てないっす！ ただ、ゴミをとって差し上げようと……』

『なんだ……そうだったのか……悪いことしたな。ついでだ、ゴミとやらを取ってくれ』

ブチッ

『ぎゃー！ 毛を抜いちまった！』

『テメエ！ やっぱりブチコロス！』

『ギャーッ！ 神様、仏様、がん黒ゴリラ様！お助けを！』

『待てやコノヤロオ！』

『俺たちや最強三兄弟！ ほら、タスカの兄貴も一緒に歌えよ！』

『上からゲフッ、下からプ！ はいっ一緒に！』

『上からゲッ……ってコラ！』

『イテッ！ 何すんだバルスの兄貴イ！』

『テメエ、なに訳わかんねえ歌を歌わせようとしてんだ！ しかも下ネタじゃネーカ！』

『だってバルスの兄貴、俺達から下ネタ取っちゃったら何も残らないじゃねえか』

『や、やめれ！ 俺“達”にすんな！ 下ネタはお前だけで充分だ！』

『そんなあく冷たいことお！言わあずにい！』

『わー！ わー！ そんな気持ち悪い顔で寄ってくるな！ わあー！ タスカ、助けてくれえ！』

俺の頬に冷たいものが伝ってきた。周りが霞んで見える。目頭が焼けるように熱い。

「ウオオオオオッ！ クリンチィィ！」

バルス兄さんの哀しみの雄叫びが空気を切り裂く。

「テメエ！ 何勝手に死んでんだよ！？ 生きてたときから気ままに生活してやがってよ！ 死ぬときまで勝手に逝っちまうんじゃねえよ！ せっかくタスカがテメエのためにプレゼント渡そうとしてたのに……それすら受け取らないまままでどこ行くつもりだよ！？」

俺は地面に突っ伏して泣いた。部下のブランゴ達も泣き叫んでいた。

「畜生……畜生！ ……人間！ オメエらもどこまで奪えば気が済むんだ！？ 俺達の居場所も……誇りも……命も……まだ奪い足りねえのかコンチクショオオッ！」

兄さんの体から、まばゆいほどの光が放たれた。普段から金色の毛で覆われている兄さんの身体を、黄金の光が包み込んでいる。たくましい腕には、バチバチと絶え間なく電流が流れ出す。

「クリンチ！ お前の仇は俺がとってやる！」

怒り狂っている兄さんは、猛然と南門へと駆け出した。
白昼の太陽よりも眩しく、猛々しく――

第20章 ラルバ 覚醒、ラージャン 激昂（後書き）

キャラ募集などしてますんで、応募したい方は前章の「お知らせ」をお読みくださいw

A n c e s t e r ' s n o t a t i o n 0 1 (前書き)

今回は特別編として載せました。小難しい話の羅列ですが、案外、キーパーソンだったり……するのかな!? つーかまず n o t p e r s o n だろ的な?

とまあそんな文句がいっぱい出そうな話でさあ

(へーへゞ)

A n c e s t e r ' s n o t a t i o n 0 1

A n c e s t e r ' s n o t a t i o n 0 1

——今、私は思う。これは“覚え書き”というより“記録”のよ
うなものだと——

~~~~~

私に時間という概念は無い。故に日付けなどは記さないつもりだ。  
それに、これを読む者は誰一人いないだろうから。

……私以外に、ということだが。

なぜこんなものを書いていたのか……と考えるであろう未来の私  
自身に告ぐ。

決まっている。私は暇だったからだ。

まず、私のことから書き記そうと思う……が、やはり止めた。自  
分のことくらい、書き記さなくても分かる。故に、私の身の回りに  
いる者を紹介しよう。

とは言うものの、それは二人しかない。

その者達の名は、アルゴンとミマス。どちらも、私に忠実な“使い”だ。

アルゴンは私の身の世話<sup>はくはつ</sup>を任せている男だ。白髪<sup>はくはつ</sup>の初老という風貌で、言ってしまうえば優秀な執事だ。頭も切れる。頼りになる奴だ。

ミマスは、目映いほどの美貌を持つ女神とでも言おう。そういうのを“大人の美”と表現するのではなかったか。確かそうだった。昔会った“人間”が教えてくれた言葉だ。

そういえば、不思議な趣味を持っていた奴だったな。私は、その“人間”を気に入っていたのだが……。

おっと、話が反れた。で、ミマスは主に私の手先として目的の“世界”に送られる。この者は、ほとほと癖のある奴だ。まあ、私がたまたましくじって造ってしまったからなんだが。

そんな失敗について書く気はさらさら無い。どうして自分の失敗をわざわざ二度も見つめなければならぬのか？ 一度でもうたくさんだ。

ミマスには“世界”の視察を任せている。アルゴンにも視察をやってもらったこともあるが、アルゴンとの違いは“殺戮”の許可を与えていることだ。

過去に一度、ミマスを“人間”として“世界”に放り込んだことがある。まだ経験の浅いミマスに、学習させるためだ。私の“使い”であるという記憶を消し、一人の人間として生きさせたのだが……私の失敗作である彼女はとんでもないことをやらかした。まあ、その“とんでもないこと”を通して、彼女は“殺し”とは何かを学んだ訳なんだが。

それ以来、彼女には“殺戮”の使命を任せている。今や、彼女は命の重みについて、私より深く実感しているのだから。

しかし、かつてミマスを放り込んだ“世界”には困らされたものだ。善と悪のバランスが極端に悪くなったために、私自身が手を加えることになってしまった。それも苦勞した。

なぜなら、私は“世界”の物事に直接手を加えることができないからだ。故に、その“世界”の住人に使命を与えて解決させることにより、間接的に手を加えることになった。

私は全てのものにおいて、純粹な“祖”<sup>そ</sup>を作ることができる。そこまでなら、私の力で自由自在になるのだが……。時間と共に、純粹な“祖”は異なる純粹な“祖”と融合し、新たなものを造り出していく。造り出されたそれらは、もはや混合物。私の手には負えない。それから、良い方へと融合していけば何もしなくて済むのだが……。

加法混色というもので例えると、純粹な原色が融合し、新たな色を造り出していくという風に考えることができる。だが、加法混色では、色を混ぜることにある色へと近づいていってしまう。

その色とは……黒だ。

数々の純粹なものも、融合し続けていけば不純な闇へと変貌する。闇はほっておけばどんどん膨張していく。

黒にいくら色んな色を混ぜても、黒にしかない。黒の量が増えるだけだ。色を混ぜていけば黒に近づくという大原則がある以上、当たり前のことだ。

その闇に唯一対抗できる純色……。それが白だ。なんでも消し去ってしまう、修正ペンのような存在だ。しかし、白とて使い過ぎれば何もない虚無の“世界”になってしまう。

そのバランスを保つのが、私の役目でもある。“世界”は灰色が<sup>カオス</sup>一番安定しているのだ。一つの純色だけで成立する世界など有り得

ない。

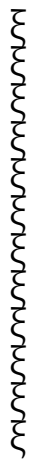
“世界”の住人が等しい性格で生まれ、同じタイミングで目を覚まし、同時に歩き出し、揃って死ぬ。そんな世界があるなら教えて欲しいものだ。

私は灰色を保つために、足りない純の“祖”<sup>いろ</sup>を注ぎ足す。ただそれだけ。それ以上でも、それ以下でもない。

故につまらないのだ。私は暇だった。

これを読んでいる未来の私は、何か面白いことでも考えていないものか……

今日はここで筆を置こう。まあ、私には今日も明日も関係ないのだが。ただ“世界”の混ざり具合を見つめているだけなのだから。



∫ Ancestor's notation ∫

—— 神の覚え書き ——

## **A n c e s t e r ' s   n o t a t i o n   0 1 (後書き)**

いかがでしたか？

もうちょいで、キャラ募集とコラボ申請終わりますね……；  
／~~~~

詳しくは目次の

お知らせ（0、）／

よりw  
w

でわでわ（^ー^）／



## **A n c e s t e r ' s   n o t a t i o n   0 2 (前書き)**

また出てきました。意味不話  $W$  軽く流しても、必死に読み解こうとしても、どちらとも構いませんぜ  $W$   $W$  でもこの人の話は“人間”には分からないでしょうっすね  $W \wedge A \wedge$  ; 書いてる俺も、良く分からないと思ってるヤツですから  $W$

## A n c e s t e r ' s   n o t a t i o n   0 2

A n c e s t e r ' s   n o t a t i o n   0 2

~~~~~

私が再びこの“覚え書き”を更新するのは、かなり久し振りだ。
前の“覚え書き”に日付を書いていないため、詳しくは分からない
が、数年は経っただろうか。

暇なので、昔のことでも書き綴ろう。

まだ、私が造った“使い”がアルゴン一人だけで、私が未熟者だ
った頃の話だ。

未熟とは言ったが、いくつか“世界”を創造していたし、もう知
識も充分過ぎるほど貯えていた。

要は、暇だったのだ。

——退屈

私の果てしなく続く生活に、蜘蛛くもの糸のように絡みついてくる、
永久不滅の存在。私がここにある限り、それはいつまでも私につき
まとい、追い詰める。私の唯一の天敵であり、私の唯一の欠点。

私は、そんな退屈さを紛らすために面白いことを思い付いたのだ。それが、未熟さゆえの失敗だった。

今まで私が造り出してきた純粋な“祖”は、純粋な一つの色で構成されていた。

色の三原色。加法混色の元になる、シアン、マゼンタ、イエロー。

シアンならシアン。マゼンタならマゼンタ。イエローならイエロー。そんな風に私は純粋な“祖”^{いろ}を造り出し、時間と共に混ざり合っていくそれを見守っていた。時には、もう一つの純色である白で、増えてきた黒^{やみ}を抑制し、灰色^{カオス}を保った。

そこでふと考えた。

“無色”という純の“祖”^そを作って混ぜてみたらどうなるだろう……と。

私はその無色な“祖”——“透明”——を造り出し、生き物に体现して、ある“世界”へ混ぜ込んだ。その“世界”は比較的造ったばかりの若い“世界”で、生き物は存在したが、“人間”のように高度な知能を持つものはまだ生まれていなかった。

私は“透明”を生き物として体现したそれに、名前を授けた。

ミラルーツ

と。

ミラルーツの“ミラ”は、別の“世界”で発祥した“ラテン語”

というものから拔擢したものだ。

“ミラ”には『不思議な星、驚異』という意味がある。

ミラルーツの“ルーツ”には、私が気に入っていた“人間”が母国語としていた“英語”の『root…祖先、始祖』を引用した。“ルーツ”は“root…ルート”を複数系にしたものだ。

“ミラルーツ”……確かにそれは、不思議であり、驚異であり、“透明”という純粋な“祖”であった。

ミラルーツは“透明”さ故に、さまざまな色を吸収していった。最初は卵だったミラルーツは、当時、その“世界”でもっとも生息数の多かった“竜”の影響を大きく受け、“竜”の風貌へと成長した。

最初は、私は喜び、驚いていた。色を持たない“透明”という“祖”は、他の純粋な“祖”や融合した——混色されて生まれた生き物——の特徴を全てそのまま受け継いでいくのだった。まさに、不思議、驚異だった。

ところが、ある日、私は重大なことに気付く。加法混色の向かう先は……言うまでもなく“黒”だ。まして、最初から“無色”であったミラルーツは、抵抗することなくその特徴を受け入れ、黒へ染まっていく。それは漆黒の闇に墜ちた、黒龍となった。

その“黒”も“黒”も“黒”や“黒”さえも……受け入れて……。その“世界”は、善と悪のバランスが完全に崩れていた。強大なのは無論、悪。

私は慌ててアルゴンをその“世界”へ召喚し、ミラルーツの“粛清”を命じた。

結果は、惨敗だった。

闇の権化となっていたミラルーツになぜ“粛清”が効かないのか

……。全ての“闇”^{くろ}に対し、“肅清”^{しゅうせい}は唯一対抗できる色^{もの}だったはずだ。不純物の塊である“闇”^{くろ}に白が効かないはずがない。まして、どんな色に対しても、それらを薄め去る白がなぜ……。

しかし、私はふと悟った。もとが“透明”だったミラルーツは、芯から“黒”^{やみ}に染まってしまったのだと。

ミラルーツは、純粋な“黒”へ染まりきってしまったのだ。しかし、純粋な色ならば私にはどうにかなるだろう。私はそう考えてミラルーツのいる“世界”へ降臨した。純粋な“祖”なら、私は自由自在に扱えるのだから。

しかし、私は敗北を喫した。

ミラルーツは純粋な“透明”にして、不純な“黒”にあり。

私は、ミラルーツに最大の“清め”を施した。外見だけは“清め”のせいで美しくなるミラルーツ。しかし、内に秘めた禍々しい“闇”は清めることはできなかった。

私は、手も足も出せずに、ミラルーツが“世界”を破滅へ導くのをただ見ているしかなかった。ミラルーツは、不純な“黒”であると同時に純粋な“透明”でもあるため、貪欲に恐怖や絶望を吸収していた。

貯めに貯まった闇を利用し、ミラルーツは己^{おのれ}の兄弟とも言えるべき二体の分身を作り出した。

私はそれらを区別するため、禍々しい赤黒い体躯のミラルーツに“ミラバルカン”、全てを呑み込む鈍い黒色に身を染めたミラルーツに“ミラボレアス”と名前をつけた。

ちなみに、最初に私が生み出したミラルーツは、私が施した“清め”のせいで、外見ばかり神々しく、美しくなっていた。その身体^{からだ}

は、雪原の雪が日光に煌めいているかのようなものだった。淡い白光がミラルーツを包み込み、さながら神のように見せている。だが、その血のように紅い双眸は、恐怖と絶望を探して蠢き、見る者をおぞましさに凍りつかせるのだ。

万事休すかと諦めていたとき、私はあることを閃き、ミラルーツの天下となった“世界”へ再臨した。私は、数少なく生き残っている、悪に染まっていない生き物へ働きかけた。そして、ミラルーツへ対抗できる意志を持つ者に、“神の力”を分け与え、ミラルーツを滅ぼすように仕向けた。

彼らこそ、“古の十勇士”たるものだ。

彼らは己を犠牲にして、ミラルーツ、ミラバルカン、ミラボレアスを封印した。

彼らの子孫には、種の営みによる血の混同で薄まってはいるが、“神の力”が宿っている。

ミラルーツが封印され、果てしない年月が流れる間、子孫達はミラルーツの封印が解けないよう、“神の力”を元に祈りを捧げ続けた。

そして、さらに時が流れ、その“世界”に“人間”が誕生した。その後、彼らの文明は目覚ましく発展していった。

私はミラルーツの脅威が蘇ることは二度と無いと考え、新たな“使い”を造ることに没頭した。

ミラルーツが君臨していたその“世界”は、とつくに善と悪のバランスを取り戻していた。

そうしてさらに数百年の月日が流れ、第二の“使い”であり、私が設計ミスを侵した失敗作でもある“ミマス”が完成した。

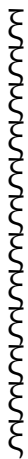
前の覚え書きでも書いた通り、私はミマスにある“世界”に放り込んだ。そこは、人間と生き物が、狩るか狩られるかの命のぶつかり合いを広げていて、ミマスには学ぶことが多くある、と私は考えたのだ。

その“世界”こそ、ミラルーツが封印されているものだった……。

書くのが疲れてきたので、このあたりで中断するでしょう。

ミマスがその後どうなったかなどは、また今度だな。

しかし、その“世界”には本当に困^{あやま}らされたものだ。私は、その失敗を脳裏に焼き付け、二度と同じ過^{あやま}ちを侵さないと改めて誓った



〔Ancestor's notation〕

——神の覚え書き——

A n c e s t e r ' s n o t a t i o n 0 2 (後書き)

次からは猿蟹に話を戻します W

<||:」(「[+]」)狙撃 お知らせ2ndG(前書き)

部活で合宿があったため、しばらく更新できませんでした>(「
」<

あと、おろそかにしていた勉強も、ちょい頑張ろうと思うので、
またまた更新が遅く……いえ、頑張りますぜい!／(＾o＾)／
俺は負けない! ……あ、今のスルーしてくださいw

<||:」(「[+]」)狙撃 お知らせ2ndG

2009年10月10日をもって、新キャラ応募、コラボ申請の受付を終了させて頂きました。

応募してくださった多くの読者様、こんなヤツとコラボをご了承くださいくださった多くの作者様、小説修正に多大な貢献をしてくださった先生方、そんなお世話になった方々にこの場を借りて深く感謝のお礼を申し上げます。

さてさて、ついにやって参りました新キャラ応募の発表でさあ
ww
ガラガラガラ……コトツ……公平なくじの結果、当選したのは

……

【雷纏竜^{らいてんりゅう} リアレイオス】

種別…飛竜・絶滅種

発案者…神月ラセ先生！

風貌はリオレウスに似ている。深緑色の体に、翼がついている両肩の所から、それぞれ一本の大きな棘^{とげ}が生えており、電流を纏^{まと}っている。強力なのは、その口から地面に向かって吐かれる電気のブレスだ。一定方向に向かって、拡散する高圧電流のブレスが吐かれ、地を伝って標的を焼き殺す。

リアレイオスの別称の【雷纏竜】と、絶滅種であることは勝手に付け加えさせて頂きました。また、作者の勝手な都合により、少々設定の変更があるかもしれませんが、ご了承くださいm（　　）m
ただし、物語の都合上、登場はまだ先なのでありますあゝ（；|；
）　どうかご勘弁してください……

また、応募して頂いた新キャラで、気に入ったものは気まぐれで作品に登場させるかもです（へーへ）／

そして……ついにコラボを了承してくださった方々の紹介です！
しかも大勢！　めっちゃ嬉しいッスww

千波　先生

CENTER　先生

SIBA☆翔太郎　先生

神月ラセ　先生

FAM　先生

／（＾o＾）／　以上の方々でさあゝ！

ではでは、先生方の大作を拙者が一つ一つご説明申し上げますぜ
いw

『ORIGIN』　作…千波　先生

全てを飲み込む雪原のど真ん中に、少年が一人、倒れていた。そ

の風前の灯となっている命を、誰ともしらない人物が助けてくれた。次に少年が意識を取り戻したとき、彼はただ何も無い闇に取り残されていた。しかし、闇が退き、周りが見えるようになると、少年の目の前には驚愕の光景が広がっていた。

まさに地獄絵。少年の回りには、血の海に溺れる無数の惨死体が……。

少年は背後に異変を感じ、振り向いた。その先には白光に包まれた龍が佇んでいる。龍は、眼前に広がる殺戮さつりくの元凶が少年だということを経験した。そうして、白い龍は嘲笑って天空へと姿を消す……。

そこで少年は悪夢から目を覚ます。その少年に新たな出会いが起きたばかりの少年の視界を覆い尽くすほど接近している少女の顔。それこそ、少年の人生に大きく影響を及ぼす出会いだった。

目を覚ました少年は、記憶を失っていた。そんな彼の元に多くの人間が現れ、時に笑い合い、時に協力し、時にいがみ合い、時に……散っていく……。そんな波乱万丈の物語の面白さは読んでみないと分からない！

モンハンを知らない方も知ってる方も楽しめる超大作がここに！

URLはこちら！ ↓ <http://ncode.syosetu.com/n2496d/>

また、先生と金剛石とのコラボ作品も、なんと新たに作ってください！ (TOT) 感涙

是非是非見ていってください！ ↓ <http://ncode.syosetu.com/n1795i/>

『MONSTER HUNTER EVOLVE』 作…CEN
TER 先生

世界は常に進化——evolution——を続けている。モンハンの世界も全てが進化していた。人間は滅び、その文明の遺産もわずかに残されているばかり。世はモンスターが支配する世界となっていた。

しかし、一部のモンスター達の知的発達、めざましい変化をもたらす。簡単に言えば、モンスターの“人間化”だ。知能発達の影響で人間の風貌に似たモンスター、【進種】が誕生したのだ。種類は様々で、【ランポス進種】や【フルフル進種】なんというものがその例だ。しかし、モンスターの原型を留める【原種】なども健在だ。また、【ハンター】という凶暴な人間類似型生物も確認されていて、【ハンター】は【進種】に対しての敵対勢力と言える立場にあった。

世界は進種、原種、ハンター、の三派の狩るか狩られるかの競争の元に成り立っていた。

そして、三種族の中で最も謎の存在である【ハンター】の正体とは……！？

ある日、優秀な武具工房の若き親方である少女ミュリエリアは、意識不明で倒れていた白銀の髪の少女を拾った。少女は、記憶の一部が抜け落ちていて、ミラ、という自分の名前らしきもの（？）のみが記憶に残っていた。

ミラとミュリエリアは姉妹のような関係になるほど仲が良くなり、一緒に暮らし始めた。そんな彼女たちの元に、ミラのかわいさに惹かれ……ゴホゴホ……ミュリエリアの工房の評判などに惹かれて多くの者たちがやってくる。彼らとの出会いは、ミラに一体何をもたらすのか。

皆様もぜひご一読することをお勧めします。きっとミラのかわい

さ……ゲフゲフ……CENTER先生の文のトリコになるはずですw

ミラのファンになりたい方……じゃない、小説を読みたい方はこちら！
↓<http://ncode.syosetu.com/n5780h/>

『アンのハンター生活危機一髪』 作…SIBA☆翔太郎 先生

両親の仇をとるため、十五歳の少女、アンはハンターを志す。

ハンターになって早々、アンは狂暴で強力な飛竜、ティガレックスを討伐した。手負いだったとはいえ、轟竜きゆうりゅうの異名を持つティガレックスを倒すには、かなりの度胸がいるものだ。そんなバケモノを倒したアンのハンター生活は、快いスタートを切ったかに見えたのだが……

ハンターになり、モンスターの命を奪うことに抵抗を感じたアン。モンスターを殺した自分に戦慄し、自らの殺生を“罪”として、彼女は思い悩む。

しかし、一緒にいた友に助けられ、彼女はハンターとして生きる覚悟を決めた。

だが、世界は甘くはない。

強力なモンスター

それを前にいがみ合う仲間達……

伝説のハンターと謳われた、今は亡き両親の存在……

食事はネギ一本というボンビー生活……

それらを前に、幾度も彼女は挫けようとし、泣いた。

しかし、彼女は一人ではない。

親代わりになり、アンを育て上げた、アイルールのサンバ。

アンの姉のような存在であり、彼女の身を常に案じているソフィア。

彼女をハンターに育て上げた、熱血漢の教官。

その他にも、彼女に手を差し出し、希望を与えたものはたくさんいる。

彼女は一人ではない。

他にも、密猟団という興味深い存在や、豊富な戦闘シーン。アンの健気な成長っぷりなどが目白押しです。

一つ、覗いてみたい作品ですね！（＾∨＾）

こちらでえいww ↓http://ncode.syosetu.com/n4168h/

『モンスターハンター 赤き翼』 作：神月ラセ 先生

ハンターズギルド直属の、狩人を取り締まる狩人——ギルドナイト——達は、ある少年を追っていた。

彼の名は神月ラセ。二つの短剣を持つ双剣使いにして、違法の狩人。^{モンスター}人。

今一步のところまでラセに迫るギルドナイト達。しかし、ラセの呼び声に、彼を助けに来た者がいた。^{モンスター}

風圧を巻き起こしながら舞い降りてきたのは、天空の王者と謳うたわれる、雄火竜おすかりゆうリオレウスだった。

ギルドナイト達は、呆然としながら、ラセを乗せて飛び去っていきりオレウスを見送った。

ラセが幼い頃に体験した悲惨な事件とは？

彼はなぜ違法ハンターになったのか？

仲間と出会う内に彼は何を知り、何を思うのだろうか……。

そして、人間だったのにいつの間にかリオレウスに転生していた元人間。彼は、ラセと出会い、どう生きていくのか……

手に汗握る戦闘と、数々の謎……。

皆さんはついていきますか？

こちらが入口でさあ！ ↓<http://ncode.syosetu.com/n8392h/>

また、こちらの作品には金剛石の小作に登場するキャラを出させていただいております。コラボさせて頂いたきっかけは、それもありませんねww

どんなキャラが出ているのかは……彼ですよ。はい。拙者の中でも一、二を争うほど好きなキャラでさあ〜（ハ〜ハヾ

『月明かりの大剣』 作…F A M 先生

彼はガルマの街を旅立った。その目に宿る決意は固い。

彼は己おのが背に全てを背負う。

希望も、不安も、家族も、愛する者との約束も……復讐も……

彼が背負うは鋼鉄の意志。

それは父親が遺した鋼鉄の剣。^{（しなせ）}
錆び付き、刃がボロボロになろうとも、その“意志”は折れることはない。

彼は向かう。“一角竜伝説”の英雄が住んでいたココット村へ――

ルル・アカツキは妹のエリスと、ガルマの街で暮らしていた。

ある日、ルルはハンター訓練所の卒業試験として、ドスランポスという肉食恐竜の討伐を課せられる。

彼はそこで少女と出会う。訓練所のマドンナ、ユイ・アスカだ。

ペアを組み、協力してクエストへ向かう二人。

しかし、その地で待っていたのはドスランポスだけではなく、暴走突進イノシシ、ドスファンゴだった。果たして、彼らは無事クエストを完遂できたのだろうか……。

ほのぼのとしたシーン。目が釘付けになるバトルシーン。もどかしい心の葛藤。

きやあゝ 壁――A≡) なシーン……おっと失礼

(へーへ；

などなどなど、ベリーナイスな大作でさあゝ！

O (≡▽≡) O

ルルの持つ、普通の大剣以上のスケールの巨大剣……その正体とは……

続きは見て知るべし！

↓<http://ncode.syosetu.com/n7556h/>

さて、いかがですか？ この大作の数々……（TOT）世界は狭いなんて誰が言ったんだろう……

ではでは、ご協力頂いた方々と、こんな俺の小説を読んでくださっている方に心からのお礼をもう一度。

> (_ _) < お礼！

第21章 アトラス参戦

第21章 アトラス参戦

☆☆☆☆ミライ☆☆☆☆

俺達は慌ててギアノスやコンガ共を食い止めようとしたが、それは不可能だった。今や、街と街の外を隔てていた北門は崩れ去っているのだ。

その原因は、今も転倒したままもがいているシェンガオレンにある。奴は倒れたまま、背負っている巨大な龍の頭蓋骨の口を通して、背甲の噴出口から強力な酸性の液体を北門の門扉に吹き掛けたのだ。まるで、背負われている龍の白骨化した頭が生きていて、それが酸ブレスを吐いたかのように見えた。

その酸性の液体の塊は、門扉に触れた途端、鋼鉄でできた頑丈なそれを溶かし去った。

「畜生！ やられちまったな……」

青い顔をしたリーダーが、街へ侵入していくモンスター達を呆然と見つめている。リーダーだけではなく、他のハンターも然りだ。

「くそっ！ このままじゃ……あっ……いいこと思いついたぜ」

俺が背後を振り返ると、何やら怪しげな微笑みを浮かべているケイがいた。

こんのクソジジイ、またロクでもないことを考えて……。

「リーダー、市民達に東門から逃げるように伝えてくれ」

しかし……ケイの目は真剣だった。ふざけている様子はカケラも

感じられない。

「わしは東門の護衛に回る。リーダー達は敵をできるだけ西に引き付けておいてくれ」

「待て、東門へ一人で行くつもりか？ 一人で五千人もいる市民を守れるのか？」

そこでケイは、またニヤリと笑った。手に持っているヘビィボウガン、“ホワイト・ヘラクレス”をポンポンと軽く叩き、俺の目を見てウインクする。

「それに、“あいつ”も手伝ってくれるだろ」

俺はなるほど、と納得した。そういうことか……。

東門の外にある岩のサークルにはアトラスがいるはずだ。もし、敵が襲いに行ったとしても、ベルキュロスほど強い味方がいるなら市民達を守ることができるだろう。それに、ケイのホワイト・ヘラクレスもある。あの武器には、まだまだ強力な仕掛けがしてあるに違いない。何せ、設計者がケイだからだ。

「……分かった。シェンガオレンはバリスタ用拘束弾で動けなくしておけ。あの足ではどうしようもないだろうがな」

リーダーは意を決したように頷いた。

俺は、街へ入っていったモンスターを追って、溶けた門をくぐった。すると、門扉の付け根に積み重ねてあった木箱が、ガバツと宙に跳ね上がり、そこから小さな人影が飛び出してきた。背が小さく、子供だというのが一目で分かる。そして、その子は俺の腰に抱きついてきた。

「ミ、ミライィ」

涙声だ。どこかで聞いたことがある声色だった。

驚いて硬直していた俺は、腰に抱きついている少女の銀青色の髪ぎんせいしよくを撫でた。

ひょっとしてこの女の子って……。

「どうしたんだ？ 早く避難所に行かねえと……」

そこで少女は涙でぐちゃぐちゃになった顔を上げた。

ルナーだった。

「ミライ……生きてて良かったよおお！　すぐくみんなのことが心配だったよー！」

おいおいと滝のように涙を流しながら泣き叫んでいる。

「モンスターがいて怖かったから、木箱に隠れて……」

回りを見ると、仲間のハンター達の姿は見当たらなくなっている。もう街の中まで入っていつてしまっているのだろう。早く追いかけるなければならない……。

「何でルナーがここにいいのかは知らねえが、理由を聞いてる暇はねえ。ひとまず一緒に来い」

「ま、待って！　ラルバはどこ？　ずっと箱の陰から見つけようとしてたんだけど……」

ラルバ……という名前を聞いて、一瞬、心臓が大きく拍動した。

「さ、さあな。あいつのことだから、トイレにでも行って迷ったんだろうよ……」

そういえば、どこで油を売っているのだろうか。こっちは死者も出るような激戦なのだと言うのに……。

「ミライ」

突然、ルナーが呟いた。ふと見てみると、彼女は南の空を指差していた。涙で濡れた彼女の目が、紅く輝^{あか}いている。

「抑えようのない怒り……深い悲しみ……激しい憎しみ……」

「ルナー？　どした？」

俺は尋常ではないルナーの様子にたじろいだ。まるで目には見えないものを見ようとしているかのようだ。

「ミライ……南の方で何か起こってる……とても危険なことが……」
ルナーはそう言ってるぶると震え出した。何かに怯えているように見える。

「赤い怒りのオーラ……青い悲しみのオーラ……」

「ル、ルナー！？　しっかりしろ！」

俺はルナーの両肩を掴んで揺すった。

「……ミライ、南へ向かって!」

俺がルナーの顔を覗き込むと、目の紅い光は消えていた。

「お願い! 急いで!」

なぜ南へ向かうのか疑問に思い、訊こうとしたが……

「早く! すぐ嫌な予感がするの!」

ルナーの顔は真剣だった。どうやって南で何かが起こっていると知ったのか、なぜ目が紅く光っていたのかなど、色々と訊きたいことがあったが、それらを頭から拭い捨てる。ここはルナーを信じるしかない。

「分かった。一緒に来るか?」

「いや……ミライだけでいち早く南門へ向かって。私がいたら遅くなるから」

「分かった。街の中にはモンスターがいるから気をつけろよ?」

「うん」

俺は走り出した。南で一体何が起きているというのだろうか。妙な胸騒ぎがした。



「道を開け給う、ベルキュロス^{たも}」

赤い甲殻の巨大な蟹が、脅すような口調で話しかけてきた。しかし、ここで怯む訳にはいかない。

「ダメです。ここから先は人間の街の中。モンスターが入ってきては混乱が起きます!」

私は、壊れた門の入口に陣取り、目の前にいるモンスターの大量と対峙していた。

この蟹達が門を壊して街へ入ろうとしたのを、私が空からブレス

を吐いて遮り、街の外へ追いやったのだ。さっきからいたこのモンスター達は、ただそこらをうろついている訳ではなかったのだった。「人間共に与^{くみ}するおつもりか？ 貴殿は人間が憎くないと申すか？」ギシギシと身体を軋ませながら、巨大な蟹が非難するように爪を向けてきた。

「あなた達こそ、人間に戦争なんか仕掛けてどうするんですか!？」
「決まっているに候^{せうろう}。憎いからにありけり」

「そんなことをしたって何も変わらないんです！ 憎しみは憎しみを呼ぶだけなんですから!」

「黙れ若造！ 貴様に何が分かりけるや!？ 我が同胞達は皆人間に殺されけり!」

「それは……人間は確かに身勝手に生き物を殺します。でも、それにだって理由があったんです！ それに、人間にはモンスターを守ってくれる人も……」

「何が理由にありけるや！ 我々から居場所を奪い、誇りを奪い、命を奪い……いかなる理由があろうとも、その所行は許されぬ！そこをどこかぬなら、無理矢理通るまでっ!」

巨大な蟹が私に向かって、背を向けた。今、私に向いているのは、蟹に背負われている巨大な一角竜の頭蓋骨。

「串刺しにしてくれる!」

巨大蟹がそう怒鳴って、後ろ向きで突進してきた。長く、鋭い角が私めがけてずんずん迫る。砂ぼこりが巻き上がり、地面がガチガチと踏み鳴らされている。

「ここから先へは行かせません!」

私は体内を流れる血から、電力を集約させるために意識を集中した。そして、巨大蟹に向かってビーム状の電気ブレスを発射した。バチバチと空中を割って直進するブレスは、見事に蟹に直撃した。

「がああっ!」

巨大蟹が突然動きを止め、全身をビクビクと痙攣させて地に倒れ伏す。しばらくすると、痙攣が収まり、静かな呼吸音が聞こえてき

た。高圧電流のせいで気絶したようだ。これでも手加減した方だった。

「副大将！」

戦いを傍観していた小さな蟹達が、慌てて巨大な蟹に駆け寄ってくる。

「おのれ！　よくもテツペキ副大将を！」

「その方は死んではいけません。ところで今、『副大将』とお呼びになっていましたね？　大将はどこにいますか？　話をさせて頂きたいのですが……」

私がそう訊くと、突然蟹達のざわめきが静まった。

「大将がどうかされましたか？」

「た、大将なんてものはお、おらぬ。我らだけにありけり」

蟹達の様子がおかしい。急に焦り出している。

その時、街の西の方で、また爆音が轟いた。さっきは北から爆音が聞こえてきて、それを合図にするかのように蟹達が動き出した。

まさか……とは思うが、私もここを塞いでいなければならない。こうなると知っていたなら、街から角笛の音が聞こえてきたあの時に空から偵察していたのに……。

「あなた達には、他にも仲間がいるようですね……。察するに、東西南北から街を取り囲んでいるのでしょうか？」

私が問うと、後ろの方で控えていた二匹の巨大な赤い蟹——テツペキという蟹の副将と思われる——がのそのそと歩いてきて……

「わはははは！」

嘲笑い出した。

「誠にそれにありけり！　さすがはベルキュロス、他のモンスターに比べ、知能の水準が高いわい」

「おおともよ！　だが、人間の犬になるとは堕^おちたものよ！　そこらにおる豚の如き！」

「さあ来いベルキュロス！　我らと共に人間を駆逐するぞよ！　そ

れともここで死ぬか!？」

「私は人間とモンスターが共に生きていけるような世界を望んでいるんだ!」

空気がビリビリと震撼^{しんかん}した。私は思わずそう叫んでいたのだ。辺りが一瞬、静まり返る。

「ぶっ」

誰かが急に吹き出した。それを起爆剤にして、笑いの嵐が巻き起こる。

「わはははは! 聞いたかお主ら?」

「人間とモンスターが共に生きていけるような世界を望んでいるんだ! などと申したぞ!？」

「ははっ! こやつ、阿呆にありけり!」

「阿呆にありけり! 阿呆にありけり!」

『人が憎いか?』

突然、耳を塞ぎたくなるような大声が轟いた。まさに雷鳴のような迫力だ。再び辺りが静けさに包まれる。

「そうだ! 憎い!」

テツペキの副将が叫び返した。

『確かに人間は身勝手だぜ』

「おお! 同志よ! そなたはどこにおる!? 姿を見せよ!」

『自分で言うのも何だが、わしも人間は憎い』

「同志よ！　我らと共に歩もう！　そなたはどこだ？」

『だけどな、わりい奴らばかりじゃねえんだ』

この声……もしや……。

「わしはここだ！」

突然、壊れた門の上から銃声がした。慌てて上を見上げる。

「き、貴様！　人間であるか！？」

副将が驚いたように声を上げる。

「そうだ！　わしは人間だ！」

そこには、日の光を浴びて銀色に輝いているケイがいた。右手に白いボウガンを持ち、左手で法螺貝ほらがいのような形をしたものを口に当てている。その貝で声量を増やしているようだ。

「貴様！　なぜ我らの言葉が分かる？」

「そんなもん知るか！　とにかく、お前ら！　よくもアトラスを馬鹿にしゃがったな？」

「アトラスとはこのベルキュロスか！？　けっ、こやつはな……」

「アトラス！　飛べ！」

ケイが副将の言葉を遮って叫んだ。私はケイを信じ、門の前から飛び上がる。

「わははは！　観念したか！」

「ちげえよ、蟹！」

その途端、ケイが法螺貝のようなものを置いてボウガンを構えた。すると、連続して銃声が轟いた。ケイの持つボウガンが火を吹き、拡散する金属片が多段に繰り出されていく。あれは、散弾という広範囲に広がる弾丸を連射しているのだ。

私は空を飛んでいるので当たりはしないが、下にいる蟹達には、雨あられのように降り注いでいる。

「いてててっ！　全員、防御体勢をとれ！」

蟹達が、大きな爪と硬い甲殻や背負っているヤドを駆使して、身を縮めた。蟹達はああやって硬い部分だけを外に向けて身を守ることでできるらしい。ケイの撃つ散弾は、全て硬い外殻に弾かれ始めた。

「おっしゃ！ それを待ってたんだ！」

ケイが銃撃をやめ、腰のポーチから何十個もの球体を取り出した。拳ほどの大きさのそれは、バラバラと落下して、蟹達の体や地面に激突し……

キュイイイイン！

耳をつんざく甲高い高音が、辺り一面に響き渡った。

「うっ！」

すると、蟹達は皆、酔っぱらったかのようにフラフラとよろめき、ボタンと地に倒れ込んだ。

「イエーイ！ お前ら、音には弱いからな！」

ケイはそう言ってボウガンの弾を入れ換えている。

「テメェら、これで眠ってな！」

ケイが動けない蟹達に向かって、何かを連射し始めた。地面に大きめの弾丸が転がり、白い煙が吹き出している。

「ケイ？」

「大丈夫だ！ 睡眠ガスで眠っててもらうだけだ」

私はケイのいる門の上まで下降した。

「何が起きているんですか？」

私が訊くと、ケイは深刻そうな顔で説明し始めた。

第21章 アトラス参戦（後書き）

さてさて、戦も佳境に……。街へモンスターの侵入を許した迎撃部隊。ジュンシャン、クリンチ、テツペキが戦闘不能となった猿蟹連合軍……。果たして勝利の女神はどちらに微笑むのか……。 （ハ－ハ）
／ではではアデュー

第22章 少女と砦蟹

第22章 少女と砦蟹^{とりでがに}

氷氷氷氷ラルバ氷氷氷氷

「うおりゃあああっ！」

「ゴアアアッ！」

南門には市民達の姿は見当たらなくなっていた。先ほど、北門から伝令がやってきて、市民は東門へ逃げるようにとの指示があったのだ。

「てりゃあああっ！」

しかし、南門には数人だけ人が残っていた。松田という腰の曲がった老人と、脳に障害がある大男、ブラスだ。そして、もう一人、黄金に輝く猛獣と戦っている人物……ラルバ。

「何という戦いじゃ……あの普通ではないラージャンに……ラルバにも何が起こっているのじゃ……」

物陰に隠れて戦いを見守っている松田が、信じられないといった顔で呟く。

「ラ、ラルバ……」

ブラスも、体を恐怖に震わせながら戦いを見つめている。

ラルバが、怒り狂うラージャンの右脇をすれ違いざまに切りつけた。それに反応して、ラージャンも無理やり体を反転させ、ラルバに向き直る。

「ゴアアアアッ！」

ラージャンが一旦跳びすさり、空中高くまでジャンプした。そして、体を丸め、激しく回転しながらラルバに向かって落ちてくる。

「ちっ」

ラルバが舌打ちして、その着地点から転がり出た。

「グオオオオアッ！」

直後に、重力と回転の遠心力で加速落下してきたラージャンの巨体が地面に衝突する。あまりの衝撃に地が揺れ、落下地点に電流が走った。

ラージャンは衝撃を背中で受け、地面にぶつかった瞬間、体をバネのように弾ますことで恐ろしいほど大きい衝撃を殺していた。

「うりゃあああ！」

しかし、ラルバは怯むことなくラージャンの背後に駆け寄り、両手に持っている二つの小斧で攻撃し始める。体が赤い光で包まれ、目にも止まらぬ速度で刃が舞った。

気が全身を覆って、格段に身体能力が上がる“鬼人化”状態にあるのだ。鬼人化は、厳しい修行の果てに、“気”を操れるようになった者のみが体得できる妙技だ。

右へ左へ、左へ右へ、赤銅色の刃がラージャンの後ろ足をズタズタに切り裂き、血しぶきが飛ぶ。

「グオオオオ！」

しかし、ラージャンも黙って切られているにとどまらない。タメをつけて、一気に体を回転させた。そのコマのような回転にラルバが巻き込まれ、吹き飛ぶ。

「ラルバ！？！」

ブラスが思わず叫んで、物陰から飛び出そうとしたのを松田が押し止める。

「待つんじゃ！ あんな戦いに巻き込まれば、命は無いぞ！」

ブラスは涙目になりながら、地面に座り込んだ。握られた拳が、プルプルと震えている。

「辛抱じゃ……待つのは……」

松田は優しくブラスに声をかけた。だが、心の中はラルバを助きたい気持ちで溢れ返っていた。

☆☆☆☆ミライ☆☆☆☆

「ミャー！ リーダーさん！ ドスギアノスが逃げていくニャー！」

「くそっ！ 今は仕方ない。こっちの蟹を抑えるのが先だ！」

俺は南門へ向かう途中で、ショウグンギザミやガミザミと戦っているリーダー達に遭遇した。いつの間にか、海賊姿の猫までこちらの味方として参戦している。この海賊猫軍団は、昨晚、俺達が東門を出るときに見かけた怪しげな集団だった。

話を聞くと、この猫達は西門から街の外へ出ようとして、侵入してきた青い蟹の大群と出くわしたらしい。それで、街を守るために応戦してくれていたのだ。

だが、直立二足歩行の猫五十匹と、鋭い鎌を振り回す巨大蟹の大群とでは戦力差があり過ぎ、押されていた。

だとしても、この猫達はよく鍛えられていて、確実に蟹達の足止め役をこなしていた。それがなければ、今頃東門へ向かっている市民達は全滅していただろう。

「リーダー、頑張ってくれ！ 俺は引き続き南門へ向かう！」

「分かった！ 気をつけて行けよ！」

ここでリーダー達を援護していたいが、ルナーの真剣な眼差しを思い出して再び俺は走り出す。

ΦΦΦルナーΦΦΦ

私は北門の戦場跡で、大きなピンク色のゴリラの亡骸^{なきがら}を見つけた。
「このババコンガが、モンスター軍のリーダーだとか言われていた子かな……」

私はミライと別れた後、静まり返った北門前の戦場を歩き回り、亡くなった人やモンスターに祈りを捧げていた。

「アトラスの言う通り、人とモンスターが戦わなくてもいい日があればいいのに……」

私はポツリと呟いて、ババコンガの見開かれた目を、手でゆっくりと閉じた。これがせめてもの償いだろう……。

焦げた臭いや、血の臭いが辺りに充満している。

私は、巨大な青銅色^{ブロンズ}の蟹に、ゆっくりと近づいていった。まさに岩壁が横たわっているかのようだ。

「大きい！ でも、シノカミには負けるよね……」

私はそう言って、蟹の巨大な足を撫でた。成長してきた長い年月の積み重ねを感じる。

「足を怪我したんだね……痛かったのかな……」

私がそう独り言を言っている……

「いくたかったな」

突然低い声が轟いた。てっきり、蟹は死んでいると思っていた私は、心臓が口から飛び出るかと思うほど驚いた。

「きゃあああああっ！」

「わーっはっはっはー！ そんなにびくびくしたあーね」
バクバクと跳ねる心臓を鎮めようと、胸に両手を重ね合わせる。

蟹はそんな私を見て、また笑い出した。

「わいの名はな、^{ジュンシャン}巡山って言うんだ」

「私はルナーよ。あなたも私の言葉が分かるのね」

シエンガオレンのジュンシャンは、すっかり私に気を許していた。
「最初、お前はくんがひとり出てきた時にゃ、どーやって踏み
つゝけたらうかと思うとってんやな〜」

「わわっ……で、でも、どうしてやめたの？」

殺されそうだったことを知り、冷や汗が背中を伝っていった。

「お前はくんが、死んだやゝつらみくんなお祈りしとったかゝ
らやな〜。それに、何でゝか突然お前はくんの独りごとが分か
るようになったかゝらな〜」

私はジュンシャンの、のんびりした低い声に心地よさを覚えて、
彼の顔に寄りかかって座った。

「わいは人間がゝ憎うてたまらゝんのやけんども、こゝんなやゝつ
さしゝいお婆はくんがいゝると知ったら……」

「今、何て言ったの？」

思わず、ピクツと眉が痙攣した。

「ほえゝ？ おっばはくんがいと……」

私は顔が真っ赤になるのを感じた。

「私はまだ子供ですう！ 女の人に『おっばはくん』なんて言うの
は、無礼千万よ！」

「ありまゝ、こりやゝ失礼ゝ。“ババア”の方がゝ良かったゝかゝ
「こらあゝ！」」

私は、ジュンシャンの顔から伸びている、長い触角を思いつきり
引っ張った。かなり太く、手でやゝと掴めるほどの太さだ。

「ぴぎよゝ！ いたい、いたい！ 悪かったゝてやゝ！」

どうやら触角はデリケートな部分らしく、離れた後もピクピクと
震えている。

「そんなゝとこ攻撃さゝれたこゝと、はゝじめてやゝ」

私の攻撃から解放されたジュンシャンが、安堵したように言った。

「ねえ、ジュンシャン」

「ひよっ！ 何でゝすかなゝ？」

私が呼び掛けると、ジュンシャンはピクツと私から触角を遠ざけ

た。

「ジュンシャンはこの戦い、止められる？」

私はジュンシャンの大きな目を見据えて尋ねた。すると、私の真剣な眼差しに気づいたのか、ジュンシャンは急に黙り込んだ。そして、間を置いて答える。

「今なら、止めた〜いと思うわな〜」

ジュンシャンの声は真面目だった。

「人間〜にも、ルナーは〜んみたいなのがいる〜って知った〜かな〜。クリンチは〜んが死んだ時に〜も、青〜い髪の色ぐろ〜いジジイがお祈りしとった〜からな〜」

ジュンシャンが長い爪を持ち上げて、桃色の毛のババコンガを指差す。青い髪に色黒って……ケイのことだ！ と直感する。

「じゃあ、私を乗せて街の西側を通って南門へ向かって！ 何かがそこで起こってるの！」

私はジュンシャンに向かって頭を下げた。

「お願い！」

すると、ジュンシャンは悲しげな声で答えた。

「そうした〜いのはヤマヤマな〜んだがな〜。動け〜ないんだな〜」

「……そうだよな……足を怪我してるんだよね……ごめんなさい……」

私は申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

「い〜やい〜や、足は〜何と〜かなるんやが〜、背負うと〜るヤドに〜な、な〜んか刺さつと〜るんやな〜。見て〜くれや〜？」

「刺さってる？」

私は駆け足でジュンシャンから離れた。近過ぎると、背負われている骨が見えないからだ。

私は充分距離をとると、ジュンシャンの方に向き直り、ヤドに目をやった。

「あー、確かに……」

ジュンシャンのヤドには、バリスタ用拘束弾という特殊な槍が刺

さっていた。

檣には頑丈なチェーンが付いていて、そこから延びているチェーンが、北門の砦の丈夫な柱に巻き付けられていた。

確かにあれでは立てない。立とうとしても、チェーンに引っ張られて、もんどり打って転ぶだけだ。

「ヤドを脱げば？」

私は思いきった提案を試みた。すると……

「ぴぎょー！ 嫌じゃー！ 蟹にーとってヤドを無くくすことは、一番の恥ー」

「なんで？」

「ぐぬっ……ヤドは……ヤドはーまさーに、漠^{むく}のふんどーし！」

「わー！ 分かりやすい！ 女性にとっては？」

「知らーぬ！ どっちにしてーも、ヤドはー命！ 壊れたらーすぐ取り替えーる」

「でも私、こんな太いチェーン壊せないし、あんなギチギチに巻いてあったらほどこけないよー」

私は万策尽きて、涙が溢れてきた。やり場のないもどかしさや、悔しさに堪えない。

ジュンシヤンは、甲殻種の蟹独特の黒い無機質な瞳で私をじっと見つめていた。

「ぐぬぬぬぬ！ 是非に及ばずっ！」

「えっ！？」

ジュンシヤンが突然ヤドを地面につけた。超重量の物体が急に落ちてきたせいで、土煙が舞い、地震のような衝撃が地を駆け巡った。

「わあっ！」

あまりの迫力に、つい悲鳴を上げてしまう。

ジュンシヤンがヤドを地につけたまま身体を揺すり出した。軋むような音が、ひっきりなしに轟く。そして、『ガコン』という鈍い音がして、ジュンシヤンの背負っていた頭蓋骨が外れた。

「わっ……」

私は自由になったジュンシャンを見て、口をあんぐりと開けた。ジュンシャンの背甲には、頭蓋骨を引っ掛けるための情けない突起がついていた。情けないというのは、それが人間の赤ん坊の親指のように弱々しく、不恰好に見えるからだ。

「ジュンシャン……」

ジュンシャンが、地平線に向かって沈んでいく陽の光を浴びて、ゆつくりと立ち上がった。ジュンシャンが足を動かすたびに、その重量のせいで地震が起きたかのように辺りが揺れる。

確かに、自慢できるようなかつこのいい姿とは言えなくなっていた。

「ありがとう……」

「むん！ 気にするでなく！ 友のためには、こゝれくらゐ何でゝもない！」 ジュンシャンが長い爪をゆつくりと差し出した。

「捕まゝれ！ 心優しゝき人のゝ乙女ゝよ」おとめ

私はジュンシャンの金属的な爪にがっしりと掴まる。そして、そのままジュンシャンの頭上まで運ばれた。そこは少しスペースが空いていて、私なら座れそうだった。

「良いか？」

ジュンシャンがのんびりと訊いてきた。

「うん」

私は、ジュンシャンの頭の真上に座り込み、落ちないようにジュンシャンの二本の触角を掴んだ。

「ひ、引っ張ゝるなやゝ？」

ビクッと触角が震える。

「大丈夫！」

私はジュンシャンに向かって叫んだ。それで安心したのか、ジュンシャンは負傷した右前足を庇って歩き出した。

「うう、背中ゝがさかしいゝ」

「ジュンシャン……」

私は苦笑いしていた。ジュンシャンは私のために自分のプライドを捨ててくれている。ありがたい気持ちと申し訳なさでいっぱいだった。

「わい、友のたゝめにふんどゝしを取ゝりにけゝり！」

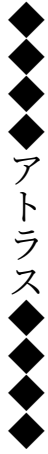
ジュンシャンは高らかに叫んだ。

「ジュンシャン、恥ずかしいよゝ！」

私は大声でそんなことを言っているジュンシャンに、こそこそと呟いた。

「ほえゝ？ どうせ人間には、わいのこゝとばなんぞ分からゝんやろゝ」

ジュンシャンは西から街を迂回するために、ゆつくりと一定のペースで歩いた。



『わい、友のたゝめにふんどゝしを取ゝりにけゝり！』

私がケイを背に乘せて、東門へ逃げてきた市民達を空から見守っている、そんな言葉が風に乗ってやってきた。

「ケ、ケイこれ……」

「ん？ アトラスどした？」

どうやらケイには聞こえていなかったらしい。

「い、いえ……」

と、ごまかしたものの、とても胸騒ぎがする言葉だった。

「お、そろそろ市民の先頭が東門に着くな。アトラスは降りたら隠れとけよ?」

「はい」

ひとまず、さっきのは聞かなかったことにした。

第22章 少女と砦蟹（後書き）

コラボについて何ですが、もう少し後になります……すいません
m ((m

シナリオも考えなくちゃいけないので……（――；）

さてさて、突然ですが問題を出します！！ww この小説の中から
テキトーに出します。暇潰しにもならないくだらんモノですが、
まあ解く気になったら是非ww

Q1…砂漠の貿易都市“ラクシャリ”で、レイザーは物語の中で何
回発砲したでしょうか？

Q2…アトラスが沼地で捕まる直前にお腹が鳴った時、それをから
かった生き物は……？

ではではアデュー（＾ー＾）／

挿話1：雪は白く舞い、青空に虹は輝くとも（前書き）

ゲホゲホ……どうもお久しぶりでさあゝ　　^^；

先日、豚インフルが発病して40度の高熱にうなされていた金剛石です。見えましたよ……花園が……

渡りそうでしたよ……三途の川を……

とまあ、ちよつと元気になったんで話を載せます。

挿話1…雪は白く舞い、青空に虹は輝くとも

挿話1…雪は白く舞い、青空に虹は輝くとも

「雪山地帯のとある村で」

「うわっ、ルーク！ ちょっとこれ、見てみなさいよ」

「んあっ？ どうしたってんだ？」

小さな雪がしんと舞い降りていく中、厚いコートを着た一組の男女が路傍ろぼうの掲示板に見入っていた。

太陽は分厚い雲に覆い隠され、淡い白光はつこうだけが弱々しく大地を照らしている。その微かな光が、舞う小雪を宝石のように輝かせていた。

二人が覗き込んでいるのは、先ほど張り出された緊急連絡用の黄色い紙だ。

“ミナガルデ新聞北部支所より 緊急連絡

雪山地帯最大の集落、ポツケ村が、山崩れにより消滅。なお、その周辺地域でも引き続き小さな地震が確認されている。

つい最近になり、急な山崩れによる集落の壊滅が跡を絶たない。今回のポツケ村を含め、雪山地帯での集落壊滅は六件目。集落が無いところでも頻繁に地震・山崩れが発生している。今までの死傷者は三百人を超え、行方不明者も五十人近く出ている。この事件の原因は単なる自然の営みなのだろうか。”

「またか……」

ルークと呼ばれた二枚目の顔立ちの男が、呆然と紙を見つめながらため息をついた。

「今までにこんなにも山崩れが頻発するようなことってあったのかな？」

女が首をかしげて呟く。そのせいで、彼女の被っている帽子が少しずれた。

「さあな。クレア、ひとまず俺達もポケ村の様子を見に行こう。生き残ってる人がいるかもしれない」

「ええ……」

クレアという名の彼女は、その美しい顔を憂いに歪ませていた。

「俺は万が一モンスターがいた時のために装備を着けてくるけど……クレアはどうする？」

「私もそうするわ」

二人は寒さに身を震わせながら、自分達の家に向かって歩き出した。相当気温が低いのか、家の外に出ている人間はこの二人以外見当たらなかった。

「山崩れの頻発か……嫌な予感がするな……」

ルークがふうと白い息を吐き出した。

「熱帯地方、上空三千メートル」

海のように青く、広い空。どんな青よりも美しいその熱帯地方の青空に、巨大な人工物が浮かんでいる。それは気球だった。人や貨物を乗せた大きな建物のような部分を、これまた大きな四つの気囊きのうが支えている。まさしく青空に浮かぶ船だった。

「現在アルタミラ密林上空約三千メートルを航行中。風は依然として南から北へ吹いています」

気球の建物の一角にある操縦室に、報告員の声が響き渡った。

「うむ。乗員や客に異常はないか？」

俺はその報告に対して問い返した。

「乗員には異常はありませんが……一般のお客様の中には、この高度での環境に慣れていない方も……」

「そうか。まあ、体調管理はしっかりするようにっておけ」

俺はこの気球、【スカイドリフター号】の船長だ。俺が乗る船で事故などは起こさせはしない。

「修理班、船体に傷などはなかったか？」

「へい！ ばっちり無傷でしたぜ！」

坊主頭にねじり鉢巻をしたいかつい男が、自分の厚い胸板を叩いて答えた。修理班の班長だ。

「上出来だ。空の旅はまだまだ続く。野郎共、氣い抜くんじゃねえぞ！」

俺は回りにいる部下達を見回して発破をかけた。

「サーイエッサー、船長！」

部下達が一斉に呼応した。

スカイドリフター号の食堂にて

「いやーうめえなあ」

食堂の窓際の席で、一人の男がステーキをがつと食っていた。「保存食でもこんな旨いもんに変えられるんだから、やっぱ料理人はすげえよな」

男は満足そうな表情をして、水の入っているコップに手を伸ばす。その時だ。

「わあっ！」

走ってきた幼い子供が、男の座っていた席のテーブルに肘をぶつけて転んだのだ。がしゃんという耳障りな音を立てて、テーブルの上の料理が跳ねた。水の入っているコップは、床に落ちて砕け、中身をぶちまける。

「おい、大丈夫か」

男が慌てて転んだ子供に駆け寄る。

「いたたた……あつ、ごめんなさい！」

子供が肘を庇いながら立ち上がり、謝罪する。幼い少女だった。

「なくに、気にすんな。食い物なんて、口に入ればどれも同じだ」

男は気前良く微笑んで、テーブルの上に散らばった野菜をつまんで口に放った。

「で、でも……ごめんなさい」

罪悪感からか、少女はうつむいてもじもじとしている。

「お嬢さんの名前は何つーんだ？」

場の雰囲気을柔らかくしようとしても思ったのか、男は自己紹介を始める。

「俺はウルカつーんだ。駆け出しのハンターをやってるんだぜ？」

「ハンター……？」

「おう。カッコいいだろ？ 武器とか防具は部屋に置いてあるから見せれないけどな」

「へえ……カッコいいね！」

「そうだろ？」

男が自慢気に胸を反らす。そうこうしていると……

「こら、ミーナ！ 勝手にどっかに行くんじゃないよ！」

どうやら少女の母親がやって来たようだ。怒っているのが目に見える分かる。

「きゃっ！ ママ！」

少女が軽く悲鳴を上げる。逃げようとしたのだが、母親に素早く襟首を捕まれて失敗したのだ。

「まあ！ 他のお客様にまでご迷惑をおかけして……すみません、うちの馬鹿娘が……」

母親が男にペコペコと頭を下げて、謝罪の言葉を並べ立てている。「あゝ、別に気にしてないっすよ。活発なのはいいことですし……。片付けも俺がやっとかんで……」

ウルカと名乗った男は、苦笑いしながら、謝り続ける母親を制して言った。

「すみません」

母親は最後にそう残して、少女を連れて去っていった。

ウルカは床に落ちて砕けたコップの欠片かけらを一つの皿に集め、テーブルの上も綺麗に拭いていた。

「ママ？ 虹が出てるよ？」

その声に釣られて、ウルカは顔を上げた。声の主は先ほどの少女だった。

「ほんとだな……」

ウルカは、一面がガラス張りにされていて、外の景色が楽しめるように作られている食堂の展望窓から外を見た。

そこには、空の中に虹の橋が架かっていた。

「綺麗だな……」

ウルカがそう呟いた途端、突然大きな衝撃がスカイドリフター号を襲った。

（スカイドリフター号、操縦室）

「船長、右舷に虹が出てますぜ」

操縦士の一人が、コーヒーを飲んでいる俺に報告する。

俺は右舷側の窓辺に歩み寄り、外に目をやった。そこには、七色に輝く美しい虹が出ていた。

「ほう。こりゃ驚いた。雨が降らなかったのに虹が出るなんてな…

…」

「幸先あきさきがいつすね、船長」

副船長が俺の隣にやって来て言った。

俺がしばらく虹を眺めてくつろいでいると、気球が急にガクンと揺れ動いた。

「何だ!？」

コーヒーカップが手から滑り落ち、音を立てて砕け散る。

キイイイイン……キイイイイン……キイイイイン

非常事態を知らせる警笛が、甲高い音で鳴り出した。不吉なその警笛の音に、不安が頭をよぎる。

俺は慌てて伝声管に駆け寄った。今の衝撃で、船体が微妙に傾いている。

「各員、持ち場の状態を伝えろ!」

緊迫した空気が流れる中、しばらく待っていると、信じられない情報が次々と入ってきた。

——こちら右舷プロペラ。プロペラが動きを停止していて、火を吹いています! 何かが絡まっているような感じですが……何も見えません!

——こちらは左舷プロペラ。右舷プロペラと同等な状態です!

「何だと? プロペラに物が絡まっているのか?」

俺は訳がわからず叫び返す。すると、次の情報が入ってきた。

——こちらメインマスト及び補助マスト。……こんなの信じられ

ません……マストが……マストがズタズタに切り裂かれています！
何が起こったのかさっぱり分かりません！

俺は耳を疑った。マストがズタズタだと？ どうすれば頑丈な繊維で縫い上げられたマストが切り裂けるのだ。鳥が刃物でもくわえてマストを破いていたとでも言うのか？

しかし、この後に入ってきた報告は更に信じ難いものだった。

——こちら浮遊力調整班です船長！ さっきから気嚢部分で浮力を調整している部下達に応答を要請していたんですが……返事がなく……駆けつけてみると……全員血を吐いて死んでいました！

「な、何だって！？」

伝声管からの報告を聞いていた者達がどよめいた。一体何があったと言うのだ？ 乗組員が吐血して死んでいるだど！？

——原因は全く分かりません！

……おいお前ら！ ひとまず浮力を取り戻すんだ！

キュオオオオオオオオ

その時、奇妙な音が辺りに響き渡った。それは笛から奏でられる、低く轟く柔らかな音色のようだった。

——何だ今のは？ ん……？ 虹……？

「どうした？ 虹がどうかしたのか？」

俺は嫌な予感がした。冷や汗がだらだらと背中を伝い降りていく。

——船長……虹が……虹が……うあああああああ！

悲痛な叫びを最後に、何かの液体が飛び散る不気味な音が伝わってきた。伝声管の向こうで、報告をしていた者が倒れる音がする。俺は震える手で額を押さえた。この船で一体何が起こっているのか、まったく分からなかった。

キョオオオオオオオオン

気味が悪いほど透き通った低音が、再び轟いた。まるで何かの生き物の鳴き声のようにも聞こえるそれは、俺達をあの世へ送り出す挽歌ばんかのように美しく、そして、恐ろしかった——

“ミナガルデ新聞南部支所より 号外”

飛行船スカイドリフター号が謎の墜落事故！？

先日、アルタミラを出発した客船兼貨物輸送船、スカイドリフタ

1号が謎の墜落事故を起こした。ギルドナイトが墜落現場に派遣され、調査を行った。気球の状態は凄惨なもので、船体には刃物で削られたような跡が無数にあり、マストや気囊は切り裂かれ、補助推進用のプロペラからも発火の跡が見られた。そして、不可解なのが、気囊部分で浮力調整をしていたと思われる乗組員が全員変死していることである。ある者は口から血を流し、ある者は目も当てられぬほど切り刻まれていた。

死者・行方不明者は乗っていた者全員と予想され、唯一の生存者であるウルカさん（名字割愛）はアルタミラ病院へ搬送された。ウルカさんは墜落事故による軽いショック状態にあるためか、しきりに『虹が……』と呟いており、墜落事故について質問できるようになるには、もう少し時間がかかると思われる。

本社一同より、墜落事故で失われた尊き命に、心からご冥福をお祈りして。

挿話1…雪は白く舞い、青空に虹は輝くとも（後書き）

今回の話では、千波先生の作品からルークとクレア、神月ラセ先生の作品からウルカを出演させていただきました。しかし、今回はあんまり活躍をさせることができませんでした……すいません>（――）

後ほどまたご登場して頂くので、その時はバンバン活躍してもらいますww

さて、前回の後書きでくだらない問題を載せたと思いますが、一応解答を載せます

Q1…砂漠の貿易都市“ラクシャリ”で、レイザーは物語の中で何回発砲したでしょうか？

A…5発。女（ブライマルの妻）とその子供2人に、それぞれ1発ずつと、ブライマルとの決闘シーンで1発。そして、ブパイマルの額に1発。決闘シーンのみペイント弾が使われ、それ以外の時では麻酔弾が使われていますぁゝゝゝ

Q2…アトラスが沼地で捕まる直前にお腹が鳴った時、それをからかった生き物は……？

A…カラス……ではないっす。2章でアトラスのお腹が鳴ったときに、「アホー」とカラスが鳴いて飛んでいった気がした……みたいなことを書いていますが、12章でそのカラスの鳴き声の元はクリンチであることが明かされています。分かりにくかったですかね……ゝゝゝゝ

ではこの辺で／

挿話2…ケイ・F・ネイチャーの真実 1

挿話2…ケイ・F・ネイチャーの真実 1

（南方の巨大貿易都市アルタミラ）

南方の夜は、じめじめとした不快な空気が充満していた。漆黒に染まった空には半月が昇っていて、神秘的な光を地上に降り注いでいる。

「ルル！ よく私の話を聞いて！」

俺は後ろから腕を掴まれ、無理やり振り向かせられる。目の前には、特徴的な青い髪を月明かりに浮かび上がらせている、自分と同じ年の少女がいた。

「こじきを助きたい気持ちはよく分かるわ。でもね、こじきは一人じゃ無いのよ!？」

彼女の名はユイ・アスカ。俺の頼りになる相棒だ。

「ルルはこじきみんなに恵んであげれるほど、たくさん物を持っている?」

ユイが俺に詰め寄ってきた。彼女が言わんとしていることは何となく分かっている。

「恵んでいるうちに、いずれ恵んであげるものは無くなるわ。でも、残りのこじき達はどう思う? 自分も恵んでもらえると思ってやって来て、もうあげるものがないです、なんてルルは言える?」

俺の相棒は頭がいい。俺が無茶しようとしたり、アホやらかそうとした時にはいつも止めに入ってくれる。

「言えっこないわ！　だって、ルルは優しいから！　でもあなたは何もできない！　ルルが恵んでくれないと知ったそのこじきは、期待して損した……と落胆するだけ……。そうになったら、また傷つくのはルルでしょう！？」

確かにそうだ。しかし、俺の性格上、可愛いそんな境遇にある奴はほっとけない。

「すまん。俺ってお節介だからさ……」

弁解するように言った。それを聞いたユイは、呆れたようにため息をつく。

「まあ、しょうがないわね……ルルは優しいから……」

「でもな、ここには一人しかこじきがない。あの人だけでも助けてやりたいんだ」

俺は木の根本で肘枕をして寝転がっている男を目で示す。その男は、ボロボロの布のようなものを体に掛け、黒い帽子を目深に被っていた。

ユイは何か言おうとしていたが、首を横に振って言葉の代わりに息を吐き出した。俺に言いたいことがあったのだろうが、言ってもどうせ意味はない。そう考えて諦めたようだ。

「仕方ないわ……。好きにすれば？」

彼女はぷいっとそっぽを向いた。どうやら、ゴーサインらしい。俺は早速寝転がっている男の所に歩み寄った。

「すいません。こんなので良かったら、食べてください」

俺は肩から掛けているバッグから干し肉を取り出し、男に差し出した。しかし、予想外の返事に俺は拍子抜けする。

「甘いな」

男はそう答えたのだ。夜だということもあり、帽子の陰になっている男の表情が見えない。それにしても、『甘いな』とは一体どう

いうことなのか。

「後ろ見てみる」

「えっ!？」

俺は男の言う通り、背後を振り返った。

「ルル!」

ユイが切羽詰まった声で呼び掛ける。俺は目を丸くした。そこには、不気味な笑みを浮かべたオヤジが、ユイの首筋にナイフを押し付けて佇んでいたのだ。

オヤジの頭は所々髪の毛が抜け落ちていて、目はギラギラと獲物を求める狼のように輝いている。頬はげっそりとこけおちており、薄汚い白い麻布の服を纏っていた。一目でこじきと分かる格好だ。

「だ、誰だお前!？ ユイを離せ!」

俺は慌てて掴みかかろうとする。しかし、オヤジは軽く身を引いてそれをかわし、ユイの喉に、いっそう強くナイフの刃を押し当てた。

「おおっと、あせんなや兄ちゃんよお。動くと、こいつの喉から赤い薔薇の花が咲くぜ?」

なんたる不覚……。暗くて辺りが見えないため、こいつが潜んでいたことに気づかなかったのだ。

ユイの白い首筋を、つうつと紅い液体が伝っていった。

「なあに、ちよいと腹が減ってな。金がいるんだよなあ」

オヤジが下卑た笑いを浮かべて俺の目を睨んできた。こんな状況では俺の馬鹿力も役に立たない。どうすればいいんだ……。

その時。

「目障りだ」

突然、俺の隣で寝転がっていた男が、上半身だけ体を起こした。いかにも面倒臭そうにオヤジを見つめている。

「ああ！？　なんだテメ……」

「目障りだって言ったんだよ」

暗闇の中に、空気をビリビリと震わすような銃声が、二発、連続で轟いた。

しばらくの間、時間が止まったかのように、誰も動こうとしなかった。そうするうちに、こだましていた銃声は聞こえなくなる。

「ユ、ユイ」

俺はハッとしてユイの手を引き、彼女を抱き寄せた。オヤジは目を見開いて硬直している。ナイフを持つ手が微かに震えていた。

俺がふと隣を見ると、半身だけ起き上がった男が、右手で金色の小銃を構えて、じっとオヤジのことを睨んでいた。銃口からは、月光を浴びた煙が青白く立ち上っている。

俺の目が正しく働いていたなら――暗くてよく見えないのもあるが――、この金色の小銃を構えている男が撃った二発の銃弾は、一発はオヤジの左頬を、もう一発はオヤジの右頬をそれぞれ掠めて飛んでいったように見えた。

もし、そうではないとしたなら、今、オヤジの両頬から流れ出てきている血はどうやって出てきたのだ、という話になる。

「これで今日は我慢するんだな」

発砲した男が、呆然としている俺から干し肉を引ったくり、オヤジの顔面に投げつけた。干し肉はオヤジの顔面に激突して落下する。我に返ったオヤジは、肉が地面に落ちる前にそれをキャッチすると、恐れおののきながら一目散に逃げ出した。

「おい、ナイフはもういらぬのか？」

男がオヤジの落としていったナイフを拾い上げて声を張り上げている。しかし、それを知ってオヤジが戻ってくるはずがないだろう。俺はそう思ったが、口には出さなかった。

「あの、本当にありがとうございました。何てお礼をすればいいか……」

ユイがペコリと男に頭を下げる。すると、この男はまた拍子抜けするような言葉を返してきた。

「何のことだ？」

俺は思わず『えっ？』と言いそうになるのをこらえる。ユイも、珍しくポカンとしたアホ面をしていた。

「俺はあそこのリンゴの木を狙ってただけだ」

男が、先ほど銃弾を撃った方向を指差す。その時、男が左目にすり切れた黒い眼帯をしているのが見えた。

俺とユイが男が示す先に視線を移すと、そこには月明かりにぼうつと浮かび上がっているナンゴクリンゴの木があった。熱帯地方でのみ育つ、特産品だ。

突然男が立ち上がり、その木に向かって歩き出した。俺達も慌てて彼に続いて走り出す。

リンゴの木の下には、真っ赤に熟れた赤いリンゴが二つ転がっていた。甘い果実の匂いがしてきて、唾液が溢れてくる。

「ひょっとしてこのリンゴ……」

「そうだ。俺がさっき撃ち落としたやつだ」

ユイの言葉を遮るようにして男が言った。肩をすくめて、しれっとそんなことを言うあたり、ほんとに撃ち落としたに違いない。

「すげえ……。さっきの所から三十メートルは離れてるってのに……あんな早撃ちで狙いをつけるなんて……」

感心している俺達をよそに、男は落ちているリンゴの一つを拾ってかじりついた。みずみずしい果実は、男が咀嚼するたびにシャリシャリと美味しそうな音を立てる。

男はリングを頬張りながら歩き出した。

「あっ、さっきは助けてくれて……」

去っていく男に、ユイは慌てて礼を言おうとするが……

「俺はリングが欲しかったただけだ。ウォッカがあればつまみにもしたけどな」

またもや遮られた。

男は寝転がっていた所に戻ると、帽子を被り直し、布団代わりに使っていた布——否、いなマントだ——を羽織った。

「一つ、聞きたいことがある」

男が木の下で突っ立っている俺達に向かって訊いてきた。夜で辺りが静かなせいか、大声を出さなくても難なく声が響いている。

「濁った青色の髪に、四十代の色黒の男を探しているんだが……名前はケイ・F・ネイチャーフアイヴという。知らないか？」

俺とユイはそろって顔を見合わせた。ケイ・F・ネイチャーと言えば、誰もが知っているあの人物以外に思い当たらない。当時のことを知る大人達は、皆彼のことを英雄として語っていたのだから。

「その人って、十五年前に“撃竜槍”げきりゅうそうを開発して、シュレイドから老山龍を撃退した人じゃないんですか？」

俺がそう聞き返した。

「確かに。だが、その五年後、彼は消息を絶った。しかも突然に、だ」

男が答える。しかし、それが一体どうしたというのだろうか。

「でもネイチャーは死んだんじゃないんですよね？」

ユイが横から口を挟んだ。ところが、それを聞いて俺は、おやっ？　と思った。

「それは違うだろ。ネイチャーは峡谷地帯にある集落で病死したはずだ」

「えっ？　私が聞いた話では、旅人に化けて各地を放浪していることになっているけど……」

そこで男の声が割り込んできた。

「確かに、ケイの噂については諸説ある。火山でラージャンと戦っている最中に、溶岩に足をつっ込んで蒸発した、だの、ドキドキノコをかじって頭がおかしくなり、奇声を上げながら山の中に走っていった帰ってこなかった、だの。ひどいものでは、クイーンランゴスタの元に婿入りして、そこで幸せに暮らしました。めでたしめでたし……などというものである始末だ」

俺は頭にクイーンランゴスタ——人の大きさの五倍はある巨大な女王蜂——を思い浮かべ、慌ててその絵を掻き消した。あんなものが嫁になるなど、想像したくもない。どこがおめでたいと言うのだ。「ひとまず……まともな説はほとんど無いんですね……」

ユイが苦笑いしながら言った。確かに、今の説では十五年前にシユレイドを救った英雄の面影はまったく感じられない。

「ただし！」

突然男が叫んだ。

「信憑性が非常に高い情報が、たった二つある」

「二つ？」

俺とユイが同時に聞き返した。

「ああ。……しかし、もしそれら二つがどちらも真実であるなら……世の中の常識は引っくり返ることになる」

俺は身体全体に鳥肌が立つのを感じた。世の中の常識が引っくり返る！？ 訳が分からない……。

今日初めて会ったこの男。その男の話を疑うこともせずに聞いている自分がある……。それは、ひとえにこの男が嘘一つ交えずに話しているからだ。そう俺は思った。

「これは俺が認める情報だ。情報一、十年前、ケイ・F・ネイチャーは峡谷の“ベルキュロス討伐”に行き、“戦死”した」

隣でユイがゴクリと唾を飲み込むのが分かった。暗雲が出てきたのか、月の光が覆い隠され、男の姿が見えなくなる。

何も見えない暗闇の中、男の声だけが不気味にこだまする。

「だが、こちらの情報も認めていいと俺は判断した。情報二、一週間前シュレイドで起きた大事件、“猿蟹大合戦”で、ベルキュロスに跨またがって戦場を翔かけた勇者の名は……ケイ・F・ネイチャーである」

ベルキュロスの勇者！ 噂では聞いていたが……

そこで俺の背中に冷たい汗が流れた。

ちよつと待て、でもその情報二とやらは情報一と矛盾していないか！？ なぜ十年前に死んだ人間が一週間前の大事件で名を上げているんだ！？

「もう一度言う」

目の前がくらくらと歪んで見えてきた。隣にいるユイは、訳が分からないという顔をしている。確かにつじつまが合わない。

「情報一も、情報二も、俺自身が、真実性を認める。疑り深いこの俺が、だ」

男はわざとゆっくり言葉を発した。相変わらず声音は真面目なままで、微塵もふざけている様子が感じられない。

「つまり、情報一が正しく、情報二もまた正しいのなら——」

雲が途切れたのか、再び青白い月光が地に注ぎ込まれてきた。

「——ケイ・F・ネイチャーというまったくの同一人物が——」

マントの男の姿が月明かりの中で陽炎かげろうのように揺らめいている。

「——この世に——」

頭上から、何かがりんごの木の葉を掻き分けて落ちてくる音がした。それはこの不可解な物語を引き立てるのに充分な役目を果たした。

「——二人存在していたことになる!——」

俺とユイの間に、熟れすぎたりんごが落ちてきて、それは音もなくコロコロと転がっていった——

挿話2…ケイ・F・ネイチャーの真実 1（後書き）

あゝ……ルルとユイが傍観者に……。FAM先生すみません。つぎの登場で活躍しますから……。m（　　）m
実は今話、けっこうキーポイントだったり……。って読めば分かりますかww

ではでは（　　）

挿話3：誓いの証（前書き）

今回は短編で、あるお方の小説の宣伝も兼ねています。詳しくは後書きで

ではでは（＾－＾）／

挿話3：誓いの証

挿話3：誓いの証

「夜 草原の星空を見上げつつ」

「なあ、こんな話を知ってるか？」

空は深い紺色に、ダイヤモンドのようなキラキラと光る宝石を身に纏っている。涼やかな風が、仰向きに寝転がっている俺の頬をそつと撫でた。寒くもなく、暑くもない。それでいて、不思議な心地よさが見も心も包んでいる。それが、草原に仰向きになって夜空を見上げる感覚だった。

「あるところに独りの少年がいた。彼は孤児だった。生まれて間もなくして、親と引き離されたのさ。お前と同じようにな……」

俺は瞬く星の一つをじっと睨んでいた。虫の鳴き声が、辺りに小さく癒しの音楽を響かせている。はかなく、小さな鈴のような音色は、一定の間隔でリーン……リーンと繰り返し奏でられた。

「その少年は、特別な組織の中で育てられた。その組織は、政府公認の暗殺機関……。彼は、命令であるならどんな人間を殺しても、何とも思わない殺し屋になった。まさに血も涙も無いような……」

俺はふっと隣を見た。さっきから俺に語りかけている人物が、黒

い影となって寝転がっている。俺と同じように、仰向きに星空を眺めつつ。

「殺し屋となって数年、理由があって少年はその組織から距離をとり、一隻の船に身を寄せた。その船の船長の趣^{おもむき}で、少年のような訳^{やから}ありの輩^{やから}がわんさと集められた船だ」

再び空に視線を戻すと、少し高いところをいくつかの黄緑色の淡い光が踊っていた。

ホタル
蛍だ。

彼らの命の灯火^{ともしび}は、その後ろに広がる藍の大海の中で、弱々しくも美しく、星よりも柔らかに輝いている。

「少年はその船で暮らすうちに……大切なことを学んだのかもしれない。何かが彼を変えたんだ。船長と出会い、仲間と出会い、敵と出会い……数々の戦いや平和な日々、苦労や喜びを経て彼は何かを学んだんだ……」

俺は黙って男の言葉に耳を傾け続ける。なぜか胸が苦しくなり、目頭が熱くなってきた。

「彼は孤独だった。組織に入っていたとはいえ、真の友達がいた訳でも、悩みを何でも明かせる人がいたわけじゃない。彼は、その船で人生で二度目のスタートを切った。再出航したんだ」

空の星々が、ゆらゆらと霞んでいき、紺色と混ざり合ってぐちゃぐちゃになる。目の端から、暑い液体が皮膚を伝ってこぼれ出ていった。

「彼は今、不幸ではない。むしろ幸せなのではないだろうか……。彼は今日も船の上で暮らす。色々な仲間に囲まれて……。彼はもう独りじゃない……」

俺は嗚咽をこらえながら、語り手の男に問うた。泣いているせいで声がかすれる。

「俺も……独りじゃないのか……?」

しばらく沈黙が続く。虫の鈴のような音色は、その静けさを逆に引き立てていた。

「ああ……お前も独りじゃねえ。……俺がついてるだろう?」

男が顔だけをこちらに向けて、ニッと笑った。そして、男は続ける。

「お前は自分の信じる道を進めばいい……」

俺は右腕の服の袖で涙を拭い、震える声で言った。それは俺の決意の言葉だった。

「俺は……ガンマンになる……。世界一強えガンマンになって……悪人達を葬るんだ!」

それを聞いた男がくつくつと笑った。

「世界一のガンマンか……。ガキが言うじゃねえか……。でもよ、簡単じゃねえぞ、それは」

男の言葉に俺は頷く。蛍がフワフワとワルツを踊っているかのよう
に飛んでいった。

「確かに……でも俺は絶対なつてやる……悪人共をやっつけるんだ
！」

俺の叫びが夜空にこだました。それはしばらく、エコーがかかった
かのように響いていた。

「……分かった。じゃ、これをお前にやる」

男が急に立ち上がり、俺の隣に何かを置いた。そして、ゆっくり
と歩き始める。

俺は上半身だけを起こし、隣に置いてあるものを手にとった。そこ
には、微妙に銃身に熱を持った漆黒のボウガンに、星明かりに煌
めく金色の小型銃が置いてあった。

「その黒いボウガンは、ラヴァシュトロームっていう名だ。俺のお
気に入りライトボウガンさ。そして、金の小銃は……」

そこで男が立ち止まって一呼吸した。そして、俺の方を振り向く。
顔の表情は暗くてよく見えなかった。が、男がニヤリと微笑んだの
を感じ取った。

「金の小銃は、俺の宝だ。テメエが世界一のガンマンになって……
もしどこかで俺と会ったなら……」

俺は金の小銃を右手で真上に掲げ、立ち上がった。夜の闇の中に、
金色の光が一筋、光を投げ掛ける。

「そんな時に俺に返せ。それはお前の誓いの証であり……お前が独りじゃねえことを表す象徴だ」

そう言い終えると、男は再び背を向けて歩き出した。だんだんと男の姿が小さくなってゆく。星明かりに照らされ、男と俺は別れた。俺は男が向かった方とは逆の向きに歩き出した。新たな決意を胸に秘めて……。

「じゃあな……」

背後の彼方から、男の声が聞こえてきた。振り返って見てみるが、その姿はもう見えない。

「いつかまた会う日まで……アウストラティック・レイザー！」

〴とある森の丘で〵

「……眠っていたか」

一人の男が木の幹から体を起こした。全身に古びた服を身に纏っている。ボロいマントにボロいシルクハット……言い出したらきりがない。

「懐かしい夢を見た」

男は空を見上げてポツリと呟いた。

そこには青空が広がっていて、地平線の果てにある巨大な入道雲が日光を浴びて真っ白に輝いているところだった。

その男は右腰のホルダーから、金の小銃を取り出し、銃口を空に向けた。そして、彼はそっと右目をつぶった。左目は黒い眼帯で覆

い隠されている。

森の中に、静かな銃声が一発、響き渡った。それはどこか物悲しい音色でこだましていた。

挿話3：誓いの証（後書き）

今回紹介するのは……抱腹絶倒、爆笑コメディ時々シリアスの大作、「カタクロフト」でさあ（、▽、）

これは全くのオリジナル小説にして、コメディ作品の部などにおいて知る人ぞ知る名作！ 毎週水曜一話更新という安定かつ、読者を待ち遠しさに狂わせる妙計！ 皆さんにもあると思います。週一回あるお気に入りのアニメ……今か今かその日を待ちわび、見逃したときにはチツと舌打ちする……そんな時代を彷彿とさせてくれますww しかも小説だから見逃すことはないww

そのあなたも、「小説を読もう！」で「カタクロフト」と検索すべし！

この大作の作者様は航平先生です！ 実は受験を控えているとか……o（へーへo）（oへーへ）oファイト！

以前、私のちんまい小説を盛大に紹介して頂き、そのお返しとしてこちらでも「カタクロフト」について紹介することになっていたのです……が、私の不手際により大幅に遅れをとり、大変申し訳ありませんでした。m（　　）m

ではではこの辺で（へーへ）／

第23章 麻薬と火薬（前書き）

ひいゝくしゅつ 皆さん、風邪とか引かないように注意してくだ
さいぜ（ハハッ

第23章 麻薬と火薬

第23章 麻薬と火薬



市民達は恐る恐る東門から脱出した。何せ、ケイに眠らされた赤い蟹がわんさといふのだ。それを見て少しも怯まない一般市民は、相当な度胸の持ち主である。

私は岩のサークルの中から、ケイが五千人も市民を誘導するのを見守っていた。

ケイはいつものふざけた調子を織り交ぜ、市民達を怖がらせないようにしている。泣いている子供も、声が漏れ出てしまわないように自分の手で口を押さえていた。

これから、市民達は街の東にあるタリ川へ向かうことになっている。ケイの話では、その川岸にラクシャリ行きの貿易船のための貨物倉庫が建てられていて、そこで騒動が収まるまで待つらしい。

日はすでに地平線に向かって傾いていた。空には雲一つ無い、どこまでも澄みきった青が広がっている。

ふと見ると、南の方で、虹が空にうっすらと橋を架けていた。しかし、虹の両端は地平線に消えてゆくのではなく、空の中で霞み消えている。

その色とりどりのアーチは、風に漂っているかのように、ゆつたりと南へ遠ざかっていく。私はしばらくの間、じっとそれを眺めて

いた。

「雨が降っていなかったのに……どうして虹が出てるんでしょう？」
ふとそう呟いた。

「市民の方々はこの大型の貨物倉庫に入ってくれ！ 一棟にほぼ二千人は入れる！ 向こうにある倉庫も使うんだ！」

ケイが声を張り上げて指示を飛ばしている。

私は空から市民達と辺りの様子を確認していた。ケイや市民達は、無事タリ川の岸沿いにある倉庫群の所にやってきたのだ。

「中に入ったら、自由にしていいが、外には出ないように！ あと、大きな音は立てないようにしてくれ！」

ケイがそう叫ぶと、市民達は、そろそろと倉庫の中へと退散していった。モンスターが襲ってくるかもしれないので、気が気でないのでろう。やがて、市民達は全員倉庫の中に収容された。

タリ川の水面には、うっすらと橙色がかった空が映えている。近くで見れば、流れる水で水面は白く泡立っていると分かる。しかし、空から見た川は、鏡のように静まっていて、ただ空の茜に一緒になって染まっているのだ。私はゆっくりと旋回飛行をしながら、街へ戻っていくケイの上についていった。

私の背の鞍に、ケイがしっかりと跨^{また}がった。

「っしゃ！ じゃ、猿と蟹を追い返しに行くぜ！」

ケイがゴーグルを着けるのを見届けた私は、数回翼をはためかせてから一気に空へ飛び上がった。

「ケイ、南門や西門でもモンスターが暴れています。どちらへ行きますか？」

私はケイに訊いた。

何としてもこの戦いを止めなければならぬ。私は使命感に燃え

た。

「市民に聞いた話だが、南門では、一人のハンターがラージャン相手に互角に戦っているそうだ」

ケイが考えるそぶりを見せて、言った。私はそれを聞いて驚く。ラージャンを相手にして互角に戦える人間は少ない。何せ、モンスタ―の中でも特に攻撃的で、最強の部類に入るほどののだ。

「では向かう先は……」

「そうだ。南門へ行く」

ケイが私の背中をポンポンと叩いた。

私は白いゴリラ達を遮るように、翼を目一杯広げて地面に居座っていた。

「バルス兄さん！」

私を押し退けようと、白い巨大なゴリラが突進してくる。私は体でそれを受け止め、彼を押さえる。ものすごい怪力で、私は今にも押し負けそうだった。

「ダメです！　今、あなたの兄さんは我を忘れて暴れてる！　巻き込まれますよ！」

私の隣ではケイが同じくヘビィボウガンを構えて立っていた。

「でも……」

ドドブランゴという白い類人猿である彼は、涙を流して壮絶な戦いを見やる。それはひどく悲しみに満ちた目だった。

「くそ……あんな興奮状態のラージャンじゃ、わしでも止められねえ……それに、一体どうなってんだラルバは……」

ケイは悔しさと驚きが入り交じった表情で私の目を見てきた。さっきからラルバのことを呼び続けているのだが、まったく反応しないのだ。

今、すぐそこで、ラルバとラージャンが信じられないような戦い

を繰り広げている。そう、まさに想像を絶するような……

「あぶねえ！ みんなそこから離れろ！ 落ちてくるぞ！」

ケイが白い小さなゴリラ達——ブランゴというらしい——の群れている所の一点を指差す。その先の地面が淡く白光に照らされていた。ブランゴ達は、口々に悲鳴を上げながらそこから退避する。しばらくすると、鼓膜を破らんばかりの轟音と共に青白い雷が落ちてきた。落雷地点周辺は一瞬で黒い炭と化し、焦げ臭いにおいが漂う。それを発端とするかのように、次々と辺りに蒼雷そうらいが落ちてきた。その落雷の雨の中、金色の光に包まれたモンスターと、眩いほどのまばゆ白い光に包まれた小さな人間が互いにぶつかり合っていた。

****タスカ****

俺は残っていた精鋭部隊、ブランゴ五十体にラージャン二頭を率いてバルス兄さんの後を追った。そして、南門の前まで来たとき、俺は呆氣に取られて固まった。俺ばかりではない。部下達も、目前で繰り広げられる壮絶な戦いに完全に目を奪われている。

そこでは、神々しい白光に包まれた人間と、黄金に輝いているバルス兄さんが取っ組み合っていた。

バルス兄さんが雄叫びを上げながら、右腕を大きく後ろに引いて、一気に強烈なパンチを繰り出した。しかし、白光に包まれた人間は同じく右腕だけでそのパンチを受け止めた。鈍い音が辺りに響き渡る。

「な、何てこった!？」

バルス兄さんの友達のラージャンが、あまりの驚愕に声を裏返らせている。

「バルスのパンチを……素手で受け止めやがっただど!？」 何なんだあの人間の女は!？」

俺は注意深く白光に包まれている人間を観察した。確かに女だっ

た。

「うおおお！」

女が雄叫びと共に兄さんの拳を押し返し始める。

突然、空が翳^{かげ}った。慌てて上を見上げてみると、どこから湧いてきたというのか、暗雲が茜色に染まってきている空を覆い隠してしまっていた。すると、そこから幾本もの蒼い雷が女の回りに落ちてきただ。

「おりゃああああ！」

掛け声と共に兄さんが吹き飛ばされた。兄さんは、人間達の街の城壁に猛スピードで激突する。岩が割れるような音がして、もうもうと白い砂塵が舞った。

信じられないことに、ちっぽけな人間が……バルス兄さんに……
【ラージャン・激昂】に力で押し勝ったというのだ。

女が息一つ乱さずに立っている。その回りを、あたかも彼女を守るかのように雷が落ちてきていた。雷鳴がひっきりなしに轟き、大地は高压の電気に焼かれ、青白い閃光が何度も何度も視界の中に亀裂を入れる。

「バルス兄さん！」

俺は、兄さんの元に駆けていこうとした。その時、突然目の前に黒光りする竜が突っ込んできて、私を自らの体で押し止めた。

「待ってください！」

所々に、バルス兄さんと似たような黄金の毛を生やしたその竜は叫んだ。

「今あそこに行っては、巻き込まれます！」

ブランゴやラージャン達が、突如空からやって来たこの竜に対し、唸り声をあげて威嚇する。この竜は、沼地で見た竜と同じ種のベルキュロスに違いなかった。

「あなたは誰ですか！？　そこをどいてください！」

俺はそのベルキュロスから慌てて身を引き、疑いの目を向ける。
だが、彼の背からひょっこり飛び降りてきた者に、俺達はさらに

驚いた。

飛び降りてきたのは人間だったのだ。

「あの暴れているラージャンはあなたの兄上なのですね？」

ベルキュロスは、新たに現れた人間を長い触手が伸びている翼で庇いながら、俺の目を見て訊いてきた。

彼の背後では、怒り狂って暴走している兄さんが、女に向かって無茶苦茶な攻撃をしかけていた。

「て、テメエは何者だ！？　なぜ人間と一緒にいる？」

兄さんの友人のラージャンが、怒気をはらんだ声で訊いた。すると、竜の翼の影から人間の男が出てきて答えた。

「わしらは調停者だ。この戦いを止めるための」

男がそう言ったとき、一瞬部下達が静まり返る。否、俺自身も啞然としてしゃべれなくなっていた。

「今……テメエは……」

兄さんの友達のラージャンが、声を震わせて男を指差す。

「ああ。お前らに話しかけたのはわしだ」

男が……人間が……俺達と話していた。

「貴様は何者なんだ！？　なぜ俺達と話せる！？」

「いいから聞け！」

男が怒鳴った。そして、兄さんと女が激戦を繰り広げているのを親指を立てて示す。

「わしらはこの戦いを止めに来た。わしはケイ。このベルキュロスはアトラスって名だ」

そして、男は一呼吸して言う。

「お前らは街に踏み込むな」

「はあっ！？　何を訳が分からねえことを……」

もう一頭の兄さんの友人のラージャンが割り込んできた。まさにその時、ケイという男がラージャンをきつと睨んだ。

俺はブルツと思わず身震いした。男から発せられた怒気が、衝撃

波のように回りに伝わっていくのが目に見えるかのようにだった。

今の男の目には、見る者を凍りつかせる何かがある。それを見てしまった俺達は、ケイというこの人間に対して少し腰が引けてしまっていた。

「ラルバ！ おいラルバ！？ 今すぐ戦いをやめろ！」

男が、人間の女の名らしいもので呼びかけている。しかし、女はいっこうに反応しようとせず、バルス兄さんとの戦いを続けていた。「くそっ！？ どうなってんだ。聞こえてるはずだろ？」

男が舌打ちする。そして、抱えているボウガンという武器と、戦っている兄さん達を交互に見詰めていた。

☆☆☆☆ミライ☆☆☆☆

「ラルバ……！？」

俺は、豹変したラルバの戦う姿を見て、呆然としていた。

そこには俺の知っているラルバいない。深みのあるライトブルーの瞳に、銀色の髪が映える小麦色の肌の美しい人はいない。人を魅了するクールな微笑みを浮かべた彼女はいない。方向音痴で、どこか抜けている天然な彼女はどこにも見当たらない。

目の前にいるのは、白光を身に纏い、蒼雷を従え、殺戮^{さつりく}の狂気に満ちた顔をした“ケモノ”だった。

「わしらを守ろうと、武器を手にした途端、暴走し始めたのじゃ……」

物陰に隠れていた松田じいが、悲しげな顔をして腕を組み、ため息をつく。

「ラ、ラルバ……」

ブラスが泣きそうな顔で小さく呟いた。大きな体を丸め込み、小さくうずくまっている。

ルナーが南へ向かえと言ったのは、こんなことが起きていたから

に違いなかった。

草原の方には、ブランゴ達の動きを封じるためにケイとアトラスがいた。どちらも、戦うラルバに手も足も出ないようだ。さっきからケイがラルバの名を呼んでいるが、返事がされることはなく、ラージャン・激昂との戦いは激しさを増すばかりだ。

「ラルバ……どうしちゃったんだよ……」

俺は、ラージャンの腕に切りかかる彼女を見て、小さく呟いた。

Ω Ω Ω Ω ハウト Ω Ω Ω Ω

「あった！」

ニヤカがいかにも感激に浸っている……というような声を上げる。彼女の前には、一人一人が入れる棺おけのような木箱が置いてあり、中には怪しげな麻袋が大量に詰め込まれていた。

僕は息を切らしながら、やっと彼女の隣に駆けつける。さっきから、ニヤカはヤクの隠し場所を探しだそうとさんざん街の中を走り回っていたのだった。僕というニヤカの抑止力となるものも、ヤクを求める彼女の欲望に対しては風の前の塵に同じ……

「うふふっ……ウチの命の源」

何が命の源だ！？ と叫びたいが、あいにく声は出ない。しょうがないので、ニヤカの後ろ頭を軽く小突いた。

「何よ？ いいじゃない。これがあれば空を飛べるようになるんだし」

ここは光があまり入ってこない地下の倉庫だ。薄暗い中、恍惚とした面持ちでヤクのおいを嗅ぎ上げるニヤカ。

僕は、倉庫の入り口の棚に置いてあるたいまつセットに近寄り、手に取った。たいまつの端から細いひもが飛び出ている。それを勢いよく引っ張ると、たいまつから火花が飛び……芯に火が移って燃え上がった。赤い炎がゆらゆらと揺らめきつつ、この部屋を明るく

照らし出す。

「ありがと」

ニヤカがどこを見ているのか分からない目でウィンクした。そんなことをされても、焦点の合っていない目が強調されるだけだと思う。確かに、かわいくない仕草ではないかもしれないが……

「では、いったきまうす」

麻袋の一つを取り出したニヤカが、袋の口を開いて一気に口に流し込もうとする。

僕は、足元に落ちていた小さな木の棒を慌ててニヤカに投げつけた。それは回転しながら飛んでいき、ニヤカの喉に激突した。今まさにヤクを口にしようとしていた彼女の口から、『おふっ!』という呻き声が漏れる。

彼女は喉を押さえながらゲホゲホとむせこんだ。麻袋は床に落ちて、中身をぶちまけている。白い粉薬が床にこぼれ出していた。

「ケホッ……ちょっと何すんのおコラア!」

ニヤカが目には涙を滲ませ、咳き込みながら僕に掴みかかってきた。狂人というだけあって、力加減はまったく無く、僕は容易に壁際まで押された。

その時だ。突然、地下倉庫の入り口から誰かが走り込んでくる音がした。慌てて地上へ通じる階段を見上げた途端、僕は硬直する。額に、じつとりと脂汗が滲み出てきた。

「どうしたのよ……」

僕の目線につられて、ニヤカも階段を見上げた。そこには、白い鱗に水色のストライプ模様の体表、特徴的なエメラルドグリーンの鶏冠とこがや爪。ドスギアノスという肉食動物がいた。背丈は僕よりも高く、鋭い歯を見せて威嚇してくる。

「グワアアッ!」

ドスギアノスが一気に階下の僕達に飛びかかってきた。

「きゃあっ!」

僕はとっさにニヤカを抱くようにして飛びつき、床に押し倒す。

背中に鋭い痛みが走り、僕は思わず声にならない悲鳴を上げた。彼女を庇った代わりに、飛びかかってきたドスギアノスに背中を引き裂かれたようだ。

僕は激しい痛みをこらえながら、素早く立ち上がった。ニヤカに手を貸して立つのを手伝い、彼女を自分の背後に回す。僕はそうしてドスギアノスと正面から向かい合った。背中がズキズキと疼く。^{うず}ニヤカを庇った拍子に、たいまつを手放してしまった。それは、火がついたままコロコロとドスギアノスの足元に転がっていく。

ドスギアノスが、鬱陶^{うっとう}しそうに足でたいまつを蹴り転がした。それはまたコロコロと辺りを赤く照らしながら、地下倉庫の奥へと転がっていき……何かにカタンとぶつかって止まった。

たいまつがぶつかった物を見て、僕は目を皿のように見開いた。倉庫の奥まで照らし上げる赤い光に、大量の“それ”は浮かび上がって見える。僕は慌ててニヤカの手を引き、階段に向かって駆け出した。心臓が破裂しそうなほどバクバクと拍動している。

その時に、入ってきた時は暗くて気づかなかった紙が、たいまつの置いてあった棚に貼り付けられていたのを見つけた。

“大火薬倉庫 火気厳禁”

たいまつの火が、接触していた木の樽に燃え移り出す。その樽には、“対巨龍爆弾 火力絶大なため、取扱い要注意”と書かれたラベルがつけてあった。

燃え上がった火は、巨大な地下倉庫を埋め尽くすほど保管されている、爆薬の詰まった大量の樽を不気味に赤く染め上げていた。

第23章 麻薬と火薬（後書き）

そろそろ、猿蟹も終わりが見えてきたかな……。

ふひふひ……部活の大会が近づいてきたでさあ（「、旦那」）ノ

忙しや（T-T）

第24章 猿蟹大合戦、終焉（前書き）

いよいよ終焉へ！

各々の運命はいかに！？

第24章 猿蟹大合戦、終焉

第24章 猿蟹大合戦、終焉^{しゅうえん}

ΦΦΦΦルナーΦΦΦΦ

「お願いします！」

私は地面にひれ伏し、必死の思いで懇願した。

「戦いをやめてください！」

私がひれ伏す先には、青い巨大な蟹の大群がいた。ガミザミと呼ばれるものと、その成体のショウグンギザミ達だ。

彼らはあまりの驚きにどよめいている。それも当然の反応だ。

なぜなら、自分達の仲間のジュンシャンが、敵である人間の少女のために命の次に大切なヤドを脱いで現れ、戦いをやめてくれと頭を下げられているからだ。おまけに、ジュンシャンが運んできた人間の少女——つまり私——が、モンスターの言葉を理解し、話が通じることが分かったとなれば、なおさら動揺するだろう。

私自身、モンスターと人間が話せるということがどういう原理なのか分からない。ただ、分かっているのは、他の人からすればギシギシという軋む音にしか聞こえない蟹達の声も、私にはちゃんと聞いた言葉として理解できるということだ。この差はいったい何なのだろうか。私やケイ、ミライが特殊なだけなのだろうか。

街の城壁の上には、信じられないものでも見るかのように、街の守備をしているハンターやギルドナイト、アイルー達が呆然と私やジュンシャンを眺めている。モンスターと話す人間など見たことがなかったからだろう。

一応、蟹達と人間の戦闘は中断されている。

「お願いだ。後でゆっくり弁解する。ヤード脱いでまゝでの頼みだ。キリキザミ」

ジュンシャンが無理は承知で言ってるんだ、と言う。ジュンシャンの古くからの親友であり、この青い蟹達のリーダーであるキリキザミというショウグンギザミが唸った。困惑が声に滲み出ている。

「ジュンシャン……我らは猿軍達と同盟を結びたる……いかが致せば良いと申す？ バルス殿達を裏切っても良いのか？ 憎き人間共を生かしておいていいのか？」

ジュンシャンはさらに頭を下げた。今、ジュンシャンも私と同じようにその巨体でしゃがみ、土下座するような格好をしている。

「クリンチはくんが死んだ」

突然ジュンシャンが衝撃的な事実を蟹達に告げた。私の心臓が止まりそうになる。そんなことを言えば、蟹達は仲間のババコンガの仇を取るために、ますます人間と戦いを続けようとするだろう。

「何い！？」

キリキザミと言うショウグンギザミが、地面に自身の鎌のような腕を突き刺す。その一撃は、目を疑うほど地を抉った。あまりの切れ味に、私の背中に冷や汗が滲む。

「それならば迷うまでも無い！ 人間共を殺すべし！」

キリキザミが口から泡を吹き散らしながら、怒声を上げた。

「御意っ！ ますます人が憎い！」

「人間を滅ぼせ！」

配下の蟹達が口々に罵声を飛ばす。モンスター達の怒りがビリビリと空気を震わせる。

「だが、同じようにして“ヒト”もまた犠牲者を出した！」

ジュンシャンの言葉が雷鳴のように辺りに轟いた。声に、覇気が込められている。そのあまりの迫力に、私や蟹達が気圧される。ハ

ンター達にも、言葉は分からずともその覇気が伝わったのか、後ずさりする者が見受けられた。

「わいらは、殺した人間に祈りを捧げたことはあるか？」

ジュンシャンが蟹達に問いかける。口調が普段ののんびりしたものではなくっていた。

「人間の中には、この少女のように、人間やモンスターの隔たりなく犠牲者を弔ってくれる奴がおるんや！」

ジュンシャンが真剣な声で呼びかける。その姿は、なぜか見るものの心を揺さぶるものがあった。

「な、何だと？」

キリキザミが素頓狂な声を上げる。

「礼儀や誇りを重んじるのがわいら“蟹”のしきたりやろう？ それなのに、わいらは敵の誰一人にたいしても敬意を払っていなかったんや！ これじゃあ礼儀もへったくれもないちゃうやろ！」

ジュンシャンが切実な思いを込めて叫び、再び巨大な体でひれ伏す。

「だから、せめて戦いは中断してくれい！」

私もジュンシャンに倣って頭を下げる。

「私からももう一度お願いします！ 確かに私達は身勝手な行動であなた達を苦しめてきたわ！ でもモンスターを殺したいからあなた達に攻撃を仕掛けた訳じゃない！ そこをどうか分かってください！」

私達の懸命な説得に、蟹達は戸惑っていた。どうやら、ジュンシャンの言う“礼儀”とやらが効いたらしい。ここへ来る道中、ジュンシャンから蟹達の掟について聞いた。それによると、礼儀第一、忠君、殻をとられることは恥だそうだ。蟹が殻を取るということは、誇りを捨て、命を投げ出すことのように重大なことなのだ。だから、キリキザミを始めとする他の蟹達は、バリスタ用拘束弾の束縛から逃れるために、殻を取ったジュンシャンに仰天したのだろう。

その時、突然街の中心から猛烈な爆音が轟いた。空気が引き裂く、

鼓膜を破らんばかりの大音響に思わず耳を塞いだ。

強烈な音に弱いとされる蟹達は、ショックで地面に倒れ伏した。ジュンシャンは耐性があるのか、大きな音に驚いて辺りを見回していた。

街の中心地からもうもと黒煙が立ち上っている。茜色に染まる空と同じ色をした炎が、そこから天高く吹き出したのは爆発して数秒後だった。

「みんな、大変ニャ！」

城壁の上にいる海賊姿の猫が叫ぶ。

「街の地下にある大火薬倉庫から出火したニャ！ さっきの爆発はほんの序の口ニャ！」

ハンター達がそれを聞いて慌てふためき出す。尋常ではない焦りようだ。

「ヤバイ！ 市民はみんな街から逃げたか？」

「知らん！ ケイというハンターが市民を率いているそうだ。そいつを信じるしかない！」

突如、足元から地響きが轟いてきたかと思うと、蟹達がダウンしているところからガスが噴き出してきた。そのあまりの圧力に、土の欠片が舞い上がる。

「ヤバいのニャ！ みんな、走って走って街から遠ざかるのニャ！」

私は、ふとシュレイドの街の構造を、お義父さんどうから教わったのを思い出した。

『がすでん？ お義父さん、それなあに？』

『首都のシュレイドの生活を支える、とても重要なものだよ』

『ふうん』

『シュレイドの街のすぐ下にはね、大きなガス田があって、ものすごい量のガスが溜め込まれてるんだ』

『それをどうするの？』

『工房の火力源にしたり、蒸気機関の撃竜槍げきりゅうそうを動かすのに使ったり……貴族階級では料理の火に使うらしい』

『ええと……何だかよく分かんないけど、火の用心だね』

『そうだね。ところで、もしそのシュレイドのガス田に火がついたらどうなると思う？』

『火事！』

『うーん、半丸だな』

『じゃあ大火事！』

『うーん、欠けた丸。火事だけじゃないよ』

『えー！？ 分かんないよ』

『答えはね……』

私は伸びているキリキザミに駆け寄った。顔の辺りをゆさゆさと揺らす。

「キリキザミさん！ 大変だよ！ みんなを避難させなきゃ！」

城壁から降りたアイルーや守備隊が走ってきた。

「急げええ！ 街が“消える”ぞおお！」

☆☆☆☆ミライ☆☆☆☆

「何が起きたんじゃ？」

ブラスの巨体に背負われた松田じいが、怪訝そうに俺に聞く。

「シュレイド崩壊の始まり」

俺はそれだけ答えると、走り出した。物陰から飛び出し、南門の脇にある小さな出入り口に駆け寄る。背中からランスを引き抜き、

錠を突き壊した。

「モンスター達からなるべく目立たないように逃げるぞ。ケイやアトラスがいるとはいえ、状況が状況だからな。ラルバやラージャン・激昂で手一杯だろう」

俺は脇門からこっそり抜け出ると、ブランゴ達の様子を確認してブラスに手招きした。

「街が消え去る前にここを離れないと、終わりだぜ。急いで逃げるぞ」

俺は不安げな顔をしているブラスの背中を軽く叩いて勇気づけ、街から垂直方向に逃げ出した。ブラスが松田じいを背負ってついてくる。

「みんな、生き延びろよ……」

いつの間にか、無意識にそう呟いていた。

なぜか、微笑みを浮かべるラルバの顔が脳裏に浮かんた。



アトラス

わしは馬鹿だ！

突然、ケイがそう叫んだ。

「単発ずつじゃ眠らせることができねえだろうが、全部いっぺんに使っちゃえばいいじゃねえか！」

私が見守るなか、ケイはポーチから大きめの袋を取り出し、私に差し出す。

「これをあいつらの頭の上から振りかけてくれ。催眠ガス弾と毒ガス弾とゲネポスの麻痺牙まひきばが大量に入ってる」

ケイはブランゴ達にも呼び掛ける。

「俺達は急いでこの街から離れなきゃならない。さっきの爆発のせ

いでな。そこで、お前らの仲間のあのラージヤンと女を助けるには……」

ケイが真剣な顔で、戦っているラルバと、バルスというラージヤンを指差した。そして、再びブランゴ達の方を振り返る。

「お前らの協力が欠かせない」

私は空へ舞い上がり、ラルバ達の頭上で待機した。そこで、ケイからの合図を待つ。

『まず、俺が右手を振ってアトラスに合図する。そしたらアトラスは、その袋の中身を全部ぶちまけてくれ』

ラルバとラージヤンががちりと組み合い、押し合いを始める。

それを見たケイが右手を振った。

私は持っていた袋を爪で引き裂いた。大量の弾丸や麻痺牙がばらまかれ、ラルバ達に降り注ぐ。

『そしたら、俺が散弾を撃ってガス弾系に衝撃を加え、特殊効果のあるガスを噴出させる』

ケイのホワイト・ヘラクレスが火を吹き、細かい弾丸がラルバ達ごと襲いかかる。しかし、それぐらいでは戦いは止まらない。

毒や催眠ガスが漂い出し、麻痺毒を含むまきびしのような牙が、それを踏むラルバ達の体の自由を徐々に奪っていく。

『麻痺毒で自由を奪い、致死性の毒ガスで体力を削ぎ、最終的に催眠ガスで気絶させる』

ラルバ達の戦いが急にやんだかと思うと、バルスもラルバも地面

に倒れ込み、動かなくなった。

『戦いがやんだら、一気に二人を運び出す。そうしたら街から死に物狂いで離れろ！』

タスカというドドブランゴが、配下のブランゴやラージヤン二頭を引き連れ、気絶した二人に駆け寄る。私はラルバの元に降り立つと、ケイがラルバを抱えて背に乗るのを待った。

「アトラス飛べ！」

鞍に跨がり、体を固定し終えたケイが怒鳴った。突然、地面の下から想像を絶するような爆音が轟いてきた。まるで大地が怒り狂っているかのようだ。

それに伴い、辺りの地面から爆炎が噴き出してきた。土を巻き上げ、灼熱の火が、まるで火山の噴火のように次々と私達を襲う。

私は翼で勢いよく羽ばたき、一気に上空へ舞い上がった。

空から街を見下ろす私の目に、信じ難い光景が広がっている。

街は大火災に呑み込まれていく真っ最中で、日が沈んで暗くなつた夜の闇を煌々と赤く照らし上げていた。

街の周囲からは火炎ガスがひっきりなしに噴き出し、街全体が地面に沈み込んでいく。吸い込まれるように、街の周りの土地までもが大地に呑み込まれていた。

第24章 猿蟹大合戦、終焉（後書き）

短編をUPしていたせいで、更新が一週以上開きましたm
┐mすいませんでした。

第25章 アライヴ（前書き）

指摘されたところ直してないのに、次話うpしてんじゃねーよ、と文句もおありかと思いますが、何分テストが近いため、修正は後に回し、出来上がってる話を載せたいと思った次第です。

題名は作者の軽い言葉遊びです（ハ－ハッ

第25章 アライヴ

第25章 アライヴ

☆☆☆☆ミライ☆☆☆☆

「クリンチっていうババコンガには悪かった」

俺は俯いて頭を下げる。その先には、生き残った猿蟹連合軍がいた。

「もういいです。そのことは……」

「ああ……結局、この戦争でお互い被害が出たし……お前らの街だって無くなっちゃったんだ」

タスカというドドブランゴが暗い顔で言葉を返す。その隣にいるラージャン・激昂のバルスも、同意した。バルスは、クリンチの亡骸を背負っている。

その時だ。突然辺りに笑い声が響き渡った。底抜けに明るい馬鹿笑いだ。

「テメェ！ 何がおかしい！」

バルスがギロツと笑い主を睨む。今にも襲いかからんとする目だ。俺は危険な状況を生み出した笑い主を見つけ、胸ぐらを掴んだ。笑っていたのはケイだった。

「おいジジイ！？ 何がしたいんだ！？」

俺はケイを怒鳴りつけた。何を今さら相手の神経を逆撫でしてんだコイツ。

「おっと、これは失礼。お前らがあんまし悲しそうな顔だからな」

「デメエ！」

コンガの生き残りの一匹が、ケイに駆け寄ってきた。

「人の話を聞けって！」

ケイがコンガの突進を身軽にかわす。そして、場の空気をいっぺんにぶち壊すことを言った。

「そのババコンガ、本当に“死んでる”のか？」

俺は口をポカンと開けて固まった。否、この場にいる守備隊、アイルー達、ルナーや松田じい、ブラス、アトラス、猿蟹連合軍の連中、全員だ。

ケイがバルスの背負っているクリンチの元に歩み寄る。

「ちよつとコイツを下ろしてくれ」

そうバルスに言った。バルスは疑わしげな目でケイを睨んでいたが、ババコンガをそっと地に寝かしつける。

「よし、よく見とけ諸君」

ケイが右手の中指と人差し指を伸ばし、しっぺの形を作る。そして、それをババコンガの首筋に沿わせ……気合いと共にパチンと打ち付けた。速すぎて見えないくらい、手際が良かった。すると、ババコンガの体が大きく痙攣し……

「わああああああ！ 死ぬ！ 死ぬ！ って……あれ？」

ババコンガが飛び起きた。そして回りをキョロキョロと見回す。俺は開けた口が閉じなくなったのが分かった。嫌でも目が皿のように丸くなる。

「何で人間共がここにいるんだ？ あれ？ 兄貴も、蟹達もギアノスも……作戦はどうした？」

クリンチが混乱した表情で周囲を見回している。

この後、クリンチは兄貴であるらしい二頭の類人猿に抱き着かれ、揉みくちやにされた。兄貴であるタスカとバルスは泣きに泣いていた。

「俺は、北門に助っ人を呼ぶための信号弾を打ち上げた後、北門の砦に梯子から登り、バリスタ砲台の所に行った」

ケイが過去を振り返りながら説明する。俺はケイがそうしている頃、閃光で視力を奪われたクリンチに襲いかかっていたはずだ。

「置いてあったバリスタの矢に麻酔薬を塗り付け、逃げていくババコンガに発射した。弱っていて動きもトロかったし、急所を外すくらいなら簡単だった」

ケイが、涙顔で説明を聞いているバルスとタスカにウィンクとグーサインをした。

「あととはまあ降下用の鉄棒でスルスル降りて、死んだと見せかけて寝ているクリンチに駆け寄り、首筋の気絶ポイントをしっぺしてやれば……まあ後は、死んだように動かなくなるし、口ん中いにしえに“古の秘薬”突っ込んで、無理やりまぶたをこじ開けさせといたから、いかにも昇天したように見える。だけど“死んでない”ってことになるわけだ」

それでケイはクリンチの近くに寄っていたわけか……。それに、古の秘薬には、どんなに傷んだ体でも完璧に治してしまう特効薬だ。あれなら死の淵いても、どんな生き物さえも健康体にしてしまう。だから、今そこにいるクリンチの体の傷は、ほとんど塞がっているのだろう。

古の秘薬はお目にかかることすら叶うか分からない貴重品なのだが、ケイはどうやってそれを手に入れたのか？

「それで、得意の芝居で歌を添えてやれば……クリンチは死んだと思われて、誰も手を出さなくなるわけだ」

ケイが得意気にそう言った。俺は、はぁとため息をつく。どつと疲れが押し寄せてきた。

「じゃあ、あの時俺は何のために暴れてたんだよ……」

バルスが力無く座り込む。タスカはそれを見て苦笑していた。

「あんな訳の分からねえ人間とも戦わずに済んだのに……」

バルスが、地面で眠っているラルバを目で示した。俺は、彼女の元に近づいた。今の外見は普通の美しい女性だが……

「確かに。わしもラルバを見たせいで、タスカにクリンチが生き
てることを教えるの忘れちゃってたしな……」

ケイが苦い顔で腕組みした。俺はラルバに薄い毛布をかけてやる。
安らかな寝息が聞こえた。

「そういえば、なぜケイ殿はクリンチ殿をお助けになった？ 我ら
もなぜ殺さずに眠らせた？」

そう口火を切ったのは、東門でケイやアトラスに敗れた、ヤオザ
ミ達を率いるダイミヨウザザミの鉄壁だ。テツベキ

「あゝ、あれは市民達がとっとと街から逃げ出せるようにするため
だ。殺すより眠らす方が早く済むからな。んで、クリンチを助けた
のは……知り合いだからだ」

「何だと!？」

俺は再び仰天させられる。初耳だった。回りの連中も驚いている。

「実は昔、沼地のババコンガ討伐でクリンチと出会ったんだ。んで
討伐しようとしたら、のそのそとキングサイズ級の【グラビモス亜
種】がやって来て、二人して一緒に逃げた」

「困った時はお互い様って言うだろ？」

そう言ってクリンチとケイが肩を組む。【黒鎧竜 くろよろいりゅう グラビモス亜

種】は、まさしく巨岩のようなデカさで、岩のように硬い外殻を持
つ、ゴツイ体格の最強クラスの飛竜だ。討伐対象でないなら、接触
は避けた方が断然いい。

「あ、だからか!？」

俺はケイに走り寄り、飛び蹴りを食らわす。見事、みぞおちに命
中。

「ごふっ」

肩を組んでいたクリンチの腕から、ケイがすっ飛んだ。そして、俺はクリンチに詰め寄った。

「おなら爆弾でケイだけ無傷だったのは……ケイが爆発の範囲外に出るのを待ってたからだろ!? クリンチ!?!」

「ヒュ〜♪」

「口笛吹いて明後日の方向見たって無駄じゃいこのヤロォ!」

俺が背の高いクリンチの顔に一発パンチをかまそうと飛び跳ねてのを見て、みんな笑い出した。

おなら爆弾で死人がでたことは、皆で黙認することになっている。戦いの犠牲として、あれはどうしようも無かったことだ。それに、クリンチが気を遣うまでもなく、ケイは持ち前の閃きでいち早くおなら爆弾から逃れていたわけだし。

「そんなんじや駄目だぜ。ミライ……だっけ?」

バルスがパキパキと拳を鳴らしながらクリンチに近寄る。

「げっ、バルスの兄貴! や、やだ、タスカの兄貴ィ〜助けてくれえええ!」

クリンチが途端に青い顔になった。じりじりと後ずさりし出す。

「殴る時はこうやるんだぜ!」

「ぎいやああああ!」

「俺に無駄な労力使わせた罰だ! 殴らせろ!」

「嫌に決まってるだろ、バルスの兄貴ィ〜!」

その場にいる俺達は全員笑った。モンスターと人間の隔たりなく、笑い合った。

一つ、今回のことを通して学んだことは、モンスターに対し普段とは違う特別な感情を持つと、彼らと“話せる”ようになるらしいということだった。だから、今、この場にいる人間達は全員モンスターと会話できるということだ。

ミナガルデ新聞

首都シュレイド壊滅！？／猿蟹大合戦勃発

先日、歴史を揺るがす大事件がシュレイドを襲った。モンスター
の連合軍へコンガ種、ブランゴ種、ギアノス種、ヤオザミ種、ガミ
ザミ種、各種のボスモンスター複数、ラージャン（激昂種含む）、
シエンガオレン〕総勢千五百体以上がシュレイド北部から奇襲をか
けたのだ。突然の襲来にハンターズギルドの対応が遅れ、シュレイ
ドは孤立無援の状態で戦争に突入した。ギルドの対応が遅れたのは、
シュレイドの皇族や上流階級の方達、ギルド幹部が、アルタミラの
視察に行っていたせいであるとも指摘されている。

〈中略〉

また、シュレイドの地下にあったガス田が、地下火薬倉庫の爆発
で引火し、地面の下でさらなる大爆発を引き起こした。ガスの燃焼
により、気圧の支えを失った地盤は陥没。街は大地に吸い込まれる
ようにして跡形もなく消え去った。

また、街の守備に当たった者で、生き残った方達が一様に『モン
スターと人間は会話できる』と言っていたようだが、戦闘によるス
トレスから集団的な錯覚に陥っていると診断された。

しかし、この戦いにおいてベルキュロスの背に乗って戦場を翔^{かけ}た
英雄、ケイ・F・ネイチャー^{ファイヴ}の存在は明確になっており、彼とベル
キュロスは実際に会話できることを証明した。研究者は彼らの研究
に乗り出す模様。また、ネイチャー本人によると、十五年前の撃^{げき}竜^{りゅう}
槍^{うし}開発者の同姓同名の人物との関連は否定している。

〈ネイチャーとベルキュロスの写真、略〉

現在はシュレイド復興中に市民を守る護衛ハンターが募集されている。また、アルタミラから空輸での物資援助もされる予定である。

とある川で

「うおおおおお！」

それは必死の形相で、あたしから逃げようと水をかいていた。否、水を叩いて泳いでいた。否、水を叩いて流されていた。しかも、それは私より上流にいたので、勝手に私の前まで流されてくる。

「ひええええ！ 食われる！ 食われるう！」

悲鳴を上げて水の中で暴れる努力も虚しく、あたしの口元までそれはやってきた。

はい、ご苦労さん。何がやりたいのだ、こいつは……

「いやあああああ！」

とりあえず、あたしはそいつを口にくわえ上げた。

「ぎゃああああ！ 死ぬ！ 死ぬ！」

あたしは喚いているそいつをくわえたまま、陸に上がった。その拍子に、それが口から地面に飛び出した。

「やった！ 走れ俺！ 水を駆け地を駆け山を駆け！ 逃げろ俺！ 走る！ 走る！ 俺！ た！ ち！ っ！」

そう自分を鼓舞し、風のように勇ましく大地を駆け、猛烈な勢いで木の枝に足を引っかけて転倒する。

「滑って転んで血が！ 出るう……」

あたしは軽く足でそれを踏みつけて自由を奪い、呆れながら見つめた。

「あああ！ 俺はもう駄目だ！ 結局、泳げないまままで一生を終えるんだあああ！」

足の裏でもぞもぞと動きながら、それは落胆の表情をする。

面白そうなので、そいつを励ましてみた。

「何なら泳ぐチャンスをあげる？」

途端に行ける屍だったそいつが、咲いたばかりの花のように眩しい笑顔になる。

「マジっすか！？ やった！ 俺ならできるっす！ 諦めたらそこで終わりなんっす！」

「ただし、あたしの胃液の海の中でならね」

そう言った途端、華やかに咲いていた花は萎え、枯れ葉のようにおれる。

「ふっ……俺は何を調子に乗ってたんっすかね……ガノトトス進種のクセに泳げない……特殊スーツを着けても役立てられてない……みんな俺を笑えばいいっすよ！ どーせ俺は駄目なんだあ……」

そんなこいつの様子を見て、あたしは笑い出した。こらえきれなかったのだ。こいつ、面白い。

「あんた、まだ気づかないのね？」

「俺が馬鹿で間抜けだってことっすか？」

あたしはまた笑った。駄目だこいつ、気に入った。

「何であたしと話せるわけ？」

あたしがそう訊いた。すると、辺りが沈黙に包まれる。いつまで経っても返事が無いので足をどかしてみると、口から泡を吹いて気絶していた。

「こいつ、人間の臭いじゃないわね……あたしと同じ香り……ガノトトスの香りだわ……」

あたしは、人とそっくりな姿のそれを口にくわえ、水の中の巢に連れて行った。観察していて分かったが、こいつは水中で呼吸ができるようだ。

「面倒見てあげようかな？」

私は水になびく瑠璃色の髪の彼——未知の“来訪者”——を、そっと巢の柔らかい水草の上に寝かせた。

「面白そうだしね」

結局の理由はそれだったが。

第25章 アライヴ（後書き）

アライヴ

a l i v e ..（死んでいると思ったら）生きて（いる）

a r r i v e ..「人・物などが」来る、着く、訪れる。〔場所に〕
着く、赴任する

参考辞書…ジーニアス英和&和英辞典

最後に登場する“彼”はある方とのコラボキャラです。そう、C
ENTER先生！の作品のグレイ君です！

登場時からパニックって、ドジを踏まさせていますことをお許しく
ださい。ただ、グレイ君はいじると面白そうなキャラなんで……オ
ネエガノトスと一緒にしました。あとでみっちり活躍して頂きま
すm（――）m

実はグレイ君の登場は……なんですよ……（――）

CENTER先生の作品で私とのコラボをしてくださった話を読
んだ方は、分かるかもですね。彼はどんな存在なのか……

年末一大企画！（。；）／（一一；）（前書き）

すみません m（　　） m

お祭り好きなもので、また変なこと思い付いてしまいました！

何やこれ、くっだらん……なんておっしゃらないでください（T
T）

年末一大企画！（。；）／（一一；）

というわけで、皆さんの頭の中で想像した今までにないモンスターを募集開始します（´▽、）／

以前、コラボ・新キャラ募集をしていた時に、神月ラセ先生の投稿モンスターが当選しましたが、それをきっかけにふと思いつきました。

新たなモンスターの投稿に関してですが、できるだけメッセージからお願いしますぜ（へーへ）b

個人の自由な発想を形にしてみてください。なんくだらないことしてる暇はない！ なんておっしゃらずにww 遊び感覚でも結構でさあ（へーへ）／

執筆の間の息抜きや、イメージトレーニングにご利用くださいぜ！！

↓新たなモンスター募集・応募方法↓

メッセージまたは感想よりモンスターの詳細データをお願いします！ 以下のデータをお願いします。できるだけ詳しく欲しいです。また、モンハン知らない方でも投稿したい！ という場合は、できるだけ設定を書いて頂ければ、作者が勝手にデータを加えさせていただきますのでOK（へーへ）b

☆モンスター名

☆別称（雪獅子、舞雷竜などの類）

☆種族（牙獣種、飛竜種などの類）

☆サイズ

☆外見

☆性格

☆戦闘方法・スタイル・攻撃属性

（例…リオレイア

■戦闘方法：地上で静止しての単発or三連続ブレス【火属性】。
サマーソルト【毒属性】。方向修正のかかる突進【無属性】

■戦闘スタイル：獰猛で、積極的に攻撃する）

☆苦手耐性（一番は水属性、二番は氷属性……麻痺はあまり効かない。毒は効くなど）

☆弱点（しっぽの付け根、翼など）

上記以外で追加してくださってもOKです！

募集期間…2009年12月1日～14日までの二週間

応募上限…お一人様につき二種類まで。ただし、応募数が多すぎた場合、くじで間引きさせて頂くこともあります……ご了承ください
m () m

さらにさらに！ 応募して頂いたモンスターを“応募者名を伏せて”公表します！ そして、読者の皆様がコイツはいい！ と思うものに投票して頂きます。銅賞、銀賞、金賞やアイデア賞みたいなのも読者の方々に選んで頂こうと思っています。

投票期間（予定）…2009年12月16日～31日

投票についてはまた後日、お伝え致します（＊＾ー＾） b

見事金賞に輝いたモンスターは、こんな拙者で良かったのでしたら、小説内で用いさせて頂きますさあ（＾ー＾ゞ

という訳で、皆様のご応募をどしどしお待ちしております（＾o
ゞ

年末一大企画！（。。。；）／（一一；）（後書き）

このプロジェクトは読者様のご協力が必要不可欠です。こんなに堂々と地雷踏んどきながら、滑ったらどうしよう……と震えています。あんまり応募数が少なかったら、シヨボンと自然消滅してしまうので、この企画にお付き合いして頂けたら大変嬉しいですよ（TーT）

第26章 ナアーカーティック..麻薬中毒者（前書き）

はあゝ。第24〜25が急いで仕上げたもので、今改めて見返すと……直さないとです……。小説の前半部分も、今よりもっと未熟だったからひどい文なんだろうな〜と、がっかりしております。いつか直したいっす……

第26章 ナアーカーティック…麻薬中毒者

第26章 ナアーカーティック…麻薬中毒者

Ω Ω Ω Ω ハウト Ω Ω Ω Ω

――辺りは真っ暗で何も見えない

――肺がストライキを起こしているかのように、空気を取り入れる仕事をサボっている

――意識はもやもやとした黒い霧に包まれ、自分の体の感覚が失われていく

――息苦しさも感じられなくなり、自分の体が自分のものではないようになっていった

すると、突然唇に何かが押し当てられた。微かに生き残っていた神経がそれを感じ取ったようだ。

そう思った矢先、突然口から暖かな空気が送り込まれてきて、肺に無理やり酸素が供給される。それと同時に、胸部に刺すような痛みが走った。停止していた肺機能が急に動き出したせいだろうか。

空気が再び送り込まれてくると、体の感覚が一斉に目を覚ます。背中に激痛を感じ、僕はあまりの痛みに、かはっ、と喘ぎ声を漏らした。肺が急に復活し、空気を渴望するせいでケホケホとせき込む。「あっ、息を吹き返したのね!？」

聞き覚えのある女の声が目の前から響いてきた。そのあまりの近さからか、女の息が頬をかすかになる。

僕は身体中の痛み顔に顔をしかめながら、うつすらと目を開いた。淡い橙色の薄明かりの中に、ぼんやりと景色が浮かんできると、目の中にいるものの輪郭がはつきりしてくると、僕は声なき悲鳴を上げて、それから遠ざかるために体を動かそうとした。その途端、背中に鋭い刃物を突き立てられたかのような痛みが走り、全身の筋がひきつったような嫌な感覚がした。

「まったく……せつかく命を助けてやったのに……まるでバケモノを見るような目でウチを見るなんて……」

その女——ニヤカ——は痛み悶える僕から顔を離して、言った。顔は薄暗いせいでよく見えないが笑っているようだ。しかし、命を助けてやった、とはどういうことだ？

「だからねえ……アンタ気絶して呼吸してなかったの！ 意味分かる？」

僕の表情から読み取ったのか、ニヤカはため息を交えつつ答える。全身に鳥肌が立つのを感じた。まさか……信じたくない……。そう思いつつ、自分の唇にそっと指を当ててみると……しとやかに湿っているではないか……！？ 顔から、さあっと血の気が引いてゆく。

では、さっき肺が復活したのは……

「ウチが人工呼吸してあげてたのよ？」

僕は知りたくなかった事実を突きつけられ、愕然とした。要は、麻薬中毒者に熱烈なキスをされていたのだ。

仰向きに寝ている僕が起き上がろうとすると、ニヤカは僕の両肩を押さえて動けなくした。驚いてニヤカの顔を見上げると、薄明かりに煌めく瞳がまっすぐ僕を見つめていた。

「全身打撲と低レベルの火傷。それに背中に軽い切り傷。その体じゃ無理やり動こうとしても、先に力尽きちゃうね」

僕はその言葉を聞いて呆れた。誰のせいで麻薬が隠されている火薬倉庫に連れていかれ、誰を大爆発から庇ったせいでこうなったのか……僕が内心でそう呟いた時、頬に何か冷たいものが落ちてきた。その液体は、僕の頬をゆっくりと滑っていく。

ニヤカが下唇を噛み締め、肩を震わせて泣いていた。彼女は、僕の肩からゆっくりと手を離し、隣で膝を抱えて座り込む。

「ごめん……」

唐突にニヤカが口を開いた。涙に声が震えている。辺りを照らしているたいまつが、パチツと火花を散らした。

「ウチがヤクなんか探してたから……ハウトが庇ってくれたから……」

僕は仰天していた。ニヤカが……まるで彼女らしくなかった。本人であることは間違いない。しかし、普段とは何かが違うのだ。

「ヤクは駄目だって頭では分かっているのに……いつの間にか、ウチはヤクを求めて探し回っている……」

そうだ。彼女の今の瞳には、命の輝きが宿っているのだ。力強く、生き生きとした瞳。以前のような、空虚でどこを見つめているのか分からない目ではなかった。彼女の目は、たいまつ揺れる炎を映し出し、頬は滴^{しずく}の伝った跡をキラキラと反射している。

その彼女の横顔は、美しく、哀^{かな}しげだった。

僕は痛みを我慢しながら上半身を起こし、自分の膝を抱いているニヤカの右手を取った。涙に濡れた瞳が、不思議そうに僕を見やる。

僕は彼女の掌^{てのひら}に、字を書き始めた。一文字一文字をゆっくりと、丁寧……。

“ヤクを始めたのはなぜ？”

彼女はそっと目をつぶった。昔を思い出そうとするかのように、ニヤカは軽く俯いて語り出す。

——ウチは医者だった。そこらでは、腕利きで名の知れた若い女医だったのさ。二十二歳の時には結婚もして、夫や子供と仲良く暮らしてた。

でも、つい二年くらい前にさ、ウチが住んでた街で疫病が蔓延してね……治療薬さえあれば簡単に治せる病気だったのに……。その材料が足りなかった……。ハンター達に、材料のキノコや薬草を集めてきてもらおうと思ってたけど……。そのハンター達も感染して、とてもじゃないけど動ける状態じゃなかった。

ついに治療薬が切れ、ウチになす術は無く^{すべ}なつた。そうしているうちに、街の住民は死に絶えていって……。ウチの夫と四歳の一人息子も疫病にかかちまってね……。ウチは薬の材料を取りに行ったさ……。それは、ハンターではないウチにとってめっちゃくちゃ危険なことだった。

何人かの有志と共に材料を集めに行ったけど、飛竜の襲撃に遭って仲間は全滅……。泥棒猫のメラルーに薬の材料の入った袋を奪われ、取り返して……。街に帰る頃には、ウチはもうボロボロだった。

そして、ウチが治療薬を完成させ、夫や子供に投与しようと様子を見に行くと……。もう手遅れで……。子供は息絶え、夫も病の末期症状が出て、昏睡状態に陥っていてね……。ウチは夫の名を……。子供の名を呼んだよ……。でも返事は帰ってこなかった……。

大切な家族が死んで、ウチは何もかもがどうでもよくなっていた……。子供と夫の死体を焼いて、骨を埋めてからはあまり覚えてない。ただ、気づいたときにはヤクに手を染めてたんだ……。何か、自分の悔しさを……。恨みを……。悲しみを発散できるものを求めているのかもしれない……。

それからはもう恥ずかしくて言えない。薬物欲しさに色んなことをしてきたから……。

僕は静かにニヤカの過去の話を聞いていた。彼女の瞳からは、悲しみが溢れ出て、その頬を濡らしている。

ヤクに魅入られたニヤカは、その泥沼にズブズブと沈み込み、廃人となってしまうていたのだろう。そんな人間を、奴隷を売買する会社が見逃すはずがない。それで捕らえられのだ。

「でもね、ウチは奴隷会社に捕まって良かったと思うよ……」

ニヤカが微笑みながら僕の目を見た。僕は意外なその言葉に思わず耳を疑った。

「廃人として生きてる中、誰もヤクに溺れるウチを止めてくれなかった……。頭では嫌だと思っても、体が勝手にヤクを求めて動き出す……。そんなウチを止めてくれる人……。松田じいやブラス、ラルバにルナー、ミライやケイ……。それにハウト」

ニヤカは、目をつぶってすうっと深呼吸した。目の端から涙がこぼれ落ちていく。

「アンタ達とは、きっと近いうちに別れることになると思う……。だけど、ウチはこの短い間の記憶を忘れないさ……。絶対……。これだけは誰かに伝えたかった。ヤクの禁断症状で、自分が自分でなくなる前に……」

僕はニヤカの掌に再び文字を書いた。ゆっくりと、大きく。

“誰が麻薬中毒者を一人野放しにするなんて言った？”

掌に書かれる文を見ていたニヤカが、はっと顔を上げた。驚きに見開かれた瞳が、ゆらゆらと微かに揺れている。

「そ、それってどういうこと!？」

彼女が、水に追われるネズミのような焦りっぷりで尋ねてきた。

“僕だって、声が出せない自分に絶望して生きてきた。友人と楽しげにしゃべる奴らが憎いと思った……。けども、声が無いことを

を受け入れてくれる仲間ができたんだ……。僕は君の支えになる、だから君は僕の声になってくれ”

よく恋愛物の話に出てくるような陳腐な言葉だった。けれど、それで充分なのだ。他に飾り立てる必要もない。ただ素直に思ったことを表したただけだ。

「ハウト……」

突然ニヤカが僕の首の後ろに腕を回し、抱き着いてきた。その途端、小さな痛みが負傷している背を伝わった。それを我慢し、慌ててニヤカの抱擁を受け止める。不意に彼女が抱き着いてきたせいで、心臓が口から飛び出るかと思うほど驚いた。

「ありがと……ありがと……」

かすれた涙声で、ニヤカは何度も呟いた。家族を失い、麻薬に慰めを求めてから、彼女はずっと闇の中を孤独に歩んできたに違いない。それは、とてもつらいことだっただろう。でも、闇の中で孤独だったのは、声を持たない僕とて同じだったのかもしれない。

顔が真っ赤に火照っているのが分かり、心落ち着かない状態だったが、僕はどうすることもできずに固まっていた。

ニヤカの話によると、どうやら僕達二人は瓦礫^{がれき}の山に生き埋めになっているらしい。ただ、比較的浅い所に閉じ込められているせいか、日の光が瓦礫の隙間を縫うようにして射し込んできている。

出口がないか辺りを探し回っていると、この空洞内の端に薄黒い何かを発見した。それは、不快な焦げた臭いを発している。近づいてよく見てみると、丸焼きにされて青白い鱗が黒ずんだ、例のドスギアノスだと分かった。爆炎から逃げ遅れて焼死したようだ。

「ハウト、これ見て！ 出口じゃない？」

この空洞の壁を調べていたニヤカが、僕に手招きしてくる。

「ほら、上に通じる抜け穴っぽくない？」

ニヤカが示す壁の小さな穴から向こう側を覗いてみると、僕らがいるこの空洞の隣にもう一つ小さな空洞があった。確かに、その空洞の一角に強い光が射している穴があった。

僕がニヤカの方を向くと同時に、向こうもこちらを見返してきた。僕らはニヤリと笑い合った。

第26章 ナアーカーティック..麻薬中毒者（後書き）

ただ今、読者様参加型のイベントを行っております。読者様が新たなモンスターを考案し、応募していただくというものです。応募期間終了後、集まった新モンスターを発案者名を伏せて公表、皆様に金賞・銀賞・銅賞・アイディア賞などを決めていただきます。そして、金賞に輝いた新モンスターは、この金剛石があります。小説内で登場させていただきます。

詳しくは、前章の「年末一大企画！（。；）／（一一；）」をご覧ください。応募方法、期間などはそちらに詳細を載せてあります（へーへゞ

さて、もう一つ、実は短編を仕上げてupさせて頂いたのですが、こちらで紹介するのを忘れていました……。では改めて……

「ルソーとワインとジャズと」・「Ancestors retrospect 《神の追憶》——」の二作もよろしく願っています。感想やアドバイス、評価などをしていただければ幸いです（へーへ）

ではアディオスです（、旦）ノ~~

第27章 天空の謎、海中の脅威（前書き）

やっと書き上げました（へーへ；

遅れてしまって申し訳ありませんm（　　）m

もっと一日の時間が長けりゃいいのに……と思ってるのは俺だけ
っすか？（TOT）

第27章 天空の謎、海中の脅威

第27章 天空の謎、海中の脅威

「シュレイド壊滅から約一週間後、アルタミラ飛行船場」

「ルル、ねえ、まだ腑に落ちてないの？」

ぼんやりと宙を見つめる俺に、ユイが呆れたようにため息をつく。俺達は今、飛行船乗船受付所の中にあるベンチに腰かけていた。

「同じ人間がこの世に二人存在するはずがないでしょ！？ だから、あの時のこじきが言っていたことはデタラメなのよ」

デタラメとは、昨夜のケイ・F・ネイチャーという同一人物が二人いるという話だ。確かに、常識で考えればおかしいことだ。しかし、ネイチャーが二人いると言い切ったあのこじきは、とても嘘を言っているように見えなかった。あの時の男の目……それはまるで、訴えかけているように真摯で、何かを固く信じている……見るものはつとさせる瞳だった。もちろん、俺のただの勘だが……。

「そもそも、何で赤の他人である私達にそんなことを教えるのか疑問だわ」

確かにそれも一理ある。だが、世の中には色々な人間がいるのだ。一般常識では推し測るかたができない人間。そんな人間は、常人には理解し得ないことをすることもある。そう、例えば昨晚出会った彼のような男には……。

「昨日のこじきは、別に麻薬とかもやってなさそうだし……頭が変だというわけでも……」

俺は、説得を続けるユイに向かって指を突き出し、言った。

「甘いな」

ちようど、あのこじきが俺に言った言葉だ。否、^{いな}あの男はただのこじきとは違う。

「な、何よ」

今までまくし立てていたユイがたじろぐ。俺は、突き出した人差し指で、ユイに背後を見るよう合図した。

「後ろ？」

彼女が振り返る。その視線の先には、木でできた四角い小さな掲示板が突っ立っていた。そこには、いくつかの写真と紙が貼っている。

「何これ……ウォンテッド？ 指名手配犯がどうかしたの？」

「一番左上の紙、見てみるよ」

ユイが、俺が言った所に貼ってある指名手配犯の写真と、その懸賞金額を見て口をあんぐりと開けた。

「ち、ちよっと！ これ昨日助けてくれたこじきにすごく似てる！ おまけに……何この懸賞金の額……A級WANTEDの六十万ゼニー！？ 賞金首のトップよ！ ひょっとして、昨日会った人って……」

「その懸賞金六十万ゼニーのアウストラティック・レイザーって奴だろうな」

「何でそんなに落ち着き払ってるのよ！ あんな大犯罪者と会ってたなんて……私達殺されてたかもしれないじゃない！」

ユイの顔から血の気が引いている。モンスターを相手取った時とはまた違う、他人に対しての恐怖。それは、やはり狩人^{ハンター}たる者でも感じるようだ。

「落ち着けて」

俺は苦笑しながらユイの隣に移動する。そして、彼女の呆然とした視線の先で片手をヒラヒラさせた。

「で、で、でも、見てよこの罪状……何人の人が殺されたのよ……。無法者の集う街、サイフォスで善政をしていた市長を暗殺……。暗

殺組織“世界の終わり”のお抱えの暗殺者五十人を全員射殺……。一騎討ちによる決闘で、計十八名に勝利……。言い挙げたらきりがないわ……」

あまりの罪の多さと、死者の数にユイが戦慄している。確かに、ここまで凶悪性に突出した者は他に見当たらない。懸賞金六十万ゼニーとは、史上今までに見ない額だ。しかも、紙の隅の方に“ラクシャリの件についてなどから、懸賞金がさらに上積みされる見通し”と書かれている。

「あ、これが一番新しい情報ね。ラクシャリにて砂漠の盗賊団の頭かしらを決闘で射殺した、だって。情報機関が把握しきれてない事件も含めたら、恐ろしい量になるはずよ……」

ユイがこじき——大犯罪者の方が正しいか——のレイザーの写真をまじまじと見つめている。そこには、マントを風になびかせ、黒いシルクハットをかぶり、使い古した眼帯で左目を覆っている男がいた。右腰のホルダーに金色の小銃がしまわれている。決闘中に撮られたのだろう。

「なくんだ、殺人鬼なら言うことがまともなわけじゃない」

ユイが納得したような顔をした。しかし、俺の勘は未だにレイザーの言うことが正しいと告げている。ユイは気づかなかったからだろうが、あの男の目を見た俺にはどうも一般常識を認める気にならないのだ。きっと何かカラクリがあるはずだ。

「まあ、飛行船の乗船予約も取ったし、宿やどに戻りましょ」

ユイがそう提言する。俺がそれに賛成して、ベンチから立ち上がり、建物の出入口に向かおうとしたとき……

「ミナガルデ新聞の号外、号外！ 緊急速報だ！ 一昨日飛び立った飛行調査隊についてだよ！ 一部につき二十ゼニーだ！」

新聞売りのでかでかとしたがなり声が外から響いてきた。

ユイが俺に向かってコクツと頷いたかと思うと、俺の返事も待たずに外に通じる出口へ走り出した。遠目からみても、すでに号外を買いに来た人間がうじゃうじゃと寄ってたかっているのが分かる。

俺は不吉な予感がして、ユイが号外を買ってくるのを椅子に座って待っていた。

結果は、俺の予感が当たっていた。

“ミナガルデ新聞南部支所より 号外”

つい一週間ほど前アルタミラ飛行船場を出発し、謎の墜落事故を起こした【スカイドリフター号】。今回は、【猿蟹大合戦】による打撃を受けたシュレイドの援助物資を積んだ飛行船【クラウドチェイサー号】が同じように墜落した。近くを飛んでいた古竜観測所の気球の研究者数名が、『クラウドチェイサー号の行く手を阻むかのように、空に虹が出ていた』と証言している。嵐なども無く、天気は良好だったらしい。

気がかりなのは、前回の墜落事故での唯一の生存者も、『虹』を見たと言言していることだ。気象観測所では、アルタミラからシュレイドへ通じる空の道（通称…ジェット・ストリーム）に何らかの異常気象が影響をきたしているのではないかと推測している。

（西方 ラティオ火山地帯）

「キヤー！ 来ないでー！」

私は力の限り逃げ惑った。後ろには、私が集めた高級な鉱石を狙って追いかけてくる猫、メラルー達。アイルーと同じで、直立二足歩行ができる。しかし、アイルー達とは違い、メラルー族は一樣に手癖が悪い。他人のものを盗むというなんとも性質たちの悪い存在だ。

「ニャー！ アンちゃんの初めてのドラグライト鉱石は渡さないのニャー！」

普段は戦闘嫌いで、狩りに行ってもモンスターを相手に攻撃することのない相棒のサンバが、今回ばかりは……と張り切ってくれていた。

アイルーであるサンバは、キッチンで働くことをメインとしている。しかし、時々、こうしてハンターのクエストクリアを手助けするオトモアイルーの役にも回ってもらっている。今回のクエストでは貴重なドラグライト鉱石を掘り当てた私のために、メラルー相手にアイルー用の小型ハンマーを振り回して追い払おうとしてくれていた。

「ニャー！ アンちゃん、やったニャー！ メラルー達が諦めて帰っていくニャー」

サンバが勝利の雄叫びを上げる。私は息を切らして膝に手をついた。心臓が破裂しそうなほどドクドクと波打ち、汗が滝のように頬を伝って地面に滴り落ちる。そのせいで、乾燥した黒い大地にいくつものシミができた。とうとう、決死の逃走劇に幕が降りたのだった。

しばらくそうやって息を整えていると、必死に走っていたせいで気づかなかった暑さが押し寄せてきた。クーラードリンクを飲んでいたとはいえ、あれは暑さで体がオーバーヒートするのを防ぐためのものだ。暑いものは暑い。

辺りはまさに焦熱地獄。山の火口からは黒煙が舞い上がり、流れ出た溶岩が岩場にたまって火の海を作る。

「サンバ……何か……足元揺れてない？」

私は地面から微かに伝わってくる震動を感じ、サンバに訊いてみた。不吉な轟音が、灼熱の大地に迫り来ている。

「確かに震動してるニャ。地震かニャ？」

サンバが地に耳を着けて確かめている。しかし、揺れはしばらくすると鎮まってしまった。

「まあいいや。早く素材採集を終わらせてしまおうね」

私は腰から提げられているアイテムポーチをポンポンと軽く叩く。ガチャガチャと高価な鉱石同士がぶつかる音がした。

私は火山地帯から帰途についていた。このラティオ火山地帯へは海路で通じているため、帰りは船の上で涼やかな潮風を浴びてくつろぐことができる。炎熱地獄の火山とはまるで違う、快適な船旅だ。頬を撫でる風は、疲れきった体に癒しを与えてくれる。

目蓋が重くなってきた私は、船の甲板に仰向けに寝転がった。青々と澄んだ空には、日の光を浴びて眩いほどに輝く白い雲。揺りかごのように波に揺れる船も心地よく、私は意識を手放そうとした。

その刹那、何かが船底にぶつかる鈍い音と共に、船が大きく上下に揺れ動いた。慌てて跳ね起き、船べりに駆け寄る。

「何だ今のは!？」

船の奥から焦り顔の船長がやってきて、怒鳴り声で叫ぶ。

「分かりません! 船底に何かが衝突したと思われます!」

操舵手の一人が船長に答えている。私は海面下に何かいるのかと考え、船から身を乗り出した。目を凝らし、深い藍色の世界を観察する。いつの間にか隣にサンバがやって来て、一緒に海を覗いていた。

だが、海には何一つ見当たらなかった。魚影の一つすら無いのだ。「ただの岩礁にぶつかっただけかもニャ。船底に穴が開いてないが心配だニャ」

私はふと違和感を覚えた。何一つ見当たらない……というのは少しおかしい。普通、魚の二匹や三匹くらい見かけるはずだ。しかし、そこには生き物の気配を感じられない。いや、少し違う。何かが海に潜んでいて、それに怯えて魚がいなくなった……そんな気がする。不気味だった。

「嫌な予感がする」

——私がそう言った瞬間^{とき}

——船の下を黒く長細い影が音も無く通り過ぎていった

心臓が氷の手に掴まれたかのようにきりきりと縮こまり、背筋に不快な汗が染み出す。

——大きい！

その影は優に船を凌駕^{りようが}するほどの大きさだ。

——船の下に何かいる！

「船長さ——」

私が警告を発するより早く、“それ”は姿を現した。水しぶきを巻き上げ、船側に寄り添うようにして水面上から飛び出す。まさに圧巻、自然の驚異だった。

——長細い蛇のようにしなやかな鈍い黒色の体

——背中から生えている何本かの突起が、うっすらと青白い光を発している

——ワニのような顎^{あご}には、獲物の肉を引き裂く鋭い歯

「や、やばい！ ラギアクルスだ！」

乗組員の一人が、真っ青な顔であとずさる。サンバも恐怖のあまり私に抱きついていた。

ラギアクルス。つい最近になって発見された新たなモンスターだ。また、ラギアクルス以外にも、十数種類もの新モンスターが目撃されている。中には、得体の知れない神々しいものや、【金獅子^{きんじし}ラージャン】と肩を並べるほど狂暴なモンスターなども含まれており、諸研究所では熱心に探究が進められている。

今、船の隣にいるラギアクルスは、私達の船を転覆させようと、体当たりしてきた。

「危ねえ！ 全員何かに掴まれ！」

船長の怒声が上がリ、私は慌てて船べりに掴まった。強い衝撃と共に船が横に傾いたのは、それとほぼ同時だった。水しぶきが飛び、それが私に雨のように降り注ぐ。

「わあっ！」

海へ体が投げ出されそうになり、慌ててへりにしがみつく。あんな狂暴な奴がいる海に放り込まれば、なす術^{すべ}もなく食い殺されるのがオチだ。

「ニャー！？ なんて乱暴な奴なんだニャー！」

サンバも船内の帆についているロープに捕まって難を逃れていた。さっきの水しぶきのせいで、シャワーを浴びたように黒い毛が寝てしまっている。

ラギアクルスは再び海中に姿を消した。しかし、巨大な黒い影が水面に浮かび上がっている。それは滑るように船の回りをぐるぐると移動していた。

「様子を伺^{うかが}ってやがる。ハンターのお嬢ちゃん、何とかならねえか！？」

困り果てた顔をした坊主頭の船長が、大声で訊いてきた。

船は体勢こそ立て直したが、最初の体当たりのせいでボンベやら銚^{もり}やらの道具が散乱している。今のところ、あの巨大な海竜^{かいりゅう}に有効なものは見当たらない。私の背中には太刀“鉄刀【禊^{みそぎ}】”があるが、これも活躍の場が無さそうだ。

「ごめんなさい！ 何もできそうもないです……」

おずおずと言葉を返すと、船長の顔から希望の光が消え去った。
何もできない自分が情けなかった。

「諦めたらダメニャ！ アンちゃん、鉤石採掘で石ころを集めたかニャ？」

サンバがロープを滑り降りてきながら、私に訊ねる。

「うん！ 前、サンバから『素材玉の材料になるからとっておけ』
って教えられたからね」

「それニャ！ 素材玉ニャよアンちゃん！」

サンバがピョンピョン跳び跳ねながら、自分の小さなポーチから何かを取り出す。一つはねばついて糸を引いている草で、もう一つは虫ビン。そのビンの中には小さな虫が一匹入っている。光蟲ひかりむしだ。

「それは……」

「実は火山で素材採集をしていた時に見つけたんだニャ」

サンバが言わんとしていることは読めた。それらの材料を組み合わせて作ることができものは……閃光玉せんこうだまだ。

私は作り上げたそれを手に持った。現状が現状なのでかなり荒い仕上がりになってしまったが、十分な効果を発揮してくれるはずだ。
「皆さん、あいつが顔を出した瞬間、これをあいつの鼻先に放り投げます！ 合図したら目をつぶるか覆うかしてください！ あいつが目を眩ましている隙に逃げましょう！」

私は船員達に計画を伝えると、ラギアクルスが海面に顔を出すのを待った。

辺りは静まり返り、波が船端をばしゃばしゃと叩いている。その波さえ小さなもので、先ほどの混乱が嘘のようだ。

恐怖と不安が入り交じった船員達の、唾を飲む音が聞こえる。無論、私も怖かった。ラギアクルスとは初めて遭遇したのだ。しかも私はまだ下位ハンターの端くれ。相手はハンターとしてのかなりの腕があっても倒すことが難しい強豪だ。

突然、ちゃぽんと水が跳ねる音がした。その途端、船内の空気が張り裂けそうなほど固くなる。私も、来るべき時に備えて手の中にある閃光玉を握り締めた。

ところが、海面から飛び出してきたのは小さなサシミウオだった。全員が拍子抜けして息を吐き出す。

「何だよ……ただの魚じゃねえか……」

「ホントだニャー。来るなら来い、来ないなら来るな、なのニャ！」
こわばった顔を引きつらせながら、お互いに声をかけ合っている。ひよつとして、ラギアクルスは帰っていったのか？

そう考えた矢先、海原を割って巨大な海竜が姿を露にした。水の柱が空高く舞い上がり、日の光を受けて白く輝く。

「さあ来いバケモノ！」

閃光玉を投げようとしている時、気合の入った船長の罵声が聞こえてきた。

船が海竜の起こした波に揺られ、慌てて転倒しないように体を支える。

「グオオアアアア！」

ラギアクルスが咆哮し、こちらにその猛々しい顔を向けた。

「今だニャ、アンちゃん！」

サンバの呼び声に押され、私は閃光玉をラギアクルスの鼻先に向かって投げつける。閃光玉が手から飛び出す時、それについていた紐を思いっきり引っ張った。引き抜かれた紐によって絶命した光蟲は、数秒後に眩い光を発するのだ。そう、目の奥を焼くような強烈な閃光を。

私は船員達がしているように、腕で目を庇った。

夜のように真っ暗になった視界が、昼間のように明るくなったのはその数瞬後だった。

第27章 天空の謎、海中の脅威（後書き）

今回は新たにコラボキャラが登場しました。SIBA☆翔太郎先生作…「アンのハンター生活危機一髪」より、アンとサンバです（
^ー^）／

実は最近、とあるの方がコラボを申し込んでくださったんですが、金剛石が遅筆かつ時間の使い方の効率が悪いいため登場が遅れるかもしれない。以前、申請してくださった先生のキャラですらまだ未登場ですので……色々とし訳ないっす（T-T）

さて、「年末一大企画！（。；）＼（一一；）」のモンスターの募集期間が2009年12月14日をもって終了致しました。たくさんのご応募、誠にありがとうございます（^ー^）／□☆□＼（^ー^）

現在、応募していただいたモンスターについて、色々と修正や足りないところの捕捉を行っております。ですので、モンスターが公表された時には応募した時とは異なる文になっていたり、なかったところが増えていたりするかもしれません。しかし、どうしても必要だ、と思ったことを付け足したりしているだけなんで、基本的に設定は大きく変わりません。そこはご心配なさらず、作者の身勝手な行動をお許しくださいm（――）m

年末一大企画！ 新モンスター公表！？（・o・）ゞ（前書き）

大変お待たせ致しました。諸事情により、予定より遅れてしまっ
たっす（；、ㇿ、）

ではでは、新たなモンハンの世界へ！

~~~~ー（・v・）ーブーン

## 年末一大企画！ 新モンスター公表！？（・o・）ゞ

モンスターコンテスト、大変遅れて申し訳ありませんm（――）

まずは、たくさんの方のモンスターのご応募、誠にありがとうございました。  
数々の緻密な設定、ユニークな発想を拝見致しました。  
さて、いよいよ公表となります。

皆様には、これから応募モンスターに投票をして頂きます。そして、得票に応じてモンスターに賞を送らせていただきます。

投票のルールは以下の通りです。

☆できるだけメッセージからお願い致します（感想欄では、他の方がご覧になられたときに、何に投票したか知られてしまうためです。ただし、どうしてもメッセージが駄目な場合は感想欄からでもかまいません）

☆もし、自分の応募モンスターがいたとしたら、そのモンスターには投票なさらないでください。ご了承ください。

☆公平かつ客観的にモンスターの評価をしてください。作者からのお願いですm（――）m

☆お一人様の一回の投票につき、【金賞】・【銀賞】・【銅賞】・【アイディア賞】・【努力賞】の五つの賞を五種類のモンスターに当てはめ、投票をお願いします。一つのモンスターにつき一

つの賞までしか選ばないでください。

なお、【金賞】・【銀賞】・【銅賞】はそれぞれ三票・二票・一票と換算させていただきます。【アイディア賞】・【努力賞】は換算せず、得票の多かったものに授与させていただきます。

☆投票期間は2010年1月1日0時00分まで（つまり、今年いっぱいとさせていただきます）

※新モンスターの説明としてモンスターハンターをやったことがない人には分からない表現が多々あると思いますが、表現上仕方のないこととしてご理解頂けたら幸いです。

しかし、モンスターハンターをやったことがない！ という方でも作者は御投票をお待ちしております。分からない表現が出てきても、読者様自身が自由に想像してくだされば異論はありません。よろしく願います

また、応募モンスターの説明では数値的なものは省略致しました。しかし、そのデータは作者が所持しておりますのでご安心ください。そして、今回の応募モンスターでは、できるだけ皆さんの表現を生かそうと、コピペでモンスターの説明を小説欄に書かせて頂きました。ゆえに、応募モンスターの間で説明文の長さや短さなどの差が著しいことがあります、それぞれ理解した上で投票してくださいれば喜ばしい限りです。

応募モンスターの説明文の冒頭にある詩は作者が勝手につけさせていただきます（へーッ

ではモンスターの発表を始めます（「、ん、」ノ

☆小型モンスター（notボスモンスターですが、一部ボスモンス

ターになりうるものもあります)

\*\*\*\*\*

暗い洞窟に蠢く白

絡みつき、毒で蝕み、たかり来る

その魔手からは誰も逃れられない

\*\*\*\*\*

名前…シウテクトリ

別称…白蜘蛛

種族…甲殻種

サイズ…最小がアイルーサイズ 最大がリオレウスサイズ

外見…目は黒水晶のようで8つ目がある。別称のとおり前身は純白。体の各部位に鉱物のような附着しており、攻撃に使うときがある。足には鋭い毛がびっしりと生えている

性格…テリトリーさえ侵されなければ、必要以外の戦闘を避ける温厚な性格。しかし、テリトリーを侵されると凶暴になる

戦闘方法…直線的な突進(無属性) ・糸をおしりからだし雁字搦めにする(無属性) ・口から毒の塊を吐く(毒属性) ・噛みつき(毒属性) ・集団攻撃(無属性) ・鉱石飛ばし(無属性)

戦闘スタイル…じわじわと敵の体力を奪っていく

苦手属性…一番は火属性 二番目は雷属性

弱点…腹部（打撃に対しては耐性があるが、斬撃や銃撃には弱い）

その他…生息域は洞窟が多い。ごく稀に水中に巣を張るという変種が言うという。生活は群れで住んでいる（20～40匹単位）

\*\*\*\*\*

猿だと思っあなごて侮るべからず

木から木へと飛び移り

隙あらばお目当ての物をかすめ盗る 密林の盗賊団

\*\*\*\*\*

名前…ルーバン

別称…影獣えいじゅう

種族…牙獣種がじゅうしゅ

外見…密林などの気の上に生息する尻尾の発達した薄茶色の毛のサル。ハンターよりふた回りほど大きい

戦闘方法…樹の上から尻尾や果実で攻撃。攻撃に属性は無し

解説…非常に素早く攻撃を避けることさえ難しいが、一度木の上から落とせばサンドバッグと化す。特筆すべき攻撃は盗み。“レア度に関係なく” アイテムを盗んでゆき、返ってこない。状態異常が決まると致命的ダメージのチャンス

### ☆大型モンスター（ボスモンスター）

\*\*\*\*\*

水中に潜む藍 ひそ ディープ・ブルー

静かなる闘士

それは真空中に舞いし太古より生きる龍 いにしえ

\*\*\*\*\*

名前…ギルファンドル

別称…真空龍 しんくうりゅう

種族…古龍種こりゅうしゅ

サイズ…平均・1930cm位（オオナズチより一回り大きいぐらい）

外見…体色は藍色でクシャルダオラとガノトスを掛け合わせた様な感じで具体的には……、・全体的なベースはクシャルダオラ・角はガノトスの頬ビレみたいな感じ（ちなみに首はクシャルよりやや長め）・翼もガノトスの翼（胸ヒレ）のようになってる（翼とは別に前足もある）・尻尾もガノトスのものに近い

生態…海に住んでおり主食は海藻やオキアミなど（雑食性）。時々陸に上がり日光浴などもする。ちなみに飛行能力はない

性格…基本的には大人しい性格だが敵意を感じると大暴れする（その為凶暴な性格のモンスターだと思っている人も多い）

特殊能力…真空域↓自分の周りに真空空間を作り出し（剣士系ハンターの間合い位の広さ）そこに入った者のスタミナを削り取る（その中にいるだけで双剣の鬼人化時やハンマーなど溜め時のように徐々にスタミナが減っていく）。尚、真空域発動時は打撃・切断に対する肉質が柔らかくなり（空気抵抗が無くなる為）代わりに弾系統攻撃に対する肉質が硬くなる（進化の過程で弱点を克服した）。尻尾切断後にあまり発動しなくなり角の部位破壊もすると完全に使えなくなる

戦闘方法…真空ブレス（真空波）【無属性】（水陸両用で単発と3連発がある）・突進【無属性】（水中で真空域を発動していない場合は水流【大】の効果有り）・尻尾振り回し【無属性】（地

上でガノのように） ・水中爪攻撃【無属性】（テオ&ナナの炎のパンチ的な感じで陸では翼や尻尾が邪魔をして出来ない）

属性耐性…火と雷の属性に弱く、次に弱いのは龍属性。状態異常属性は麻痺の耐久値が低いが持続時間が短い。逆に毒は耐久値は高いが持続時間が長い。睡眠は普通。

弱点部位…頭と胸

部位破壊…・角 ・翼 ・胸 ・尻尾切断（切断系のもので切断可能）

\*\*\*\*\*

野を駆け 山を駆け 谷を駆け  
はや疾きこと雷の如くは天翔る天馬なり  
いかずち  
あまかけ  
ペガサス

\*\*\*\*\*

名前…ペガサス

種族…古龍種

サイズ…キリン程度

外見…言わずと知れた、羽の生えた馬。体が白光に包まれている。



体表もキリンと同じく、白く輝いている。サイズは現実世界の馬ウマ、小さいアフリカゾウ並の大型種まで

特徴…キリンの亜種。雷撃を出すのもキリンと一緒に。だが、リオレウスと同じように空を飛び攻撃する

戦闘方法…空からの突撃、そして落雷。これはリオレウスと違い自分の周囲、もしくは真下にしか落雷できないため、離れていれば落雷の攻撃は防げる

弱点属性…キリンと違い睡眠はまったく効かないが、その分毒に弱い。属性攻撃はほとんど無効

弱点…頭部の角、もしくは羽。ただし、角は散弾か打撃属性（ランス、もしくはハンマー、狩猟笛）しか効かず、羽は切断系しか効かない

\*\*\*\*\*

人の侵入を拒む雪の世界

そこに棲すまう温厚にして狡猾オオカミな戦士  
疾風の如く獲物を追う追跡者チェイサー

\*\*\*\*\*

名前…ヴィアル（♀）／ヴィアリク（♂）

別称…氷翔狼／黒翔狼

ひしょうろう  
こくしょうろう

種族…牙獸種

がじゅうしゅ

サイズ…2 mくらい（雌雄共に）

外見…雌は毛色は碧みがかった白に近い銀色でふんわりとしている。瞳は氷のように冷たい蒼い色。狼のような姿をしているが、尾は三又に分かれており、その間から水晶のような淡い赤色の結晶体が存在する。雄は青みがかった黒い体毛をしており、結晶体の色が濃い赤色になっている他は雌と同じである。

特徴…非常に大人しい。ちなみに素手で尻尾の結晶体に触ると低温火傷するので注意。ごくまれにはあるが、遠吠えで同族を呼ぶ事もある（雄のみ）。体力が残り少なくなると咆哮を使った後に他エリアへと逃げて行く。知能が非常に高く、人の言う事を理解できる。体毛はふわふわだけど凍らせて刺々しくする事も可能。雪山などの寒冷地帯に住み、雪が積もった中でも、氷が張った水の上でも安定したスピードを保てる。足の裏には小さな細かいトゲがあり、それがスパイクのような役目を果して氷の上でも軌道修正が出来る。跳躍力も中々ある。基本的に雄は繁殖期以外は単独で生活し、雌は他の個体と少数で群れて生活する

戦闘方法&スタイル…すばしっこく動き回って翻弄<sup>ほんろう</sup>し、たまに攻撃。相手が疲れてきたら良く攻撃をしてくる。攻撃属性は大体雷と氷。氷に至っては属性やられも付加される。攻撃は基本的にブレス、尾での薙ぎ払い。リオレイアのサマーソルトのような攻撃もたまに行う

\*\*\*\*\*

砂塵<sup>さじん</sup>を巻き上げ 現れたるは

攻防万能のエキスパート

それは鉄壁を誇る古代兵器<sup>ダイミョウザザミ</sup>

\*\*\*\*\*

名前…タンクザザミ

種族…甲殻種（？）

外見&特徴…本来、甲殻種はモンスターの死骸から背負うヤドを得るのだが、コイツは“太古の技術”から殻を得た。失われた太古の都市に眠っていた兵器を殻としたとんでもないモンスター。中身は、戦車を殻にしたダイミョウザザミ。巨大な爪と、赤い体色が特徴

弱点属性…戦車自体が鉄のため、雷に弱い。ダイミョウザザミも雷に弱いが、火には格段に強くなった。そして、水圧を利用したブレスを使い、戦車に残っていた弾丸を発射させる。弾丸は任意で変えられるらしく、貫通弾、散弾など。城や街の壁すら破壊する弾丸を得て、さらに火属性という弱点をなくした。毒、麻痺、睡眠は以前と同じように効くが、殻（戦車）に幾ら当てても効果なし。モンスター本体に当てないと意味がない。

弱点…ただし、あまりにも重い装備のためスピードはガタ落ち。得意のジャンプもできず。接近戦も以前より弱くなった。殻を破壊するのは、打撃属性でないと不可能

戦闘方法…爪引っかき、突進、ブレスを利用した弾丸を発射など

その他…ヤドを破壊すると自分が住んでいる村にバリスタを配備してもらえる（戦車という太古の技術が手に入るため、ハンターズギルドが大喜びW）

\*\*\*\*\*

氷の生きた宝石

ひょうげん  
氷原を統べる芸術アート

それは血の紅に身を染めし 見るものを魅了する

\*\*\*\*\*

名前…デグリシャルガ

別称…赤粧竜せきしやうりゆう

種族…飛竜種ひりゅうしゅ

解説…

極寒に地にのみ生存するため、最近まで存在が知られていなかった飛竜。

名前は「氷河を削る者」という意味。

氷の中で眠っている姿を見たという報告があるが、真偽は定かでは

ない。

ウカムルバスの幼生とする説が一部の研究者によって提唱されたが、その後これは誤りであるとされた。

雪の中で生活している間に鱗に積もった雪が凍り、全身が氷に覆われていて、その姿はすばらしい氷像のよう。

ごく稀な吹雪の晴れ間に、デグリシャルガが太陽の光を浴びる姿を見たあるハンターは、その姿を描きとめるために武器を捨てて筆を取ったという。

外敵の少ない環境に生息するからか、警戒心が小さく、非常に穏やかな性格をしている。

その反面沸点が低く、攻撃を受けるとすぐに怒り始める。

だが、諦めもいいのか、体力が減ると逆に怒りにくくなる。

怒り状態になると、氷をまとった鱗が逆立って刃となり、触れるものの全てを削り取る全身凶器の姿へと変じる。

普段は雪化粧をされていて真っ白だが、怒り時は鱗の下の血管が体表に浮かび上がり、白い体に赤いラインを引いたような姿になる

サイズ&外見…

外観はリオレウスに近いが、翼は退化して小さくなり、翼というよりもヒレに見える。

翼には細かい翼爪がびっしりと生えているが、普段は横向きに倒れている。

全身が青白い鱗で覆われて、その上に氷と雪を纏っている。

後肢は非常に発達していて、尾は先端にいくにしたがって細く鋭くなっている。

頭の両横から前方に突き出すように、真っ白な角が生えていて、先端はスコップのように平らに広がっている

怒り時

全身の鱗が逆向きに逆立つ（一枚だけ向きが変わらない、順鱗とい

うレア素材が存在)。

翼爪が立ち、鋸のこぎりのような翼に。

鱗の下から血管が浮かび、全身に赤い線を引く。

## 性格

普段は大人しいが、反面怒りやすく、一度怒ると手がつけられなくなる

## 戦闘方法..

- ・ 噛みつき

目の前の敵に噛みつく攻撃。飛びつきながら行うことも（無属性）

- ・ 猛ダツシュ

追尾性能の高い突進攻撃（無属性）

- ・ 頭突き

頭の角で敵を突く攻撃（無属性）

- ・ 滑空攻撃

一度空中にジャンプし、滑空しながら翼で打つ攻撃（無属性）。怒り時はダメージが大きく増加する。

- ・ 雪飛ばし

後脚で雪玉を蹴り飛ばす攻撃（氷属性・雪だるま）

- ・ 尻尾攻撃

振り向いた後、尻尾で薙ぎ払う攻撃（無属性）

- ・ バックジャンプ

素早く後方にジャンプして距離を取る行動。連続で行うことも

- ・ カウンター

バックジャンプ後、飛びついて攻撃する（無属性）

- ・ 雪煙

角で雪をすくい上げる攻撃。ハンターは一時的に視界を奪われ、落ちてきた雪に触れると雪だるまになる

すくい上げに巻き込めれると空中に飛ばされ、結構なダメージを受

ける

・怒る

咆哮（バインドボイス大・ダメージあり）と共に、怒り状態になる全身（首から尻尾まで）の鱗が逆向きに逆立ち、接触するだけで敵の肉を削り、ダメージを与えるように  
以下のような行動が追加される

・咆哮

バインドボイス（大・ダメージ無し）を行う

・空中尻尾攻撃

前方に高くジャンプし、前方宙返りをしながら尻尾で地面を攻撃した後、敵の後ろに着地する（無属性）

・雪棘飛ばし

鱗の逆立った尻尾で雪をすくい、尻尾を振る動作で前方に飛ばす攻撃（氷属性）。散弾のように広範囲に飛び散るため、一つ一つの威力は小さいが、近くで食らうと即死級のダメージをうける

・防御姿勢

尻尾を体に巻きつけて丸くなり、一時的に鱗を閉じて防御力を高める。閃光玉で視界を閉ざされるとかならずこの姿勢になる（閃光玉を使われていなくても使う）。怒りが収まっているわけではないので、しばらくすると咆哮と共に鱗を逆立てて攻撃形態に戻る

この際、至近に大ダメージの当たり判定が発生する

・血煙突進

少し後ずさりする予備動作の後、ジャンプして角を雪に突っ込み、雪と一緒に敵を空中にすくい上げた後、その下を駆け抜けながら背中の中鱗で引き裂く攻撃（氷属性・防御半減）。獲物の血で、真っ赤な雪が舞っているように見える

戦闘スタイル…怒るまでは消極的で、バックジャンプを多用する。

怒るとバックジャンプは一切行わなくなり、苛烈な攻撃を始める

耐性..

火◎・水△・雷○・氷×・龍△（◎非常に有効、○有効、△普通、×無効）

麻△睡○毒×気絶△（○なりやすい、△普通、×なりにくい）  
閃光玉、落とし穴、シビレ罠、肉は効果あり。

弱点..怒り状態になると、鱗が逆立ち、肉がむき出しになるため、  
極端に肉質が柔らかくなる。特に、背中を狙うことができれば大きなダメージを与えられる。また、逆立っている鱗ははがれやすく、  
攻撃を重ねれば剥がしてしまうことも可能

\*\*\*\*\*

森に咲いた可憐な花

だがそれは罠

美しくもずる賢い 森に潜むもう一つの狩人

\*\*\*\*\*

名前..ビスカトルス

別称..異常花

種族..獣竜種



サイズ…ゲリヨス並

外見…美しい花卉の様な襟巻きを持つ、前足は貧弱だが対して後ろ足は強靱。顔は鰐に近く、口内は襟巻きと同色で牙もない。襟巻きを含めた頭部は鮮やかだが、襟巻きから下は茶褐色。襟巻きの下辺りから自在に伸縮できる先端に蕾の様なものがついている2本の触手を持つ。尻尾も伸縮可能

性格…狡猾だが臆病。しかし獲物に狙いを定めれば何処までも追いつける程に執念深くなる

弱点…襟巻き、頭

弱点属性…火、氷

戦闘スタイル…多彩な状態異常攻撃で相手を弱らせてからトドメをさす

戦闘方法…触手攻撃、眠り花粉（眠り）麻痺花粉（麻痺）、粘液飛ばし（疲労）、消化液（防御ダウン）、毒針（猛毒）、触手による締めつけ（声帯異常）

備考…臆病なため普段は美しい大きな花に擬態している。花に釣られ近づいてきた獲物を一気に丸飲みしたり、触手で捕らえて口内に貯めた消化液に漬け込み獲物の悲鳴を聞きながら消化するなど狡猾。肉食だが自らの攻撃方法である花粉などを作成するために必要な花を頻繁に食べる。獲物が抵抗する場合は最初は花に擬態したまま触手を駆使して戦うが、怒り状態になると擬態をとき姿を現す。触手の先に着いている蕾の様な物が開くと、牙の並んだ口が姿を現

し、主にそこから花粉や毒針を出し獲物の自由を奪う。

尚、両性であり胎生だが胎盤機能がなく他種族の雌の胎盤に自家受精してある卵を産みつけ子を増やす。卵が孵化すると……まさにスプラッター

\*\*\*\*\*

陸海空を統べる者

森羅万象 自然の怒り

七つの翼は七色に染まる

伝説に生きし虹霓こうげい

\*\*\*\*\*

名前…ウエゼントネル

別称…虹蛇龍こうだりゅう または 天括龍てんかつりゅう

種族…古龍種

解説…ある村を巨大な嵐と共にクシャルダオラが襲った。一步も歩けないような暴風で、人々は逃げることも戦うこともできない。

そんな中、一人の少女が天に祈ると、金色の雷が曇天を裂き、七色に輝く龍が降臨した。

龍は、風と雷を操って瞬く間にクシャルダオラを退け、祈った少女と共に天に消えた。

この昔話のモチーフになった龍こそ、「天候を統べる雷」という意味の名を持つ古龍ウエゼントネルである。

蛇のような長い体に七対十四枚の翼を持つ、他の種と全く異なる生態の古龍だ。

陸上、空中、海中とあらゆる場所で活動することができ、普段は深海に身を潜めているため、目撃例が非常に少ない。

全身の全ての細胞が発電機能を持っている他、クシャルダオラと同様の風を発生させる器官も備えている。

非常に頭が良く、また思慮深い。

戦いにおいても、相手の動きをじつと観察するそぶりを見せることがあり、相対したハンターは口を揃えて「得体が知れない」と不気味がる。

今までに怒り状態になるのが確認された事例がなく、ウエゼントネルが怒ると天地海の全てが引き裂かれると噂される

外見…細長い白蛇のような見た目で、長いものは全長五十メートル近くにもなる。

頭部には黄金の三叉の角があり、角の付け根に赤い毛が生えている。この毛は非常に長く、体長の倍ほどもある。

古くは四肢があったが、今は退化してしまっただけ存在しない。

頭の少し下（全長の1割くらいの位置）に、体の両側面に伸びる巨大な翼があり、そこから後方に向かって、少しずつ小さくなりながら合計七対の翼が並ぶ（わずかに重なるように連なり、総合的には巨大な三角形のヒレに見える。事実、水中ではヒレの役割）。

この七枚の翼は、それぞれ色が違い、赤、橙、黄、緑、青、藍、紫の順に並んでいる。

尻尾の先には尾ビレがあり、牙と翼と尾ビレにはそれぞれ異なった種類の毒を持つ（牙が毒、尾ビレが睡眠、翼は毒、麻痺、睡眠）

性格&戦闘スタイル…常に注意深く、決して怒らない。

地面を這い、あるいは地面から少し浮遊して鎌首をもたげているのが基本姿勢で、あらゆる行動の後でこの姿勢に戻る

## 戦闘方法..

### ・風鎧

相手が主に遠距離攻撃してくるときに身に纏う。

全身を筒状の竜巻が覆い、剣士は押し戻し、矢や弾を跳ね返す。

### ・雷鎧

相手が主に近接攻撃をしてくるときに身に纏う。

自分の周囲にいるものに継続ダメージと麻痺値の蓄積、矢と弾を叩き落す。

### ・噛みつき

目の前に噛みつく攻撃（鎧によって属性変化、毒）

### ・巻きつき

長い体で巻きつく攻撃（鎧によって属性変化、ランダム状態異常）

### ・叩きつけ

首を後ろに反らし、前方に叩きつける攻撃（鎧によって属性変化）

### ・這いずり攻撃

首を下げて地面を這いずる攻撃（鎧によって属性変化、ランダム状態異常）

### ・薙ぎ払い

首で前方の広い範囲を薙ぎ払う攻撃（鎧によって属性変化、ランダム状態異常）

### ・尻尾薙ぎ払い

地面から浮き上がり、尻尾で薙ぎ払う攻撃（鎧によって属性変化、睡眠）

### ・空中旋回

地面から浮き上がり、その場で勢いよく旋回する攻撃（鎧によって属性変化、ランダム状態異常）

### ・落下攻撃

高く空中に飛び上がり、全身で押し潰す攻撃（鎧によって属性変化、震動）

- ・咆哮

バインドボイス（大）を行う

- ・風ブレス

圧縮した空気を吐く攻撃（風鎧時のみ。風属性）。疲弊値蓄積小（疲弊は下の項目参照）

- ・羽攻撃

羽を風に乗せて飛ばす攻撃（風鎧時のみ。ランダム状態異常）。疲弊値蓄積小

- ・竜巻解放

体を垂直に伸ばし、風を全方位に放つ攻撃（風鎧時のみ。風属性）。使用後に風鎧解除、疲弊値蓄積中

- ・全身放電

体の周囲に放電する攻撃（雷鎧時のみ。雷属性。麻痺）。疲弊値蓄積小

- ・全身放電（大）

攻撃範囲の広い全身放電（雷鎧時のみ。雷属性。麻痺）。疲弊値蓄積中

- ・誘導放電

ピンポイントに体から電気を飛ばす攻撃（雷鎧時のみ。雷属性。麻痺）。疲弊値蓄積小

- ・落雷解放

空中に飛び上がり、飛行しながらランダムに雷を落とす（雷鎧時のみ。雷属性。麻痺）。疲弊値蓄積大、使用後に雷鎧解除

- ・電磁投射砲

体を砲身にして体内に蓄積しておいた（食べていた）鉱石を撃ち出すレールガン。凄まじい攻撃速度と威力を誇り、鉱石と衝撃波に当たり判定がある（雷鎧時のみ）。使用後に必ず疲弊状態になり、雷鎧解除

耐性..

火△・水×・雷×・氷△・龍◎（◎非常に有効、○有効、△普通、×無効）

麻×睡×毒×気絶△（○なりやすい、△普通、×なりにくい）

閃光玉のみ効果あり

弱点..

角を破壊すると風鎧と雷鎧の両方がなくなり、またその属性の攻撃も使用できなくなる。

通常時は頭に攻撃が届かないのだが、雷鎧を長時間纏っていたり、特定の攻撃を何度か使うと疲弊して倒れ、一定時間無防備になる。ゲーム的な話をすれば、攻撃から基本姿勢に戻る行動の間は鎧が解除される

隠しステータス..

怒り状態

風鎧と雷鎧を強化して同時に使う、天鎧を身に纏う。

このとき、風の強さに羽が全て抜け、風に乗って体の周囲を舞い、見た目は美しい毒の嵐を作り出す。

無敵の防壁に守られながら凄まじい猛攻をかけ、どんな敵でも葬り去るが、これは諸刃の剣である。

これは、全身の細胞が限界を超えた発電をしているから可能な技であり、使用すれば自分も命を落としてしまう。

役目を終えた細胞は砂のように崩れ、最期には発電機構を持たない角だけが墓標のように遺される

\*\*\*\*\*

売られたケンカは買いに行く

臆病にして勇敢

まさに自然が生み出した料理人<sup>ポップコーンせいぞうき</sup>

\*\*\*\*\*

名前…ポポポップ

別称…怪鳥<sup>かいちょう</sup>

特徴…太った巨大なニワトリ。背中に火山の噴火こうみたいものがある。普段は温厚で戦いを好まないが、卵を狙われたり、身の危険を感じると体中を真っ赤に変色させて怒る。血のにおいに敏感で、ハンターを見つけると一目散に逃げてしまう。しかし、喧嘩っ早いので、石やペイントボール等で注意を向けると、すぐに向かって来る

部位破壊…トサカ

戦闘方法…火炎弾噴射、ついばみ、のしかかり

怒り状態の時に噴射口にむけて“黄色い種”を投げ入れると、火炎弾がすべて無害なポップコーンになる。このポップコーンは高級品で500Zで売れる。しかも、上位になるとバター味が着く。

その他…ちなみに、彼を怒らせてポップコーンを取るだけというクエストも存在する。

\*\*\*\*\*

夢を司りし太古の幻獣 つかさど げんじゅう

獲物を眠りに誘い いさな

生み出す悪夢はその命を削る ナイトメア

\*\*\*\*\*

名前…バク

別称…幻想獣 げんそうじゅう

種族…古龍種

サイズ…平均・730cm位（キリンとイャンクックの間位）

外見…キリンビールの麒麟の黒い部分の碧色、金色の部分はそのまま（つまり鱗は碧色で体毛が金色）。頭は動物のバク（マレーバクなどが有名）の頭の頬の部分に毛を付けて（ラージャンに少し似てるかも）耳の部分を朱色の角を付けた感じ（ちなみに角の形は中国風の龍の角みたいな感じ）

生態…近年発見されたばかりの新種の古龍だが竜人族の伝承にはその存在が僅かながら伝えられている。最新の研究によるとこのモンスターはキリン近い種族のモンスターである可能性が高いらしい。この古龍の周辺には常に雪が降っており、一説によると角に雪を降らす力があるらしい。主に沼地に生息しているが時折密林や塔、雪



山深奥などでも姿が確認されている。食性は謎に包まれているが伝承では動物の夢を食べると言われている。

戦闘方法…睡眠ブレス【睡眠】（ヒプノックとほぼ同じ） 猛ダッシュ【無属性】（キリンと同じ） ・睡眠纏いダッシュ【睡眠】（体から睡眠ガスを噴出しながらの猛ダッシュ。当たると睡眠効果有り） ・ナイトメア【睡眠】（眠っているハンターに鼻先を近づけて体力を吸い取る。さらにその時に体から睡眠ガスを噴出して他のハンターに攻撃されなくする。ちなみに吸い取った体力に応じて自分の体力を少量回復する） ・氷柱降らし攻撃【氷】（まず空中に氷柱を形成してからハンターに降らして攻撃する。キリンの雷撃と同じで前方・周囲・ハンター狙いの3タイプがありハンター狙いは落下地点に日の光が射す）

弱点属性…火と雷だがあまり効果は大きくない（キリンにとっての火・水とほぼ同じ）。麻痺には弱い

弱点部位…頭（部位は頭と胴体だけでキリンとは違い胴体の肉質はそれほど硬くない）

\*\*\*\*\*

伝説の龍の上に立つ者

その怒りは絶望をもたらし 世界を破滅へ誘う  
ラグナレク いざな  
世界の終焉を告げる覇王

\*\*\*\*\*

名前…アカムルバス

別称…魔神龍 まじんりゅう または 終焉龍 しゅうえんりゅう

種族…古龍種

解説…世界の終わりを告げる古の龍。その一撃は大陸を破壊し、その一撃は全ての命を奪い、その一撃は海を消し去り、その一撃は天をも打ち砕く。覇龍と崩龍、黒龍、紅龍、祖龍の五頭を退けし者の前にのみ現れる。まさにチート

外見…見た目はウカムルバスに棘が生えまくったようなもの。体色は黒い。ひたすら黒い。ミラボレアスより黒い。闇と絶望と終わりの色。翼が隠れており、飛翔の際に現れる。ゴツイ体格で、巨岩のような大きさ

性格…「義理と人情」を重んじる。凶暴に見えて天然。受けた恩は必ず返す

攻撃方法…戦法は自由

ブレス（衝撃波）

地震

バインドボイス大

雷の雨（ミラルーツのアレ）

氷の雨（ミラルーツのアレの氷版）

尻尾大回転（横に二回転）

戦闘場所…地上のみ（戦闘中は移動の時以外飛ばない）

その他…怒ると身体が七色に光る

\*\*\*\*\*

その者の怒りは大地の怒り

自然を操る大龍たいりゅうは 破滅わざわいと禍を招く

\*\*\*\*\*

名前…グラン・マルバス

俗称…怒いかれる大地

外見…ラオシャンロン級の超巨大な古龍。いく千年もの時の中で大地と一体化しており、ラオシャンロンのような首だけが地面から出ている。まさに山のように巨大

戦闘方法…大地からエネルギーを吸い上げ、ブレスや災害などの形で攻撃する。密林、火山、岩石地帯、海中など現れた場所によって性質が大きく変わる

解説…属性、攻撃方法、弱点は地形によって変わる。基本的に属性ブレスと大地からエネルギーを噴きあげたり植物を急速成長させて攻撃する。「怒れる大地」と呼ばれ、地域の生態系に大きく関わっているため狩る許可さえなかなか下りない。言い伝えにある勝つ方

法「勝利と言う眼先の小さな言葉に捕らわれず、来世も含めた長い期間で考え、人徳的に勝つ」

以上です（へーへゞ

この企画には読者の皆様のご協力が必要不可欠です。非常に身勝手な私事情ですが、このコンテストの審査員となってくださいれば、作者、大変嬉しく思っておりますm（＿）m

ではでは長くなりました。（へーへ）／

**年末一大企画！ 新モンスター公表！？（・o・）ゞ（後書き）**

いやはや……この企画を通して出会った先生方もいるので、とてもいい経験になりましたぜ（ハーハー

重ね重ねしつこいっすが、モンスター投票、よろしく願ひします。

## 第28章 — 前奏 — (前書き)

さてさてクリスマスが近いっす。皆さん体調に気をつけて（＾／＾）

## 第28章

## 前奏

### 第28章

### プレリュード 前奏

ミナガルデ地方東部 山脈の果て とあるモンスターの兄妹きょうだい

「お兄ちゃん。朝だよ」

小鳥がさえずる穏やかな雰囲気の中、朗らかな声が響く。静かに目を閉じてじっとしていただけなのだが、レイは僕が寝っていると勘違いしたらしい。肩でぐいぐいと脇腹を押してくる。レイの翼の爪がチクチク刺さって痛い。

「あゝ、分かった分かった。起きてるよ」

起きないと、いつまでもくっついてくる妹——起きていてもくっついてくるが——のために慌てて立ち上がる。昔のことを思い出していたのだが、中断することになった。

「あれ？ お兄ちゃん、山の上の塔が光ってる！」

「塔が？ あそこには誰もいないはずだよ？」

不思議に思っただけで視線を上へ向けた。木々の葉の間から、山の頂上に建つ三つの巨塔が見える。それは、朝日の逆光で青空に黒く浮かび上がり、塔の先端から赤い光を発していた。特に、真ん中の一番高い塔の赤光しゃつこうが最も明るく煌めいている。

黒い影と赤い光

その光景は、お世辞にも縁起が良さそうだとは言えない。まるで、不吉な出来事が起こることを予感させるお告げのようだ。

「レイ、ここを離れよう。お引越した」

僕は直感でこの土地から離れた方がいいと判断した。嫌な予感というのは大抵当たるものだ。

「ええー!?　せつかく居心地のいい洞窟を家にしてたのに」

レイがぷいっと頬を膨らませ、鼻息を荒くする。ヤバイ、だだをこねる前触れだ。そうなたら手がつけれない。不吉の予兆とはこいつのことだったようだ……。

仕方ない。こうなったら奥の手だ。

「実はね、レイ。朝、あの塔が赤く光ると、その日の晩にね……恐ろしいことが起こるんだよ……」

声を一オクターブ低くし、怖い顔でレイに迫る。案の定、怒っていたレイの顔が真っ青になった。

「な、何が起こるの?」

おそろおそろ、レイが僕の顔を伺いながら質問してきた。

僕はたつぷりと間を持たせて答える。

「それはね、モンスターに殺された恨みを持つ人間のユウレイが――」

「いやああああ!　お化けえええ!」

恐怖のあまり、火炎ブレスを乱射しながら飛び去るレイ。今のブレスで二、三本木が吹き飛び、燃えて灰になった。

僕はレイの犠牲者に謝りながら、苦笑いした。いくら怖い話が嫌だからと言って、恐怖のあまりにブレスを発射するのはやめてほしいものだ。

「まあ、レイも引越することに賛成したみたいだし……いいや」  
翼を目一杯伸ばし、ゆっくりとはためかせる。辺りに風が巻き起こり、木々が揺れ出す。

体が宙に浮かび上がった。

そして、一気に翼で空気を叩き付け、空へ身を投げ出す。

頬を撫でる風。

地平線の果てに顔を出す巨大な日。あか



どんどん小さくなっていく、眼下みどりの森。  
視界に広がる自由あおの空。

飛んでいく先で、旋回しながら僕を待つ竜。日の光で、黄金に輝いている。

レイだ。

対して僕は白銀に身を包む竜。

『ソルは銀の太陽、レイは金の月。困った時は助け合いなさい。あなた達が揃って越えられない困難は無いのだから。』

昼も夜も、片時も離れてはいけません。昼に力を与える者、夜に安らぎを与える者、どちらが欠けてもいけないのです』

昔、両親から教えられたことだ。

その回想に浸っていて、先ほど見た不吉な光景が頭から抜け落ちそうになった。

ギャアオオオオオン

不気味な鳴き声が、背後に佇たたずむ塔から聞こえてきた気がした。

くとある木の枝の上

「金レイアと銀レウスか……」

とある男が、しみじみと空を眺めていた。

リオレウス稀少種、通称銀レウスの最高級の素材を使った防具を身に纏っている。“シルバーソルZシリーズ”と呼ばれるもので、

狩人<sup>ハンター</sup>が使う最高峰の装備だ。

男が頭部用の防具を取ると、肩まである長い青灰色<sup>せいがいしよく</sup>の髪がさらりと舞った。色黒の肌で、目がイタズラっぽく輝いている。

「いいね、空を飛べるってのは」

男の視線の先では、黄金に輝く竜と白銀に煌めく竜が空を舞っていた。

リオレイア稀少種と、その雄であるリオレウス稀少種だ。

「ケイ・F・ネイチャー<sup>ファイヴ</sup>様、そろそろ出発のお時間です」

木の根本にもう一人男がやって来て言った。

「んな固い名前で呼ぶなって。ネイチャーだとかケイだとか、呼び捨てでいいってのによ」

軽くため息をつきながら、男が木から飛び降りる。その時だ。

ギャアオオオオオン

突如、辺りに不気味な鳴き声がこだました。

くシュレイド跡地く

ΦΦΦΦルナーΦΦΦΦ

「よし！ 届いたか！」

ケイが慌ててミライが持ってきた箱に駆け寄る。長大な木箱だ。私はプラスと一緒に箱のフタが開けられるのを見ていた。

中には、“ガンズⅡロック”という岩のようにゴツゴツした灰色<sup>しゅりょうふえ</sup>の“狩猟笛”が入っていた。“狩猟笛”とは、シンプルに言えば、モンスター<sup>モンスター</sup>の狩猟に用いられる演奏可能な鈍器だ。もっと素晴らしい特性があるらしいが、詳しくは私も知らない。

「こ、これなくに？」

ブラスがぱちくりと目をしばたかせながらケイに訊ねた。

「わしが演奏専用に改造したんだ。笛みたいに吹き鳴らすんじゃないがな」

ケイが、どうだ、と言わんばかりに胸を張った。

「でも、何でもこんなものを取り寄せたんじゃ？」

松田じいが腰をさすりながらやって来た。すると、ケイとミライは互いに顔を見合わせてニヤリと笑った。

「今日から十日後には何がある？」

ケイが思わず振りな口調で言った。顔がイタズラっぽい笑みで溢れている。

「十日後……って、う、うそ！？」 シュレイドがこんなことになってるのに！？」

私は啞然とした。まさか……そんな資源をどこから集めるというのだ。第一、シュレイドは崩れ、街としての機能は全て失っている。

「年に一度の一大行事まつりだぜ？ 聞いた話じゃ、回りの街とかから大量の援助がされるらしい」

ケイが楽しそうに語り、ミライもそれに便乗する。

「要は、街が燃えようが、陥没しようが、祭は行われる。シュレイド復興という名義も掲げてな」

——そして、その行事で、とケイが続ける。

夢を見ているかのように目蓋を閉じ、息を大きく吸い込む。開かれた口からこぼれ出る言葉は私の心に響いてきた。

——わしらは“歌う”んだ

〈南方の貿易都市 アルタミラ〉

「……つまり、このアルタミラ上空には、北上する強力な貿易風が吹いているのだ。季節に関係なく、安定してな。

その空の道、ジェットストリームは砂漠の都市ラクシャリの上空で最も強力となるため、我々の唯一の飛行用具である気球では地上に降りられない。故に、ジェットストリームの勢いが収まるシュレイド上空から地上へ降りるのだ。

すなわち、シュレイド、ラクシャリ、アルタミラの三大貿易都市が栄えた理由は、タリ川の流れに乗ってシュレイドから南下し、ラクシャリを経てアルタミラへ。また、アルタミラからは空路を経て北上、シュレイドへ直通しているからだ。まさに、貿易の生命線<sup>ライフライン</sup>なのだ。

よし、講義はここまで！ 散れ！ 飯の時間だぞ！」

俺は教官の講義を聞き漏らすことなくノートに写し、パタンと閉じた。

昼食を食べるために、講義室を出ようとする。すると、突然誰かが俺を引き止めた。後ろから右肩に手をかけられたのだ。振り返ると、教官だった。

「アールブリード君、渡したいものがある」

しごく真面目な顔をした教官に、以前受けた気球士のテストをしくじったのかと肝を冷やした。

「は、はい。何か？」

なるべく平静を装うために、声を低くした。そんな俺の様子に勘づいたのか、いかつい顔の教官がクスクスと笑い出す。

「君は……実に優秀だ。故に、飛行船に実習生として呼びがかかったそうだ。おめでとう」

俺の手に、赤い印<sup>いん</sup>の入った豪華な紙が押しつけられた。紙の左上に“飛行船実習生 証明書”とある。

「期待してるぞ」

教官は呆然としている俺を残し、スタスタと講義室を去っていった。

証明書を持つ手がぶるぶると震え出す。体の底から熱いものが込み上げてくるのが分かった。

「よっしゃあああああ！」

俺は誰もいなくなった部屋で喜びを爆発させ、ガッツポーズをした。

＼アルタミラ 数日後＼

度重なる飛行船墜落事故に、ついに本格的な捜査が始まること  
が決定した。

“影虎”<sup>かげとら</sup> “スカイブレイカー号”の二つの装甲調査船が明後日出  
発の予定。危険区域に墜落したときに備え、乗組員に数名のハンタ  
ーも募集されている。

「エントリーは？」

若い女の声。

「もちろん二人分だ。取ってきたぞ」

そして、もう一人の男の声。

「気球に乗るの、初めてだね。一体何があるんだろう？」

女はどこか楽しげだった。

「あー、それはあれだ。神のみぞ知るってやつだ」

あくびじみた返事で応じる男。

二人のハンターが、すでに調査船への乗り込みを申請していた。

（アルタミラ飛行船場）

広い飛行船場に佇む漆黒の船。弩<sup>バリスタ</sup>や固定砲台まで設置されているそれは、異様な威圧感を放っている。

「これが影虎か……」

黒い髪の男が飛行船の視察に来ていた。全身を薄い赤色の刺々しい防具で覆っている。“クックシリーズ”と呼ばれる防具だ。トゲがついているので、下手に扱うと自分が怪我をする。その隣には小柄な女性が立っていた。

「すげえ頑丈そうな飛行船じゃねえか」

男がコンコンと影虎の黒い金属製の船体を叩く。

「はい……。えっと……影虎とスカイブレイカー号はどちらも調査船の中ではトップクラスの強度を誇っているんです……」

女性が控え目に応えた。人付き合いが苦手なのか、モジモジとしている。服装は飛行船乗組員のものなので、どうやら影虎の乗員らしかった。

「中の方はどうなってんだ？」

男が無遠慮に入り口から船の中へ入ろうとする。

「あ、あの、整備中なんで――」

「おお！ 前に乗ったスカイドリフター号とは全然違うな」

女性の小さな声は、男の豪快な歓声を前に儼く潰える。

「あの……ハ、ハンターさん」

「ふむふむ。こりゃいい大砲だな」

女性は困り果てた顔で見守るしかなかった。

## 第28章

### ——前奏——（後書き）

年末一大企画！ 公表モンスターへの御投票、お待ちしております  
す（へーへッ

**年末一大企画！（。；）／（一一；）    コンテスト結果発表！（前書き）**

いやいや、これほどいいものになるなんて……

感激っす（T—T）



## 年末一大企画！（。；）／（一一；） コンテスト結果発表！

さて、昨年12月を丸々使って行われた「年末一大企画！（。；、  
）／（一一；）」、新年が明けたということで応募モンスターのコ  
ンテスト結果が明らかになります！

それにしても実に多くのモンスター応募・コンテスト投票をして  
いただき、誠にありがとうございますm（　　）m  
チートでしょwwとか これは面白いwwとか カプコンの  
モンスター企画案並の細かさだ！ などなど

読者の皆様の色々な感想もお聞きすることができ、作者としても  
本当にこのコンテストを開いて良かったな〜と感慨に浸っております  
（T-T）感涙

ではでは、いよいよ結果発表です！

入賞モンスターとその考案者が分かります！

裏話としては、かなりの激戦でした（。；）

中盤辺りでは

「えっ……同着金賞が四体、同着銀賞二体……（。D。）ええっ！  
？ マジかよ！」

みたいな感じで（；´D`）

かなり冷や冷やしながら見守ってましたww 金賞〜銅賞まで3  
〜1票の価値の差をつけたにも関わらず、恐ろしいほどの接戦……  
さて、そんな話は置いて、結果的には数票差で別れ、綺麗に  
収まりました（、A、）

ではでは、アイディア賞からです！

アイディア賞受賞モンスターは……

ひちよう  
肥鳥 ポポポップ

考案者…SIBA☆翔太郎先生

金剛石が物申す！

ゞ(。Д。)ていつ

いやゝ、これはダントツでしたねww タンクザザミとかなり張り合っていました。後半の追い上げで競り勝ちました。タンクザザミには敢闘賞をあげたいですね。授賞に出さないには惜しいモンスターです(TOT)

ポポポップはどうやらポップコーンを生み出すというのがウケたらしく、「笑った」とのコメントが多々ありましたww

あと、最初は別称が【怪鳥】でしたが、考案者の希望で発表の時は【肥鳥】とさせていただきます。【肥鳥】の方が愛着が湧くと思っただけだそうです。

SIBA☆翔太郎先生、おめでとうございます(\*^ー^\*)b

ではでは、続いて努力賞です。

努力賞受賞モンスターは……

＊幻想獣<sup>げんそうじゅう</sup> バク＊

＊考案者…風の双剣使い先生＊

金剛石が物申す！

ゞ（。∩。）ていつ

これはかなりばらけましたね。一票差でバクになりましたww  
ううむ、ドングリの背比べ状態でした。もしこれが金賞争いだったら気絶もんですよ……はい。一番接戦でしたね……。

（▽、；）ボソツ「もし、これが金賞争いだったら金賞が七体はいるっすからね……」

最後に勝負を決めたのは、モンスターの個性ですね。夢喰い魔と  
いうのは新鮮でした（へーへ）

風の双剣使い先生、おめでとうございます。

さて……ここから本番です。銅賞発表。

さあ、銅賞に輝いたのは……

@真空龍<sup>しんくうりゅう</sup> ギルファンドル@

@考案者…風の双剣使い先生@

金剛石が物申す！

ゞ（。Д。）ていつ

まずは一言、風の双剣使い先生、二体入賞おめでとうございます

♪（▽、）ノ”

出だしはギルファンドルのぶっちぎりでスタートでした。いやはや、びっくりです。しかし、中盤でドンと追い上げられ、トップを維持できませんでした。惜しいっ（・ω・、）

真空という新鮮さと、外見のかっこよさ？ が光りましたね。

藍色ですよ？ しかもクシャルダオラ混じりの。カッコいい！

いい戦いだったぜ！

さて、銀賞です。

なんと二体います。

栄えあるシルバーに輝いたのは……

☆赤粧竜<sup>せきしょうりゅう</sup> デグリシャルガ☆

☆虹蛇龍<sup>こうだりゆう</sup> ウエゼントネル☆

☆考案者…CENTER先生☆

金剛石が物申す！

ゞ（。Д。）ていつ

はい、二体入賞二人目、CENTER先生です！

序盤から終盤にかけて、着実に票を集めた二体です。揃って銀賞  
って、めっちゃ確率すごいっすよΣ（。D。；）

決め手は設定の意気込みでしょうかね。モンスターについている  
エピソードも好評だったのでは？

あとはユニークさですかね。死んだら墓標のように角だけが残さ  
れる……（ウエゼントネル）などなど、総合的に見てかなり完成度  
が高い（ゝ・ω・ゝ）

しかし、あと一歩及ばず（。D。）

CENTER先生、おめでとうございます。

ではでは、ラストバッター、ゴールドです。

金賞に輝いたのは……

☆氷翔狼／黒翔狼 ヴィアル（♀）／ヴィアリク（♂） ☆  
ひしやうろう　こくしやうろう

☆考案者…焰椰來氷先生☆

金剛石が物申す！

ゞ（。D。）ていつ

こちらも順調に票を集めて頂点にまで登り詰めたモンスターです。  
中盤の他のモンスター達の猛攻にも耐え、終盤で堅実に票を集めま  
した。

一番多かった声はカッコいい！ でしたww

狼カッコいいぜ！ イカしてるぜ！ 萌えるぜ！  
という意見が多々見受けられたように思います。

幻想的な神々しいウェゼントネルに比べ、デグリシャルガやヴィアル&ヴィアリクはワイルドな美しさを持つということで人気があったのではないでしょうか。

モンスターらしいモンスター、自然の中に生きる荒々しさと温厚な性格がぐつときますぜ。

さて、見事入賞なされたヴィアル&ヴィアリクは拙作の方で登場させて頂きます。誠に光栄つす。多少こちらの都合上、設定変更があるかもしれませんがご了承くださいm（　　）m

惜しくも金賞ではなかったモンスターも、金剛石のお気に入りばかりで全部出したい！！　とか思いますが、それではコンテストの意味がありません……ここは涙を飲んで別れを告げましょう（T-T）

しかし、コンテストで金賞にならなかったからといって廃案にするにはもったいないモンスターばかり……。モンスターを応募された先生が、応募モンスターをご自分の小説で登場させるというのもいいかもしれません。

さて、いよいよお別れの時間です。

最初はこの一連の企画を打ち立てておきながら、失敗した……。やめようか……。なんて思っていました。でも、この企画を通して新たに先生方と知り合ったり、コラボが決まったりと、とても良い結果を得られました。

なので、後悔はしてないっす（へーへ）

最後に、この企画を支えてくださった皆様、モンスターを応募してくださった方々、応募モンスターに投票してくださった方々、そして、「小説家になろう」ウメ研究所に心からの感謝を。

年末一大企画！（。；）／（一一；）

これにて閉幕です。

そして遅ればせながら

皆様、新年明けましておめでとうございます

♪（▽、）ノ”

年末一大企画！（。。；）／（一一；）      コンテスト結果発表！（後書き）

実は中編（？）の新連載を始めました。「WORKERS」という題名です。ちよつと本気になつて取り掛かろうと思つてます。

いやいやいや、本作品は手抜きなのか？    とかそういうのじゃないっす（ハオハ；）    コラボして頂いたりしてるのに手なんて抜けませんぜ。文章力は無いですけど……

ともかく、「WORKERS」は昨年の集大成的な作品になればいいなゝって感じっすねww    長くなるかもですが（ハハ；

ファンフィクションではなくオリジナル作品です。良かったら見てやってください（ハハヾ

まだ一話しかないので、つまんねえな（一・一）yー～

とか思われるかもですがww

ひとまずこの辺で（ハハハ）／    アデューでさあゝ♪



## 第29章 ガノトスVSラギアクルス（前書き）

さてさて、念願のモンスターVSモンスターです。猿蟹大合戦でベルキュロスVSダイミョウザザミをやったのですが、一瞬だったんで（へーへ；

今回も長いとは言えませんが……

## 第29章 ガノトトスVSラギアクルス

### 第29章 ガノトトスVSラギアクルス

とある密林の海中で

「ぎゃああああ！」

気絶から目が覚めた男が絶叫した。水中にいるせいで、口からボコボコと泡が溢れ出している。

「うるっさいわね」

あたしは胸ビレでそいつの口を押さえつけた。鋭い悲鳴がヒレに塞がれてくぐもったものになる。

だが、あたしはそいつの身体能力について甘く見ていた。

走れば転ぶ。川では泳げない。そんな男でも、それら全てを帳消しにする力……いや、それ以上の能力を持っていた。

「えいっ！」

そいつがかけ声をかけた途端、突然あたしの体が水流に押し流された。

風に吹かれた綿毛のように、あっけなく。

まるで濁流に呑み込まれたようだ。生き物の中でもかなりの大きさを誇るあたし——ガノトトス——をも弄ぶほどの威力。もてあそ

「な、何なの！？」

突然の現象に、つい取り乱す。

「俺にはこれがあるのを忘れてたっす！ 動揺してたっす！ 逃げるっすよー！」

何だったのだ、先ほどの水流は？ まるで、この男の意思に従う

かのように襲いかかってきた。いや、これがこの男の能力か？  
「うおおお！」

猛烈な叫び声と共に、男が水面に向かって駆け上がっていく。まるで段差を上っていくようだ。

ふと私の嗅覚が海の向こうから迫り来る危険な臭いを察知した。海流が危険なモンスター臭いの臭いを運んできている。

「嫌な感じね……」

あたしは逃げる男を追いながら、ポツリと呟いた。

氷氷氷氷グレイ氷氷氷氷

水面に顔を出すと、近くに船が漂っていた。ボロボロになり、マストがへし折れている。

不思議に思っただけ再び海中を覗くと、船の下に巨大な竜が見受けられた。俺を追跡してくるガノトトスとはまた違う生物だ。

「な、なんすかあの竜!？」

獐獐そう顔にしなやかな体軀<sup>たいく</sup>。あんなのは見たことがない。新種や変種の類<sup>たぐい</sup>だろうか。背中の突起が青白く発光している。

それは船の回りを泳ぎ回っている。船をつけ狙っているのだろう。前門の海竜、後門のガノトトス。

これでは船は助からない。ガノトトスは俺に気を取られているが、俺がいなくなれば船にちよっかいをかけるに違いない。船の上には人影も見える。

そう思った途端、逃げ足が鈍くなった。

——自分だけが逃げて、あの船を見捨てていいのか

良心の呵責にさいなまされる。

「に、逃げていいわけないっす！」

声を震わせながら眼下のガノトトスに向き直る。逃げられないなら戦うしかない。

しかし、そこに巨大なガノトトスの姿は無い。

慌てて周囲を見渡す。

「えっ!？」

ガノトトスが猛烈なスピードで船に向かって泳いでいた。

まるで船に突進するかのような勢いだ。まったく減速する様子がない。

「やめろお！」

水流を使って急いで追跡するが間に合わない。ガノトトスは“大地の絆《ガイアタイズ》”の範囲外にいたので、水で妨害することもできない。

ガノトトスが船にぶつかると思った途端、自分の口から「えっ」という言葉が漏れ出たのが分かった。

ガノトトスは思いっ切り激突した。

海竜に向かって。

その巨体の肩で、海竜の横顔をカチ殴ったのだ。

「ギャアオオン！」

海竜が短い悲鳴を上げて、ガノトトスを睨みつけた。突然の襲撃者に少したじろいでいるようだ。

「ここはあたしの縄張りだ！ 出ていきな！」

巨大なモンスター同士が、獲物を狙って対峙している。今のうちに船を陸に着けさせなければ。

俺は水の中に“水の板”を敷き、その上を走って船に向かった。泳げなくなったら水は渡れるのだ。

俺はボロボロの船に乗り移った。甲板は色々な道具や木の破片が散らばっている。

「あなた誰？」

甲板の隅の方から声がした。

ふと見ると太刀を背負った少女が船べりに掴まってうずくまっている。

ランポスシリーズと呼ばれる、綺麗な水色の防具を身につけていた。ランポスという人の背丈ほどの肉食竜の素材を使って作るものだ。比較的手に入れやすい防具として定番化されている。

その少女の隣には二足歩行ができる猫、アイルー。防具を着て、主人であろうその少女にしがみついている。

「おお、いいところにハンターさんが来たぜ！ 俺達を助けてくれ！」

船室の壊れた扉を開けて、坊主頭の男が叫んだ。

「ハ、ハンター！？」

耳を疑った。なんで俺が【ハンター】なんだ！？ 俺は何も武器を持っていないし、あんな狂暴な生き物じゃない。しかも、俺は喋れるんだ！ ……さっきのガノトスとも話ができるのはなぜだか分からないが……。

驚く俺を見て首をかしげる乗員達。首をかしげたいのはこっちだ。「ハンターじゃないのか？ 防具を着てるからてつきりそうだと思っただが……」

どうやら、俺の考えている【ハンター】と、この人達が言っているハンターとは意味が違うらしい。

色々疑問はあるが、今はそれどころではない。足の下海中ではモンスター達が獲物目当てに戦っている最中なのだ。

「ともかく、船を陸に着けるっす！ 今、海中ではガノトスと海竜が戦ってるっす！ この船を目当てに！」

一瞬の静寂の後、俺の言葉に船員達が騒然となる。それもそうだ。自分達は二匹もの大型モンスターに狙われていると知ったのだから。「くそったれ、怪物共の水族館かここは！ 船は捨てるしかねえ。」

マストは折られたし、オールは今頃海ん中を漂流してる」

先ほどの坊主頭の男が怒鳴った。どうやらこの船の船長らしい。しかし、船から降りれば危険が増す。海は水棲モンスター<sup>すいせい</sup>の天下なのだ。あの二体の戦いに決着がつく前に逃げ出さなければならぬ。

「皆さんに泳げない人はいないっすよね？」

確認を取ると、全員が泳げると言った。ガノトトス進種なのに泳げない俺には羨ましい限りだ。

「じゃあ、俺が護衛に回るっす。皆さんは陸に上がることで考え、一生懸命泳いでくださいっす」

船員達は頷き、次々と海へ飛び込んでいく。

「私も護衛に回るよ」

ランポスシリーズを着込んだ少女が、何かのマスクを拾って顔に取り付けた。マスクからは太い管が伸びていて、彼女に背負われた金属製のボンベにつながっている。透明な板が顔全体を覆う仕組みになっている。水中で呼吸するための装置だろうと予想する。

彼女のアイルーも、小さなボンベを背負い、透明なマスクを顔に取り付けていた。アイルー用に作られたものらしい。

「水は嫌いなものニャ」

と半泣きになっているが、我慢して主人についていくらしい。

無理はしなくていいっすよ、と声をかけると「アンちゃんのためについていくのニャ！」と突っぱねられた。

「名前はアンって言うっすか？」

少女に問いかける。彼女はマスク越しに俺の顔を見てきた。白い肌に黒い髪が映えている。

「そうだよ。君は？」

お返しに、という感じで問い返され、手が差しのべられる。

「グレイっていうっす」

その手を取り、軽く握手した。

★★★★★アン★★★★★

二体の大型モンスター同士の戦いは壮絶だった。あれに比べたら、人間の二対一の対決はいかにちやちいことだろう。

「ギユワァァッ！」

ガノトトスが叫びながらラギアクルスに突っ込んだ。水棲モンスターだけあって、水中でのその動きは速い。

ラギアクルスはガノトトスの突進を避けようと右へ旋回するが、間に合わない。ガノトトスの強靱な胸ビレに頭を強打された。まるで鎌が雑草を刈り取るかのようにされ、ラギアクルスの体が大きくのけぞる。

体格差で圧倒的なパワーを誇るのはガノトトスの方だ。しかし、俊敏性と狂暴性はラギアクルスに劣る。

先の頭への一撃が怒りに火をつけたのか、ラギアクルスの背中にある複数の突起が青白く光り出す。

そして、ガノトトスにとってさらに不利なのは……

「グォァァァァァァァ！」

ラギアクルスが怒号を発した。あまりの音響に辺りがビリビリと震える。それと同時に、ラギアクルスのしなやかな体を中心に球状の電流が発生し、その周囲を飲み込んだ。

油断していたガノトトスはその電撃を受け悲鳴を上げる。強烈な電流に体がビクビクと痙攣し、動かなくなった。

そう、ガノトトスは電撃に弱いのだ。教官から聞いた話だったが、今の戦闘を見れば一目瞭然。一撃で伸びてしまっている。

動けなくなった相手に、ラギアクルスは容赦なく襲いかかる。ガノトトスの白く滑らかな腹部に、鋭いナイフのような牙を突き立てた。

「キュォォォォォ！」

痛みに目が覚めたのか、ガノトトスが暴れ出す。だが、ラギアクルスの強靱な顎あぎとは外れない。吹き出した赤い血が、霧のように漂う。「血が……」

痛々しいガノトトスの姿に思わず目を背ける。

乗員達はもう少しで上陸するはずだ。上陸したら、サンバが安全な場所まで先導することになっている。私達もそろそろ撤退しなければならぬ。

声をかけようとグレイを見てみると、驚いたように目を見開いていた。じつと戦いに見入っている。ぶつぶつと何かを呟いて、泡が口から溢れ出ていた。

彼はウキの役割を果たす空気袋のついたスーツを着て、水の中に顔を浸けて戦いを見守っている。

ふと戦いに目を戻すと、ガノトトスが死んだ魚のように水面に浮かんでいた。腹部にはいくつもの噛み跡があり、赤い血で姿が霞んで見える。一方的なやられようだった。

弱々しくラギアクルスに抵抗しようとしたが、胸ビレの付け根に食いつかれ、動きを制される。

ラギアクルスの背中の光がだんだんと青白い輝きを増していく。噛みついたまま、とどめに帯電技スパークをするつもりのようなのだ。

「ひどい……」

モンスターとは言え、心が痛む光景だった。

この世界は弱肉強食の元に成り立っている。自然界でもああやってモンスターの闘争が起こり、強い者が勝ち、弱い者は食られる。あのラギアクルスとガノトトスのように。

グレイの肩に手をかけ、離れようと合図しようとした時だ。彼が鬼気迫る顔で何かを叫んだ。声量に比例して、大量の気泡が彼の口から溢れ出す。

水中なので、彼の叫び声はよく聞こえなかった。聞こえなかったが、口の形を見ることはできた。



ヤメロ

確かにそう言った。

グレイは、とどめの電撃を受けて傷だらけの体を痙攣させているガノトトスを一瞥すると、着ていたスーツの空気を抜き始めた。

私は驚いてグレイの肩を掴もうとした。しかし、背負ったボンベの浮力が強すぎ、掴み損ねる。

グレイはどんどん海底に向かって沈んでいく。

どうするべきか思い悩んでいると、陸の方からサンバが泳いできていた。無事、乗員達を陸上のどこかに隠れさせてきたのだろう。

ガノトトスに目を移すと、ピクリとも動かずに水面を漂っていた。ぐったりと体を横にして、波に揺られて赤い霧を振り撒いている。

ラギアクルスと言うと海底に向かって一目散に潜っているところだった。向かう先はサンゴが周囲を取り囲む平たい岩場だ。

そして、グレイもそこに向かっていった。

私はサンバに目で合図をして、ボンベのメーターを確認した。まだ空気は残っている。

意を決してグレイの後を追った。サンバは私の背中のボンベにしがみついている。

昼なので、海中は日の光が射し込んでいて明るい。眼下には、一面に美しいサンゴが広がっている。ちらほらと色鮮やかな魚も見受けられた。こんな状況でなかったら、まさに海中の楽園だ。

潜っているうちにふと気づく。その事実には、頭の中が真っ白になった。

グレイはボンベを着けていない。

武器も持っていない。

そして、さっきからずっと息継ぎをしていない。

## 第29章 ガノトトスVSラギアクルス（後書き）

ガノトトス進種、【ハンター】、グレイの能力などについては後に説明されますが、先に知りたい方は、金剛石とコラボしてください。CENTER先生の小説、「MONSTER HUNTER EVOLVE」をご覧ください（ハハッ

私事情により、携帯投稿のためURLは載せられませんm（

）m

が、金剛石のお気に入り小説から飛ぶことができます。

### 第30章 マリモ戦士と光を願う者（前書き）

マリモって可愛いですよね W W

二つ丸いのがちよこんちよこんと自室のミニ水槽に飾ってあります。

—— あっ、ごめんなさいマリモ（；´ 旦´）  
すっかり忘れてたっす！

## 第30章 マリモ戦士と光を願う者

### 第30章 マリモ戦士と光を願う者

氷氷氷氷氷氷氷氷氷氷

——何で黙ってたんすか！

俺は海面を海藻のように漂うガノトスに、心の中で叫んだ。

ふわりと例の岩場に降り立つ。目が覚めた時はすぐ近くにいたガノトスに驚いて逃げたため、気づかなかったのだが、俺は気絶している間に彼女の巣に連れてこられていたのだ。

あの時、もし俺が冷静にものを考えられていたなら——

——気づいただろう。彼女が俺を食うつもりなら、俺が気絶している間に俺を殺せていたということを

——気づいただろう。気絶している俺が他のモンスターに襲われないように、彼女が俺を自分の巣に連れてきてくれたということ

——気づいただろう。なぜガノトスがわざわざ巣を持っていたのかということ

——気づいただろう。

『うるっさいわね』

そう言って、絶叫する俺の口を彼女がヒレで塞いだ理由を

——気づいただろう。彼女に子供がいたということ

なぜ彼女が海竜に無謀な戦いを挑んだのか。

船を狙うためではなかった。

気絶から目覚めた時、俺が大声さえ出さなければ、眠りから覚めたガノトトスの子供が巣から出てくることは無かったのに。海竜がその子供を狙うことも無かったのに。それを阻止するために、ガノトトスが海竜に突っ込んでいく必要も無かったのに。

——何で黙ってたんすか！

「あんたのせいで子供が起きて、出てきちゃったじゃない。ちょっと、このワニ追ひ払うの手伝いなさいよ」

——なぜそう言わなかったんすか！

周りを見ると、三匹の子供が寄り添うようにして水草の上を泳いでいるのを発見した。

幼体のガノトトスは綺麗だった。若い鱗が水中に射し込む日光を浴びて、淡い瑠璃色にツヤツヤと輝いている。ヒレはとても小さいため、泳ぐ力はほとんど無いようだ。フワフワと水中に浮くのが限界らしい。あれでは海竜からは逃げ切れない。

「ごめんなさいっす。ちよつとこつち来るっす」

俺は不思議そうにこちらを見つめてくるガノトトスの赤ちゃんを三匹とも抱え込んだ。驚いたことに、逃げようとはしない。俺の遙か祖先がガノトトスだからだろうか。

近くにあった長い水草を引きちぎり、ロープの代わりにしてガノトトスの子供達を俺の胸の辺りに結いつける。クッションとしてモジャモジャの水草も間に挟んだので、俺の胸から巨大なマリモが生えているようになった。マリモからはガノトトスの子供の顔が三つ、ちよこんと飛び出している。

「よう、美味そうなもん持ってるな」

突然、背後から声がした。

咄嗟に反転しながら前に飛び出し、大きな“水の盾”を作った。

胸部のマリモを守るように、両腕でそれを前にかざす。

ガキンという音がして、強い衝撃が腕を揺さぶった。

「ちっ、外したか」

水の盾に牙を阻まれた海竜が、忌々しそうに身を引く。いつの間にか忍び寄ってきていたのだ。

それに、なぜだか知らないがこいつの言葉も“分かる”。

「海竜さん、お、俺の言葉が分かるっすか？」

敵の気を散らす意味も含めて相手に話しかける。内心ではかなり焦っていた。心臓が早鐘を打ち、早く逃げろ、早く逃げろと喚いている。

海竜も多少は驚いたのか、一瞬動きが止まる。不思議なことに、相手の言葉が分かるようになるとモンスターの顔にも変化が感じられる気がした。口を半分開いている海竜のワニのような顔が、驚愕に口をポカンと開けたアホ面<sup>づら</sup>に見える。

「お前、何者だ？」

「い、生き物っす」

「そんなもん見りゃ分かる」

音が鳴らないように唾を飲み込み、必死になって逃げる方法を考える。

見たこともないモンスター、しかもガノトスを倒してしまうような奴に勝てる訳がない。ましてやここは水中だ。泳ぐことができれば浮力を味方につけられる。

しかし、俺は泳げない。先祖がガノトスなのに。

しかも、戦うには武器が要るが、水中では浮力が逆に敵となる。だからまともに戦えない。

泳いで逃げられるなら浮力を味方にできる。でも泳げない。俺の手首と足首に着いているヒレはただの飾りだ。

戦おうとすれば浮力が敵になる。武器をまともに振り回せない。なんという皮肉な状況だ。

すると、目の前に何かが降ってきた。鉄のパイプや銚もりだ。ふと見上げると、水没しかけの船が波に揺られていた。よく見ると船底に穴が空いている。バラバラと降ってくる道具は、船の甲板に転がっていたものだろう。

「よそ見は禁物だぞ」

不穏な声と共に、手から盾が弾き飛ばされる。

はっとして視線を戻すと、目前に海竜の口が迫ってきていた。並んだナイフのような牙が、血に赤黒く染まっている。

「ひゃあっ！」

慌てて横に身をかわす。ついでに“水の階段”を作って駆け上がる。

「くそっ、チヨロチヨロ動き回りやがって」

心臓が鼓動を忘れていた。

死ぬかと思った。

★★★★★アン★★★★★

驚くしかなかった。

グレイが胸からマリモを生やして戦っている。マリモからは、小さなガノトスの顔が三つ飛び出していた。

海竜はグレイが身をかわすたびに呻き声を上げていた。まるで攻撃が外れるのを悔やんでいるようだ。

海面の船が水没しかけているせいで、甲板に散らばっていた道具がバラバラと沈んできっていた。

鉄パイプに銚いかり。金網に船の錨いかり。そして、閃光玉。

「閃光玉!？」

慌ててそれを掴み取る。あの時、海竜に向かって投げた……はずの物だ。

〽数十分前〽

「今だニヤ、アンちゃん!」

サンバの呼び声に押され、私は閃光玉をラギアクルスの鼻先に向かって投げつける。閃光玉が手から飛び出す時、それについていた紐ひもを思いっきり引っ張った。

引き抜かれた紐によって絶命した光蟲ひかりむしは、数秒後に眩い光まばゆを発するのだ。そう、目の奥を焼くような強烈な閃光を。

私は船員達がしているように、腕で目を庇った。

そして、その一瞬後、強烈な光が辺りを包む……はずだった。

しかし、実際は違っていた。

閃光玉を投げつけようとした私は、波に揺られた船に足を取られた。そして、閃光玉を中途半端に投げ出し、腕で目を庇った間拔けな姿勢のまま、後頭部から甲板に激突して気絶したのだった。



閃光玉の紐は効果を發揮するために引つ張られたのではなく、倒れゆく私につられてそれを甲板に引き戻しただけで、目の前が真っ白になったのは、頭を打って星が散ったからだ。

一部始終を見ていたサンバが教えてくれたことだった。

その後、閃光玉は散らかった甲板の道具類の中に身を隠し、どこだどこだと探しているうちに奴にラギアクルス船底を打ち抜かれ、マストの近くに立っている船長を食おうと飛び出してきた奴にラギアクルス激突されたマストがへし折られ、船員達がオールで漕いで逃げようとした矢先に泳いでいた奴の尾にオールを弾き飛ばされ……そして今に至る。

その例の閃光玉が、今ここで役に立とうとしている。

私は距離を置いてグレイの後ろに降りた。すぐ近くにラギアクルスがいると思うと、恐怖に胃が締めつけられる。心臓が破裂しそうな勢いで拍動していた。

「これ、まさか、光らないなんてことは無いよね……あはははは……」

全然笑えない。冗談じゃない。

もし閃光玉が光を発しなかったら、死に物狂いで陸まで逃げるしかない。こんな化け物に勝てるほど私は強くない。

初めはモンスターの血を見ることがさえできなかった私に、こんなモンスターを相手にできる訳がない。

そう思いつつも、恐怖に口が軽くなった。

「やっいワニ顔！ こっち向けアホ！」

ワニ顔がグレイ越しに私を睨んできた。黄色い地に一本の黒い縦筋の入ったギョロ目と目が合う。

ごめんなさい！

ごめんなさい！

ごめんなさい！  
ごめんなさい！  
ごめんなさい！

背中のボンベにしがみついているサンバが縮み上がるのが容易に想像できた。私も縮み上がっているのだから。

「あいつは食っていいのか？」

ラギアクルスがそう言ったように見えた。

グレイが、はっと後ろの私を振り返る。その瞬間、ラギアクルスは動き出した。

「グレイ、目をつぶって！」

聞こえるか分からないが、私は咄嗟に叫んだ。そして、手元の閃光玉の紐を思いっ切り引き抜いた。

後ろを振り返るグレイの行動を待ち構えていたかのように、ラギアクルスが食いかかってきていたのだ。

光れっ！

今ほど祈ったことはない。それくらいに願いをこめていた。

こちらを見て驚くグレイに、ラギアクルスの開かれた口が迫る。

光れっ、閃光玉！

私はギュッと目を閉じた。目蓋を閉じる直前に見えた光景は、勝ち誇ったように見えるワニ面と、背後に迫る危険に気づいて呆然としているグレイだった。

光れ！ 光れ！ 光れ！！

閉じた目蓋をさらにきつく閉じる。  
一瞬、辺りが静寂に包まれる

——うわああああっ！

グレイのくぐもった悲鳴が聞こえた。

そして、目の前が真っ白になった。

——サンバ、私、また転んだのかな……

### 第30章 マリモ戦士と光を願う者（後書き）

——あつ、ごめんなさいマリモ（；´ 旦´）  
すっかり忘れてたっす！

ひと月おきの水替え！

ヤバシヤバシ、半年以上忘れていました。この話を書かなければ  
ずっと変えないままだったかもっす（▽´ ；´）

### 第31章 見捨てられた者、見捨てない者（前書き）

今回は少し長くなりました（^ー^；  
今までの文が短いだけかもつすが……。まあどぞどぞ、ご入場く  
ださい（^ー^）／

### 第31章 見捨てられた者、見捨てない者

第31章 見捨てられた者、見捨てない者

★★★★★アン★★★★★

嫌な予感や悪い予感というのは大抵よく当たる。ただ、“大抵”  
ということは“絶対”ではないということだ。

今回は神様のご厚意なのか、悪い予感は外れた。

恐る恐る目を開けると、体を食い千切られ、水の中に赤い靄<sup>もや</sup>を噴  
出させながら断末魔の苦しみに悶えるグレイがいた、わけではない。  
目に飛び込んできたのは、傷だらけのガノトスがグレイを庇っ  
てラギアクルスに噛みつかれている光景だった。ラギアクルスは閃  
光玉を食らって視力を奪われたせいか、ガノトスの肩に食いつい  
たままがむしゃらに暴れ回っている。ガノトスは海竜を押さえつ  
けようと必死だ。

突き飛ばされたのであろうグレイは、啞然とした様子で命の恩人  
の魚竜を見つめていた。

ガノトスが、モンスターが人間を庇った。その事実を理解する  
までに、脳みそがあたふたと混乱に陥る。

グレイが胸に抱え持っているマリモにはガノトスの子供が見え  
隠れている。彼はこの子達をラギアクルスから守るためにこの海  
底までやって来たのだらう。つまり、ガノトスにはそれが分かっ  
ていてグレイを守ったということになる。そうでなければ、なぜモ  
ンスターが人間を庇うのか説明がつかない。普通ならグレイが獲物

になっていたところだ。

グレイが私のところまで海底を走ってくる。  
傍らでは、巨大なモンスター達が砂ぼこりを巻き上げながら壮絶な死闘を演じていた。しかし、受けたダメージの多いガノトトスは動きにキレがなく、体のあちこちにある傷口から血を流している。なんとなく、ガノトトスを応援したくなるのだった。

グレイは私の目の前にやって来ると、自分の口を指差し、分かりやすいようにゆっくりと喋り出した。

水に音を遮られても、口の形を見れば何を言っているのか分かる。

——ガノトトスを援護するっす

そして、彼は胸のマリモを示した。マリモには、可愛らしい三匹のガノトトス赤ちゃんが、不安げに顔を覗かせている。

グレイの体の仕組みがどうなっているのかは分からないが、水中で呼吸できるらしい。

——なぜガノトトスを助けるの？

私も口パクで質問を返す。グレイの抱えている赤ちゃんも、結局はモンスター。成長すれば、私達人間の脅威になる。自分の命を懸けてまで守る必要はないのではないのか。確かに、赤ちゃんを見捨てるのは気が引けるが……。

その間も、大型モンスター達は怒りの咆哮を上げて熾烈な格闘を繰り広げていた。視力を取り戻したラギアクルスが、スピードを生かして再びガノトトスを翻弄する。ガノトトスはそれについていけず、傷口がどんどん増えていく。

グレイはちらりと傷だらけのガノトトスを見やると、信じ難いことを口にする。

——ガノトトスはあるんだ達を庇ったっす

「えっ？」

顔に取りつけてあるマスクの中で、私の声がくぐもって聞こえる。

——俺も

グレイが自分の胸を指差す。そして、もう一方の手でガノトトスを指した。

——助けられたっす

呆然とする私に、グレイはさらに言葉を重ねる。

——俺はガノトトスに借りがあるっす

——見捨てるなんて、できないっす！

グレイは駆け出す。浮力に逆らって、水を掻き分けていく。その彼の手に、突然“槍”が現れた。海中に入ってきた光が、そこだけ不自然に屈折して、“槍”を形成している。グレイは武器を持っていなかった。ということは、彼は能力か何かで“水の槍”を作り出したのだ。

正直、戦う気力はゼロでグレイの後を追ってきた。海底に沈んでいたグレイを連れ戻すだけ、という目的でついてきたのだ。

それに、私はハンターの中でもランクが下の方。ラギアクルスと対峙するような腕になるには、普通なら十年かそれ以上、さらに言えば一生かかって無理かもしれないのだ。ましてや水中戦など初めて。ハンターとしての手前、先ほど船員達が逃げる間の護衛を名乗り出たが、もしラギアクルスが襲ってきたなら、相手の気を引き



つつ食べられないように逃げるつもりだった。

その時、背中にしがみついていたサンバが突然私の隣に飛び出した。そして、砂に埋もれかかっている小さなボウガン拾い上げる。

“ 緊急時用

本製品は対モンスター用の強力な麻痺弾が装填されているため、人に向けて発射しないこと。六発装填。水中でも使用可”

説明の書いたプレートが貼りつけられている。先ほどの船から落ちてきたのかもしれない。そういえば、ラギアクルスに襲われた時、船長が「ボウガンを探してくる」とか言っていたが、このことなのだろう。結局、船が体当たりされた衝撃で、元あった場所からボウガンが弾き飛ばされ、船長はそれを見つけられなかったようだが、サンバがボウガンの弦を引いた。カチリとトリガーが動き、発射準備が整う。

サンバが私を見上げた。

目が合う。

私達は互いに頷き合い、グレイの後に続いた。

メメメメガノトスメメメメ

嫌な予感は大抵当たるものだ。そして、今回も例外なく当たった。

あたしの縄張りに、二つ侵入者がやって来やがった。

一つは船。もう一つは海竜だ。

海竜。

最近になって急に见かけるようになった邪魔者だ。しかも、あたし達ガノトスよりも小さいくせに、異常なまでに強い。今までは情けなくも逃げてきたが、あいにく今は子供がいる。放っておけばあいつも臭いで気づくだろう。狙いやすい獲物がいると。

子供の存在に気づかれる前に撃退しなければならぬ。それに、船にはどうせ人間が乗っているだろう。あの男からはガノトスの臭いもするが、外見は人間だ。ひょっとしたら船を助けようとするかもしれない。逆に見捨てるかもしれないが。

いや、同族を見捨てるなんて許さない。たとえ、あの男が人間だとしても、船を見捨てて逃げたらあたしが許さない。

確かに人間は嫌いだ。

でも、仲間を見捨てる奴はもっと嫌いだ。

一目散に海竜に向かって突っ込む。

海竜は動きが速い。こちらに気づく前に先手を取り、強烈な一撃を叩き込まなければ。

加速する。体をヘビのようにくねらせ、推進力を得る。もっと速く。もっと速く。

周りの景色が飛ぶようにあたしに追い抜かされていく。掻き分けた水が、唸り声を上げて渦を巻く。海竜は船に夢中だ。

後ろから誰かが叫ぶ声がする。多分、あの男だろう。

あたしは海竜の体に推進力で得たエネルギーを叩きつけてやった。

「ギャアオオン！」

痛みに叫んだ海竜がすぐさま反転し、こちらを恨みがましく睨みつけてくる。

「ここはあたしの縄張りだ！ 出ていきな！」

海竜に向かって威嚇するように吠える。

「何だ、ただの魚か」

海竜は蔑むような視線を向けてきた。同時に安堵するように息を吐いてみせる。

それが癪に障る。

「悪いけど、あんたより力は強いのかな？ 体も大きいしね」

見下すような視線を送るが、相手は意にも介さない様子で肩をすくめる。

「デカイからって威張ってんじゃねえよ。あんたみたいにデカイだけなのを“ウドの太木” っつーんだ」

「口、だけは達者ね。あんたに体当たりで岩の壁を打ち崩せる？ 襲ってくる狩人達を一斉に薙ぎ払える？ あたしはできるわよ」

「負け犬ほどよく吠える、とは上手く言ったもんだ。狩人達は俺を怖がって襲って来さえないさ」

はらわたが煮えくり返ってきた。しかし、さっきからこいつを観察しているが、この海竜、できる。常にあたしの一挙手一投足に気を配っている。顔ではなんともないふうを装っているが、あたしが隙を見ればすぐにでも喉に噛みついてくるだろう。最初に与えた一撃は、ただこいつが油断してただけに過ぎない。かなりのやり手だ。悔しいが。

「言うわね。あたしはあんよりも重い一撃を食らわすことができるわ」

「世の中、できるできる、って自信を持ってる奴に限って痛い目を見るぜ？」

海竜は嘲笑う。

「あんたみてえなのが」

言うが早いか、突然そいつが襲いかかってきた。

馬鹿ね。

あたしは隙など見せてはいない。突っ込んでくるそいつに、横から鎌のように左ヒレを振るった。

ところが、それは虚しく水を掻く。

「えっ!？」

しまった、フェイントだ。海竜は、突っ込んでくると見せかけて、身を引き、あたしの攻撃をかわしたのだ。

「遅いねえ」

攻撃後の硬直から立ち直り切ってないあたしの頭に、海竜の尻尾が打ち付けられる。脳みそがぐらぐらと揺れた。一瞬、辺りの景色が霞む。

「キュオオオッ！」

雄叫びを上げて海竜に体当たりしようとするが、上にかわされる。「どうしたどうした、ウドの大本？ 力だけでスピードは全然だな」ゲラゲラと耳障りな笑い声を上げて海竜がからかう。頭に血が上る。

怒りのこもった攻撃は、どれもかわされた。そのたびにあたしの体に奴から受けた傷がついていく。だめだ、冷静にならないと……。船からは人が飛び出してきていた。陸へ向けて一目散に泳いでいる。残ってこちらを見守っているのは、あの男と太刀を背負った一人のハンターだ。

「あんた達も早く逃げな！」

とりあえずあの男は船の人間を見捨てなかったようだ。あの男は驚いたようにこちらを見つめている。

「何だテメエ？ 人間を庇うのか？」

海竜が仰天したように動きを止めた。大きなチャンスだ。

「隙ありっ！」

思いつ切り海竜に接近する。

「しまっ——」

避けようとする海竜の頭に、渾身の右フックをぶちかます。頭を刈るように放った一撃に、海竜の巨体が仰け反った。

ちらと後ろを見ると、人間達は陸のすぐ手前まで辿り着いていた。

「——っつ、今のは少し効いたぜ……」

再び海竜を見る。放たれる殺気が膨れ上がっていた。今にも海水が沸騰するのではないか、というほど怒りの炎が燃え上がっている。

背中に生えているそいつの突起が、青白く輝き出す。海竜の目の色が変わった。怒らせてしまったようだ。

「グォアアアアアアア！」

周りの水がブルブルと震撼する。あまりのやかましさに、思わず顔をしかめる。もともと、あたし達ガノトスは大きな音が嫌いだ。海竜がニヤリと不吉な笑みを浮かべた。私の鳩尾みぞおちがスツと冷たくなる。嫌な予感だ。

「俺を本気にさせるとはな、確かに強力な一撃だ」

海竜がそう言った途端、周囲に電流が流れた。

体に力が入らず、痙攣けいれんする。全身を炎に焙あぶられ、ナイフで引っ掻き回されているような痛みだ。

意識が飛ぶ。

「テメエと遊んでる暇は無えんだよ！」

どこからか、あいつの声がぼんやりと響いてくる。すると、突然腹に激痛が走った。血の臭いがする。自分の血だ。

「キュオオオオオオ！」

海竜のその恐ろしい牙から逃れようと必死に暴れるが、深く食い込んで離れない。

だんだん体が重くなっていく。さっきの電撃が効いたようだ。力が抜けていく。

その時、ふと自分の巣が目に入った。

背筋が凍った。

巣の水草の上に、子供達が浮いている。あの男が巣から逃げ出すときに叫んだせいで、目が覚めたのだろう。隠し穴から出てきてしまったのだ。

「旨そうな臭いだな」

ハッとして海竜を見ると、その冷たい目が子供達に向けられていた。

気づかれた。

「子供の魚竜って旨いだろうな。ママさんよ？」

残忍な笑みを浮かべて、これ見よがしに舌舐めずりをする。体が震え出した。電流のせいではない。

「やめなさいよ」

慌てて殴りかかろうとするが、体が自分のものではないかのよう  
に言うことを聞かない。

海竜があたしのヒレの付け根に噛みついた。そいつの背中にある  
突起が段々青白い輝きを増していく。

輝きが最高潮に達した。

次の瞬間、海竜の体から爆発するかのように大量の電流がほとば  
しる。それはあたしの体まで包み込んだ。

焼かれる。全身を引っ掻き回される。視界が真っ白になったり、  
真っ黒になったりする。体から力が抜ける。

そして、地獄が突然止んだ。

体が電撃の余韻にびくびくと震えている。

「旨いもん食わせていただくぜ。ピチピチの赤ちゃんをな。人間達  
に逃げられちゃったし、テメェも後で食ってやるよ」

ひどく遠いところからそんな声が響いてくる気がした。

うつすらと目が見えるようになってくる。

あいつはあたしが死んだと思っているのだろう。

「や……めて……」

叫んだつもりだが、口から漏れてきたのは掠れた息だった。

嘲笑うかのように、海底に向かってゆったり泳いでいく海竜の背  
を掴もうとヒレを伸ばすが、届かない。

あたしの願いも、届かない。

「こどもを……たべな……いで……」

後を追おうとヒレを動かすが、揺れる波にすらかなわない力では  
泳げない。

「やめて……おねがい……」

視界が滲む。海水に、悲しみと悔しさの混じった塩辛い水が混じ  
っていく。

「みんな待てよ！」

夫が叫んでいる。生まれたばかりの子供を抱える、あたしの盾になつて。

「悪い。みんな逃げちまったし、俺も逃げるわ」

「お、おい！」

夫が同族を呼び止めようとするが、仲間はずつと海面に向かって逃げていく。

「俺達はこの遺跡を守るのが役目だろ！ 遺跡の石盤にそう書いてあるじゃねえか！」

「んなもんだだの“字”だよ！ だいたい、こんな奴が来てそんな“石”の建造物なんて守つてられつかつーの！」

夫の親友までもが逃げ出す。老いて動けない者や、泳げない子供達まで捨てて……。

「お前らは仲間を見捨てるのか！」

激昂する夫にたじろぐ仲間のガノトス達。

「し、仕方ねえよ！ 構つてたらこんな奴から逃げられない！」  
そう吐き捨てて去っていく。

その“こんな奴”はあたし達の遺跡をぐるりと取り巻いている。あたしは、その遺跡の上にいた。あまりの巨大さに、体の震えが止まらない。島一つ覆い尽くすことができるような巨大な海竜だ。

グオアアアアアアアアア！！！

その大海竜は吠えた。いや、吠えたどころの話ではない。

そのあまりの咆哮の凄まじさに気を失いそうになった。海底が割れ、岩壁は崩れ、子供達や老いた者達は気絶する。泳いでいた魚は音圧で弾け、生い茂ったサンゴも薙ぎ払われる。

泳いでいた夫も、音にやられて海底に落下してきた。

「くそっ、体がでかけりゃ声もでかいってか！」

あたしはヒレで子供達を抱いていた。辺りには、自力ではほとんど何もできない同族のみ。他は皆逃げてしまっていた。

「もう遺跡を守るのは無理だ……。お前だけでもいいから逃げてくれ」

夫が信じられないことを口にする。いつも明るい夫が、この時ばかりは絶望に打ちひしがれていた。

「ダメよ！ あんたがここに残るなら、あたしだって残る！」

あたしがそう言った時、大海竜が突然火の塊を吐いた。どんな物質の性質なのか、それは水の中でも消えずにこちらにまっすぐ飛んでくる。

「よけろ！」

夫が叫び、慌てて遺跡の上から浮上する。子供を抱えているせいで、上手く泳げない。

その火球は、気絶している同族もろとも遺跡を吹き飛ばした。火球は休むことなく次々と発射され、あたし達の巣を破壊していく。慈悲も何もない。ただ淡々とそこにあるものを消していく。そんな炎だった。

残された者達は成す術もなく粉碎され、跡形もなく消されていく。海底の砂塵が巻き上げられ、遺跡は轟音と共に崩落する。

それを呆然と見つめるあたし達は、破壊の限りを尽くす大海竜に悟られぬよう、静かに泳ぎ去った。

遺跡を棲み家としていたあたし達、ガノトトスのニア族は散り散りになり、その後は各自で縄張りを作って、他のガノトトスと同じように単独で暮らし始めた。

あたしと夫は火山付近の密林の綺麗な海に居を移した。それからしばらくして、夫は死んだ。ハンターに殺されたのだ。



夫が言葉もまだ分からない子供によく言い聞かせていたのを思い出す。

「いいかお前ら、仲間を見捨てるような奴になったらダメだぞ！」  
必死に力説する夫の努力も虚しく、子供達は首を傾げてクスクス笑うだけだった。

「このどら息子共が」

夫はそのたびに不機嫌になって、憂さ晴らしに魚を獲りにいった。  
「世の中、仲間だと思っていたのに平気で見捨てる奴が多すぎると  
思わねえか？」

襲った魚の群れで、一匹だけ取り残された獲物に問いかける夫が  
脳裏に浮かぶ。

ふと気づくと、体が動くようになっていた。身体中がギシギシと  
悲鳴を上げているが、泳げないわけではない。

慌てて海底の自分の巣に目をやる。あの男が胸にマリモを抱えて  
海竜に襲われていた。マリモからはあたしの子供達の顔が飛び出  
している。そして、男の後ろに太刀と銀色の筒を背負ったハンター。

あの男が子供を助けてくれたようだ。まったく、厄介な生き物を  
密林の川で拾ったものだ。

「あんたのせいで子供が起きて、出てきちゃったじゃない。そのワ  
ニ追い払うの、手伝ってもらおうわよ」 体は痛めつけられたが、  
心は晴れた。あのガノトス男は見捨てなかった。同族どころか、  
種族が違おうであろう、あたしの子供達を。

あたしを楽しませる上に、子供まで助けてくれる。本当に厄介な  
奴だ。

あたしは海面を蹴り、海底に向かって猛スピードで潜る。どうや  
ら、男と一緒にいるハンターと……その背中にいるアイルーはあた  
しの子供を守るために戦ってくれるらしい。あの昔、同族ですら見

捨てた奴らとは違って。

「見捨てなかったよ、こいつら」

夫に向かって呟く。

「世の中、見捨てる奴ばかりじゃないよ」

やつれた体に鞭打ち、さらに加速する。

人間が一人、猫が一匹、ガノトス人間が一人。

寄せ集めだが、今はあたしの仲間だ。

あのムカつく海竜、ただじゃ済まさないわよ。

「俺は仲間を見捨てる奴は大嫌いだ」

頭の隅で夫の声がこだまする。

### 第31章 見捨てられた者、見捨てない者（後書き）

読んでいただき、感謝です（^ー^ゞ

こちらとは随分作風が変わります（？）が、もう一つの拙作「WORKERS」もよろしくお願いします（^ー^）b

## 第32章 水流槍（前書き）

さて、やっとラギアクルス決戦です（^^

めっちゃくっちゃ長くなってしまいました。すいません^^;

## 第32章 水流槍

### 第32章

ジェット・ランス  
水流槍

ズズズズグレイズズズズ

「うおおお！」

突進してきた海竜の巨体を盾をかざして受ける。腕が衝撃で震えた。海中戦ということで踏ん張りが利かず、あっけなく吹き飛ばされる。だが、逆に言えば衝撃を緩衝しやすいということだ。

「受けてばかりじゃ、何も変わらないぞ」

海竜の背中<sup>あざし</sup>の突起が淡く光を放つ。その巨大な顎から電気の塊が飛び出し、迫ってきた。慌てて足をばたつかせ、ギリギリのところ<sup>あざし</sup>で横にかわす。

視線を戻すと、海竜がガノトトスの突進を受け止めている最中だった。

「どうした、さっきほどの威力がなくなっているぞ。所詮、魚の力もその程度なのか？」

海竜がガノトトスを肩で押し返しながら嘲笑う。

「うるさいわねっ」

歯をくいしばって必死にガノトトスが対抗しようとするが、力を入れようとするたびに腹の傷口から血が吹き出している。まるで、血と一緒に力まで体から流れ出してしまっているようだ。

「グオアアアッ！」

海竜が雄叫びと共にガノトトスを突き飛ばした。ガノトトスの体勢が崩れ、無防備な格好になる。俺は追撃を加えようとする海竜に

水流を使って接近し、勢いに乗せて“水の槍”を突き立てた。スピードを生かして、浮力で失った分の威力を補ったのだ。

槍は海竜の脇腹を刺し貫いた。赤い血が霧のように噴き出す。

海竜が素早くこちらに向き直り、間髪入れずに噛みついてきた。身を引いてそれを避ける。

その恐ろしい牙が並んだ海竜の顎に銛もりのような物が突き刺さった。「ギャオオオッ！」

海竜が怯んで仰け反る。その隙にガノトスが強烈な突進をお見舞いした。海竜が弾き飛ばされる。

周囲を確認すると、サンゴ礁の陰からサンバがボウガンを構えて様子を窺っているのが見えた。頼もしいアイルーだ。

海竜の巨体が岩壁に叩きつけられ、岩がガラガラと土煙を上げて崩壊する。

痛みに悶えている海竜に、アンが太刀で斬りかかった。刀が閃き、血が青い海を赤く染める。水中だということもあって、太刀裁きがぎこちない。浮力が邪魔なのだ。

「舐めやがって、このクズ共が！」

海竜がいきり立つ。背中が青白く輝き出した。一気にアンの剣舞から逃げ出し、俺達の頭上に位置取る。

「雑魚が何匹集まっても、雑魚でしかないだよ！」

言うが早いか、こちらに向かって電気ブレスを連発してきた。慌てて“水の盾”を構えようとしたが、水は電気を通すことに気づいた。考える暇もなく身を伏せて、電気の塊をやり過ごす。

背後で電気ブレスが炸裂する爆音が轟く。運良く一発も当たらずに済んだ。急いで体を起こす。

目の前に海竜の顔があった。

「わあっ！」

咄嗟に海底の砂を蹴って、バックで噛みつきを回避したが、続けざまに振り回された尻尾は避けきれなかった。盾を作るような余裕はない。胸のガノトスの赤ちゃんを守るように体を丸める。

背中を強打され、砂地に叩きつけられた。口からボコボコと血の混じった気泡が溢れ出す。息が詰まって苦しい。あまりの衝撃に意識を失いそうになった。

「キュワアアアッ！」

ガノトトスが援護に駆けつけ、海竜と俺の間に入っ妨害してくれた。

胸の赤ちゃんの様子を確かめると、ちゃんと生きている。つぶらな黒い瞳が三対、不安そうにこちらを見つめていた。

「ふいー、心臓に悪いっすねー」

安堵して胸を撫で下ろす。

「デメエは電気に弱いんだったな？」

海竜がガノトトスに向けて凄んでいる。その海竜から発せられる怒気は、気をしっかり保たなければ体が震えそうになるほど強烈だった。

「ち、ちようにいいくらいの電力よ」

ガノトトスが上擦った声を漏らす。凶星だ。

「そうか、ちようにいいのか。じゃあ何度でもぶちかましてやろう！」

咆哮と共に海竜の体の表面に電流が流れ、その状態でガノトトスに襲いかかった。

その時、二発目の銛が海竜の背中に命中した。

「ちくしょう、こざかしいアイルーめ」

海竜が忌々しげに帯電を解き、身を翻してサンバが隠れているサンゴ礁に近づいた。先に倒しやすい獲物を選んだのだろう。

それを防ぐようにしてアンが立ちはだかる。

海竜は鬱陶しげに電気ブレスを放ってアンを追い払う。海底に命中したブレスは、弾け飛んで地を抉った。

三発目の銛が飛んできて、海竜の胸に命中した。

その途端、海竜の動きが止まる。苦しうに体を痙攣けいれんさせて、海底に沈んでいく。銛に麻痺毒が仕込んであったのだろう。とうとう

効果が現れたのだ。

このチャンスに逃すわけにはいかない。急いで海竜に走り寄り、“水の槍”を突き出す。だが、やはり浮力のせいでいまいち手応えがない。海竜の厚い皮に、少し食い込んだだけだ。やはり水中戦は難しい。

ガノトトスは、自由を奪われた海竜に覆い被さるようにして押さえ込んだ。

ガノトトスが海竜の顔面に向けて顔を近づけ、口から何かを発射する。

魚竜ガノトトスの吐くブレスは高圧水流だ。陸では岩壁を削り取るような威力を発揮するが、水中ではやはり威力が落ちる。至近距離で発射したが、海竜の顔を水压で海底に押さえつけるほどの効果しかない。ガノトトスが弱っていて、ブレス自体のエネルギーも足りないということもあるだろう。

「駄目、効かないわね……」

不満を言う彼女の声にも、活気が感じられない。

アンに目をやると、太刀を槍のようにして海竜を突き刺していた。確かに、長大な太刀を思うままに振り抜けるほど浮力は弱くない。いかに刃が鋭くても、自然の摂理にはかなわない。突く、というのは良い戦法だ。

そこでふと閃いた。ガノトトスのブレスは水だ。だが、それが鋼鉄のように硬くなれば水中であっても強力な威力を発揮できると。

「諦めたら駄目っすよ」

俺はガノトトスに声をかけ、海竜の頭を指差した。

「もう一度、こいつの頭にブレスを吐いてくださいっす」

「でも効かないのよ」

海竜が麻痺から立ち直ろうとしていた。時間がない。

「俺が手伝うっす」

海竜の頭の近くに位置取る。海竜の目玉がギョロリとこちらを睨んできた。だが、その瞳の色には、怒りとは別に焦りが混じってい



る。

ガノトトスが再び海竜に顔を近づけた。彼女が弱っているのが目に見えて分かる。あれだけ電撃を受け、牙で痛めつけられたのだ。当然だろう。

「こいつの頭を狙うっす」

海竜の目が忙しく動き出した。何をしようとしているのか分かったのだろう。必死に麻痺した体を動かそうとしている。

「任せて……」

暴れようとする海竜を必死に押さえつけ、ガノトトスが答える。彼女の脇腹から血が吹き出した。ガノトトスの巨体が揺らぐ。もう限界か。

海竜の背中が発光し始めた。帯電して、俺達を一掃する気だ。

すると、応援に駆けつけたアンがガノトトスの巨体を脇から支えてくれた。これも、水中だからできたことだろう。陸上ならアンはぺしゃんこに押し潰されている。

海竜の背中が一段と強くなった。

「しっかりっす」

ガノトトスの頭をそつと撫でる。

突然、押さえ込んでいる海竜の体が大きく震えた。慌てて視線を戻すと、背中が光が消えている。ガノトトス越しに海竜の腹の上を覗けば、サンバがニヤニヤしながら手を振っていた。麻痺毒塗りの銛が、一気に三本、海竜の腹に打ち込まれている。麻痺毒を追加してくれたようだ。「残弾はもう無し。ラストチャンスだニヤ」と言いたげに、ボウガンを海底に放った。本当に頼もしいアイルーだ。「いくわよっ」

ガノトトスがぐつと海竜の頭に口を近づける。体力的に、ブレス一発吐くのでさえままならないのだろう。サンバの言う通り、これが海竜に勝つ最後のチャンスだ。そう確信した。

ガノトトスの喉に右手を添え、海竜とガノトトスの口の、拳一つ分ほどの空間に意識を集中する。

目を閉じ、頭の中で細い槍をイメージした。いかなるものでも容易く貫通する、最強の“水の槍”だ。

ガノトトスの体が大きく力むのが分かった。体の底から、高圧の水がせり上がってくるのが震動となって伝わってくる。

俺は目を開けた。

海竜の背中が再び光を放ち出す。狂暴さを感じさせる双眸がガノトトスのことを睨み付けていた。

水が轟音とともにガノトトスの喉を伝ってくる。

海竜の背の青白い光が、急激に眩く煌めく。

右手の平に、水の流れを感じた。

海竜の背の突起から電気がほとばしった。

ガノトトスが口を開く。

俺は体の全神経を、たったの拳一つ分の距離に捧げた。

ガノトトスの口から、水流が溢れ出した。

細く、鋭く。頭の中で、細い槍が繰り出されるのを思い描く。

放たれた高圧水の“槍”は、衰えることなく水中を割って突き進む。細く、鋭く――

海竜の額ひたいが水流の“槍ランス”に撃ち抜かれた――

★★★★★アン★★★★★

「へえーそうだったんだー」

私達は、焚き火を囲んで円になっていた。すぐ近くの水溜まりでは、三匹のガノトトスの赤ちゃんが顔を水面から覗かせている。

火の回りには、私とサンバ、グレイの他に船員達もいた。船員達は、私の背後で寝そべっている巨大なガノトトスを恐る恐る観察している。やはり、モンスターに対する先入観が人を怯えさせるのだろう。

私達は濡れた服や防具を乾かすため、全員下着姿になっていた。私やグレイ、サンバは陸に上がった後、船員達にもお願いして薬草とアオキノコを集め、調合して回復薬を作った。そして、それをガノトトスの傷口に塗り込んだ。回復薬を傷ついた部位に塗れば、多少の殺菌効果があり、傷が治るのを促してくれる。

サンバは私達がそうこうしている間に、周辺のを確認しに行った。念には念を、とかそれらしいことを言って姿を消したが、草むらの陰で眠りこけていたに違いない。サボりだ。

グレイは、魚竜であるガノトトスの鱗が乾燥しないように、時々水溜まりから水をすくってはかけてやっていた。

今はそのグレイから身の上話を聞いたところだ。驚いたのは、グレイが人間ではなかったことだった。“ガノトトス進種”という種族らしい。その種族は一定の範囲内の水なら、意のままに操れるそう。グレイが武器を持っていなかったのは、武器が無いからではなくて、水があれば何でも作り出せるからだ。

ガノトトス進種は、原種のガノトトスが長い時間を経て知的に

発達した進化を遂げたために生まれたいらしい。しかも、祖先の能力を引き継いで、水中でも呼吸できる。

言われてみれば、納得できなくもない。彼の手首や足首には、飾り物ではないヒレが生えているし、髪もそこにいるガノトトスの鱗のように瑠璃色だ。

「その、スーツみたいなのは何だ？」

船長が干してある藍色のグレイが着ていたスーツを指差す。

グレイの顔がパツと明るくなった。

「これは“ゲリヨススイムスーツ”って言うっす。泳げない俺のために、友達が作ってくれたっす」

グレイが自慢気に語る様子からすると、かなり高性能なのだろう。

「え、あんた、泳げないの？」

船員達が揃いも揃って言葉を発した。見事なシンクロぶりだ。確かに、水中で活動できることに特化した能力を持っているのに泳げないというのは不思議、というか玉に傷だ。

隣のグレイに目をやると、背中に巨大な岩が乗っているかのようにながっくりとうなだれている。

「どーせ俺は泳げないっすよ。来る日も来る日も練習してるけど、いつになっても……」

「ニヤニヤニヤ、これはいいスーツだニヤ〜。諦めずに練習していれば、きっと泳げるようになるのニヤ。ええと、それより、グレイさんはどこから来たんだニヤ？」

サンバがナイスなフォローをする。質問の内容もごもつともだ。

“進種”なんて生物は聞いたこともなかったし、水を自由に操ったりできる不思議な能力もまったく見たことがなかった。

「ああ、そのことっすけど……」

先ほど、回復薬の材料集めをしている時、グレイは私達が“人間”だと知って驚いていた。なぜ、私達が人間であることに驚いていたのかも気になる。

「俺もよく分からないっす」

グレイが困ったような顔をした。

「よく分からない？」

私が訊き返す。

「そうなんすよ。川で泳ぐ練習をしてたんすけど、途中で貧血を起こしたみたいに一瞬周りが見えなくなってる……気づいたらあそこの川でこのガノトトスに食われそうになってたっす」

グレイが近くにある川を顎で示した後、寝っ転がっているガノトトスを指した。

「それでよく分からないうちに、泳げない俺はこのガノトトスに助けられたんっすよ。で、俺、川から上がった後に気絶したらしくて、ガノトトスの巣に匿ってもらってたんっす。色々勘違いやらなんやらあったっすけど……」

グレイが身震いしながら苦い笑みを浮かべる。もし、ここにいるガノトトスが狂暴なガノトトスだったら、餌になっていただろう。

「なんか無茶苦茶だな」

船員の一人がしかめっ面で腕を組み、考え込んでいる。

「で、俺の予想っすけど」

グレイが空を見上げた。綿飴のような白い雲が、青い空に浮かんでいる。曇りに近い晴れだ。あまり好ましい天気ではない。

「ひょっとしたら俺、別の世界に移動したか、時間の壁を越えて過去に飛んだのか……って考えてるんっす」

「異世界にやって来た？ 過去に戻った？ 何よ、それ」

ガノトトスがそんなことが起こるわけがない、という様子で口を挟んだ。

そういえば、陸に上がって船員達にガノトトスのことを紹介した時から、私達とガノトトスの言葉が通じ合うようになったのだ。船員達も、次から次へとガノトトスの言葉が分かるようになっていった。グレイは会った時からすぐに喋れたらしいが。それらの原因は結局分からないままだ。

「俺のいた所では、人間は遥か昔に絶滅したことになってるんっす

よ。だから、あなたが人間だって言った時は、心底びっくりした  
っす。【ハンター】っていう人間そっくりの凶暴な生き物なら、俺  
のいた所にいるんすけど」

「船でハンターって言葉に反応したのはそのせい？」

私の言葉に、グレイは神妙な顔で頷いた。

「俺のいた所でいう【ハンター】は、俺達“ガノトトス進種”みた  
いに知的進化を遂げた色々な“進種”を殺して回る、謎の殺戮生物  
のことっす。だから最初、俺がハンターだなんて言われたから……」  
グレイが照れ臭そうに頭を掻く。

「それよりも、皆さんこれからどうするんっすか？ 船は、沈没し  
てしまったっすよね」

それを聞いて私や船員達は顔を見合せ、「あゝ」と揃ってため息  
をついた。

「ここがラティオ火山地帯の南の方に広がるジャングルってのは分  
かるんだけどよ」

ねじり鉢巻を坊主頭に巻いた船長が、情けない声を出す。

「だいたいのが現在地が分かれば向かう方角も決まるんだが……」

「この先、海岸に沿って南に行けば町があるわよ。人間の足だった  
ら、一日中歩き通しで行き着くはず」

ガノトトスが顔をこちらに向けて、言った。

「本当か？ どんな町だ？ その、町の特徴はどんな感じだ？」

若い坊主頭の船員が身を乗り出して訊ねる。

「そんなもの、あたしみたいなモンスターが町に近づけるわけない  
から分かるはずないじゃない」

「そ、そうか……悪かった……」

「って訳でもないけどね」

「えっ？」

ガノトトスの顔が悪戯っぽい女性に見えたのは気のせいだろうか。  
「その町、つい半年ほど前からパツタリと人の気配がなくなったの  
よ。で、気になって行って見たら、だれもない。空っぽの町に

なってた」

「誰もいない町？」

「そう。人っ子一人いない。なんというか……近寄り難い空気だったわ。悲しみ……いや、死の臭いがした。だから、あたしは町の中にまでは入らなかった」

ガノトスがそう言った時、サンバが「ニャ！」と反応した。ピヨンと二つの足で地面に立つ。

「ミャーの友達に“海賊Jキャッツ”の幹部がいるニャ。その子が言うには、ヒンメルン密林の“医学の町”、リバースが疫病で壊滅したそうニャ。あまり知られてないみたいだニャー」

ヒンメルン密林とはこのジャングルの地名だ。そして、その密林の海岸沿いにある“医学の町 リバース”はかなり知名度が高い。私も知っている。過去に何人もの名医を排出した町だ。ただ、密林の奥地にあるせいで、海路を通じて以外ほとんど人の出入りが無い町らしい。そこが疫病で墜ちたとは初耳だ。

「そりゃ知らなかったな……。生存者はいなかったのか？」

坊主頭の操舵手そうだしゅが気の毒に、という声音で話す。

「それが分からないのニャ。ちょうど、夏の嵐がたくさん来る時期で、リバース行きの船が出てなかったのニャ。海賊Jキャッツの情報によると、外からの物資援助が切れたその時期に疫病に襲われて、薬を作る材料が無かったから町がやられたとかいう話ニャ」

「そうだったか……バルサー、ネイキッド、プランニユ……あの三大名医達も死んだのか……」

一同の間に不快な沈黙が訪れる。何とも言えない悲しみに満ちた沈黙だ。自分達にはどうにもできない、関係のないことだったが、不幸の知らせが人を明るくしたことは一度もない。たとえば、それが自分に関わることでなくても。

「と、ともかく現在地は分かった。この辺の地図なら頭に入ってる。行くとしたら、真東にある荒れ地の町だ。一番近いのは……」

船長が、沈んだ場の空気を取り払うかのように話題を逸らした。

「トウルク、ですよね？」

私が船長に訊ねる。船長は暗い顔で頷いた。船長がそんな顔をするの分かる。

「そうだ。歩いて三日で着くし、ここからリバースの次に近い町と言えどそこしかない。それ以外の町は五日はかかる。装備のない俺達にとっては、長いサバイバル生活ほど命取りになるものはない」

トウルク。別名“暗殺者の集う町”。リバースが名医を生み出す町なら、トウルクは犯罪者を生み出す町だ。

噂によれば、奴隷売買をしている“スラブ会社”の初代社長や、巨大暗殺組織“エンデ・デアヴェルト世界の終わり”など、巨大な暗躍組織は、すべてその町から生まれたことになっている。

過去にシュレイドのハンターズギルドが行き過ぎた治安の悪さを見兼ねて、精鋭のギルドナイトを派遣したことがあったらしい。だが、その結果は凄惨なものだ。ギルドナイト十名が町の入り口に入った途端、待ち構えていた狙撃手からの一斉射撃に遭い、全滅したのだ。

当時、その町に入るには特別な“何か”が必要だったらしいが、当然一般人が知り得るはずもない。

「最近はその町に普通の人間も出入りするようになったらしいがな……」

船長は難しい面持ちだ。

「エンデ・デアヴェルトの主力暗殺者が五十名、全員が銃殺されたとは言え、根っからの悪はこれからも悪だ。あの町も表向きは変わったかもしれないが……いつ物陰から銃口が向けられてもおかしくない町に、行きたい者はいないな」

船長が曇ってきた空と同じように、表情を曇らせる。

それからはとりとめのない雑談が始まった。意外にも、ガノトトスの話が面白くて、みんなは日が暮れるまで笑い通しだった。

サンバとグレイは気が合うのか、コンビを組んで仲良く魚を取り



に行った。

　　～ヒンメルン密林　とある洞窟～

「おい、あのハゲ野郎共は出て行ったっけか？」

「つばいですよ～」

暗闇で、蒼い目がパチパチと瞬きをしている。目玉はギョロギョロと左右を見回した。再び正面を向いたその蒼い目が、ぐわっと開かれる。そして、再び瞬きする。

「な～んも見えへんかて、あきちにはきつうてたまらんばい」

「ですよね～。じゃあ私にくつついてきてください」

甲高い声の生き物が、蒼い目の生き物を先導する。甲高い奴の体が、暗闇に薄白く浮かび上がっている。洞窟の中から、外に向かっているのだ。

「おっ、おっ、目がよう見えるようになってきたわ。あっ、でも眩しいばい」

洞窟の出口に近づくにつれ、蒼い目の生き物が目を狭めながら喚く。

「静かに！　あいつらにバレますよ」

甲高い声の生き物がヒソヒソ声で注意する。

「ああん？　なんやて？　よう聞こえへん」

蒼い目の生き物がさらにでかい声で喚く。洞窟内がグワングワン反響している。

「大きな声で言えませんがね、あいつらに居場所がバレるかもしれないから静かにしてくださいって！」

と、大きな声で怒鳴り散らす。これは甲高い声の奴だ。洞窟の天井から石がパラパラと降ってきた。

「でけえ声出すなっつうに！」

蒼い目の生き物が地震のようながなり声で返す。二匹の目の前に、巨大な岩石が滝のように崩れ落ちてきた。

「聞こえとるわい」

ぼそつと蒼い目の奴がつけ足す。

「おかしいニャ。確かに生き物の鳴き声がしたんニャが……」

岩陰から、蒼い目の奴がひょっこりと顔を出して、唐突に洞窟に戻ってきたアイルーの様子を見張っている。岩陰に隠れてアイルーをやり過ごしているのは、蒼い目に、赤黒い甲殻で覆われた体の、大きな翼を持つ飛竜ひりゅうだった。【雄火竜おすかりゅう リオレウス】だ。その隣には、何やら薄気味悪い白色の飛竜がうずくまっている。甲高い声のこの生き物は【帯電飛竜たいでんひりゅう フルフル】だ。体の皮膚が、ブヨブヨと不思議な弾力を持っている。

「やつぱり、異常なしニャ。念には念を、だニャ。みんな材料集め終わったかニャ？」

陽気に去っていくアイルーに向けて、リオレウスが囁く。

「あやつが、あの水揚げされた、びしょびしょのハゲ頭軍団を連れてきよった張本人か？」

フルフルはリオレウスの耳に口を近づけて、なるべく高い声で話す。

「そうそう。坊主頭にねじり鉢巻をした人間とかを連れてきた奴です」

「わざわざ安全を確認しにきよるとは、抜け目無い猫よ……」

「最初は私達も上手く洞窟の奥にある秘密の部屋に隠れていたけど……シュルツさんが大声出すから……」

「あん？ 何やて？ 私が大声出したからですゴメンナサイ？ お

ーおー、分かっているならそれでよろしい」

「ちっ、この耳つんぼ野郎め」

フルフルの態度が豹変する。

「あーん？ 聞こえへんて」

「いえいえ、何でもありません。早く場所を移動しましょう」

「えーっ、この前も引越したばかりやき、もうええやん！」

リオレウスが駄々をこねるように地面にうずくまる。

「じゃ、雪山の私の家に行きましょう。寒いから今度こそ誰も来ませんよ」

言うが早いか飛び立つフルフル。

「や、や、ちよいまち、今なんつうた？ 聞こえへん、分かりません！ おーい、シロブタヤロー、わんもあたいたいむ！ ふおーみー！

へい、ゆー！ へーい、ゆー！！！ うえいと！ へーい！」

リオレウスが慌ててフルフルの後を追っていく。

「私が貴様の耳になるから、貴様は私の目になれて頼み込んできたのはソフィアさんやーん。シロブタ言うて、悪かったあーて。待ってーなー」

くヒンメルン密林 夜く

「グレイ……だっけ？ あんた、まだ起きてるでしょ？」

ガノトトスがヒソヒソと声を出す。

「バレてたっすか」

グレイは悪戯が白日のもとにさらされた子供のように、恥ずかしげな苦笑いで応える。

「あんた、これからどうすんの？ 別の世界かどっかから来たんでしょ？」

「たぶんそうなんすけど……どうすればいいか分かんないっすねー。しばらく、この辺で泳ぐ練習してるかもっすよ」

グレイが答え終えてから、取ってつけたように言い足す。

「お、溺れる練習じゃなくて、泳ぐ練習っすよ」

空は曇っていた。晴れていれば星空が見えていたかもしれない、

とガノトトスは思った。少し残念だ。

アンやサンバ、船員達はものの見事に爆睡している。船長は寝言でマストがどうか、オールがどうか呟いていた。多分、失った船の夢でも見ているのだろう。

「ねえ。あんたは仲間を見捨てない奴だと思う？」

ガノトトスが不意に質問した。彼女の声が若干震えているが、グレイは気づいていない。

「誰の話っすか？」

「グレイの」

「俺っすか」

グレイはしばらく黙り込む。周りの者達の寝息と、虫の鳴き声と「くそラギアクルスがマストを折りやがった」という誰かの寝言だけが耳に飛び込んでくる。

「たぶん」

しばらくの沈黙の後、グレイがふと口を開く。

「拾うと思うっす」

「拾う？」

答えの真意を測りかねて、ガノトトスが訊き返す。

「友達にめっちゃ強い奴がいるんっすよ。ミラっていう人とメイミイっていう人」

「うん……」

「ミラさんは仲間を絶対見捨てない人っすね」

グレイがしみじみと言った。

「きっと、仲間だと思ってた奴が敵だと分かってても、自分で確かめるまでは見捨てない、そんな人だと思うっす。メイミイさんも同じっすね。あの人も、一途な人だから。懸命に仲間を信じようとするっす。全部、俺が思ったことっすけどね」

グレイが寝返りをする音がする。

「俺、この二人みたいに強くないから、最初は仲間を見捨てるかもっす。でも、そうするともう一人の強い自分が俺に問い掛けるんっ

すよ」

「どんなふうによ？」

グレイの一つ一つの台詞が、ガノトトスの心に響く。

ガノトトスは水溜まりの赤ちゃんに目を移した。グレイは、赤ちゃんを無傷で守り切った。グレイが本当に仲間を見捨てるような者なのなら、今頃、私も子供達も、船に乗っていた人間達もここにはいなかっただろう。ガノトトスはそう思った。

「俺はこれでいいのかって、もう一人の自分が訊いてくるんっす」  
グレイがポツリと言った。自嘲するように笑って話を続ける。

「変な奴っすよね、俺。心の中で一度仲間を諦めるけど、やっぱり駄目だってすぐに戻ってくるんっすよ。だから、拾うってことっす。こういうのを優柔不断っていうんっすよね」

ガノトトスは黒い影になっているグレイを見つめた。暗くて顔は見えないが、邪気の無い笑みを浮かべているのが容易に想像できる。  
「それ、見捨てないのと一緒にじゃない？」

「そうっすかね。でも花瓶を落としたら割れるっすよ？ 拾っても粉々っす」

一度捨てられたら、きっと仲間は傷つく。そう言いたいのだろう。

「狭い壺から解放されて、花はせいせいするでしょうね」

「石を投げ捨てたら砕け散るっすよ」

「中からダイヤが出てくるわ」

ぐぬ、という呻き声がする。

「ともかく、仲間は大事にするっすよ」

グレイが拗ねたようなムツツリとした声で、答えた。

その時、遠くの方で、何か巨大なものが崩れ去る音がした。かつて、仲間に見捨てられた私達が見届けた、海底の遺跡が崩れる光景が脳裏に浮かぶ。

「うわ、あいつら大丈夫かな」

「えっ？」

あいつら？ ガノトトスは混乱する。

グレイが「大きな声では言えないっすが」と前置きして話し出す。クスクス笑っている。

「実はここから北に少し行くと、小さな山があって、その洞窟に船員達が隠れていたんっすけど」

「うんうん」

「実はそこにリオレウスっていう赤い竜とフルフルっていう白い竜がいたらしくて」

グレイが笑いをこらえようと必死になっている。いやいや、それは笑い事ではない。下手をすれば、海竜の相手をしている間に船員達は死んでいたかもしれないのだ。

「サンバはその二匹のコンビは人を襲わないと知っていたらしいっすよ」

ガノトトスはさらに呆気にとられる。どういうことだ。あの猫、何者だ、と。

「サンバの友達の海賊Jなんとかっていう組織のアイルーが、リバースの町が疫病でやられたっていう情報と一緒にそのリオレウス&フルフルの情報も仕入れていたらしくて」

グレイが「遊び半分で調べてたらしいっすよ。なんか、モンスター界では結構有名なコンビらしくて」と継ぎ足す。

「疫病が蔓延した時、薬の材料を集めるために結成されたリバースの町の部隊が壊滅したのはこいつらのせいにされてるんっすけど、実は違うということも分かったそうっす。かわいそうなコンビっすね」

ガノトトスは半ば呆れ、半ば笑いながら話を聞く。

「で、その二匹のコンビが、人間を嫌っているけど、絶対に人間を襲えないという情報を踏まえて、わざわざ」

グレイが一旦言葉を切る。

「サンバは船員達をそこに避難させたってことよね？」

ガノトトスが先に答えを言った。何という猫だ。イタズラとういうものもあるだろうが、リオレウスやフルフルなどという強力なモンスターがいれば、他のモンスターが襲ってくることもない。そうい

うことも考慮したのだろう。

ガノトトスは、大口を開けていびきをかいているサンバを見下ろした。これは、猫の皮をかぶったタヌキだ。つくづくそう思う。

「しかも、サンバは洞窟の近くに潜んでこのコンビの間抜けな会話を聞いていたそうっす。この話、魚を取ってるときにサンバが教えてくれたんっすけど」

グレイがその時の様子を口真似で喋り出す。ガノトトスはクツクツと笑いながら、その間抜けコンビは愛すべき馬鹿共だという印象を、受けざるを得なかった。

なるほど、洞窟の中で大声を出すのは、自分を生き埋めにするのと同じことだ。今頃になって、山の耐久力が無くなったのだろう。間抜けなコンビのせいで。明日になれば、無残に崩れ去った山を見物することができるとは違う。

「あいつら、大丈夫なんすかね。生き埋めになってなきやいいんっすけど」

グレイが笑いながら呟く。

ガノトトスは静かにグレイを見る。

他者を見捨てられない者がここにいる。

「俺は仲間を見捨てる奴は大嫌いだ」

夫の安心したような声が聞こえる。グレイはきつと仲間を見捨てることはないだろう。もし、そんなことがあったら、地の底まで追いかけてやる。ガノトトスは笑いながらそう考えていた。

「じゃ、お休みなさいっす」

グレイがそう言って喋らなくなり、ガノトトスも満足した気分で眠りについた。

空は曇ったままで星は見えない。

翌朝。グレイはいなくなっていた――

　とある密林の川で――

氷氷氷氷グレイ氷氷氷氷

「ちょっと、しっかりしなさい！　あなた、男ですよ！」  
俺はうつすら目を開けた。光が眩しく射し込んでくる。それを遮るようにして、少女の顔が迫ってきていた。

「うおおおお！」

猛烈な勢いで後ずさる。

目の前にいたのは、絶世の美少女だった。色の白い肌。輝く青い瞳。ガッチリと暗緑色のツヤのある装備に身を包んでいる。頭には白銀に輝く冠が乗っていた。燃えるような高貴な緋色のマントをなびかせ、こちらに詰め寄ってくる。そして、その体型に不釣り合いなほど巨大な何かを持っていた。虹色に輝く、巨大なこん棒だ。それを軽々と担ぎ上げている。

「ちょっと、こっち来なさいよ！」

いやいや、俺は何も悪いことはしていない。死にたくない。俺はただ――

「あれ？」

ついさっきまでのことが思い出せなかった。確か、作ってもらったゲリヨススイムスーツを着て、泳ぐ練習をしに来たはずだ。



その後が分からない。  
辺りを見渡す。

川が流れている。

そう、この川で練習していたはずだ。一体何があったんだ……。まったく思い出せない。記憶を掘り出そうとするたびに、余計なもの散らばって、さらにごちゃごちゃしてくる。そんな感じだった。「あなた、ガノトスにくわえ出されて、踏みつけられそうになっていたのですわよ？ 私がガノトスの頭を殴って、追い払って差し上げたのです」

美少女が鼻息も荒々しく俺をジロジロと見回す。  
「怪我はないみたいですわね」

この上から目線の口調。このオネエさん性。どこか懐かしい気がする。もうちょっと汚い言葉遣いだったかもしれないが。  
「近くに私の居城がありますわ。少し休んでいきなさい」  
そう言って、少女はスタスタと歩き出す。

「あ、ちょ」  
慌てて起き上がって追いかけようとするが、木の枝に足を引っかけて盛大に地面に突っ込んだ。  
「いてええっす！」

これも、記憶にあるような気がする。何だこれ。やることなすこと、すべてが記憶の何かを刺激する。蚊が刺した時のかゆみのようにもどかしい。

思い出せるなら、思い出せ。思い出せないなら、きっぱり忘れろ。脳みそに怒鳴りつける。

「何をやっているのですか……」  
少女が呆れた顔をする。

「早くしないと、酸で溶かしますわよ？」  
「えっ？ 胃酸？」

思わず聞き返す。俺はこの女に食われるのか？ いや、待て待て、食われるはずがない。この少女の胃袋がガノトトス並に大きければ食べられたかもしれないが。

「胃酸じゃなくて、酸ですわ。クイーンランゴスタは尾から酸の液体を飛ばして獲物を弱らせるでしょう？ 知らないのですか？ わたくしはランゴスタ進種なのです。しかも、皇族の娘ですわ」

クイーンランゴスタか。

頭に浮かんだのは、自分体の五倍はある巨大な蜂だ。気色悪いモンスターランキングのトップスリーに常にランク入りできるような強者だ。

「実際はランゴスタ進種が酸なんて出せませんが」

彼女が上品に笑う。眩しい微笑みだ。何が何だかよく分からないが、とりあえず、彼女に俺は助けられたらしい。

「ガノトトスはどこっすか？」

「今は部下が対処していますわ。仲間を呼んでおいたのです」

仲間、か。

「仲間を見捨てる奴は大嫌いだ」

自分の口から意味不明の言葉が出てきた。彼女が驚いて俺を振り返る。いやいや、どうしたんだ俺。

「すいませんっす、何だか疲れてるみたいっす」

そう自己完結しておく。だが、ものすごく後味が悪い。どうなってるんだ。

憂さ晴らしに空を見上げた。

快晴だった。

「今夜は星が綺麗かもしれませんわ」

少女の声が耳に飛び込んでくる。

い。  
そう言えば、星が見れなくて残念に思った日があったかもしれない。

確かに、今晚は星が見れそうだ。

## 第32章 水流槍（後書き）

グレイ君、そして名前は出てきませんが、姫嬢ルティエ様、こんな拙作にわざわざ登場して頂き、誠にありがとうございます。

この2人はCENTER先生の小説

「MONSTER HUNTER EVOLVE」  
<http://ncode.syosetu.com/n5780h/>

からのゲスト登場となります。CENTER先生、コラボして頂き、感謝の限りです。ありがとうございました。（＾|＾）ゞ

※ 拙作は「MONSTER HUNTER EVOLVE」本編の話とは直接リンクしていません。ですので、本編の話に拙作の話が出てくることはありません。ご了承とご理解のほどをm（　　）

## 挿話4…ケイ・F・ネイチャーの真実 2（前書き）

以下、広辞苑第六版より抜粋

※作者による勝手な加筆あり

### 【伝説】でん—せつ

1. うわさ。風説。
2. 神話・口碑などの「かたりごと」を中核にもつ、古くから伝え来った口承文学。
3. 人々の心の中に存在する希望、または恐怖を物語化したもの。
4. 虚しい妄想。空想上の物語。これを信じる者は大概、馬鹿にされる。

ドラキュラ——。ギリシャ神話や北欧神話は興味深い——だ。「君は——なんかを信じてるのか? ——を信じる者が馬鹿にされなかつた日なんてないのに」

## 挿話4…ケイ・F・ネイチャーの真実 2

### 挿話4…ケイ・F・ネイチャーの真実 2

「ねえ、おじさん、何で虹は七色なの？」

「さあな」

「じゃあ、何で空は青いの？」

丈の短い草地に寝そべっている、小さな少女が訊ねる。空は底のない青い海のようにただ澄みきっていた。

「ん、そりゃあ顔色が悪い時だ。体調が良くないからだろ」

おじさんと呼ばれた男は、新聞に見入りながら筋の合わない返事をした。明らかに適当にあしらっている。

「おじさん」

少女は苛立たしげにおじさんを睨みつける。口を尖らせ、ゲシゲシと足の近くに座っているおじさんを蹴った。

「はいはい、悪かった悪かった。俺だって分かんねえんだよ」

おじさんは少女の攻撃範囲から逃げ出すように立ち上がる。おじさんは赤い生地に金の刺繍で縁取られた、長細いフェザーハットをかぶっていた。白い鳥の羽が一つ、飾られている。その帽子から覗く、長い、くすんだ青い髪がなびいた。

頭だけでなく、おじさんは全身に儀礼用のような赤い服を身につけている。一見して高貴な印象を受ける、特別な服だ。

ミナガルデ地方で最も強力な影響力を持つ、“狩人達の組織”<sup>ハンターズギルド</sup>直轄<sup>つかつ</sup>の“ギルドナイト”に所属する者が着用を許された服、ギルドナイトシリーズだ。

ハンターズギルドとは、依頼主からのクエストを受け、ハンター

が過剰にモンスターを討伐したり、捕獲したりしないようにハンター達を管理している一大組織のことである。そのハンターズギルドの長官という地位は、上位貴族に匹敵するものとされている。ミナガルデ地方の政治には、ハンターズギルドが密接に関わっているのだ。

そのギルド直下にある一つの部署がギルドナイトだ。

ギルドナイトは有能な人材のみを集めた精鋭部隊で、各地のハンター達の管理を行ったり、治安の補助に出向いたりする。さらに、人道や決められた条令に反する者を処罰、最悪、暗殺まで実行する。言わば、どんなことでもやってのける凄腕の集まりだ。

ギルドナイトには、大抵、腕に自信のあるハンターが入隊を申し込む。と言うより、ハンター以外から入隊申請をすることはほぼ不可能だ。ギルドナイトは、時にモンスターの討伐や未開の地への調査をすることもあるため、ハンターとしての経験が不可欠なのだ。

ハンターは、ハンターズギルドに管理されているため、頻繁に履歴が残されることになる。いつ、どこで、どんなクエストをこなし、結果はどうなったということだ。それが入隊を受け入れるかどうかの判断材料の一つになる。

「すごいね」

少女が疑わしげな目でおじさんを見上げる。

「こんな変じいさんが“ナイト・オブ・マスター”だなんて」

「世の中何があるか分からんぞ？ 自信のある奴が失敗して、嬢ちゃんみたいな馬鹿が成功することもあるんだぜ？」

ナイト・オブ・マスター。ギルドナイトの長官だ。ハンターズギルドのギルドマスターに次ぐ地位で、政界での発言力もギルドマスターにほとんど引けをとらない。それに、違法・悪徳ハンターの死刑や暗殺の最終的な指示を出すのも、ナイト・オブ・マスターだ。

良い言い方をすれば、ギルドナイトは治安を保つ正規の軍隊。悪く言えば、政府公認の殺戮機関だ。ただし、それは正義の名に基づくが。

そんな強大な機関のリーダーが、ここにいる。

平凡な家庭の平凡な裏庭で、新聞を片手に尻をボリボリと掻きながら大あくびをしている。もしこんな服を着ていなかったら、その辺にいる平凡なオヤジと何ら変わらない。

少女は地面がすべて沈み込んでいくというようなため息をつく。

「オッサン、うるさい」

「んだとコラア!? 俺はオッサンみたいな歳に見えるか?」

少女はゴキブリでも見るような目つきでオッサンを睨む。

「ジジイはだ・ま・れ」

「しばき倒すぞ」

ジジイが額に筋を浮かべて凄む。実際、全然老けてはいないのだが。

「ニャー! まうた、まうた、まあうたアンタは喧嘩するのかニャー!」

家の中から、直立二足歩行の猫、白いアイルーが飛び出してきた。腰に猫用の小さな刀を差している。

アイルーは喧嘩している二人の間に割って入る。

「猫ちゃん、このクソジジイやつつけてよ」

少女がクソジジイに向かってビシリと人差し指を突き出す。

「何だシヨット、少女を庇うとは……貴様、ロリコンか!?!」

おじさんが仁王立ちになって、険しい顔でアイルーを見下ろす。

シヨットと呼ばれたアイルーは呆れたような顔をして小刀を抜き放った。そして、その切っ先を少女の喉元に向ける。

「みねう峰打ちニャ。許してニャ」

「えっ!?!」

少女が目を見開く。

すると、シヨットが刀の峰と刃を返し、体を反転させた。それと同時に刀を峰の方から振り上げる。

刀の峰は、仁王立ちしているおじさんの無防備な股間を叩き潰した。



「はうっ」

おじさんの体が「く」の字に折れ曲がり、地面に倒れた。

「感謝するのニャ。峰じゃなくて刃だったら、アンタは……」

シヨットは右手だけで刀をクルクルと回転させた後、庭の雑草を一払いしてから鞆さやにしまった。斬られた雑草が、宙を舞う。

「さすが猫ちゃん！」

少女が満面の笑みで褒め称える。シヨットもウィンクで応えた。

「く、くそう。あのポケ猫があ……俺が腹を下していると知っててあんなコトをつ……」

蚊の鳴くような声でおじさんが呻く。今は地面に丸まって痙攣けいれんしていた。両腕は大切な“何か”を守るため、太股の間にしまいこまれている。

「そうやって、いつも売られた喧嘩を買うから悪いのニャ」

シヨットがケイに舌を出す。

おじさんが手で持っていたはずの新聞が脇に転がっていた。

「ニャニヤツ、何なのニャこの記事！」

シヨットが新聞を地面に広げる。

“ミナガルデ新聞”

暗殺者五十名が銃殺！？

先日、“暗殺者の集う町”エンデ・デアヴェルトトゥルクで大量殺人事件が発生した。

暗殺事業を営む、“世界の終わり”の主要社員が五十名、死体となって発見されたのだ。死因は全員が射殺で、暗殺組織同士の闘争によるものではないかと思われる。

エンデ・デアヴェルトが主要社員を失ったことで、トゥルクでの勢力均衡が崩壊した可能性が高い。各地に潜んでいる闇組織の間で闘争も起こり得る。一般市民の方はくれぐれも注意されたい。

※エンデ・デアヴェルトとトゥルク

エンデ・デアヴェルトとは、今より約五年前にその名が表社会に知れ渡った暗躍組織。過去に、王族や貴族にまで手を出したことが露見している。トゥルクが“暗殺者の集う町”と化したのも、この組織が町を乗っ取ったからだと言われている。それ以来、トゥルクに近づく一般人などはことごとく狙撃によって殺されるようになった。

トゥルクに出入りするためには、ある“通行許可証”が必要だと言われている。また、町を訪れた時、通行許可証代わりになる“ある行為”を町の入り口ですることでも町に入ることが可能らしい。詳細は不明。

「うわっ、何これ？ 物騒な事件ね〜」

少女が顔をしかめながら新聞を眺めている。

「新聞ってのは物騒な事件をでかでかと書きたがるもんだ」

おじさんがゆっくりと起き上がる。地獄から復帰したようだ。

「それよりも、隣の写真見ろよ」

「隣の？」

少女が視線を写真に移す。そこには、目つきの鋭い、色白の青年が写っていた。灰色の瞳だ。しかし、その瞳は一对ではない。

青年の左目は、黒い眼帯で覆い隠されていた。

「ニャー！」

ショットが仰天の声を上げて写真の注釈を指差す。

“五十名の暗殺者を射殺した疑いのある青年。推定年齢二十歳。左目に黒い眼帯。本社の潜入撮影隊による。”

「二十歳？ もっと若く見えるけど……って、うそっ、若っ！」

「俺と十歳くらいしか違わないぞ。なのに俺はおじさんなのか？」

「十歳も、だニャ」

それぞれがそれぞれの反応をする。少女は驚きに目を見開いていた。

二十歳にも満たないような青年が、暗殺者を五十人も殺したと言  
うのだ。到底信じられるはずがないだろう。しかも、相手はかの暗  
殺組織、エンデ・デアヴェルトだ。

「この人の名前は？ 書いてないの？」

青年の名前が載っていない。出身地や、居住地すらもだ。

「そういう名無しの奴は、孤児か浮浪者だろ」

おじさんが目を細めて、写真を凝視しながら言った。まるで、写  
真の向こうにある何かを見透かそうとしているようだ。

「孤児、ね……」

少女の口から小さな声が漏れる。

「あ、そう言えば」

唐突に少女がおじさんの顔に目をやり、訊ねた。

「お兄さんの名前も聞いてなかった」

おっさんやらクソジジイやら言っていた呼称が、一気に若返る。

「そうだそうだ。俺はまだ二十代だぜ？」

お兄さんが若々しい微笑みを浮かべて、右手でグーサインを突き  
出す。

「人の名前を知りたかったら、自分から名乗るんだぜ。嬢ちゃん」  
少女は涼しい顔で言い返す。

「子供は知らないおじさんに、名前を教えたりしちゃいけないのよ」  
「おお、そうだったそうだった」

おじさんは豪快に笑いながら、うんうんと首を縦に振る。その傍  
らでは、またおじさんと呼ばれたことに気づかないナイト・オブ・  
マスターにケタケタと奇妙な笑い声を上げているシヨットがいた。

「俺はケイ・F・<sup>フレイッシュ</sup>ネイチャーっつーんだ。こっちのポケ猫がシヨッ  
ト。有能なアイルーだ」

「ボケは余計ニャ！」

ショットがジロリとケイを睨みつける。そして、少女に向き直り、お辞儀した。

「改めて、海賊Jキャッツ幹部、ショットですニャ」 自己紹介を終えると、おじさんが新聞を拾い上げた。

「この写真の男や、嬢ちゃんみたいな馬鹿、俺は嫌いじゃないぜ」  
おじさんの顔は、無邪気に笑っていた。

く南方の巨大貿易都市アルタミラ とある研究室く

「ん……あれっ……」

私はぼんやりとする視界のまま、体を起こした。燃え尽きたロウソクのロウが、机上の燭台しよくだいの板に虚しく溶け残っている。辺りは、雷光虫の入ったランプのぼんやりとした青白い光で包まれていた。どうやら、また机に突っ伏して朝まで眠っていたらしい。

おじさんとアイルーが出てくる、懐かしい夢を見たのはそのせいだ。

「ううく眼鏡はどこく」

生きた屍しかばねのように、のそのそと部屋の中を歩き回る。と言っても、慎重に、だ。

部屋の中は、分厚い本が言葉通り山のように積み重ねられている。下手してそれを崩そうものなら、あつという間に生き埋めだ。

レポートやメモやらでぐちゃぐちゃな机の上にも眼鏡がない。床に落ちているかどうか探すが、ありそうもない。

ひょっとして風呂場の洗面所の眼鏡入れにあるのかと思って見に行ったが、予想は外れた。

「ああもう、眼鏡どこなのよく」

以前は居眠りをして眼鏡を床に落とし、踏みつけてお陀仏だぶつにして

しまった。

とりあえず顔を洗おうと、洗面所の薄汚れた鏡を覗き込む。洗面所の天井にぶら下げてある雷光虫ランプが、私の顔を照らし出した。「はぁ〜」

ため息が漏れる。薄い桜色の髪はボサボサで、まるで獅子か何かのたてがみだ。少なくとも、ババコンガの剛毛みたいだ、とは言われたくない。

目の下には黒々とした隈が浮き出ているし、風呂にもまともに入らないから肌は荒れ放題だ。

食事も一日に一回しか取らないため、頬は痩け落ちている。

「あっ」

そして……

「眼鏡、頭に乗ってるじゃん……」

私はげんなりとため息をつく。

寝てるだけで出世できる世界になればいいのに、と心底思う。

汲<sup>く</sup>んでおいた水が入っている洗面桶を覗き込み、両手を皿にして水をすくう。それに顔を浸け、ゴシゴシと勢い良くこすった。

生ぬるい水が、頭から眠気を洗い流す。

ふと手を止めて耳をすました。

雨が降っていた。雷が空を裂き、閃光を撒き散らすのが脳裏に浮かぶ。

ここは地下にあるため、外からの音が遮蔽<sup>しゃへい</sup>される。耳を傾けないと聞こえないのだ。

タオルで顔を拭き、分厚いレンズの眼鏡をかける。

しばらく、止まない雨音に聞き入っていると、一定のリズムを刻む地面を踏む音が聞こえてきた。その音と共に、溜まった水が跳ねる音が耳に入ってくる。

足音だ。二人分の。

「やっとな」

ひとりでに口から言葉が漏れた。

足音がだんだんと大きくなり、急に聞こえなくなった。すると、この地下室に通じる一階の扉が開け放たれた。

外からの明かりが、この部屋にまで射し込んでくる。

紫色の閃光がほとばしり、空が唸り声を上げる。この部屋の床に、扉の入り口に佇む者の影が黒く映し出された。

地下へ続く階段を降りる靴音がコツコツと響く。

「ブルジョア博士、この方がやっとおいでになりましたぜ」

先に部屋に入ってきたのは、頬の痩せたオヤジだった。

サザンという男だ。かつてはある組織の首領だったらしいが、部下に組織を追い出されたらしい。白みがかった頭髮がところどころ抜けている。いかにも不潔そうな格好だった。私が言えたことではないかもしれないが。

「やっとなたね」

私が声をかけると同時に階段の陰から、もう一人の男が現れた。

茶色の革靴。薄茶色のマント。全身黒の服。頭に黒いシルクハット。

「俺に依頼がある。そう聞いたが？」

黒い帽子の陰から、男の灰色の瞳が鋭く視線を向けてきた。もう一つの瞳、左目は黒い眼帯で覆われている。

灰色の瞳と目が合う。

狼の目だ。

「いやはや、まさかこじきに身をやつしているとは……。俺がちよっと若い男女にちよっかいかけてるところを見られて、この人に撃ち殺されそうになりましたぜ」

サザンがナイフをちらつかせながら、汚い笑みを浮かべる。

「道端で伸びてるこじきなんて、普通の人間からすれば、いてもいなくても一緒だからな。建物の影でこそそそ話されるようなことでも、そばで勝手に喋ってくれる」

マントの男が肩をすくめる。そして、事務的な口調で訊いてくる。  
「で、あんたが俺に何の用だ？」

私はニヤリと笑った。さすがは“せきがん隻眼の孤狼”ころう”。話が早い。

「もうあの話は知ってるわね？ 飛行船連続墜落事故」

「まあな。それがどうした？」

「これが依頼状よ。依頼内容と報酬が書かれてる」

私は白い紙をマントの男に渡した。黒い字で内容が書きつけてある。

マントの男がスラスラと目を通していく。その男の目の動きが一瞬间止まった。ある文に目が釘付けになっているのだ。

「へへっ、やっぱそうなるよな」

サザンがナイフで手遊びをしながら言った。マントの男の顔を窺っていたようだ。

しかし、マントの男は何も言わずに最後まで読み進んだ。そして、無言で依頼状を突き返す。

「悪いが、他を当たってくれ。俺は遊びに行きたいんじゃない。それに、俺は殺し専門なんだ」

男はマントを翻して階段に向かおうとした。それを私は呼び止める。

「フライヴケイ・F・ネイチャーって知ってるよね？」

マントの男が振り返らずに立ち止まる。

「もし依頼をこなしたら、報酬として情報を教えてあげなくもないわね」

私はニマニマと頬が緩むのをこらえるために必死だった。サザンは不思議そうな顔で私を見つめてくる。このこじきは何も知らないからだ。

「本当に教えてくれるという保証は？」

面倒くさそうにマントの男が振り返った。

「私はその依頼の実行を見届ける。一緒に行くの。私が情報を教えなかったら撃ち殺せばいいじゃない」

「おいおい、マジでそんな依頼受けるのか？ 隻眼の孤狼も馬鹿だな」

サザンが薄汚い麻布の服で、ナイフの刃を拭きながら言った。私はサザンを睨んだ。

「ああ、ブルジョアさんは“馬鹿”って言葉が嫌いだったな」

サザンが皮肉に笑う。意外にも、そのサザンに反論したのは隻眼の孤狼だった。

「確かに、この依頼の内容は馬鹿馬鹿しい。だが、どんなにくだらないことでも自分の目で確かめるまで決めつけは良くない。それに世の中……」

マントの男が一旦口をつぐむ。

「世の中、そんな馬鹿が成功することもある」

私は呆気にとられているサザンの間抜け面に吹き出す。この台詞に含まれる“馬鹿”という単語だけは、誇りに思える。

「じゃあ、契約成立ね。もう一枚、あなたの分の契約書があるから、サインしてね」

私は突き返された依頼状にサインを書いて差し出した。

マントの男はそれを受け取らず、私の机の上のペンを指す。

「その前に、報酬に『ケイ・F・ネイチャーの情報を提供する』と加えておけ」

「あ、バレた」

「当たり前だ」



**挿話4…ケイ・F・ネイチャーの真実 2（後書き）**

学校の情報室よりこっそり更新っす（へ皿へ）

## 第33章 離陸

### 第33章 離陸

（アルタミラ飛行船場）

#####

「では、今からテメエらが乗る飛行船の振り分け発表を行う。聞き間違えんじゃねえぞ！」

口汚い怒号を張り上げ、船長専用の白い制服を着た人物が怒鳴る。ボードを携え、値踏みするかのようにこちらを睨み回していた。猛禽類きんるいのような眼光の鋭さだ。口の回りに生やした黒い髭、海賊帽子に似た白い船長帽をかぶっている。威厳が滲み出ていた。

俺の隣で、ユイはあからさまに嫌そうな顔をしている。

「ねえ、あの船長、ルルが殴り飛ばしてきたら？ 何あの帽子。まるで海賊じゃない」

ヒソヒソと耳打ちしてくる。あの船長の態度が気に入らないらしい。

俺は相棒に肩をすくめてみせる。

「何でそんなに穏やかでいられるわけ？」

ユイは沸騰気味のご様子だ。

「あのなあ、世の中、九十九パーセントの出来事は笑って許せる、って言葉を知ってるか？ 生きてりゃムカつくことなんて山のようにあるだろ。いちいち気にしたら血管が切れる」

ともかく、爆発しないように沸騰石ふっとうせきを加える。

「九十九パーセントってことは、残りの一パーセントはキレイなのよね？」

ムスツとした顔でユイが唸る。

「あー、まあそうだな」

しばらくそつとしておこう、と俺は考え直し、二隻の飛行船に目を移した。

船が、二つの巨大な気球で吊り下げられているかのようだ。青空を背景に、本当に航海しているのではないか、と錯覚する。

「スカイブレイカー号」

「冗談じゃない。何で、よりによってあんな海賊船長の船なのよ！」  
ユイは派手に足音を立てて、ズカズカとスカイブレイカー号内の通路を進んでいく。

あんな海賊船長とは、今、俺達が乗っているこの装甲調査船の船長のことだ。バルトと名乗っていたのを思い出す。

俺達は、与えられた寝室に向かっている。荷物を整理したいからだ。

スカイブレイカー号と影虎は、飛行船の中でもかなり大型だ。装甲調査船と呼ばれる通り、強力な武装が施されている。

カブレライト鉤とドラグライト鉤の頑丈な合金で船体を補強し、風船のような気囊部分きのうにはモンスターきりゅうの素材が使われている。それも、“ヤマツカミ”という空を浮遊する大型古龍こりゅうの強固な素材だ。稀少価値が非常に高い。浮遊性も抜群だ。

この二隻の飛行船は、二隻セットで過酷な環境の土地への観測に用いられている。だが、観測用だけでなく、そのあまりの火力から古龍撃退戦にまで活躍したそうだ。

「この船、ほんとすごいわ。固定砲台が左右で二門ずつ。バリスタ

は後ろと左右でそれぞれ二門だから、合計六門。船首の方には秘密兵器でしょ？」

「そうらしい。聞いたところによると、スカイブレイカー号と影虎を作るだけでアルタミラの一年分の貿易予算を使ったとか」

ユイはそれを聞いて目を剥いた。

「わお。シュレイドからの援助もあったの？」

ユイの質問に答えようとした時、俺は背後にただならぬ気配を感じて振り返った。無意識に、腰の剥ぎ取り用ナイフに手を添える。

しかし、そこには何もなく、ただ歩いてきた薄暗い通路があるだけだった。雷光虫のランプが、ぼんやりとした青白い光で通路を照らしている。

「どうしたの？」

俺は通路をじっと睨んだ。天井、壁際、ドア、床。何もない。

俺はナイフに添えていた手を外し、歩き出す。

「あー、何でもない」

ユイは不思議そうな顔で後ろの通路を眺めていた。

「そう言えば」

と、俺は唐突に思い出す。

「何？」

「離陸したら“競争”があるから、体調を崩さないように注意しておけだ。気圧が急激に減るからだろうな」

「競争？ 何の？」

俺はその質問に肩をすくめて応えた。

「何てこった」

サザンは開きかけたドアから外を覗き、誰もいなくなったことを確認すると掃除用具庫から通路へ出た。掃除係の服を着ている。

サザンはバレなかったことに胸を撫で下ろした。

「どうした？」

部屋からもう一人の男が姿を現す。黒いシルクハットにマント。それら着ているものは全部ボロい。

隻眼せきがんの孤狼ころうだ。

「いや、俺がちよっかいを出した例の女とその相方が通っていったんだ」

孤狼は無表情のまま、宙を見上げる。

「ああ、あの二人組か。確かに見たことのある顔だった」  
しばらくして孤狼が頷いた。

「そうそう。あんたが俺を撃ち殺しかけた、あの時の奴らだ」  
サザンが銃を撃つ真似をする。

「悪いが」

孤狼が急に黄金の小銃を取り出した。

「あの時はリングが欲しかっただけだ」

「お、おい、何する気だ。ここにはリングなんてねえだろ」

サザンが慌てて両手を上げる。目はギョッと銃を見つめていた。

孤狼はじつと通路を眺め回している。

「おい、どうしたってんだよ？」

孤狼が銃を持っている手とは別の手で、マントからナイフを取り出した。それをサザンに放り投げる。

サザンは難なく回転して飛んできたナイフを掴み取った。

「何か飛びかかってきたら、殺せ」

静かな声で孤狼が警告する。

その時、通路から誰かがやって来る足音がした。二人は慌てて武器を隠す。

歩いて来たのは機械整備士だった。通路の両脇に寄った二人の間を通り抜け、去っていく。

しばらくしてから、孤狼が通路を歩き出した。

「おい」

サザンも慌てて後を追う。

「さっきのあの二人も気づいていたみたいだが……」  
隻眼の孤狼は考え込むような素振りを見せながら言った。  
「この飛行船に、何かが忍び込んでいる」

（影虎）

ЯЯЯЯアルブリードЯЯЯЯ

「スカイブレイカー号から合図です。十秒後に浮上開始！」  
連絡係がそう怒鳴り、スカイブレイカー号の制御室に向けて赤い旗を振る。

「了解」の合図だ。

「アル君、これが飛行船の出発現場よ」  
影虎の女船長、ラピスさんが不適な笑みを浮かべて、言った。長い黒髪を後ろでまとめている。アルブリード、では長いということとで勝手に「アル」とあだ名をつけられたのだ。

「乗船中の方々、船が間もなく離陸します。船酔いにご注意を！」  
ラピス船長が伝声管で船内のハンター達などに注意を促す。

俺は今、実習生としてこの飛行船に乗せてもらっている。本来なら、普通の飛行船にしか実習生は乗れないのだが、墜落事件のこともあって普通の飛行船は飛行を禁止されていた。そこで教官に頼み込んで、この装甲調査船に乗せてもらえるようにしたのだ。

俺からも、この二隻の装甲調査船の船長に頼みに行った。最初は二人とも反対していたのだが、熱心に食い下がっていると、バルト船長——スカイブレイカー号の船長——が折れてくれたのだ。

「俺はお前みたいに熱い男は嫌いじゃないぜ」  
というバルト船長の言葉を思い出す。

「気<sup>き</sup>囊調整班、点火！ 離<sup>き</sup>陸せよ！」

ラピス船長が伝声管を引っ張り出して叫ぶ。

「サーイエッサー。おい、点火だ！ 野郎共、火い吹いていけ！」  
班長の暑苦しい声が伝声管から漏れ出してくる。

「ひゃっほう、点火装置の調子は抜群だぜ！ 上がれ上がれえ！」  
体が下に向かって押しつけられるような感覚。

巨大な展望窓の外を見やると、周りの景色が徐々に低くなっているのが分かる。

地上では、アルタミラ飛行船場の職員達が集まって、こちらに手を振っていた。

地平線がだんだん下がっていく。視界に映るものが、雲一つ無い青空になっていった。

俺は今、飛行船に乗っている！ そう考えると体の芯が熱くなった。

「ねえ、スカイブレイカー号に負けてるわよ！？」

ラピス船長がニヤニヤ笑いながら伝声管に挑発の言葉を放り込む。  
「あ、ほんとだ」

俺は窓の外のスカイブレイカー号を見やった。白いあちらの船体が、若干こちらより浮いている。

「何い！？ おい、テメェら負けてるぞ！ 燃やせ燃やせ！」

班長のがなり声が轟いてくる。

ここにいる管理室の面子めんつは、計器の様子を確認しながらスカイブレイカー号に向かって挑発つちしていた。親指を下に突き出したり、中指を上突き出したり。それが見えるのだろう、あちらも同じように挑発を返してくる。

班長のたぎる熱意が影虎を上昇させたのか、ずいずいとかちが上に出てきた。

ラピス船長に指示されて、怪しい笑みを浮かべた連絡係が丸めた白い旗を持ってくる。そして、スカイブレイカー号に向かってそれを広げた。それを見て、俺はむせこむ。

“童貞バルト船長”と、でかでかと赤い文字で書いてあった。

ラピス船長が窓に歩み寄り、あちらに向かって親指を下に突き出す。顔は嫌味な微笑みを浮かべていた。そして、双眼鏡であちらの管理室を観察している。

俺も双眼鏡をポケットから取り出して、スカイブレイカー号の管理室を覗き込んだ。野次を飛ばすスカイブレイカー号の乗組員を無視してバルト船長を探す。すると、視界いっぱい突然“赤鬼”が現れた。

「わっ」

仰天して双眼鏡を落としそうになる。そして、慌ててもう一度覗き込んだ。

間違いない。トマトのように顔を真っ赤にした人間が海賊帽子をかぶって窓に張りつき、こちらを睨みつけている。

バルト船長だ。

「やりやがったな、ラピス！」

と怒鳴っているのが、今にも聞こえてくるのではないか、と思う。ラピス船長は爆発寸前のバルト船長を見つけて、笑い転げている。乗組員達も、怒り狂うあちらの船長を見て爆笑し出した。

連絡係はこれ見よがしに例の旗を振ってみせる。

「バルト船長に捧げる応援だ！ フレー、フレー」

乗組員達も悪乗りしてはやし立てた。

俺も、バルト船長に心の中で謝りつつ、笑っていた。

そうこうしている間に、影虎がぐんぐんスカイブレイカー号を引き離していく。

「船長！ 所定の高度に達します！」

笑いすぎて目に涙を溜めた技師が報告する。

「よし、今回はこっちの勝ちよ！ 勝利の赤旗を振って、あっちにも知らせてやりな！」

ラピス船長は満足げに指示を飛ばすと、俺の方を向いた。



「これが恒例の“競争”なのよね」

小悪魔のように笑って、ウィンクしてくる。

この人を怒らせたなら生きて帰れないな、と俺は密かに心に刻み込んだ。ラピスさん恐るべし。

くアルタミラ密林・北部 砂漠と密林の境目の村でく

「ねえ、パパく。雲って何色？」

とある民家の庭で、小さな子供が二人、寝そべって空を見上げている。小さな双子だった。

その隣では、あぐらをかいてボウガンの手入れをしている、体格の大きな男がいた。ボウガンのバレルを銃口に取り付け、満足そうに頷く。何発か弾をこめている。

「雲は白色だな。天気が悪かったら、灰色か黒っぽい色。夕焼けだったら赤やオレンジだ」

「ふくん。じゃあ雨って物を溶かす？」

もう一人の子供が、空を指差して、言った。

「んなわけないだろう」

「ふくん」

ポツポツと雨が降ってきたようで、鉄製の家の屋根が雨音を立てて――

――溶けた

溶けた鉄が、屋根を伝って下に落ちてくる。

「何だと!？」

降ってくる雨は庭の芝で跳ね、煙を立てて草を枯らしていく。村のあちこちで悲鳴が上がった。

「お前ら、早くこっちに来い！」

男は大柄な自分の体を盾にして、子供を抱き寄せた。落ちてきた雨が男の服に当たり、溶かす。

「どうなってんだ」

大男は、手をかざして空を見上げた。ところが、手に液体の当たる感触がしない。

雨はやんでいた。通り雨だったらしい。

「ね？ 変でしょ？ 雲が虹色だなんて」

男は目を剥いた。口があんぐりと開く。

「何じゃありや……」

空には雨が降ったせい、虹が掛かっていた。だが、それだけではない。

虹色に輝く巨大な雲が、もくもくと空に沸き立っていたのだ。それは太陽を覆い隠していたが、その光が雲の中で乱反射している。それもまた虹色に煌めいていた。

「綺麗だね」

子供が暢気のんきに感嘆の声を漏らす。

男は空を凝視した。

「また何か降ってくるぞ！」

男は直感的に子供とボウガンを抱えて、家に飛び込んだ。

その次の瞬間、彼らがいた場所に空から猛烈な速度で落ちてきた物体が激突する。爆音と共に、それは火を吹いた。爆風で土が弾け飛び、地面を抉えぐる。

「砲弾だ」

男は落ちてきた物体を見破り、ボウガンと弾の入った箱を持って外へ飛び出る。

「お前達は机の下に隠れろ！」

子供にそう怒鳴り、男はボウガンを空へ向けて構えた。

いくつもの黒い球体が、雨のようにバラバラと降ってきている。

男は落ち着いてボウガンの引き金を引いた。

村の上空で、赤い爆炎が上がる。轟音が空気を引き裂いた。

男は次々と砲弾を撃ち抜き、村に落ちてくる前に無力化する。

「パパ、頑張れ〜!」

双子が無邪気に父親のことを応援していた。

男が村を守っていたおかげで、砲弾は初弾以外すべて空に散った。

「さすがにもう落ちてこないな。お前達、出てきていいぞ」

男は空を見据えながら、そう言った。子供達は嬉しそうに机の下から這い出る。

その子供達は、ふと、庭の片隅に落ちている物に気づいた。そして、二人は顔を見合わせる。

「トマトケチャップだらけだね、あれ」

「うんうん。そう言えば、僕らもトマトケチャップだらけの赤いお服着たことあるよ?」

そう言って、双子は庭に落ちている物に仲良く駆け寄り、片方がそれを頭にかぶった。

「ねえ、パパ? 似合うでしょ?」

双子は、険しい表情で空を見守る父に駆け寄る。

男は緊張を解いて自分の子供の姿に目をやった。が、その顔が凍りつく。

「お前達! それを……一体……何したんだ!?!」

男は震えた怒鳴り声を子供に浴びせた。双子はその剣幕に縮こまる。

「あれれ? パパ、怒ったよ?」

「パパごめんなさい!」

「何謝ってるの? 僕達何もしないよ」

「でも、でもごめんなさい!」

双子は恐る恐るかぶっていたものを父親に差し出す。

「お庭に落ちてたんだよ。僕ら帽子にイタズラなんかしてないよ?」

「うん。トマトケチャップなんか塗ってないからね！」  
父親は不吉な物をするかのような面持ちで、それを受け取った。

それは、鮮血に赤く染まった、白い海賊帽子だった。

### 第33章 離陸（後書き）

座右の銘、これからもちよくちよく引用させていただきます。  
m

### 第34章 航空（前書き）

遅くなりましたm（　　）m

実は小説の企画に参加して短編を書いていたのです（；  
、  
ん  
）

## 第34章 航空

### 第34章 航空

くアルタミラ密林 上空1500メートル 影虎く

ЯЯЯЯアルブリードЯЯЯЯ

「んむ」

黒髪の体格のいい男が目玉をひん剥いて相手の手札を凝視している。テーブルに身を乗り出し、眉にしわを寄せて悩んでいた。本人は真剣なのだろうが、何となくおっとりしているような顔だ。

男はうんうん唸りながらカードを睨み続けるが、透視能力でもない限り裏からカードの内容を知ることとはできない。

「さあ、どれにしますか？」

自分の手札を二枚、裏面を相手に向けて広げている若い女性が微笑む。はっとするような絶世の美人ではないかもしれないが、優しい顔と雰囲気は他人に好印象を与えるだろう。

「よし、じゃあこれだ」

男はニヤリと怪しい笑みを浮かべて、女性の手から一枚のカードをかすめ取る。

そのかすめ取ったカードを見て、男は悲鳴を上げた。その悲鳴には、幾分か苛立ち紛れの感情も窺える。

「あああああ！ またかよ！ めんどくせえな、おい」

男が取ったカードには泥棒猫メラルーの絵が描かれていた。イタズラっぽい笑みを浮かべ、紙幣をつまんでウィンクしている。カードの下部

には、“アルカトラズ”という言葉が金色の洒落<sup>しゃれ</sup>た字体で書き込まれていた。

「ウルカさんまたハズレ。こっちが“13”でした」

そう、カードゲームを続けているこのおっとりとした顔の男こそ、最初の飛行船墜落事故の唯一の生存者、ハンターであるウルカさんだ。

まさかこの船の護衛として乗っているとは思ひもなかった。確かに、特に大きな怪我をしたようには見えない。それで、病院の入院期間も短く、早く退院できたのだろう。

そのウルカさんと向き合ってカードゲームをしているのがアンさんだ。この女性も幼い頃からハンターとして生きてきたらしい。

「ああっ！」

今はこの二人の隣で実習で学んだことをノートにまとめているのだが、ウルカさんの声につられてついついそちらに目移りしてしまう。でも、あまり悪い気はしない。見ていだけで面白いのだ。ウルカさんは。

「やったわ！ “13”が二枚揃った！ 上がり！」

アンさんが無邪気にVサインを作る。

「あゝ、負けちゃったぜ……」

ウルカさんが忌々しげに最後に一枚残ったメラルーのカードをつつく。今まで、ババ抜きというカード遊びをしていたのだ。

「私、今日は運がいいわね」

アンさんが、使ったカードをかき集めながら満足そうに言った。

「でも、アルの初回上がりにはビビったぜ」

ウルカさんがこちらを見ってくる。俺はクスクスと苦笑いした。ラピス船長にアルと呼ばれてからは、周りにそう呼んでもらうようにしている。

最初は俺もこのババ抜きに参加していたのだが、驚いたことに、カードを配られた時点ですべてペアが揃っていたのだ。だから、ゲームが始まった時に俺の手に残っていたのはババであるメラルーの



み。それを俺の隣のウルカさんが引かされて、俺一人、ゲームから抜け出したのだ。

「まあ、ババ抜きも確率の問題ですからね。運ですよ」

そう言って励ますと、ウルカさんはため息をつく。

「だったら、俺は神様から見放されてるな……。生きてて、ひでえ目ばっかに遭う。自分より年下の双剣ハンターには見下され、リオレウスに挑みに行つて相棒に死なれ、おまけに乗っていた飛行船は墜落する」

自虐の言葉だったが、ウルカさんの目は力強く輝いていた。

「だから、今まで頑張ってきたんだ。あの双剣ガキハンターを見返すために、死んだ相棒のために。飛行船墜落の事件の調査も、万が一に備えて俺達ハンターがしっかりしないと……」

自分の世界に入っていくウルカさんを、アンさんと俺はそつと見守っていた。

彼はしばらく、じつと過去に浸っていたようだが、唐突に顔を上げた。

「そうだ。お前ら、ラセっていう名前のハンター知らねえか？ 妙に自信に満ち溢れてる、例のガキ双剣ハンターなんだが」

俺は知り合いにハンターが一人もいないので、とりあえず首を横に振る。

アンさんも難しそうな表情を見せた。

「私知ってるのは“風の双剣使い”という人なんだけど……その人とは違うの？」

「風の双剣使い？」

心に思い当たる節があり、思わず「あっ」と声が漏れた。

「あの小説家兼双剣ハンターの？」

「そうよ」

ウルカさんも、それを聞いて納得したようだ。

「最近発見されるようになった、新しいモンスターを小説に取り入れてるんだってな。小説名が“大海の剣”、だったか？」

「そう。月刊誌“狩りに生きる”の連載小説。その小説家とは違うの？」

「ああ。十中八九、違う人物だ」

ウルカさんの表情が、多少がっかりとした元氣のないものになる。よほど、そのラセという人物が氣になるのだろう。

「そう言えば、新種のモンスターってどれくらい見つけれたんですか？」

氣になったのでアンさんに訊いてみる。何の予兆か、最近は未知のモンスターの発見が相次いでいるのだ。

「そうね……。私のオトモアイルーが情報を仕入れて来ていたけど……」

アンさんが独り言のように呟きながら、足元の自分のリュックをあさっている。そして、薄い紙束を取り出した。レポートを冊子にしたような物に見える。

「この辺はかなり古いよね」

アンさんが最初の方のページを指で示した。ウルカさんと俺はアンさんの両脇からそれを覗き込む。

@尾晶蠍 びしょうかつ

アクラ・ヴァシム

※上記亜種 あしゆ

灰晶蠍 かいしょうかつ

アクラ・ジェビア

@迅竜 じんりゅう

ナルガクルガ

@舞雷竜 ぶらいりゅう

ベルキュロス

「俺が生まれる以前に発見された奴らですね」

それらは確かに古い情報だった。ベルキュロスなどは、あまりの強力さから、瞬く間にその名が広まったと聞く。

アンさんは適当にページを飛ばし、最新情報の載っているところを開いた。

@海竜かいりゆう ラギアクルス

@炎戈竜えんかりゆう アグナコトル

@響狼きょうろう オルガロン

♂ カム・オルガロン  
♀ ノノ・オルガロン

@翔狼しょうろう ヴィアラ

♂ ヴィアリク  
♀ ヴィアル

「な、何だこいつら？ ラギアクルスはまだしも、それ以外の三つは聞いたことがないぞ」

ウルカさんが目を白黒させる。俺も初めて見る名前ばかりだ。

「アグナコトル、オルガロン、ヴィアラはまだまだ知名度が低いらしいわね。でも、報告を読んでみたけど……どれも侮れないモンスターばかりだわ」

アンさんがにっこりと微笑む。

「じゃあ、公表されていない裏情報も覗いちゃう？」  
ウルカさんは目を皿にした。

「そんなもんもあるのか!？」

「私のオトモアイルー、私が小さな頃から面倒を看てくれてるんだけど、意外とすごいのよ？ コネを使ったり、交渉をしたり……」

アンさんがイタズラっぽい笑みを浮かべる。よほど優秀なアイル  
ーなのだろう。

「コネ、交渉、だと？」

ウルカさんが懐疑的な目でアンさんを睨む。

「そいつ、きつとタヌキだろ。猫がそんな世渡り上手なはずかねえ。  
タヌキが猫に化けてるんだ」

アンさんは、そんなウルカさんの言葉を聞いて吹き出した。何か  
を思い出しているのか、懐かしそうに目を細めている。

「何でそんなに笑うんだ？」

ウルカさんが拍子抜けしたように問うた。

「いや、昔、ガノトトスさんが別れ際にそう言っていたのを思い出  
して」

アンさんは意味ありげな答えを返す。

「ガノトトス？　すごい名前の人間がいるもんだな。それとも、本  
当に魚竜、ガノトトス（ガノトトス）が言ったとか？」

ウルカさんも、冗談をアンさんに言って笑い出した。

「って、モンスターが喋るわけねえか」

「ふふふ」

アンさんは、やはり意味ありげに微笑むだけだ。

「水で槍を作る人がいるくらいなもの。モンスターが喋ったってお  
かしくないわ？」

「アンさん、それ、屁理屈なんじゃ？」

俺は彼女にそう提言するが、アンさんから返ってきたのは肩をす  
くめて首を横に振るという仕草だけだった。

冊子のページをめくると、黄色の“最新報告”と書かれた紙が露あらわ  
になる。

@火山地帯の地震、原因未だ解明せず。海賊Jキャッツ、ギルドナ  
イトによる調査続く

@リバース沿岸より沖へ七キロメートルの孤島。調査隊、海底に崩壊した遺跡を発見。簡易調査によると、ガノトトスの骨が多く見受けられる。魚竜の群れの巣だった可能性あり

@ラージャン亜種か？ 雪山で銀獅子ぎんじしの発見情報。一個体を確認済み

@雪山、連続雪崩なだれ発生の原因不明。村の壊滅件数、十件超

@雪山の巨大キリン、遂に確認。若いハンターの男女がポケ村跡でキリンと戦っていたと海賊Jキャッツが目撃証言

@マンドラゴラ、価格暴騰はげ。コンガ種によるキノコの食い荒らしが原因と見られる。現在、平均単価十五万ゼニーが三十万ゼニー超までに。まだまだ上昇する見込み

「何っ？ マンドラゴラが、さ、さ、三十万超！？ 高っ。確かにマンドラゴラが高いって噂は聞いていたが……。誰も買えねえだろ……」

三十万ゼニー。マンドラゴラと同じ大きさのピュアクリスタルは二十万。小指の先ほどの大きさしかないキノコが宝石をはるかに上回っている。

「そんなことより、もっと耳寄りな情報があるじゃない。巨大キリンとか、銀獅子とか」

アンさんがおかしそうに笑う。

「木を見て森を見ず、って言うのよ。そういうの」

「いやいや、マンドラゴラだって重要だろ。“秘薬”を作るのに必須の材料だぜ？ キノコが生き物の命を救うんだ」

ウルカさんは大真面目に言い返す。

秘薬。マンドラゴラが持つ、特殊な効能を利用した奇跡の薬だ。服用すれば万病に効き、致命傷を負った者を一瞬で復活させることができる。ゆえに、その材料や完成品は非常に高値で、一般人にとっては到底手の届かない品だ。

しかし、世の中には、“古の秘薬”<sup>いにしえ</sup>という秘薬を超越する薬もあるらしいのだが。

「森なんか見なくたっていい。木一本観察するだけで充分だ。一を知って十を知る、ってやつだぜ」

ウルカさんはそう言って鼻をならした。

く同じ頃 スカイブレイカー号く

「これが、あんたの恐れるものか」

黒い眼帯の、マントを着た男が分厚い本を手にとって読んでいた。  
<sup>せきがん</sup>黒い眼帯の、  
<sup>こうろう</sup>隻眼の孤狼だ。

小さな部屋の中に、頬の瘦け落ちたサザン、隻眼の孤狼、ブルジョア博士の三人が、寄り集まっている。サザンは孤狼の脇からその分厚い本を覗いていた。

開かれたページには一枚の絵と、その絵についての説明文がある。

「虹か……」

サザンがボソリと呟く。そこに書いてあることを、暗に信じ難いものだとしていたような呟きだ。

絵には巨大な竜が描かれている。入道雲の陰から、半透明の、虹色に輝く竜が身を乗り出していた。その身体からは霧のようにミストが吹き出し、円形の虹が竜を取り巻いている。途切れていない、三百六十度の虹だ。

「こんな綺麗な生き物があるわけねえよ」

サザンはブルジョア博士に肩をすくめてみせる。博士はサザンに蛇睨みを利かせて黙らせた。隻眼の孤狼はあくまで沈黙を貫いている。

「えいこうりゅう瑩虹龍、リリス」

ブルジョア博士は記憶しているその文章を読み上げる。孤狼が手に持っている本に書かれた文だ。

「その者、はる遙か天空に棲まう虹霓。こうげい太古より生きし、空の覇者。現るは、あまた数多の虹」

博士は言葉を切った。そして、頭を抱え込み、うずくまる。サザンは驚いたように駆け寄った。

「どうした、博士？」

サザンが呼びかけると、ブルジョア博士はゆっくりと顔を上げた。「飛行船墜落事故の原因がもし本当にこの龍のしわざだったなら……私達が止めなきゃいけない……」

「止める？ 何を？」

サザンが寝耳に水だというような顔で訊く。

「これを読んでないのか？」

孤狼が自分が持っていた分厚い本をサザンに差し出す。【瑩虹龍リリス】について書かれたところが開かれていた。

「もし、それが本当なら、俺はとんでもない依頼を引き受けたことになるな」

孤狼はため息をついてブルジョア博士に向き直る。眼帯の隣にある右目が、鋭く博士を見据えた。

「もし、その龍が実在していて、もし、俺達は何もせず逃げ帰ったら、一体何が起こるんだ？」

本を読むのが嫌なのか、サザンは真相だけ知るために博士に質問する。

「街が破壊されるとか、古龍迎撃戦が起きるとかか？」

サザンは笑いながら本を閉じる。

「サザン」

孤狼が黒い帽子の陰からサザンを睨みつけた。殺し屋の眼力は誰よりも強い。ものの一瞬でサザンは静まる。

「さっきの本、全然読んでないな」

「ま、まあな。それがどうかしたのか」

「じゃあ、問題だ。お前の知っている場所で、この世で一番広い場所はどこだと思う？」

孤狼がホルダーから金色の小銃を取り出し、弾倉を引き抜いた。話しながら点検している。

「広い場所？ 果てしなく続く東部山脈か？」

「もっと広い」

「じゃあ、海か？」

「おいしいな」

孤狼は人差し指を上に向けて示す。

「俺達が今いる、空だ」

サザンはそれがどうしたのだ、と言いたげに孤狼を見返す。

「この本ではこう考察されている。生き物が棲む場所が広ければ広いほど、その場所で生息する生き物の最大サイズも大きい、と」

孤狼はサザンが閉じて机のうえに置いた本を見やった。

「陸は確かに広い。陸に棲む老山龍ラオシャンロンや仙高シエンガオレン人もかなり巨大だ。だが、海にはもっと巨大な奴がいるという伝説もある。実際、海は陸よりも広い。では、海よりも広い空ではどうなるか。螢虹龍の大きさはどれくらいのものだと言われているか、予想してみろ」

孤狼が微かに笑いながら、サザンに促す。サザンは適当に答えを言ってみることにした。

「ヤマツカミくらい？」

孤狼は首を横に振る。確かに、ヤマツカミも巨大なモンスターの部類には入るが。

「ラオシャンロンクラスか？」

「違う」

「ラオシャンロンの三倍か？」



孤狼は、手をヒラヒラと振ってため息を吐き出す。

「おいしいな」

そして、再び本を手に取り、ラオシャンロンの絵が描かれているページを開いた。

「街や砦に襲ってくるラオシャンロンのサイズは、大抵同じで、あれでも成長途中らしい。あのサイズを1としよう」

「成長途中？ あの大きさでか？」

「シェンガオレンが背負っているラオシャンロンの頭蓋ずがいはラオシャンロンが寿命まで育ちきって白骨化したもので、普通のラオシャンロンの頭蓋よりサイズが大きい。頭蓋の大きさのラオシャンロンを再現して計算すると、普通サイズを1とするなら2〜3はあるらしい」

サザンは頷いて先を促す。

「なるほどな。じゃ瑩虹龍のサイズは普通のラオシャンロンを1としたら3くらいってことか。さっき、おいしいつつたもんな」

だが、隻眼の孤狼は首を振った。

「別にサイズが近かったからおしいと言ったわけじゃない」

「へっ？」

サザンは度肝を抜かれたように固まる。

「数値に三が含まれているから、おしいと言ったんだ」

「え、あ、そういうことだ？」

サザンが混乱したような表情でブルジョア博士に助けを求める。

ブルジョア博士はニヤリと笑って指を三本突き立てる。

「普通サイズのラオシャンロンが1なら瑩虹龍は30。ラオシャンロンの三十倍はあるそうよ」

くシュレイド跡地く

☆☆☆☆ミライ☆☆☆☆

「何だと!？」

ケイが大口を開けて正面から首を絞めてくる。

「痛え痛え、分かったから離せ!」

何とか苦し紛れにケイの腕を振りほどき、ぜえぜえと荒い息をつく。

南方のアルタミラから空輸で援助物資がシュレイドに送られてくるはずだったが、飛行船の墜落事故が相次ぎ、空輸が不可能となったのだ。巨大貿易都市アルタミラの物資援助をあてにしていたシュレイドは、復興が大きく遅れる予定だ。つまり、例の年に一度の“祭”も延期されることになる。

「何が飛行船墜落事故だ!？」 嵐だろうが、モンスターが出ようが空輸してこい!」

暴れて悔しがるケイを、ハウトと俺で懸命に押さえつける。

「まあまあ、もうしばらく待とうよ。演奏の練習をする時間が増えて良かったじゃん」

だだをこねるケイを、ルナーがイチゴジュースを飲みながらいさめる。

ケイは憤懣ふんまんやるかたない様子で暴れるのをやめ、ため息をついた。  
「つたく、空でいったい何が起きてんだか……」

### 第34章 航空（後書き）

前書きの短編は「泥棒エイプリルフル」と言います。四月一日に投稿致しました。本作とはまた違った作風・内容となっています。速読できる方は30分程度で読めるかと思います。是非読んでいただけたら幸いです（ハ－ハッ）

金剛石の執筆作品一覧からどうぞm（　　）m

### 第35章 夢を追う者達（前書き）

遅くなりましたm  
（  
）  
m

## 第35章 夢を追う者達

### 第35章 夢を追う者達

くアルタミラ密林 上空2000メートル スカイブレイカー号く

#####

「どうやら貿易風に乗ったみたいだな」  
ジェットストリーム

与えられた乗員室の窓から外を眺めると、雲が川に流されているかのように過ぎ去っていく。

「そうみたいね。飛行船が自力でこんなに速く飛ぶはずないし」  
隣からユイが覗き込んできた。

「さすがにここまで来ると息苦しいな」

気圧が低いため、当然空気の量も地上より少ない。先ほどの報告では高度2000メートルに達したと聞いた。そこらにある山の頂上を優に超える高さだ。耳も、その気圧のせいでキンキン唸っている。

「そろそろ、調査員が動き出す頃ね」

ユイが備え付けのベッドに寝そべり、あくびした。調査員とは、飛行船墜落事故の原因を解明するためにこの船に乗り込んでいる研究者達のことだ。

「昼寝するのか？」

「空気が薄いから、頭が働かないのよ」

お休み、と言ってユイがカーテンを閉める。すっかり姿が見えなくなった。

「暇だな……」

相棒は寝てしまったし、船の中でも見て回るか。と、余った時間を船内散策に当てることにする。

「確か調査員が詰めてる観測室がどこにあるはずだな……」

そこに行けば、飛行船墜落事故の原因がどんなものか、話を聞けるかもしれない。

++++レーザー++++

「えいこうりゅう螢虹龍？ 君は伝説なんか信じてるのか？ そういう伝説を信じ

る者が馬鹿にされなかった日はないのに」

観測室の研究員が肩をすくめて見下したように笑う。

飛行船墜落事故の原因が螢虹龍である可能性はないのか、と訊ねに来たのだが、先ほどのように一蹴されただけだった。

「なぜ螢虹龍でないと言い切れる？ 伝説が真実を示していたことも少なくないはずだ」

ブルジョア博士の推論に賛成するわけではないが、少なくともその論を否定はできないと思っている。

「真実を語る伝説ね……。動くれいほう靈峰の老山龍ラオシャンロン、浮遊山岳さんかくのヤマツカミ、秘境伝説ひきょうの金銀竜、砂漠の水晶のアクラ・ヴァシム、樹海王伝説のエスピナス……確かに伝説が本当のこともある」

中年を迎えたその研究員の男は、こちらに背を向けて窓の外を見やった。

「だが、本当の伝説と言ってもその程度しかない。邪龍伝説は？そうへき双壁成す兄弟は？ ぜつとうしゅ絶島主は？ 言い出したらきりがない。こんなものは嘘に決まっている。未だにその証拠が発見されていないのだ」  
研究員が自慢気に背後の俺を振り返る。自分の持論を鼻にかけているのだ。

「だが、研究員の中にも一人、螢虹龍リリースが事故の原因ではないかと唱えた馬鹿はいた」

「いたのか」そんな伝説を信じる馬鹿が。「でもな、俺はそんな馬鹿を否定するつもりは毛頭ない」

「は？」

俺が言ったことがよほど心外だったのか、男は向き直ってねめつけてきた。

「一つ言わせてもらうが、その螢虹龍説を唱えた人物は学界で爪弾きにされてる奴なんだぞ？　いつもいつも、言うこと為すことが突飛過ぎるんだ」

俺も社会ではお尋ね者だがな、とは言えない。

俺が“そんな馬鹿”でも否定しない理由。それは、昔、とある人物が言った言葉が頭から離れないからだ。

『世の中何があるか分からない。お前みたいな馬鹿が成功することもあるんだぜ？』

そうだ。馬鹿呼ばわりされてでも、少しでも可能性があるならそれに向かって突っ走る。そういう奴を否定する気にはなれない。殊<sup>こと</sup>に、自分もその“馬鹿”だったのだから。

「ちなみに言うと、その螢虹龍説を唱えていたのはブルジョアって言う女だ。アルタミラのホラ吹き博士として有名だぞ？　そんな馬鹿の推す説なんかが真実のわけがない」

思わず片眉がつり上がる。その名前が出てきたのは予想外だった。さらにホラ吹き博士と銘打たれていたことも初耳だ。あの博士、それが理由で“馬鹿”と呼ばれるのを毛嫌いしていたのか。

「何でも小さい頃から夢物語ばかり吹いていたようだね。馬鹿だの変人だの言われて育ってきたらしい。今じゃ人目を忍んで地下暮らししてるそうだ」

その馬鹿がこの船にこっそり乗り込んでいて、さらに目の前いる

マントの男が隻眼の孤狼だとこの研究者が知ったらどんな顔をするだろうか。くだらないことを考えながらその場から去る。

観測室に来て分かったことといえば、研究員達は飛行船墜落事故の原因がモンスターではないと信じ込んでいること。そして、ブルジョア博士が不憫な<sup>ふびん</sup>人生を送ってきたことくらいだ。

「不憫な人生を送ってきた奴か……」

そういう奴に限って、大抵あの男が絡んでいるのだ。そう、闇の中にロウソクを灯す<sup>とも</sup>が如く、人々に希望の火を灯していく男――

フェイス  
ケイ・F・ネイチャーが。

⊕⊕⊕⊕ ユイ⊕⊕⊕⊕

目が覚める。

ただならぬ不穏な気配を感じ、全身の毛がさわさわと逆立った。

枕元に置いてあった剥ぎ取り用ナイフの鞘<sup>さや</sup>を取り払い、カーテンを開け放ってベッドから飛び出す。

「ルル？」

つい一時間ほど前、ルルは船内散策に出かけると言って部屋を出ていったのだ。戻ってきた形跡はない。ドアも閉まっている。

「誰もいない……」

不穏な気配は感じられなくなっていた。この部屋に、人が隠れられるような適当な場所はほとんどない。だから、身を潜めている可能性は低い。

「気のせい？」

首を傾げながらナイフを鞘に戻す。

確かに誰かが……何かが近くにいた気がしたのだ。ハンターをやっている以上、常人を遥かに凌駕<sup>りようが</sup>する五感を持っている自信はある。



いたと感じたらいるのだ。だが、ネズミか何かの小動物が迷い込んできただけなのかもしれない。

再びベッドに横になった。ナイフは枕の下に入れ、いつでも触れるようにする。しばらく部屋の中に目を光らせていたが、特に変化はない。

気のせいかな、と割り切って目を閉じた。

（同じ頃 影虎）

ЯЯЯЯアルブリードЯЯЯЯ

「こつちが小型浮遊機<sup>フライバード</sup>だ。最新技術を駆使した装備だぜ」

装備班班長の小柄な男が自慢気にそれをさすった。棚にいくつも収められているそれは、規則正しく丁寧に並べられている。

「すげえ。これがあれば飛行船<sup>ふね</sup>や気球に乗らなくても空を飛べるんですよね？」

好奇心丸出しだが、この傑作を前に感心しない奴は血が赤くない。と、密かに思う。

「その通り、空を飛べる！」ばん、と俺の背中を叩き、班長が解説しだす。「強靱<sup>きようじん</sup>なツタの葉の繊維を使った丈夫な気囊<sup>きのう</sup>。タンクには特殊な浮遊ガス。太った人間じゃなければ、容易に空中を漂える！」両腕を広げ、興奮気味に熱く語るその姿はどこか微笑ましい。

「飛行船が行けないような樹海の中でも、地面に降りることなく移動可能だ。もっと上手く扱えるようになれば、空中戦も夢じゃない」しかし、そこで班長は肩を落とす。「スピードは出ねえし、風頼みの移動になるけどな」

それは玉に傷っすね、と苦笑する。小型の気球とはいえ、飛行船のように自力で速力を生み出せるわけではない。もったいない限り

だ。自由に宙を移動できるようになれば、どれほどフライボードの活用性が高まることか。

「推進力をつける装置は取り付けられないのですか？」

訊ねてみると、班長は難しそうな表情をして答える。

「つけたいのはやまやまだが、飛行船と同じプロペラ式じゃあ装置がでか過ぎるし、自重に耐えられなくて墜落だ。噴射式も考えたが、熱で装置が溶けるし操作もしづらい。燃料の消費も激しい。おまけに、装置自体のコストも高いから量産が難しい。そして、二つの方式に共通するのは、推進力を維持するために必要な燃料の積載量が少ないことだ」

唸らずにはいられないような問題点の数である。

だが、フライボードを眺め回していて、ふとあることに気づいた。

「班長、この装置、モンスターの素材は使われていますか？」

「モンスターの？ いや、自然の物資は用いたがモンスターは例外だ」

やはり、と内心で頷く。火属性のモンスターの甲殻で装置を覆うか何かすれば、耐火性は大幅に強化されるだろう。ただ、そんな簡単に済むのならとくにそうしてあるはずだ。耐火性の甲殻は生物からとるため形が均一ではない。船もそうだが、少し船体の形がひしゃげているだけで勝手に進路がずれる。それでは非常に扱いづらい上に、自分の意思とは違う方向に進んだりして危険だ。マグマの中の小岩に着地しろと言われて、失敗したら黒焦げになってしまうような状況なら、なおさら精密性がモノを言う。特に、危険な土地への調査に用いられるこの船は、そんな状況になり得ないと言い切れないのだから。

「きつと、もっとフライボードは進化しますよ！」

人の手によって生み出された“空を翔ける鳥”。

「ああ、こいつはいつか、本当に空を翔け回るぜ！ 鳥みたいにな  
！」

まだ雛ひなのように幼いその技術は、いつ巣立ちを迎えるだろうか。

そして、自分もまた飛行船員の雛だ。

「俺もいつか飛行船の船長になるんだ！」

小さい頃から秘めてきた夢が、弾ける。これまで生きてきた十数年、ずっと空に憧れていた。自分の頭上にはずっと空があり、見上げればいつもその広大さに感動した。

「そうだ若造！ おめえも空を飛べ！」

両親がそうであったように、俺自身が飛行船を繰り出して冒険するのだ。

「飛ぶぜ！ うおおおお！」

「その意気だ！ うおおおお！」

気づけば、班長と俺とで雄叫びを上げ合っていた。室内に声が反響して、ビリビリと空気が震えている。雄叫び合戦はますます白熱した。

しばらくして、班長が俺の肩をバシッと掴んだ。鷹たかのように鋭利な眼光をたぎらせ、俺の目を覗いてくる。

「よし若造、俺がラピス船長に掛け合って……いい仕事させてやる」

「マジですか？」

「任せとけ！」

班長は頼もしい自分の胸板をバシンと拳で叩く。そして、豪放に笑い声を上げた。飛行船には本当に“熱い”男達が乗っている。それを改めて実感するのだった。

〳数日前 アルタミラ学会にて〳

円形の広い講堂。

収容数五百人を誇るアルタミラ大学院、第一議事堂。首が痛くなるほど見上げなければ見れない高さにある天井。そこには、光井戸やシャンデリア、特殊なランプが吊り下げられている。石造りの壁

には、ミナガルデ地方の地図。東の峡谷地帯の所に、ベルキュロスの絵が静かに佇たたずんでいた。他の地域の所にも、様々なモンスターが描かれている。

講堂内は人で溢くみれていた。何人もの教授服や白衣を着た人間が雁がん首並べて座っている。

ここで、連続飛行船墜落事故の原因を突き止める研究会が催されているのだ。

「——なのです。つまり、墜落事故の原因は天候にあります」

座している群衆の中、一人立っていた若い男が自分の推測を説明し終えた。

数十人の学者がそれに頷いて応える中、あちこちで手が上がる。

「質問！ 最初の墜落事故の生存者、ウルカさんの検問録によると天気は快晴だったとのこと。これはどう説明する？」

「アルタミラ密林付近で、そんな局地的な嵐が発生した前例は確認されていないわよ？」

「墜落現場付近の住民に事故当日の天候の詳細を訊いたのですか？ 数時間で天気が変わることだってよくありますけど——」

次々とぶつけられる質問に、発言者はたじろぐ。

その時、木槌を板に叩きつけるような音が連発された。

「静粛に！ 質問や異議のある者は沈黙をもって挙手されたし」

目をみはるほど蓄えた白髭ひげを震わせ、年老いた議長が騒然とする講堂を取り仕切る。辺りは水を打ったように静まった。議長は満足そうに頷くと、先ほどの発言者に目を向けた。

「どうやら、先ほどの質問の数からして穴だらけの論だったようだな」

議長の言葉に若い男は顔を赤くし、不服そうに着席する。

「なに、気にするな。事故の目撃者は一人しかいない。推測のみで事故の原因を突き止めようとすれば、そのようなことになって当然だ」

事実、今まで数々の学者が発表した推論には、どれも相応の質問

や異議が飛び交った。未だに、はっとするような聡明な推論は立っておらず、霧の中を手探りで進んでいる状態だ。

その時、講堂の末席の方から手が一本上がった。

「議長」

「なんだ？」

議長が先を促すと、挙手した人間が起立した。もしやもしやした薄い桜色の髪を適当に撫でつけ、分厚い眼鏡をかけた、しわくちゃの服を着た若い女性だ。群衆のあちこちから、ぼそぼそと文句の声上がる。

「あなたの名は？」

議長が周りを静まらせた後に問いかけた。

「ミラノ・フォン・ブルジョアと申します」

女性が名乗ると、再び辺りがざわめいた。数人の高名な学者達は一斉に顔をしかめる。

「静粛に！」

議長は苛々《いらいら》と木槌を打ち鳴らし、ブルジョア博士に発言を催促した。博士は一礼して語り始める。

「皆さん、あなた方が知っている生き物の中で一番巨大なものはないでしょうか？」

博士が問いかけるように話を進めると、あちこちから「老山龍だ」ラオシャンロンと声が上がった。ブルジョア博士はそれに頷いて続ける。

「では、伝説上の生物も含めるたとする、どうなりますか？」

先の読めない話に眉をひそめる学者達もいるが、それでも何人かは思い思いの答えを發した。

「なるほど。アカムトルム、ウカムルバス、ラヴィエンテ……聞こえますね。しかし皆さん、それらの伝説上のモンスター達の生息地はいずれも海か陸とされています。空はどうでしょうか？」

ここまで来たにも関わらず、何が飛び出すか予期していた者はほとんどいなかった。だから、大概の学者達は怪訝そうな表情をしている。

「聞いたことはありませんか？ “虹の歌伝説”を」

辺りがどよめいた。「まさか……」と驚愕する学者。「馬鹿な」と一蹴する学者。数名だが「なるほど」と感心する学者。様々な意見が講堂内に渦巻く。

ブルジョア博士は手の平を宙に突き上げて、学者達が静まるのを待った。

「おかしくありませんか？ 空に生きる巨大モンスターが、ヤマツカミ程度までなどと決めつけるのは。ラオシャンロンや伝説のラヴィエンテなど陸海の生物は軽くそれを凌駕する（りょうが）というのに」  
博士が息をついた拍子に、高名な学者が苛立ちを交えて声を上げる。

「待て！ まさか……」

一瞬、躊躇（ちゅうちう）する学者。

「まさか？」

ブルジョア博士が先を促す。その学者は意を決して言った。

「まさか、螢虹龍リリスが墜落事故の原因だと言うのか？」

視線という視線がブルジョア博士に集まる。

「私はそう推測しています」

つかの間の静寂。

「馬鹿馬鹿しい！」

罵声の嵐が津波のように講堂を呑み込んだ。

「静粛に！ 静粛に！」

木槌を打ち鳴らし、議長が叫ぶが、もはや焼け石に水である。

「やっぱりお前はホラしか吹かないな！」

「地下ごもりでますます脳みそが腐ったようじゃ」

ブルジョア博士。アルタミラの学会では、ホラ吹きだとか夢見学者などと名付けられて蔑（さいげす）まれている人物だ。

——馬鹿だよ。馬鹿

騒ぎが収まるのに数十分を費やした。

ブルジョア博士は俯いたまま、議事堂を去っていった。

その背に投げ掛けられるのは、罵倒と憐れみの眼差し。称賛や尊敬とはかけ離れたもの。

ブルジョア博士が講堂に残していった推論書は、長い会議に苛立っていた者達により腹立ち紛れに破かれた。

その日、議会の出した結論は、墜落事故の原因があると思われる空域に調査船を派遣しようということだった。翌日、その役目は影虎とスカイブレイカー号が引き受けることに決まる。

第36章 虹の歌と伝説（前書き）

こういう逸話って好きです (^ー^)  
下手っすけど、ご覧ください m ( ー ) m



## 第36章 虹の歌と伝説

### 第36章 虹の歌と伝説

“ 虹の歌 ”

虹は空に架かってる

ほら 君と僕の間

渡ろうよ 僕も渡る

橋の真ん中で 君を待ってる

君に渡したいモノがあるから

僕らは許されないけど

二人一緒なら何でも叶うんだ

虹は空に架かってる

見て 君と私の間に

渡ろうよ 私も渡る

橋の真ん中で 君を待ってる

君と一緒にいたいから

私達は逃げられないけど

二人一緒なら何も怖くない

二つのココロが一つになって

二人の間に橋を架けたんだ

悲しまなくていいよ

二人は一つになったから

ほら 空に虹が架かってる

“虹の歌とその伝説の関係とは”——古代論文より冒頭と巻末  
を抜粋

我、ここに誓う。

かの瑩虹龍の伝説を、己が命の続く限り追い求め、その真実を解明せしめんとす。ただ、我、徒に己が信念を全うするにあらず、勉強と研究の崇高たる精神に則り、後世にて学問の発展の先駆けとなる先例に能うことを生涯の信条とせん。

——1233年 第二寒冷期22日

——略——

『虹の歌』。見ての通り、男女の恋を詩にしたものだ。この歌には、元となるエピソードがある。

——とある村に二人の男女がいた。男は村を守る狩人で、他の地方からやって来た。女は医者だった。どちらも優れた逸材で、男は剣術に詳しく、女は医術、殊に薬に通じていた。

男は怪我をするたびに女を訪れ、女はそのたびに男を看病した。最初、男は月に一度女の所にやって来る程度だった。だが、それは日増しに早まっていった。二週に一度。週に一度。怪我も無いのにやって来て、おすそ分けに、と上等な肉を持ってくることも多かった。

ついに、男は仕事が無いときは女の家に来て、薬の調合や医術などを教わったり手伝ったりするようになった。男はそれで医療にも通じるようになった。

逆に女は男から剣術を習った。女はなかなかの剣客になった。女は男の来訪を楽しみにするようになった。

ある日、村は他の地域からやって来た貴族とその配下によって占拠された。医療技術に長けていたこの男女以外の村人は、すべて奴隸として売りさばかれ、男女は医者としてこき使われた。

そして遂に、男は別の場所へ連れていかれることになった。

二人は再会して結婚することを誓い合い、別れた。

だが、二人は一向に解放されなかった。男は女に手紙を送り、とある橋がある場所で落ち合おうと決めた。

雨期、雨の降る夜、二人はそれぞれ捕らえられた場所から逃げ出した。村人を奴隷として売り払ったことの口封じをするため、貴族は二人の刺客を雇い、それぞれの後を追わせた。

男女は示し合わせた橋で落ち合った。男は七色に輝く宝石の指輪——結婚指輪を女に渡そうとした。

その時、刺客の一人が撃った銃弾が指輪を砕いた。指輪の破片は川に流された。もう一人の刺客は、剣を持って男女に躍りかかった。男女は抵抗せず、ただ抱き合っていた。逃げもせず、慄きもせず、静かに刺客を見据えて。

刺客は躊躇<sup>ためら</sup>いなく二人の首を斬り飛ばした。

二人の顔は安らかで、抱き合ったままの体もろとも川に落ち、流された。

二人の刺客が立ちつくしてそれを見守った。

雨がやみ、川に虹が架かった。

——どうだっただろうか。

### 『虹の歌』。

あの短い詩には、どれほどの想いが込められているのか。あなたには測り知ることができただろうか。

さて、ついでだがこの話には続きがあることをお伝えしておこう。あまりにも凄惨<sup>せいさん</sup>な内容となるため、私も載せようか迷った。だが、この物語が何かの謎を解く鍵になっているのであれば、それを後世に伝えなければなるまい。

——男女が死んで、それから。

雨期は終わらなかった。それどころか、ますます天候は荒れ狂った。

毎日のように嵐がやって来て、食べ物となる植物などを根こそぎ大地から洗い流し、吹き飛ばした。

雨は雪に変わり、大地が凍りついた。人々は飢えと寒さに死んでいった。

そうかと思えば、あつという間に乾期がやって来た。大地は焦熱地獄と化し、水は涸れ果て、森を砂漠にした。

男女を貶めた貴族はとうに死に絶え、二人の刺客だけが生き残っていた。

ある日、食物と喉を潤す水を探し求めて砂漠を歩いていた二人の目に、オアシスが映った。慌てて近づいてみると、楽園が広がっていた。

それは虹の世界。

生い茂る植物は淡い虹色で、葉に隠れるようにして瑞々しい果実がなっている。

湛えた泉は虹色で、よく見てみると底が透けて見えるほど清く澄んでいる。

刺客の一人は果実に手を伸ばし、一人は泉の前にひざまずいて水を仰った。

刺客の一人は果実を取ろうとして失敗した。茂った葉から腕を引き抜く。

腕は無かった。

刺客は激痛に叫び声を上げそうになったが、植物から伸びてきた蔓に喉をかき切られ、事切れた。蔓に茂った葉は剣のように鋭く、伸びた蔓は刺客を抱き込んでいった。

一方、泉の水を飲んだ刺客はあまりの美味さにため息をついた。

息の代わりに吐き出したのは血飛沫だった。

刺客は体を激しく痙攣<sup>けいれん</sup>させ、滝のように血を吐いて息絶えた。泉の水はまるで最高濃度の毒薬で、刺客を体内から蝕<sup>むしば</sup>んでいった。砂漠の空に虹が架かった。

オアシスには、ボロ切れのように切り刻まれた肉塊<sup>にくかい</sup>と、毛穴という毛穴から血が噴き出ているか細いミイラが落ちていた。

——私が生まれるより遥か昔の学者は、このストーリーの中に“瑩虹龍リリース”の謎を隠したのだろうか。そもそも、この話がなぜ龍と関係するのか。この話と伝説がなぜ関係しているのか。甚だ疑問である。

だが疑問を持つのが学者の仕事である以上、それを解明せねばならない。

もう私に残された時間は少ないだろう。急がねばならない。

人生のほとんどをこの研究に費やして、分かったことと言えば雀の涙ほどだ。虚<sup>むな</sup>しくないと言えば嘘になる。

だが、微量でも分かったことは事実。努力が実を結んだ結果だ。

この論文を読んでくれた諸君、研究とはそんなものだ。一生かかって何も得られない者もいれば、反対に巨万の富と知識と名声を得る者もいる。

現在、モンスターの素材と鉱石を合成して強度の高い防具を開発する研究が進められている。今思えば、あれも成功するとは全く見積もられていなかった分野だ。

何度も言うが、研究とはそんなものだ。

夢を追い続ける。馬鹿だ、間抜けだ、と何を言われようが知ったこっちゃない。自分の夢に向かって馬鹿みたいに突進せよ。

私が言えるのはこれだけだ。拙<sup>つたな</sup>い論文で申し訳ない。

最後に、私が生涯追い求めた謎を遺しておく。あちこち欠けていて、読むことすら難しかったものだ。

答えを知る者は、未だ誰もいない。

知りたいのであれば、捜せ。

己<sup>おの</sup>が信念のために。

——著 トライタス・ベルベッティ 1300年 第四温暖期  
9日

“虹の歌伝説”

虹が空を覆い 陽光<sup>ひかり</sup>は途絶える

雨が大地を潤<sup>うる</sup>し 生きとし生ける者を枯<sup>か</sup>らす

清らかな虹は弧を描き 恐慌を世界に橋渡す

希望の虹は円<sup>な</sup>を為し 絶望の循環を創り出す

峯<sup>やま</sup>は大地を踏み崩し

蛟<sup>へび</sup>は大海を揺り動かす

魚<sup>うお</sup>は天空に橋を架け 希望と絶望の光を輝かせ ただただその時  
が来るのを待ち続ける

今再び、死と混沌の咆哮が響くその時を

ラストーヴァ リリス

目覚めよ 瑩虹龍

ラストーヴァ リリス

目覚めよ 瑩虹龍

今再び甦<sup>よみがえ</sup>れ、十の勇士の三叉<sup>トライデント</sup>の鉾よ――



### 第37章 天空の瑩虹龍（前書き）

二隻の装甲調査船、スカイブレイカー号と影虎が向かった高度3000メートルを超える空域。

そこに待っていたものとは？

また、“虹の歌伝説”の真偽とは？

## 第37章 天空の瑩虹龍

### 第37章 天空の瑩虹龍えいこうりゅう

くアルタミラ密林 上空3000メートル スカイブレイカー号く  
#####

俺が部屋に戻ってきて扉を開けると、ちょうどユイがベッドから起き上がったところだった。

「例の空域に到着したらしいぞ」

ずっと眠っていたらしいユイに報告する。研究員が詰めている観測室に行って、色々と説明を受けてきたのだ。

「どうやら、この辺りの空域で飛行船に何かが起こったらしい。一説には天候、一説には貿易風ジェットストリームに異常が起きた、などと推測されてるみたいだ」

「ふーん」

相棒はすっきりしたような顔で伸びをしている。

「のん気なもんだな」

「いいじゃない。気持ち良く寝てたんだから」

悪びれた様子もなく、自分の武器の手入れを始めるユイ。俺も自分のベッドの隣で静かに横たわっている巨大な剣を引き寄せた。刃を覆っていた革をほどき、砥石ととしで丁寧ていねいに刃をこする。

「そういえば、高度3000メートルだって言ってたわね？」

「ああ」

それがどうかしたのか気にかかり、訊ねてみた。

ユイは自分の鼻をつまんで唾を飲んでみせる。高い所に登って耳がキンキン痛む時にやると、多少は楽になるというアレだ。

「ねえ、息がしやすくなったんじゃない？」

「言われてみれば……そうだな……」

深呼吸してみるが、まるで地上の空気を吸っているようで息苦しくも何ともない。

「耳も痛くなくなってるし……慣れたのかな？」

「まさか。この船は貿易風に乗ってずっと上昇し続けてるんだぞ？その分気圧はどんどん下がっているはずだ」

慣れる間もなく、徐々に体にかかる負荷が強くなっていくのだ。過ごしやすくなるのは大いに結構だが、何だか薄気味悪い。

「あ」

突然、ユイが嬉しそうな声を上げた。

「ほらほら、虹が出てるわよ？」

「虹？」

部屋の窓に歩み寄り、船の進行方向を観察すると、確かに七色の光のアーチが架かっている。青い空に浮かぶ白い雲を、橋で繋いだかのような。

「雨、さっきまで降ってたか？」

「寝てたんだから知らないわよ」

ユイは自分の武器を研ぐ作業に戻り、刃をまじまじと眺め回している。

いや、雨は降っていなかったはずだ。ただ、ジェットストリームの気流に乗った飛行船の移動速度が大きいいため、雨の降っていた地域に俺達が飛び込んだだけなのかもしれないが。

その時、ふと最初の飛行船墜落事故で生き残った者の言葉を思い出した。新聞の取材で、そのことが記事になっていたのだ。彼は入院中、うわ言のように『虹が……』と呟き続けていたという。

胸の中に、もやもやとした不安が霧のように渦巻いた。

（同じ頃 影虎）

ЯЯЯЯールブリードЯЯЯЯ

装備班班長がラピス船長に頼み込んでくれたおかげで、俺は今、実習生にとって信じられないような仕事に就いている。

「どう？ 自分が飛行船ふねを動かしている気分は？」

ラピス船長が背後から俺の両肩にぽんと手を置く。僅わずかに後ろを顧かえりみると、焦げ茶色の二つの瞳が楽しそうに見下ろしていた。余談だが、ラピスさんは女性なのかなりの長身だ。足は長いし、スタイルは良いしで船員からも人気だろう。ちなみに、船長の身長は180センチメートルに迫る。俺なんて、つい先月やっと170センチメートルに達したばかりだ。

それはさておき、話を戻す。

俺は今、影虎の舵かじを握っていた。

「あんまり固くならなくてもいいわよ」

ラピスさんがグーサインを作って言った。

「え、あ、はい……」

そうは言ってもらっても、興奮で体が強ばったりするのは防ぎようがない。舵を握る資格があるのは、普通なら操舵手か船長だ。一介の実習生が気安く触れていいものではない。飛行船の舵は、空を飛ぶ者達の誇りの象徴と言っているものなのだ。その誇りを、ラピ

スさんの補助付きとはいえ、自由に動かせる。

「ラピス船長！」その時、伝声管から気囊調整班班長の野太い声が飛び出してきた。「ちよつといいか？」

「どうしたの？」

不安げな班長の声に、ラピスさんは怪訝な表情になっている。

俺は船の進路がずれないように方角を確認しつつ、班長の声に耳を傾けた。

「今の高度は？」

「およそ3000メートルよ。異常でもあった？」

ラピス船長が訊ねてから班長が答えるまでに、不自然な間ができる。

「……いや、異常は何もない。むしろ、機器の調子は良いくらいだ……そう、良すぎるんだ」離陸の時はあれほど豪快だった班長の声は、すっかり鳴りをひそめている。「こんな高えところ飛んでんのに、まるで地上にいるみたいに火がごうごう燃え盛ってやがんだ。船長それによ、どうもこの辺の空気、“濃い”と思わねえか？」

俺はハッとして深呼吸してみる。その感覚は、まるで地上にいる時のように、深々と濃密な空気で肺が満たされていくものだった。

「船長、前方に巨大な虹が見えます。天候は晴れ。雨が降った様子はありませんが……」

室内の観測士がそう告げると、この部屋の扉が勢いよく跳ね開けられるのはほぼ同時だった。

部屋の入口に、鬼気迫る表情で立っている人物。それが誰か判明して、多少度胆を抜かれる。

ウルカさんだ。

ウルカさんは顔面蒼白で、肩を上下させながらぜえぜえと呼吸していた。

何か、と静まり返る室内に、ウルカさんの低く抑えた声が妙に

響き渡る。

「全員、大至急“戦闘体制”を整えろ」

一瞬、皆が哑然とした。聞き間違えたのかと、怪訝な顔をする者もいる。

「て、敵は？」

普段は腰の座っているラピス船長も、この時ばかりはたじろいでいた。ウルカさんは窓の外を指差す。そこには、先ほどの七色に輝く虹が架かっている。

「敵は、虹だ」

その時、並行して空を飛んでいたスカイブレイカー号が急に左へ旋回を開始した。スカイブレイカー号から赤い煙幕弾が発射され、それが影虎の前を横切る。

この二隻の飛行船は、飛行中に緊急事態が起きた時、煙幕弾を発射して互いに連絡を取り合うと聞いている。その赤色の煙幕弾が意味するものは……

「スカイブレイカー号より赤煙幕の緊急連絡！ 敵襲！ 敵襲！

乗員は持ち場にて指示を待て！」船内全域に通じる伝声管を引っ掴み、ラピス船長が怒鳴っている。「乗船中のハンター達に告ぐ！

持参の武器で遠距離攻撃が可能な者は、ただちに一階または二階の外面通路に駆けつけ、砲撃班班長の指示を仰ぐこと！ 手持ち無沙汰のハンター達は、バリスタ弾や砲弾の運搬、装填を手伝いな！」

呆然と舵を握るしかない俺を差し置いて、ラピス船長は手際よく各班に指示を与えていった。

そんな中、飛行船櫓やぐらからの連絡が飛び込んでくる。

「ラピス船長に報告！ 敵の姿が確認できません！」

「何っ！？ よく周りを確認して！ モンスターとかはいないの？」

ラピス船長は半信半疑で櫓にいる観測士を叱りつける。その時、隅の方で静かに佇んでいたウルカさんがラピス船長の伝声管を引っ

たぐった。

「観測士に訊く」ウルカさんは一呼吸おいて言った。「船の周りに“虹”は見えるか？」

伝声管がしばらくの間沈黙する。観測士が慎重に周囲に目を凝らしているのだろう。コックピットから見える景色はほぼ進行方向のみなので、船の周囲をすべて見渡せる飛行船櫓の情報は貴重だ。しばらくして聞こえてきたのは、切羽詰まったような観測士達の叫び声だ。伝声管を口元に持ってきていないせいか、声が遠い。

——十二時の方向に……の虹があるぞ！

——八時の……にも虹だ！ スカ……カー号の向こうにも……があるぜ！

——どうなっ……だ？

——俺達、虹に囲まれてるのか！？

皆、伝声管から聞こえてくる摩訶不思議な観測士達の会話に聞き入っているせいで、この部屋の中は不穏な静けさに包まれている。

そして、唐突に“それ”は聞こえた。

——キュオオオオオオオオオ

青空に低く轟く、澄んだ音色。

深みのある笛が音を奏でているかのようだった。

しかし、その優しく美しい響きには、どこか悲しみと憤怒が満ちている。

その微妙な調和が、一層“それ”を不気味に引き立てていた。

ウルカさんが窓に駆け寄り、外を睨む。まるで、虹の向こうに隠れている何かに目を凝らす如く。

「また会ったな、虹」

ウルカさんのその一言を合図にしたかのように、スカイブレイカー号の固定砲台が一斉に火を吹いた。

爆音が高度3000メートルの空を揺るがす。

宙を切っていった砲弾は、“虹に直撃して炸裂した”。

——キユオオオオオオオオオオオオ——

再びその咆哮が猛った時、俺は信じられない光景を目にした。そう、今、目の前で起きていることが夢ではないのかと錯覚するほどの——

——キユオオオオオオオオオオオオ——

影虎のコックピットに設置された大窓。それでさえ映しきれないほどの巨大な虹が現れた。

いや、それは虹ではない。

遙かな地平線に向かってただただ延々と続く虹。

絹のレースのように滑らかで、優雅にたなびく虹。

陽光を吸収し、七色の光となって辺りの白雲を彩る虹。

しなやかで魚の如く、悠々と青い空を泳ぐ虹。

風が吹き荒れ、船が大きく流される。その疾風に乗ってキラキラと煌めく塵。

雲が、空が、大気が、嵐の海のように、揺らぎ、荒れ狂う。

たちまち巨大な雨雲が沸き立ち、何本もの紫電が宙を切り裂いた。

船員達は、畏怖と驚愕に硬直し、眼前の現実を受け入れられずに立ち尽くす。

その強大な存在は、何もかもを粉碎する威圧感で空に君臨してい



た。

舵を握る手が、ぶるぶると震える。全身に鳥肌が立った。

その者の前に、いかに自分がちっぽけな生き物か、いかに自然が人間より偉大か。身をもって思い知らされる。

スカイブレイカー号と影虎。二隻の調査船が向かった先の空に待っていたもの。

それは“虹ならぬ虹”だった。

### 第37章 天空の瑩虹龍（後書き）

オリジナルモンスター、瑩虹龍リリスです。

瑩（漢音…エイ）

意読……ひかり。あきらか

- ・ ひかり。玉の周囲に発散する光。輪郭を浮き出させる光。
- ・ 玉のように美しい石

虹（漢音…コウ）

意読……にじ

- ・ 雨上がりなどに大気中に現れる七色の半円帯状の像。日光が大気中の水滴に当たって生じる現象

——漢字源より

虹霓<sup>コウゲイ</sup>

- ・ 虹<sup>にじ</sup>。古くは竜の一種と考え、雄を虹<sup>コウ</sup>、雌を霓<sup>ゲイ</sup>といった。

——広辞苑 第六版より

リリスという名前の由来は、

イリス<sup>イリス</sup>…ギリシャ神話の虹の女神。オリンポスの神々の仲間。ヘルメスとともに、神々ことにゼウスとヘラの意思を地上の人間に伝える使者の役を果たすと信じられた

＋（プラス）

R a i n b o w（虹）の頭文字 R

＝（イコール）

R <sup>リリース</sup> i r i s

ということです。響きが綺麗な感じなので採用しました。

## 第38章

—— 旋律・瑩虹の調べ ——  
(前書き)

大変遅くなりましたm( \_ ) m  
スランプって怖いですね……

## 第38章

### ——旋律・瑩虹の調べ——

## 第38章

### ——メロデー 旋律・えいこう 瑩虹の調べ——

くアルタミラ密林　上空4000メートル　スカイブレイカー号く

空に架かる虹――

そして、異変は突然やって来た。

スカイブレイカー号はいち早くそれに気づき、態勢を整えたため、発見の遅れた影虎よりも混乱が少なかった。影虎のラピス船長があたふたと指示を出している頃、スカイブレイカー号のバルト船長は悠々と敵への攻撃を命じていた。

バルト船長が敵の襲撃に気づいたのは、スカイブレイカー号が敵から攻撃を受けたからだ。

何もない空間から突如“虹の刃”が現れ、補助マストをズタズタに引き裂いた。偶然、その一部始終を飛行船外部通路にいる係員が目撃したのだ。

スカイブレイカー号の迅速な対応と反撃に怯んだのか、“虹”は一旦二隻の飛行船の前から姿を消す。

スカイブレイカー号のコックピットには、常駐している船員や飛行船墜落事故の調査員などが集まっていた。そして、皆はコックピットの入口に立つ不審人物達を一樣に警戒の目で睨みつけている。

「あんたら、誰だ？ 船員でもなきゃ、契約を結んで乗ってきたハインターって柄にも見えねえ。もしそうなら、今頃外で警備に参加してるはずだからな」

バルト船長が葉巻を吹かしながら、訝<sup>いぶか</sup>しむような面持ちで問い詰めた。

強面のバルト船長がそんな顔をすれば大抵の人間は怯むものだが、入口に立つ三人はまったく動じる様子がない。

「さあねえ、誰なんだろうね」

それどころか、三人のうちで痩せ細った中年の男は、余裕の表情で減らず口を叩いている。

「私達はあるた達に伝えなきゃいけないことがあってここに来たのよ」

三人のうち、唯一の女が真剣な顔で申し出た。分厚い眼鏡をかけていて、桜色の髪は手入れがされていない空き地の雑草の如く生え繁っている。

残りの一人は、使い込んで薄汚れた黒いシルクハットや服、茶色のマントが印象的な男だ。寡黙<sup>かもく</sup>に状況を見守っている。顔は帽子の陰になっていてよく見えない。

「こんな汚らしいこじき三人組がまともな理由で乗船してきたとは思えませんな。まったく、船が何かに襲われてそれどころではないと言うのに……」

事故調査員の一人が嫌味たらしく罵り、蔑むような視線を送る。

「取っ捕まえて閉じ込めましょう、船長。邪魔になるだけです」

乗組員の若者も、苛立ちを露にしてバルト船長に提案する。しかし、バルト船長は黙って葉巻を吸いながら、じっと三人を睨みつけ

ていた。値踏みするかのように、注意深く観察している。

他の船員達も、この三人に嫌悪感を抱いているのか、コソコソと指を差して何かを呟き合っていた。

近年、アルタミラではこじきが巧みな口述を使って人に取り入り、財産や食物などを奪っていくという事件が多発していたため、皆も不信感を抱いているのだ。

ボサボサ頭に眼鏡の女。頬が痩け落ち、卑しい笑みを浮かべている男。ボロボロに使い古された服にマントを羽織った男。一見すれば、確かにこじきか怪しげな集団にしか見えない。

「私達がここに来たのはね、最初にも言ったけど伝えなきゃいけないことがあるからよ」

しばらく口を閉ざしていた眼鏡の女性が、機を見て話し出した。

「あんたは何者だ？」

バルト船長はどっしりと構えたまま、その女性に質問する。

「アルタミラの夢見学者だよ」

ところが、その質問に答えたのは女性ではなく、事故調査員の一人だった。

「夢見学者？ ひょっとして、あんた、ブルジョア博士なのか？」

桜色の髪的女性は、苦い表情を作り、感情を押し殺すように「そうよ」と答える。その途端、ざわめきと嘲笑が調査員達の間を広まった。

「これはこれは、ホラ吹き博士が何の用でこの船に無断乗船しているらっしゃるのですか？」

ブルジョア博士は、俯いて悔しそうに唇を噛んだ後、キッと顔を上げた。そして、一步、地を踏みしめるように進み出る。

「あのね、あんた達、この船がどんなモンスターに襲われたのか知ってる？」

「さあね、知ったこっちゃない。あんたは、また例の如く瑩虹りゅ――」

その時、室内の片隅から「ひいっ」という小さな悲鳴が上がった。

それに続いて、誰かが床に尻餅を突くように倒れ込んだ。室内の視線がその一点に集まる中、転倒した初老の男は震える指で入口に立つ三人組の一人を指差す。

「あ、あいつは……“砂斬”<sup>サザン</sup>だ！ な、なんでこんなところにいるんだ！？」

「サザン！？」

何人かの年を取った男女が、一斉に顔を青くして入口に立つ細身の男に目をやる。

「ほお」バルト船長もその名を聞いて眉を吊り上げた。

「世間はまだ俺を覚えててくれたのか」

サザンと呼ばれた男はせせら笑いながらナイフを懷から取り出し、軽快にくるくると回してみせる。

「サザン？ あんたの名前がどうかしたのか？」

シルクハットをかぶったマントの男が訊ねる。その拍子に、帽子の陰から左目を覆う黒い眼帯が露になった。

「<sup>デザートナイフ</sup>“砂斬”って言えば分かるか？」

「なるほどな……」サザンがそう言うと、マントの男は唯一の目を細めて呟いた。「つい最近滅んだ、砂漠の盗賊“砂嵐”の元首領。部下との一騎討ちに敗れ、死んだとされていたが……まさか、ここに身をやつしてアルタミラに亡命していたとはな」

バルト船長は葉巻の火を練り消しつつ、へらへらと笑っているサザンをねめつける。

「懸賞金、三十万ゼニーの悪人がこういう風の吹き回しで俺の船に乗ってるんだ？」

不意に、懸賞金リストの束を眺め回していた女が急に甲高い悲鳴を上げた。

「そ、そ、そんな……」女はリストを取り落とすと、動揺も露にマントの男を見つめている。「間違いない……」

隣の男が、何事だと言いたげに床に落ちたリストを覗き見る。その途端、男は目を見開き、硬直した。死神でも見たかのように顔を



蒼白にする。

落ちているリストの一番上に、懸賞金六十万ゼニーという想像を絶する大金が設けられた人物が掲載されていた。その写真には黒いシルクハットをかぶり、左目を眼帯で覆ったマントの男——たった今、コックピットの入口で静かに佇んでいる男が写っていた。

「隻眼の孤狼、アウストラティック・レイザー」

部屋のあちこちから息を飲む音や小さな悲鳴が巻き起こる。サザンの時以上の畏怖と恐怖を交えた視線が、隻眼のマントの男に集束した。

「バレちゃったなあ。レイザーよお？」

「バレる前提でこの部屋に来たんじゃないのか？」

サザンがからかうように隻眼の孤狼の背中をぺしぺしと叩くが、当人は眉一つ動かさずに切り返す。

「何の用でこの船に凶悪な犯罪者が二人も乗ってるんだ！ しかも、未知の巨大なモンスターに襲われて、こっちはひでえ目に遭ってるってのに！ だいたい何で——」

若い船員が恐れを振り払って勇むが、隻眼の孤狼の一睨みで呆気なく押し黙った。腕つぶしとガタイが自慢の飛行船乗りも、暗殺者の前では蛇に睨まれた蛙だ。

「そう、あんたの言う通り、この船は大変な目に遭ってるわ。巨大なモンスター、えいこうりゅう螢虹龍のせいだね」

ブルジョア博士がそう言うのと、事故調査員の男が呆れた表情でささず反論する。

「またそれか？ あんな伝説にすがっていったってモンスターの生態の解明には繋がらんぞ。いい加減目を覚ませ」

「目を覚ますのはそっちよ。あんた、さっきそのコックピットの窓から見なかったの？ 動く、巨大な虹を」

「だからどうだと言うのだ。あれが螢虹龍だどうして断定できる？ 幻影で姿を大きく見せているだけの新種のモンスターだってあり得るぞ」

「あんたね、この飛行船を揺らした猛烈な風圧と、急に沸き出してきた雲や稲妻はどう説明するのよ。小さなモンスターにそんなことができる？　どれも、気候を司ると謳<sup>うた</sup>われる瑩虹龍なら可能な現象だわ」

「そんな、捨てられた古文書に書いてあることを信じられるか！」  
そう叫ぶ学者の声音には、ある種の意地がこもっているようにも聞こえる。

ちょうどその時、伝声管から戦闘待機をしている乗組員の連絡が入った。

「戦闘班より連絡。左舷、遙か向こうに動く虹を発見！」  
バルト船長がそれを聞いて舌打ちする。

「さすがに、たまたま当たった砲弾数発じゃ致命傷にはならねえか」  
「それに加えてあの巨体よ。ラオシャンロンに砲弾を撃ち込むのと同じように、こっちの攻撃なんて、蜜蜂が精一杯熊に針を突き立てているくらいにしかな感じてないはず」ブルジョア博士は険しい表情でバルト船長に詰め寄った。「しかも、私達は瑩虹龍から逃げることを許されない」

バルト船長は意味が分からないという面持ちで、「なぜだ」と訊ねる。

ブルジョア博士は指を三本伸ばして掲げた。

「瑩虹龍リリース。彼女の強力な武器は三つある。一つはモンスター史上最も巨大な体格。もう一つは雌雄同体であること」

「何だって!？」

すかさず、調査員達が驚愕のあまりどよめいた。

「一個体で繁殖できるなど、ますます信じられん」

「いいえ、巨大さゆえの生息数の少なさを考えれば、雌雄が出会うのは非常に難しい。そう考えれば当然だと思わない？」

その会話をそれ以上続けさせないためか、バルト船長が椅子から立ち上がり、持っている葉巻でブルジョア博士を指す。

「小難しい生態論はさておき、虹の化け物の三つ目の武器ってのは

なんだ？ 俺達が奴から逃げられないのは、その三つ目が関係してるんだろ？」

それを聞いて、ブルジョア博士は首を縦に振った。意を決したかのような、真剣な瞳で周囲の人間を見回す。

「そう。肝心なのは螢虹龍の大きさでも、繁殖方法でもない。彼女の最大最凶の武器は“毒”よ」

「毒？」

「単に毒と言っても種類じゃないわ。睡眠毒や麻痺毒、強酸性毒、覚醒毒……複合性のものもあるとされている」

「性質が悪いな。だが、何で俺達は逃げちゃいけないと言った？ 毒なんて戦わなければ関係無いだろ。飛行船墜落事故の原因がこいつだとすれば俺達は任務完了だ。何も必要以上の仕事をする事はない」

バルト船長は煮え切らない、と言いたげな表情で博士に問う。そこで、唐突に口を開いたのは隻眼の孤狼だった。

「戦闘において毒を用いる時、二つの掟<sup>おきて</sup>がある。一つは、解毒薬などの自分の使う毒を無効化する手段を持つこと。もう一つは、毒ガスや揮発性の毒薬の使用に際し、必ず風上を取ること。効率良く毒を広めるために」隻眼の孤狼は、机の上の地図を使って螢虹龍の目撃地点を指でなぞった。「“虹”は南下してきている。貿易風の風上に向かって」

「風上って、まさか……じゃあこの螢虹龍ってのは……知の限界線<sup>アンノウンベルト</sup>を越えて貿易風の起源に向かっているということか？」

「そうだとしたらどうなる？ もしそこで、あの巨体から毒ガスでも噴出されてみる。貿易風に乗って毒は拡散し、このミナガルデ地方は壊滅だ。誰も生きることのできない、死の大地になる」

アルタミラの遙か南に、人間達がまだ足を踏み入っていない未知の森が広がっている。そこから広がる世界も然りだ。その既知と未知の間に敷かれた境界が知の限界線と呼ばれるものだ。知の限界線以降の地域から天気や季節の変化は訪れる。貿易風も、そこに端を

発するとされている。

「待て、いくら強力な毒と言っても、そんな広域を侵そうにも無理がある。その……たとえあれが本当に螢虹龍だとしても、毒ガスに比べれば清浄な空気の量は圧倒的に多い。濃度的に被害は出ないのではないか」

学者が慌てて反論したが、ブルジョア博士は目を閉じて首を横に振った。

「螢虹龍の毒ガスは、例えるなら“雲”よ。猛毒の雪や雨を降らす、猛毒の雲……」

博士は思い出すように、何かの唄の一部を暗唱し出した。

——虹が空を覆い 陽光は途絶える

雨が大地を潤し 生きとし生ける者を枯らす

清らかな虹は弧を描き 恐慌を世界に橋渡す

希望の虹は円を為し 絶望の循環を創り出す——

「螢虹龍に関すると言われる虹の歌伝説の一部よ。螢虹龍の毒は世界を揺るがすほど影響を与える。そう、毒の雨が大地に染み、生きとし生ける者を枯らすのよ……」

学者や他の者達は遂に黙り込んだ。たった一匹のモンスターによって、世界が死に絶えると言うのだ。そして、事実、信じ難いような巨軀を誇るモンスターが現れた。螢虹龍の存在を頑なに否定する者も、その真の恐ろしさを知って押し黙っている。

「確かに、これらは全部伝説よ。でも思い出して。伝説だと言われて侮ったがためにどれほどの命が失われてきたか……」

ブルジョア博士は螢虹龍の存在を否定し続けてきた調査員の学者達に訴える。過去の過ちを繰り返してはならないと。

そして、突然一人の学者がブルジョア博士に向かって土下座した。  
「すまなかった」

その年老いた学者は、涙ながらに謝罪の言葉を絞り出した。悔しそうに眉を歪め、自分に恥じているのが伝わってくる。

「わしには何も見えていなかった。学会の正式な書物と理論だけを信じ、伝説や理解できない謎の存在を否定してきた……」

学者達が次々膝を着き、ブルジョア博士に頭を下げていく。

「私も忘れていた。説明できる物事だけが真理であるわけではない、ということ。謎や不思議に憧れ、夢を追い求める。それが学者であることを忘れていた……」

「あなたは夢見学者だ。“馬鹿”だと思っていた。だが、偏見という小さな檻の中でしかものを考えられなかった俺達は、どうしようもない“ただの馬鹿”だ……」

飛行船の乗組員達は、次々と頭を垂れる学者達に驚いておろおろしている。サザンも呆然と口を開けて、周りを眺めていた。

「馬鹿でいいんだ」隻眼の孤狼が不敵な笑みを浮かべてサザンに言う。「世の中そんな馬鹿が成功することもある。言っただろ」

さんざんブルジョア博士をないがしろにしてきた者達が腰を折って謝るのを見て、サザンは隻眼の孤狼ことレイザーに肩を竦めてみせた。そして、ブルジョア博士に軽く頭を下げ、素知らぬ顔でナイフの手入れをし始める。博士を馬鹿にしていたサザンなりの謝罪だったのだろう。

「スカイブレイカー号と影虎以外に武装飛行船は存在しない。それに瑩虹龍の飛行速度も不明なため、アルタミラに引き返して準備を整えるのも危険。奴がいつ知の限界線を越えるか分からないからな。

だから、俺達は逃げられない。ここで勝つしかない。螢虹龍、リリースに」

バルト船長が作戦を練る中で、そう宣言した。現在、二隻の飛行船は貿易風の影響が無い高度3000メートルにまで下降し、螢虹龍の探索を始めていた。先ほど、動く虹が見つかったと報告はあったが、再びリリースが姿をくらましてしまったのだ。

「さっきも言ったけど、リリースは古龍クシャルダオラ以上の天候を操る能力を有するわ。元は海洋・陸上生物だったと言われていることが関係するのか、空に上ってから周囲の環境を自分の過ごしやすいように変位させてる。気圧、気体中の物質濃度など、地上の環境に近いように」

ブルジョア博士がリリースの特徴について説明した。それに、スカイブレイカー号の気囊調整班の一人が反応する。

「なるほど、どうりで気囊調整機きのうの火の点き具合が良かったわけか。ずっと、おかしいとは思ってたんですが」

「耳鳴りがしなくなったのも、気圧が地上と同じくらいになってるからね」

そこで、一人の事故調査員が、腕を組みながら発言する。

「今もその状態が続いているということは、近くに螢虹龍がいるということにもなる。そうかね、ブルジョア博士？」

「ええ。それより、影虎に急いで螢虹龍の情報を伝えなければ。きっと奴はもう一度私達に接触してくるはずだわ。今までただ空を飛んでいた飛行船と違い、私達はリリースに攻撃した。それでリリースはこちらに多少関心を持ったはず」

バルト船長は静かに頷くと、連絡係を呼び出し、光通信で影虎に情報を伝えるよう指示した。

「そう言えば、こいつらはどうするんだ。博士、あんたは何のためにこいつらを連れてきた？」

副船長が隻眼の孤狼とサザンを指差す。それに答えたのは、博士ではなく彼ら自身だった。

「博士の依頼を受けたからだ。最初は、俺も依頼内容を疑った。何せ、墜落事故の調査に向かう飛行船に乗り、襲ってくるモンスターからミナガルデの人々を守れと書いてあるんだからな」

「そーだぜ。意味分かんねえよ。たかが飛行船に乗ってモンスターと戦うだけってのに。とりあえず報酬金に釣られて依頼を受けてみたわけよ。で、蓋を開けてみりゃ瑩虹龍とかいう化け物が相手だと信じられるか？ まるで詐欺だぜ」

「詐欺だな」隻眼の孤狼もすかさず相槌を打つ。

そこでバルト船長が冷静に疑問を挟んだ。

「待て待て、今となっては事の重大さが分かったが、普通ならそんな依頼、馬鹿馬鹿しくて受けられたものじゃないだろ。なぜ、わざわざ受けた？ 詐欺臭がする、その依頼を」

「人助けだよ」

サザンが珍しく真顔で答えた。

「は？」

拍子抜けしたバルト船長の口から葉巻が落ちる。

「今まで俺は盗みに壊して、殺して、暴れ回ってきた。死ぬ前に一度はやってみてえんだ。誰かのためになる、でけえことをよ。人生、花の一つも無えんじゃロマンに欠けるだろ？」呆氣に取られている周りの人間には意にも介さない様子でサザンは語った。「そう言えばレイザーはどうなんだ？ 例のケイ何ちゃらっていう奴が関係してんのか？」

「そうだな。報酬金よりも、俺はそっちに興味がある。その情報のためならふざけた依頼でも受ける気になった」

「ふざけてはいないわ」すかさずブルジョア博士が訂正する。

「分かっている。あの時は真相を知らなかったただけだ」隻眼の孤狼も間を置かずに弁明した。

「じゃあ一つ、俺の船に乗ったからには守ってもらう約束がある」

バルト船長が隻眼の孤狼、サザン、ブルジョア博士を指差して言う。「面倒臭い問題を起こさないってことだ。できないなら、叩き出す」

ブルジョア博士はにっこりと笑って答える。

「了解、船長。一応、この二人は問題を起こさないことを私と契約してるわ」

#####

「穏やかじゃないわね。静か過ぎるのも」

傍らでバリスタを構えている相棒が呟いた。その隣で、俺はバリスタの弾が入った箱を抱えている。

「そうだな」

俺達がいる通路に目を移すと、弓やボウガンを構えたハンター達がいっ来るやも知れない敵の襲来に備え、息を詰めて辺りを見守っている。

眼下にはくすんだ砂の大地が広がり、それに隣り合わせて深緑の熱帯林が延々と続いている。

その時だ。何の前触れも無く、頭上の雲を割って“虹”が現れたのは。

「来たぞ！」

瑩虹龍の澄んだ低い鳴き声<sup>もてあそ</sup>が、ため息のように響き渡る。猛烈な風圧が船を玩具のように弄び<sup>もてあそ</sup>、耳元を風が唸りを上げて通り過ぎていく。

改めて、瑩虹龍リリスの顔<sup>あらわ</sup>が露になった。頭部とは思えないそのスケールに、全身に震えが走る。

「で、でかい」

竜に似た淡い青色の目。肉食魚のような形状の口。その中には、小さなノコギリ状の歯が無数に並ぶ。首と頭との境目が確認できず、



首であるはずのところには魚類のそのような美しい形のヒレが生えている。身体はありったけの陽光を吸収し、溢れんばかりの七色の光を辺りに発散していた。

まさに、虹の権化だ。

「これが、瑩虹龍……」

バリスタで狙うことも忘れ、ユイは心を奪われたかのように見とれている。

“それ”は生きた芸術品のように美しく、古代の遺跡のように荘厳な雰囲気醸し出していた。

「あの本の挿し絵とは随分姿が違うな」

「確かに、龍と言うより魚だな、こりゃ」

不意に背後の通路から聞き覚えのある声がした。振り向いて確認してみ、俺は目を見張る。

慌ててユイの肩を小突いた。怪訝な顔で振り向いたユイは、たちまち呆氣に取られて固まる。

俺はアルタミラの飛行船場で見かけた賞金首のリストを思い出し、汚ならしい白い服を着たこじきを思い出した。そして、通路を並んで歩いてくるその男達に呼び掛ける。

「あんたら、何でここにいるんだ？」

歩いていた二人は立ち止まって、こちらを見た。視線が交錯する。「げっ」

例の俺達を襲ったこじきが面倒臭そうな顔で睨んできた。

「事情があるんだ。説明している暇は無い」

隻眼のマントの男が、黒い地に橙色の斑点が混じったライトボウガンを取り出す。

「マントの人はともかく、あんたは絶対信用できない！」

ナイフを突きつけられた恨みか、ユイが汚いものでも見るような目付きでこじきを見返した。

「そうか。そんなに信用できねえか」

こじきが急に真剣な表情に変貌した。へらへらした態度も、まっ

たく見当たらない。こじきはずいずいと俺に近づくと、ゆっくりとナイフを差し出した。

「俺が信用できないなら、この場で俺を刺し殺せ」

こじきと目が合い、火花が散った気がした。その瞳は、微動だにせず、俺の目を覗き込んでいる。

「何よ、そんなこと言っただけ……」

「待て、ユイ」

男を突き飛ばそうと動きかけた相棒を、こじきから目を逸らさずに押し止めた。

男の目は揺らがない。その瞳の中に、何か強い力を感じる。静かに語りかけてくるような、それでいて力強く叫んでいるような声を感じる。

しばらくして、ふっと俺は笑った。

「俺はルルって名前だ」

緊張を解き、右手を差し出した。男も、不敵な笑みを溢して俺の手を握る。

「俺はサザンっつーんだ。今回は真面目に働くぜ」

ユイは困惑したように俺の顔を覗き込んできた。俺の下した判断に心配しているのだろう。

「自己紹介は終わったか？」ボウガンに弾を込めながら、マントの男が空を、リリスを見上げた。「ここはアルタミラ密林に近い、砂漠地帯の上空3000メートル。落ちたら即死。逃げ場も無い」

「そうだな」

相槌を打ちつつ、俺も空の螢虹龍と向かい合った。奴は静かに佇み、こちらをただじっとりと眺めている。様子を窺っているのかもしれない。

「殺るか、殺られるか。世界ってのはいつもそうだよな」

サザンが着ていた掃除係の服装を脱ぎ捨てると、大量の投げナイフが納められたベルトが現れた。

「ルル、このサザンって奴、信用していいのね？」

「ああ。目を見て、分かった」

「なら、いい」ユイは踵<sup>かかと</sup>を返し、冷めた表情でサザンに手を差し出す。「言っとくけど、許してはいないわよ」

「上等だぜ。あん時の夜は俺もへマしたんだ。今回は本気で行くぞ」  
「それはこっちの台詞なんだけど」

サザンがユイと短い握手を交わした。二人はニヤリと黒い笑みを浮かべ合っている。

その直後、影虎から無数の矢が放たれた。矢は瑩虹龍へ次々と振りかかり、突き刺さる。

「攻撃開始のようだな」

マントの男がボウガンの弦を引いて、撃鉄を起こす。

あちこちで、一斉に鬨<sup>とき</sup>の声が上がった。それは、青空に寄せては返す波のように響き渡っていく。

「面白くなってきたな」

久しぶりに身体の芯が熱く滾<sup>たぎ</sup>っていた。未知のモンスターを相手に、命を賭<sup>と</sup>す。恐怖もある。ただ、それ以上に狩りへの陶醉があった。

「ルル、内心喜んでるでしょ？」

ユイがこちらを向いて微笑んでいる。

「ん？」

「いつもより、燃えてる気がする」

「そうか？」

視線を空に戻す。

瑩虹龍リリースが、天を仰ぐように頭をもたげた。

風が止む。

キョオオオオオオン！

咆哮とともに、目映い虹の光が視界を埋め尽くした。

### 第38章 — 旋律・瑩虹の調べ — (後書き)

モンスターハンターの二次作品がめちゃくちゃ増えてて、びっくりしました。

やっぱりモンハン人気あるんですね (▽、)

## 第39章 高度3000メートルの戦い（前書き）

とても遅くなりました……m  
┌  
└ m

## 第39章 高度3000メートルの戦い

### 第39章 高度3000メートルの戦い

「アルタミラ密林近辺の砂漠地帯 上空3000メートル スカイブレイカー号」

#####

「かかれえええっ！」

戦闘班を現場で指揮する砲兵長が吠えた。それに続き、瑩虹龍に向かつてバリスタや大砲が一斉に火を吹く。ガンナー達が思い思いの弾を次々と発射する。無数の爆音が響き渡った。

リリスの、淡い透き通るような虹色の体表に砲弾が衝突し、詰められていた炸薬さくやくが爆炎を上げる。バリスタや弾丸、矢が吸い込まれるようにリリスに命中した。

二隻の飛行船からの猛攻撃で、瑩虹龍の体表を炎が舐なめる。しかし、瑩虹龍はまったく怯むそぶりを見せない。先程反撃したことから、こちらが再び攻撃するのを予想していたのだろうか。

「あんまり効いてる気がしないな……」

「だからどうしたの？ 塵も積もれば山となる。諦めなければ勝てる可能性は必ずある」

相棒に声をかけてみると、苛立ちの混じった剣呑な言葉が返ってきた。まったく動じないリリスに、ユイも不安が頭をもたげてきて

いるのだろう。

もやもやとした霧のような不安感にさいなまされつつも、とにかく砲弾を大砲の元へと運びに行く。やれるだけやるしかない。

ちょうど砲弾を届け終わった時、こちらを取り巻いて様子を窺っていたリリスが、遂に攻撃してきた。

長い白魚しろうおのような身体の、背部に生える二本の細い虹——ひれの一部が長細い触手になったかのような——が風を切ってしなった。それは日の光を浴びて金属的な輝きを放つ。

「気をつけろ！ 虹の刃が来るぞ！」

咄嗟に周囲の注意を促すと、慌てて通路の壁際へ退いた。まるで鞭が振り下ろされるかのように、虹の刃は宙を引き裂く高音とともに迫ってくる。

剣と剣が交わったような、鋭い衝突音が鼓膜を貫いた。船がぐらりと傾ぎ、転ばないように足腰で踏ん張る。戦闘員達の悲鳴や怒声が飛び交っている。先ほど俺が立っていた場所の通路の塀が、ひしやがていた。もし壁際に寄っていなかったら、打撲どころじゃ済まなかっただろう。それはさておき、さすがは装甲飛行船。ぶたれたくらいで墜落するほどヤワではないらしい。

「船長に報告。気嚢部にさっきの虹の刃が当たったが、異常なし。さすがはヤマツカミとブランゴの皮の気嚢だ」

通路の船内伝声管から、気嚢の面倒を見ている班長の落ち着いた声が漏れ出てきた。

「負傷者はいないか？ 怯まずやり返せ！」

砲兵長が怒鳴り声で味方を鼓舞している。再び、ハンター達が反撃を開始し、無数の矢や弾が雨あられのようにリリスへ降りかかる。お世辞にも効いているとは言い難い。瑩虹龍は痒そうに身体を揺すっているという様子だ。

「弱点みたいなものは無いのか？」

いつの間にか、隣にマントを着た隻眼の男がいた。瑩虹龍に油断なく目を配っている。

「分からない。とりあえず妥当なのは眼球や口の中じゃないか？」

他のモンスターの弱点を参考に、そう答えた。

「やはりそうか。こいつには角があるか？」

「いや、今のところ見あたらないな」

古龍と呼称されるモンスターには角を持つものが多数存在する。

例えば、キリン。馬そっくりな形態だが、頭に一本の角を持つ。その角には雷を操る力が宿っているとされている。また、オオナズチという古龍は角に自分の周囲の空気を歪ませる力があり、カメレオンのように背景に溶け込むことができる。

これらのことから、古龍の角を破壊すれば、相手の戦闘能力を大幅に削ることができるのだ。そこでマントの男は瑩虹龍にも角らしきものがないか探しているのだろう。俺もさっきからそんな弱点がないか観察しているのだが……。

ひとまず、未知の能力を持つ生物を相手にするのは危険だ。できるだけその能力を押さえ込むに限る。じっと目を凝らして瑩虹龍を観察した。

その時だ。背後に妙な気配を感じ、咄嗟に振り向いた。腰のハンターナイフに手を添え、気配がした通路を睨む。

何も、ない。

「あんたも感じたのか」

「物騒な社会で生きてるからな、敏感なんだ」

自分と肩を並べてボウガンを構えているマントの男と目が合った。隠れていない右目が、鋭敏な眼光を放っている。なるほど、やはり暗殺者の目だと納得する。

「乗ってるな」隻眼の孤狼が言った。

「ああ。何かが」そう返事を返す。



（同じ頃 影虎）

ЯЯЯЯールブリードЯЯЯЯ

「秘密兵器？」

ラピス船長がニヤニヤと不敵な笑みで見つめてくる。影虎もスカイブレイカー号も強力な武器を搭載していると噂されていたが、まさか本当だとは思わなかった。

「当たり前よ。この船を何だと思ってるの？ 二回も対古龍戦で勝ってきたんだから」

「う、噂には聞いてますけど……」

「じゃあ、その古龍達を撃墜してきた“主砲”をお披露するわよ」  
ラピス船長が扉の取っ手に手をかけ、ゆっくりと引く。そして、開かれた入口から中を覗き込んで、胆を抜かした。

「わひあっ」

目の前に白いフルフルの生首があった。

「びっくりした？」

クスクスと人の悪い微笑を浮かべてデビル・ラピスは俺の顔を見つめている。驚愕した時の間抜け面を美人船長に見られたかと思うと、穴があったら螢虹龍などそっちのけで入りたい気分だ。

「コレは一体……何なんですか？」

フルフルと言う、のっぺらぼうの顔に口だけがある、不気味な白い竜の生首を巨大化して象かたどった物体だというのは分かる。

「さっき言ったわよ。主砲だって」

ラピス船長が入口の近くにあったレバーを引いた。ブーンという低い稼働音が聞こえ始める。それと同時に“主砲”が蒼白い薄光を

発し始めた。その淡い明かりの中で、生々しい砲身に黒い字が浮かび上がっている。

グロテスク  
G・キャノン——と書いてある。名付け親はひどいネーミングセンスの持ち主のようだ……。

「駄目な名前だと思うでしょ？　だから、これの製作者に改名しろって皆で抗議したのよ」

俺の心の内を読んだかのように、ラピス船長が苦笑いしながら言った。

ブーンという稼働音が次第に大きくなるにつれ、キャノンの光も強くなっていく。すると、さっきまでG・キャノンと書かれていた部分の上に、新たに赤い字が浮かび上がってきた。

「Lightning bolt of Lucifer……墮天使の雷撃？」  
らいげき

「そう。私達は単にライトニング・ボルトって呼んでるわ」  
なるほど、フルフルを墮天使ルシファーとなぞらえるのは良いセンスだ。あの不気味な生態は墮天使と評するに相応しい。

「さて、あの虹の化け物にお見舞いしてやろうじゃないの」  
ラピスさんがそう言いつつ、主砲に付いているボタンを押した。フルフルの口がゆっくりと開く。まるで生きているかのようだ。

砲身に繋がっている太い管を見つけ、目で辿っていくと、何やら奥の機械室に通じていた。“立入禁止 高圧電流”との注意書が貼ってある。

「ねえアル君、この大砲はどれくらいの威力があると思う？」

唐突にそんな質問を投げられ、困惑した。取り敢えず、普通の大砲よりいくらか強いくらいだろうと予想を立てる。ところが、俺が答える前にラピスさんが口を開いていた。

「そうね。コストは高いけど……電気に弱いガノトスだったら一撃であの世行きかな。古龍のクシャルダオラですら一発で失神させたしね」

「えっ？」

しばらく開いたままになっている自分の口を、手で顎を押し上げて閉じた。

く再び スカイブレイカー号く

++++レーザー++++

「主砲を使う？」

戦闘から抜け出し、コックピットに訪れるとそんな話が持ち上がっていた。

「ああ、影虎から信号が送られてきた」

白い海賊帽を被ったバルト船長が、窓越しに黒い飛行船を指差す。なるほど、船首から白い砲身が飛び出している。かなり大きい大砲だ。

「あれならリリースの巨体でも痛いだろう。今さっき戦ってきたが、通常の弾や矢じゃまったく歯が立たない」

船長も既に知っているだろうが、一応報告しておく。

「うむ、聞いている。ただ、主砲は一発ぶっ放つのに多大な時間とコストを要する。それだけの威力はあるわけだがな」

そこに、ブルジョア博士が口を挟んできた。

「近接武器で斬りかかってみたらどうなの？」

それを聞いた他の学者が、呆れ顔で答える。

「あのなあ、ここは空中なんだぞ。足場の無い中どうやって……」

「小型浮遊機フライングを使えば？ 積んでるんでしょ、たくさん」

バルト船長は険しい顔を作って反論する。さっきから、イライラと右手に持ったパンをかじっていた。

「あれは戦闘用ではなく緊急時の脱出用だ。しかもほとんど風任せの移動になる。人員を出撃させた方がいいが、回収はどうする？」

「だが、このままではいけないことも確かだ」

俺は船長をシルクハットの陰から睨んだ。船長も、遠距離武器だけでは勝ち目はないと分かっているはず。それでもやはり、無闇に死地へ人を仕向けたくないのだろう。苦々しい表情の裏に、船長の人情と葛藤が見受けられる。豪胆な人物なのだろうが、情にも厚いようだ。

「そんな死ぬかもしれない境地にハンター達が自ら行きたがると思うか？ 何もできずに犬死にする可能性だってあるんだぞ」

もっともな意見だった。ひょっとすれば、瑩虹龍は刃が通らないほど硬いかもしれない。体表を毒液で覆っているかもしれない。未知の危険を孕んだモンスターに、進んで近づくほど愚直な行為は無いのだ。

その時、突然俺は例の“不穏な気配”を感知した。右手が黄金の小銃ホルダーから抜き放つのと、バルト船長の手から食べかけのパンが“消える”のはほぼ同時だった。

「何だ？」

バルト船長が驚いて腰の剣の柄に手をかける。かなり戸惑っている様子だ。バルト船長のパンを奪おうとする者など、いるはずがなかった。

——ヒトならざる者を除いて。

見えない空間に銃口を向け、ペイント弾を発射した。それはバルト船長の足元の“空気”に直撃し、彩った。

着色された空気が跳びすさり、「クルルルル」という高い唸り声が室内に響く。全員が息を飲んでその奇妙な“空気”を凝視していた。

「そうか……どうりで姿が見えなかった訳か」

コイツなら気配や姿を消し、船内に潜伏することなど容易いことだっただろう。

“ 空気 ” が徐々に形を見せ始め……遂に正体を現したそれに、誰もが驚愕した。

かすみりゆう

「霞龍、オオナズチ！？ 小さいな……幼体か？」

バルト船長が帽子を被り直す。

まだ人の身長程の大きさだ。かなり若い。しかし、成熟すれば二十メートル近くになる古龍だ。

「いつの間に乗り込んでやがった？」

船長がレイピアを抜き放って怒鳴る。

そんな混乱の中、伝声管から緊急連絡が飛び込んできた。冷静な女性の声が、その場をさらに困惑の渦に叩き落とす事実を運んでくる。

「船長、私の目の錯覚でしょうか……。日の光に輝く、金と銀の飛竜がこちらに向かって飛んできているんですが……」

「何だと！？ 本当なのか？」

思わず舌打ちした。

金竜、銀竜とは言わずと知れた飛竜リオ系の希少種である。どちらも強力なモンスターとして、ハンター達から畏れられている輩だ。今、この状況でそんなモンスター達が乱入してくるということは、俺達の破滅を意味する。

小銃をボウガンに持ち換え、オオナズチへと銃口を向けた。小さいとは言え、古龍は油断ならない強敵だ。逃す前に倒しておいた方がいい。

「面白くなってきたね、レイ」

「暴れまくりたいな」

「まあ……ほどほどに」

「あの子達上手くやってたかなあ？」

「さあ。少なくとも、僕らより隠れるのは上手いだろうし……」

「兄さんは不器用だもんね」

「レイ、頼むから誤爆だけは勘弁だよ」

陽光を浴びて、黄金と白銀の翼が青空を翔<sup>かけ</sup>ていく。

## 第39章 高度3000メートルの戦い（後書き）

はあゝ……もっと1日の時間が欲しいっす（；  
――；）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5865h/>

---

CROSSING OF DESTINY

2011年1月4日03時25分発行